

津島市史

資料篇

(一)

津島市役所備品

所属No. 10

備品No.

E-03-1Z

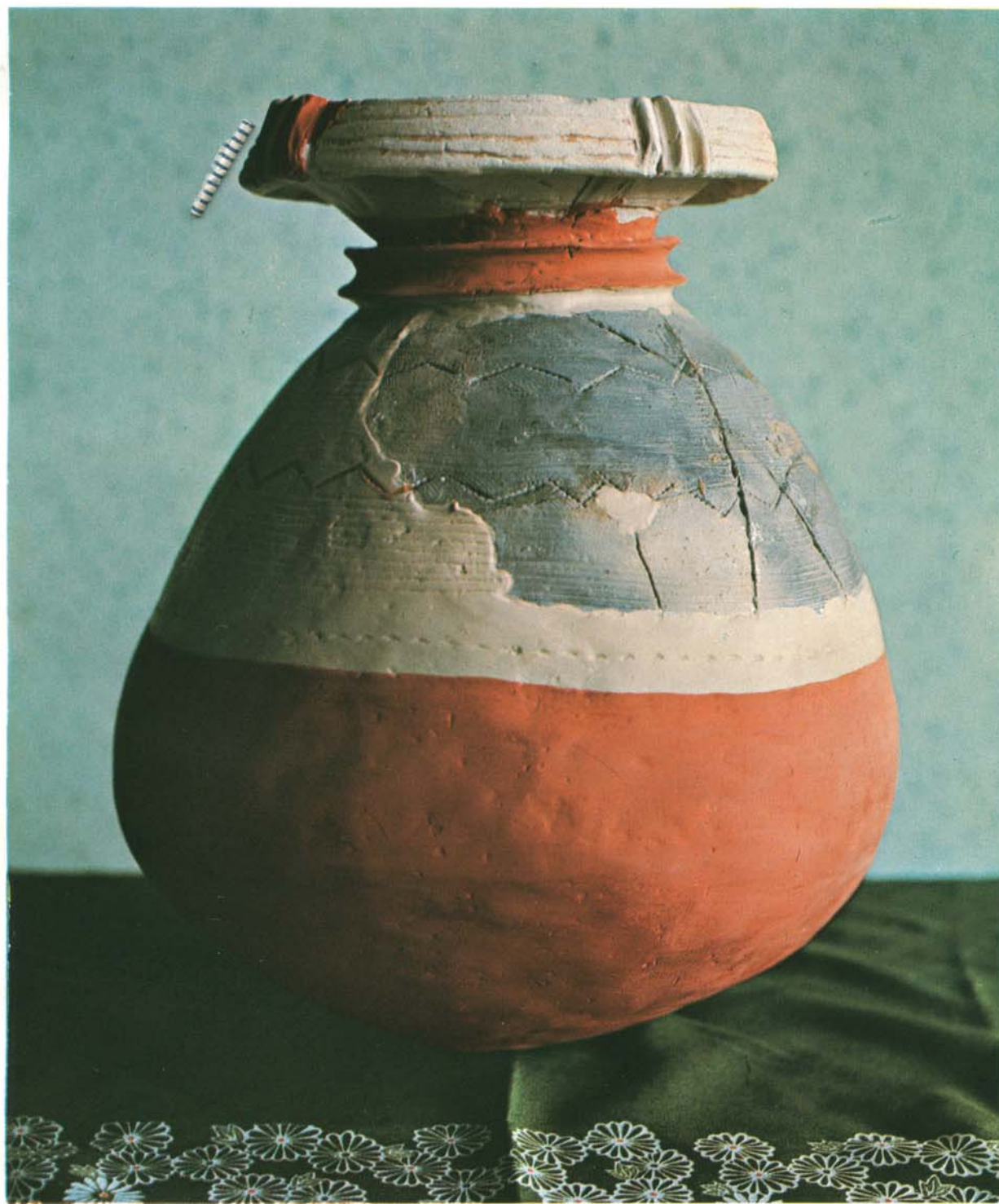
正 誤 表

頁	行	左より	正	誤
挿図目次	埋田遺跡			
〃	第2図	5	掘	堀
〃	第4図	5	掘	堀
8	4	2	面	画
59	8	18	元	原
63	21	3	遺 跡	出土遺物
68	16	38	甲	早
〃	17	2	郡	部
〃	28	22	(第28図 1.図) 版 第22	—
〃	〃	25	—	(第28図 1.図) 版 第22
69	9	25	遺 跡	出土遺物
71	31	8	や	欠 字
93	9	9	遺 跡	出土遺物
141	25	1～4	抹 消	聞社取材
〃	27	全行	抹 消	
217	1		第25図	図版第24
233	5	38	津	戸

津 島 市 史

資 料 篇

(一)



寺野遺跡 弥生式丹彩広口壺

発 刊 の 辞

市制施行23周年をむかえ、ここに津島市史の第一編である考古資料編を刊行することは、まことに意義深いものがある。昭和13年津島町史を刊行してすでに年久しく、その後の旧神守・神島田地区の合併、新しい調査方法による新史料の発見等、加除訂正せねばならぬことが数多く、市史編さんのことは市民からの要望もあり、市将来の施策発展の指針とするためにも、是非実現せねばならぬことであったが、市史編さんの事業は決して容易なことではなく、終戦前後の社会的変動によって資料の消失散逸したものも少なくない。其の収集整理は、多大の困難を伴うことを覚悟せねばならなかった。幸いこのことに最適の人々が市民の中におられ、ご多忙の方々と知りつつも編さん委員としてお願いした次第である。委員諸先生の周到な計画、ならびに不断の努力と市議会のご協力で、こゝに津島市史資料編の発刊を見ることのできたことは、まことに欣快にたえないところである。

郷土を愛することは、郷土を本当に知ることである。そして郷土を愛することから、その発展は実現されるのである。太古の津島の生いたちと、われわれの祖先がこの地にくらしを求めた草創の苦しみ、豊かな社会と明るい町づくりに営々として築いた生活の足跡を少しでも市民に知っていただくことができれば幸いである。今回の企画に市の内外からの激励やご指導、ならびに資料の提供のあったことに感謝の意を表するとともに市史編さん委員の諸先生に厚くお礼を述べる次第である。

津島市長 林 義 一

[illegible]

	凡	例
———	国 有 鉄 道	① 遺 跡
———	私 有 鉄 道	
----	郡 市 界	
-----	町 村 界	
.....	大 字 界	
◎	市 役 所	
○	町 村 役 場	
月	神 明 社	
卍	学 院	
マ	学 校	
田	病 院	
×	警 察 署	

凡 例

本資料編は津島市教育委員会文化財専門委員に於いて、さきに調査報告された、寺野遺跡その他の資料と、市史編さんの資料として発掘調査した、埋田遺跡の資料を基礎として、市史編さん委員に於いて整理編さんしたものである。

しかし本編はあく迄も市史の資料編として、遺跡と遺物の掲出にとどめ、いささかも学問的な注釈は加えなかった。なお、こゝに掲げる資料は一部個人所有のものを除き、すべて津島市教育委員会の管理のもとに、市立津島図書館に於いて常時展示しているから、大いに活用して当市の古代文化について、十分な理解を深めてほしいと希うものである。

この編は市史編さん委員伊藤晃雄担当によるものである。

津島市史編さん委員

伊 藤 晃 雄

小 島 廣 次

出 口 清 一

樋 田 豊

堀 田 喜 慶

(五十音順)

目 次

発刊の辞

凡 例

津島市域に於ける遺跡…………… 1

1 寺 野 遺 跡

第1章	遺跡発見の動機……………	6
第2章	調査経過……………	7
第3章	遺跡の様相……………	8
第4章	井戸遺構……………	10
第5章	自然石群……………	13
第6章	遺物（1）弥生中期土器……………	15
第7章	遺物（2）弥生後期土器……………	18
第8章	遺物（3）弥生後期土器……………	23
第9章	遺物（4）弥生後期土器……………	31
第10章	遺物（5）弥生後期土器……………	38
第11章	遺物（6）弥生後期土器……………	40
第12章	遺物（7）弥生後期土器……………	41
第13章	遺物（8）土師器……………	42
第14章	遺物（9）土師器……………	44
第15章	遺物（10）土師器……………	48
第16章	遺物（11）土師器……………	50
第17章	遺物（12）土師質土器……………	53
第18章	遺物（13）須恵器……………	57
第19章	遺物（14）須恵器……………	59
第20章	遺物（15）須恵器……………	61
第21章	遺物（16）須恵器……………	63
第22章	遺物（17）須恵器……………	67
第23章	遺物（18）須恵器……………	68
第24章	遺物（19）須恵器……………	71

第25章	遺物（20）須恵器	74
第26章	遺物（21）無釉陶器	76
第27章	遺物（22）無釉陶器	79
第28章	遺物（23）常滑焼	82
第29章	遺物（24）土師質土器	84
第30章	遺物（25）陶磁器	87
第31章	遺物（26）瓦	89
第32章	遺物（27）石器・鉄鋳	93
第33章	考 察	96

2 宇治町 旭羊毛構内遺跡

第1章	位置及び発見の動機	126
第2章	調査経過	126
第3章	遺跡の様相	127
第4章	遺物	128
	（1）須恵器	128
	（2）無釉陶器	128
	（3）同	130
	（4）常滑焼	132
	（5）土師質土器	132
	（6）鉄製品・木製品・獣歯	134
第5章	む す び	136

3 埋 田 遺 跡

第1章	遺跡の発見と発掘	139
第2章	調査の経過	141
第3章	遺跡の地形と構成	145
第4章	遺物・遺構の出土状態	147
第5章	遺物（1）弥生式土器	154
第6章	遺物（2）土師器	161
第7章	遺物（3）須恵器	169

第8章 遺物（4）陶器・青磁類	173
第9章 遺物（5）石器・青銅器・鉄器・鉄鋳等	179
第10章 考 察	183
追 記	193

4 宇治町遺跡

第1章 調査経過	218
第2章 試掘結果	219
第3章 遺物（1）土師器	220
第4章 遺物（2）土師質土器	221
第5章 遺物（3）須恵器	221
第6章 遺物（4）無釉陶器	224
第7章 遺物（5）青磁・灰白磁・陶器	225
第8章 遺物（6）鉄鋳	226

5 中一色町遺跡

第1章 調査経過	230
第2章 遺跡の現状	230
第3章 遺物（1）無釉陶器・陶器類	231
第4章 遺物（2）土師質土器	231
第5章 石 仏	233
第6章 考 察	233

6 その他の遺跡

(1) 蛭間町遺跡	236
(2) 大木町遺跡	238
(3) 観音町遺跡	240
あとがき	245

挿 図 目 次

1. 寺 野 遺 跡

第1図 寺野町遺跡図	9
第2図 方形井戸遺構実測図	11

第3図	自然石群見取図	14
第4図	弥生中期 甕・壺・台・平底	17
第5図	弥生後期 甕（第1類）（S字状口縁）	20
第6図	弥生後期 甕（第2類）・長頸壺	22
第7図	弥生後期 壺形土器	23
第8図	弥生後期 壺形土器	26
第9図	弥生後期 壺形土器	28
第10図	弥生後期 壺形土器・平底	30
第11図	弥生後期 高杯	32
第12図	弥生後期 高杯	34
第13図	弥生後期 高杯	37
第14図	弥生後期 櫛目文土器・脚台・平底	39
第15図	弥生末期 器台	41
第16図	土師器 甕（S字状口縁）	43
第17図	土師器 甕	45
第18図	土師器 甕	47
第19図	土師器 壺	49
第20図	土師器 高杯・脚台・平底	51
第21図	土師質土器 皿・把手・土錘・角形土器脚部・埴輪	56
第22図	須恵器 高杯・脚付蓋杯	58
第23図	須恵器 蓋杯	60
第24図	須恵器 盃・盤・長頸壺・甕	62
第25図	須恵器 壺	65
第26図	須恵器 壺	66
第27図	須恵器 平瓶	67
第28図	須恵器 裝飾付器台	70
第29図	須恵器	73
第30図	須恵器 平底・叩文	75
第31図	無釉陶器 壺・甕・片口・平底・盃	78
第32図	無釉陶器 山杯・小杯	81
第33図	常滑焼 甕	83
第34図	土師質 鍋・内耳鍋・土釜	86
第35図	陶磁器 皿・鉢・おろし皿・紡錘車	88
第36図	鍔 瓦・平瓦叩文	91

第37図	鏡 瓦	92
第38図	石器・鉄鏝	95
第39図	寺野出土遺物編年模式図	97

2. 宇治町 旭羊毛構内遺跡

第1図	無釉陶器 片口	129
第2図	無釉陶器 盥・山杯	131
第3図	常滑焼	133
第4図	土錘・木器・鉄器・獣歯	135

3. 埋 田 遺 跡

第1図	遺跡付近地図	194
第2図	発掘区域実測図	195
第3図	第1・2区鉄鏝出土状態	196
第4図	試掘区南側断面図	197
第5図	第10区北側断面図	198
第6図	遺物出土状態と遺構	199
第7図	弥生後期以降壺	200
第8図	弥生後期以降 壺・碗・壺底部・手焙形土器	201
第9図	弥生後期以降 高杯類	202
第10図	弥生後期以降 高杯・器台脚部	203
第12図	土師器 細頸壺・小型丸底壺	205
第13図	土師器 甕	206
第14図	弥生後期以降 甕	207
第15図	土師質土錘・角形土器脚部	208
第16図	土師器甕・土鍋・土釜・平瓦	209
第17図	須恵器	210
第18図	須恵器	211
第19図	無釉陶・灰釉陶	212
第20図	緑釉皿・碗・灰白磁輪花碗・青磁碗・染付合子・鉄絵鉢	213
第21図	播鉢・天目釉茶碗・柿釉鉢等	214
第22図	砥石・磨石・石製模造品勾玉・銅鏃・鉄器・鉄鏝	215
第23図	埋田出土遺物編年模式図	216
第24図	稲沢市松下町字随所出土灰白磁・青磁	217
第25図	元禄頃の埋田附近古図	217

4 宇治町遺跡	
第1図 試掘地層断面図	219
第2図 試掘出土 土師器・須恵器・鉄鏝	223
第3図 各所出土 土師器・須恵器・無釉陶器	226
5 中一色町遺跡	
第1図 陶器類・土師質土器	232
6 其 他 遺 跡	
(1) 蛭間町遺跡	236
第1図 弥生式 壺・須恵器 壺・無釉陶器 輪花皿・山杯・小杯	237
(2) 大木町遺跡	238
第2図 須恵器 飾台付壺・甗・短頸壺	239
(3) 観音町遺跡	240
第3図 巨石・灰釉皿	242

図 版 目 次

卷 頭 津島市域遺跡位置図（測量部地図）

1. 寺 野 遺 跡	
第 1 （巻頭）弥生式丹彩広口壺	
第 2 発掘状況其他	
第 3 A・B井戸遺構・自然石群・遺物出土状態	
第 4 遺物出土状況	
第 5 弥生中期 甕	
第 6 弥生中期 甕・壺・平底・中空脚台	
第 7 弥生後期 甕（S字状口縁土器）	
第 8 同 上	
第 9 弥生後期 同上・長頸壺	
第 10 弥生後期 壺・小形壺	
第 11 弥生後期 広縁壺	
第 12 弥生後期 壺（丹彩）	
第 13 弥生後期 高杯	
第 14 弥生後期 高杯・小形高杯・櫛目文	

- 第 15 弥生後期 平底・器台・土師器 甕（S 字状口縁土器）
- 第 16 土師器 甕・小形壺・高杯・小形高杯
- 第 17 土師質 把手・角形土器脚部・土錘・埴輪
- 第 18 須恵器 高杯・台付蓋杯・甕・長頸壺
- 第 19 須恵器 蓋杯・壺
- 第 20 須恵器 壺
- 第 21 須恵器 甕・平瓶・甗
- 第 22 須恵器 裝飾付器台・三耳壺
- 第 23 須恵器 有鈕蓋
- 第 24 須恵器 叩文
- 第 25 無釉陶器 壺・甕・山杯
- 第 26 無釉陶器 小杯・常滑焼甕
- 第 27 常滑焼 甕・土師質 鍋・釜・陶器 紡錘車・陶器 おろし皿
- 第 28 鏡瓦・砥石・鉄鋳

2. 宇治町 旭羊毛構内遺跡

- 第 1 調査状況・無釉陶器 片口・土錘・鉄製品・獣歯

3. 埋 田 遺 跡

- 第 1 遺跡全景・第3区柱穴
- 第 2 第3区遺物出土状態・第5区遺物出土状態
- 第 3 第5区遺物出土状態
- 第 4 第8・9区遺物出土状態
- 第 5 第10区遺物出土状態・第10区北側断面
- 第 6 弥生後期壺・高杯・壺と甕との底部
- 第 7 弥生後期 高杯類・靱痕ある土器・磨石・砥石
- 第 8 弥生後期以降 壺口部外面・同内面・甕口部
- 第 9 土師器 甕口部・台部
- 第 10 土師器甕台部とその磨消刷毛目
- 第 11 土師器小形丸底壺・細頸壺・高杯
- 第 12 土師器把手・甗とその底部内面・土錘・角形土器脚部
- 第 13 須恵器蓋・杯・甕・石製模造品勾玉・鉄器・銅鏃
- 第 14 須恵器蓋杯・壺・高杯・甗等
- 第 15 須恵器広口壺外面・内面の同心円叩目文
- 第 16 須恵器蓋・杯・広口壺破片

- 第 17 白色灰釉陶碗外面・内面
- 第 18 無釉陶小皿・碗・壺・鉢類
- 第 19 緑釉陶皿・碗・灰白磁輪花碗・青磁画花文碗等
- 第 20 平瓦・緑色灰釉陶鉢・壺類・土釜・常滑焼甕
- 第 21 無釉陶碗・卸鉢・天目釉茶碗・柿釉壺等
- 第 22 柿釉鉢・尾呂窯飴釉茶碗・志野白釉碗・鉄絵鉢・染付合子・播鉢
- 第 23 鉄鉢4 個（上下側面）

4. 宇治町遺跡

- 第 1 試掘風景・遺物出土状態・土師器深鉢
- 第 2 土師器甕・壺・青磁・灰白磁類

5. 中一色町遺跡

- 第 1 陶器類・土師質土器・石仏
- 第 2 無釉陶器・土師質土器

6. その他の遺跡

- 第 1 蛭間町遺物 弥生式 壺・須恵器 壺・無釉陶器 輪花皿
- 第 2 大木町遺物 須恵器 飾台付壺・甗・短頸壺
- 第 3 観音町遺跡 巨石

津島市域に於ける遺跡

三河猿投神社旧蔵と伝える、養老年間の「尾張太古図」というのが世に出ている。尾張最古の地図といわれるものである。それによると伊勢湾は現在よりもズッと奥深く入込んで、犬山あたりを北限とし、東は春日井あたりの山なみを南下して浪越（名古屋）に至り、西は大垣近くまで入込み、養老多度の山裾を海岸線として南へ延びている。この大海中に中島・津島・市腋（え）島・沖ノ島など、大小の島々が点在している。

この古図についてはどこまで信頼がおけるものか、巷間信疑を云々されるものであるが、考古学の発達した今日、各所に数多く発見されている遺跡をたどって見れば、凡そ古代の地理も窺われよう。

ところで、我が津島の地は、大海中の孤島として描かれている尾張太古図を、そのまま信頼できないとしても、凡そ木曾川の流砂により、デルタとして形成されたものであることは間違いないが、それは当地の地層によっても十分に窺い知られる。

津島市は海部の郡に属する。海部の地名は全国に数多くあるが、それは海人(あま)族の繁殖したところとされる。海人部は人皇第15代応神天皇の御代に制定された氏族(古事記)で、九州値嘉島を本拠とし、主に海辺沿いの各地に一族が繁栄したところであるが、こゝに尾張風土記残編によれば、

「民用富饒材竹多種出柴胡橘柚川芎当帰厚朴業鮮魚繁多而膳部知所也（下略）」

とあり、「膳部」とは即ち海部氏のなりわいで海部氏の支配するところと解釈出来る。もとより尾張風土記残編をそのまゝに信憑出来ないにしても、三河には渥美(安曇)の郡があり、海部氏と同族の安曇氏が住居したと考え、この地方に海部氏が無縁とは云い切れない。

承平年間（931～937）に成立した和名抄には「海部郡」と記し、既にこの頃には島も陸続きとなり、デルタも耕地に発達して居たと思われるが、なお、延喜5年(905)に着手し延長5年(927)に完成した延喜式50巻の内の、神名帳に載せられた海部郡8座の神社の中で、我が津島地域では、神守の憶感神社があり、隣邑佐織町諸桑に諸楯神社・佐屋町柚木に由乃伎神社がある。しかし大社である津島神社は神名帳に載っていないが、右8座のうち国玉社が所在不明で、一部学者はこの社を津島神社に比定している。

このように我が津島には、歴史にあらわれた古社も存在する以上、そこに住んだ人々の聚落（しゅうらく）があった筈である。

俗に木曾四十八流と云う。太古以来洋々と流れるこの大河は、一旦はんらんの場合は、一望平坦な西尾張地域を縦横に侵したであろう、その木曾川の本流を凡そ今日の川筋に固定したのは、戦国時代の天正12年、豊臣秀吉の治水行政によるものと伝え、干ばつ減水の際、往々この

古堤が木曾水流中にあらわれることは、時々新聞に報道されるところである。

この地は一帯渺茫(びょうぼう)たる沃野で、農耕文化の発達したところであるから、この沃野をうるおす流水は天与の恩恵ではあるが、一旦荒れたとなれば大切な耕地はもとより、生命をもおびやかす危険にさらされる。そうした現実の上に、農耕と水を司る神々をまつるのは自然の理で、この地方には古名を冠したお社もあり、上代から神祭が行はれたことと考えられるから、祭祀遺物もなければならない。

然るに津島地方は、従来木曾の流砂の堆積で形成されたデルタで、考古学的遺跡は無かろうというのが一般の通念であった。もっともすでに先年、市内七軒家(愛宕町)地内から貝塚が発見されて遺物も出たが、しかしこれとて数百年さかのぼる程度のもので、さして重視すべき遺物でもなかったが、その他に遺跡らしい場所も見当たらないまゝに過して来た。

ところが昭和39年4月津島市教育委員会に文化財委員会が発足し、文化財保護の事業を開始した直後、寺野町に遺跡が発見され、これを契機としてようやく一般市民の間にも、文化財殊に埋蔵文化財の意義が認識され、委員会の活躍とともに、各所に遺跡や現に保管されている遺物も見出されつつあって、今后なお一層の関心と探査の必要を痛感する。

津島の遺跡を概観すると、今日まで調査した限り、遺跡の土層から見ても、立地から考察しても、いずれも浅海の海浜か、あるいは川岸と云った場所と見られる。殊に去る昭和43年に発掘調査した埋田遺跡の如きは、この事実がハッキリとうなづけ、しかもこれによって、中世の水路をも考察する事ができたことは、別記の通りである。

遺物について見ると現在までのところ、寺野遺跡から出土した弥生中期(約2,000年前)の土器を上限とし、各所に弥生・土師・須恵などの各時代にわたる土器の出土を見るが、これより時代の降る無釉陶器は圧倒的に多い、即ちこの頃には、すでに普遍的に聚落が定着したことを裏付けするものである。

遺物のうち特筆すべきことは、寺野遺跡に於いて弥生後期土器中、その豪華さを以って知られる、パレススタイルの丹彩各種土器と、今一つは白鳳期の法隆寺式鎧瓦の出土である。法隆寺式の瓦は尾張に於いては数すくなく、しかも国分寺をさかのぼる2世紀前、すでにこゝにかような美事な瓦を用いた大伽藍が存在したことは大きな謎で、今後の解明をまたなければならないが、同時にその調査の過程に於いて、同町明安寺に藤原期の仏頭と、仏像の残欠を見出したことである。白鳳期の瓦の裏付として調査したこの寺で、さゝやかな厨子にまつられた仏頭は、板光背その他に優秀な彫刻をもつ、藤原期に製作された半丈六の大日如来像であることが判り、間もなく愛知県文化財に指定されたが、これもいわば遺跡調査の副産物であった。

埋田遺跡に於いては、弥生後期以降各時代にわたる多くの土器を得たが、その中で銅鑠と緑釉・中国の宋・元時代の青磁・灰白磁等の陶片類が出土したことである。銅鑠は4～6世紀の古墳から、たまたま副葬品として出土した例はあるが、このように住居跡から出土したことは、県下最初の実例として甚だ珍しいといわなければならない。また緑釉や中国渡来の青磁類は、当時としては貴重な品で、その頃これを使用したのは高貴な向か、或いは大社・大寺あたりでなければおそらく使用するを得ない珍重である筈の品が、こゝで発見されたことは、こゝに高度な生活をもつ何かが有ったものか、或いは尾張国分寺の所在する、中島郡矢合に至る水運に沿い、このような品物の集散地ではなかったかと云う見方も出てくる。しかしこのように舶載の青磁片はここだけではなく、別記宇治町茶の里・観音堂からも採集したので、あるいはかかる貴重な品々をも日常に使用し、高度な生活を営んだかも知れないが、それについては今後充分な調査を必要とするであろう。

このように挙げると我が津島市内には、まだまだ多くの遺跡が埋蔵し、幾多の謎を秘めているものといはなければならない。

ようやく上代の解明に手がかりを得てから、日も浅い現時点に於いて、市史の第1巻に考古編をまとめて見たものゝ、今後調査の進むにつれて、津島の歴史を更に前進させる貴重な発見がされることも決して夢ではないと信じる。



寺野町明安寺仏頭



同 光 背

1. 寺 野 遺 跡





寺野遺跡全景

第 1 章 遺跡発見の動機

津島市寺野町では、同町20ヘクタールに亘る耕地整理を行うために寺野土地改良区組合を結成し、昭和39年と翌40年の2ケ年に亘る継続事業として、工事一切を組合員の同町の農家の人等の手によって実施された。偶々昭和39年3月中旬、水路開鑿工事にあたり地下から井戸様の構造物と、中から若干の土器が発見されたことがきっかけとなり、工事の進展と共に、各時代各種に渉る夥しい土器片や、布目瓦等が出土したが、そうした遺物に徴して、こゝは先史時代既に聚落が営まれていた遺跡であることが判明した。

第 2 章 調 査 経 過

井戸様の遺構発見とともに、組合から津島市神守支所を通じて、市教育委員会へ通報があり委員会から直ちに文化財専門委員へ調査の要望があったので、昭和39年3月15日委員等は直ちに調査のため現地に出向いたところ、遺構は新たに掘鑿された用水の中心で、且つ新規に敷設される農道の下にあったが、工事の都合ですでに埋め戻された後であった。しかし工事手直しの必要から近日再び掘起すとの事であったので、その際に調査確認する事を約した。その際遺構から出土した無釉陶皿3点と、隣接の畑で表土を除去した跡には、土師器・須恵器の破片が散乱しているのを見付けて採集、なお現場から50m程隔たった畑の下層から現われた自然石群と、伴出した土師質の甕等から、古代遺跡であることが確認されたので、今後は土器類の出土には十分に注意を払うよう組合員に要望して引揚げた。

ついで3月18日に再度現場へ出向き、除土された用水中に露出した遺構を実測調査し、その附近各所に散乱している各種土器片を採集したがなお、委員は工事に従事している組合の人々を集め、これら土器片についての説明と、寺野の歴史につながる当遺跡の重要性を説き、今後工事の進展に伴って出土する土器類は、たとえ破片の大小を問わず保管して置いて貰いたいと依頼した結果、この事に共鳴した組合員各位の熱意ある協力が得られ、爾来39年度第1期工事の終了するまでの約5ヶ月間、担当委員は十数回に亘って遺跡を訪れ、進行する工事現場について、遺跡の様相を調査観察する一方、組合員の協力によって、工事現場の各所に一括されてある遺物の収集に従ったが、なお一応工事の終わった後もしばしば現地を訪れ、雨などによって各所に露出した遺物の採集に努めた。

ついで第2期工事の開始された、昭和40年1月18日に調査を始め、同年5月14日までの5ヶ月間、十数回の調査によって、更に夥しい土器片と、布目瓦等を採集したが、特に第2年度の成果としては、前年度には見られなかった、弥生中期の土器類・パレススタイルの丹彩土器を含む弥生後期の各種土器、白鳳期の鎧瓦等、当地方の歴史の上に重要な資料となる文化遺物が続々と出土したことである。

寺野遺跡の調査については、真野慶泰氏の協力に負うところが非常に多かった。

第 3 章 遺跡の様相（第 1 図・図版第 2）

寺野町土地改良区の耕地整理は、同町人家の集落を除く耕地全域に亘って行なわれ、区画に従って新しく敷設する道路と用水の開鑿・新道添いに畑を設けるための畑土の移転等の工事で、総面積約20ヘクタールにも及ぶ広範囲に涉っているので、地層も甚だ複雑を極め一概には云えないが、凡その場合を観察すると約30cmの表土の下にや、砂粒を含む褐色土層約20cm、その下に灰色を帯びた砂層約20cm、続いて白色の強い粘土層となっている。この粘土層は即ち基盤で、此の辺り特有のソブや、鉄分の沈着した植物繊維らしいものも含まれ、下層出土の土器には、しばしばこの鉄分が附着しているのを見る。しかし北方の大字牧野前、B井戸遺構のあったあたりは、砂層の下は漆黒の有機質泥土で、水路掘鑿の際などは、甚だしい異臭がしたが、そのあたりは恐らく、蘆荻(ろてき)の密生した水辺で、これら植物が腐蝕累積した場所と思われる。またその西方の如きは耕土が甚だ薄く、すぐに厚い粘土層に続いている。大字砂田の名の如く砂層が他の地点より厚く、ここからは土錘等が出土して居て昔の砂浜を思わせる。

このように観察すると、この地はもとは入組んだ水辺で、最初に定着した弥生人は、デルタの水際に点々と居を構えたのが、其後河川の氾濫によって堆土が嵩んだものと思われるのは、古式土器の出土層位は、普通表土下70cm～80cmを普通とするが、或る地点では1m以上、甚だしいのは2m以上に及ぶ地点もある事から想像される。

さて本遺跡から出土した土器は、弥生式中期の條痕文土器と、弥生式後期の高杯を主体とする各種、特にパレススタイルと呼ばれる一連の華麗な丹彩土器、各種の土師器、古墳期から平安期に亘る須恵器・無釉陶器・陶器に及んでいる事から推して、此处ではすでに2,000年近く遡る頃からすでに水辺の沃野に農耕と漁撈の生活が営まれ、しかも相当高度な文化遺物から考えて、恵まれた階層にあった事が窺われ、また円筒埴輪の破片が出土したことによって、こゝにはかつて相当規模を有した古墳が営まれていたことを裏書きし、これに伴う装飾豊かな須恵器の各種がある。

また白鳳期の、法隆寺式鋸歯文帯六葉複弁蓮花文鏡瓦と、多くの平瓦が発見されたことは、尾張国分寺創建の奈良朝を遡る頃、すでに相当な規模をもつ伽藍が存在したことを立証し、やや時代は降るが、同町明安寺には県文化財に指定された藤原期の半丈六の大日如来像の仏頭と残欠が存してかれこれ、尾張仏教の黎明期に営まれた、寺院の遺物と見ることが出来る。なおこゝで断っておかなければならない事は、本遺跡出土の土器は、一部を除いた概ねのものは、出土地点がハッキリしない事である。それは前述の通り、工事が広範囲に亘っていることと、概ね資料は工事の工程に於いて見出されたものが多いからである。即ち採土中出土したものは、その附近に纏められてあるが、畑の移動または道路作りのために、あちらこちらからトロッコ

で運ばれた現場で見出されたものは、その移動後の現場で纏められたという具合に、発見の動機も非常に錯綜しており、出土層位も勿論不分明のために遺物の区分、たとえば弥生末期～土師器の時期の何れに類別するか、頗る苦勞したものも少くなかった。そうしたものは胎土・手法を勘案して一応の区分はしたが、しかし絶対のものでない事を断っておかなければならない。



第1図 寺野町遺跡図

第 4 章 井戸遺構（第2図・図版第3）

本遺跡発見の動機となった、方形竪杵形井戸——A井戸と仮称——発見の翌年、今度はA井戸から北西の方向に於いて、水路開鑿にあたり、曲物を積重ねた井戸——B井戸と仮称——遺構に掘当たった。

A 井戸（第2図・図版3）

寺野町字丸田1197番地横井勝之丞氏所有の畑で、新しく水路を開くため掘鑿(くつさく)中に発見されたものである。

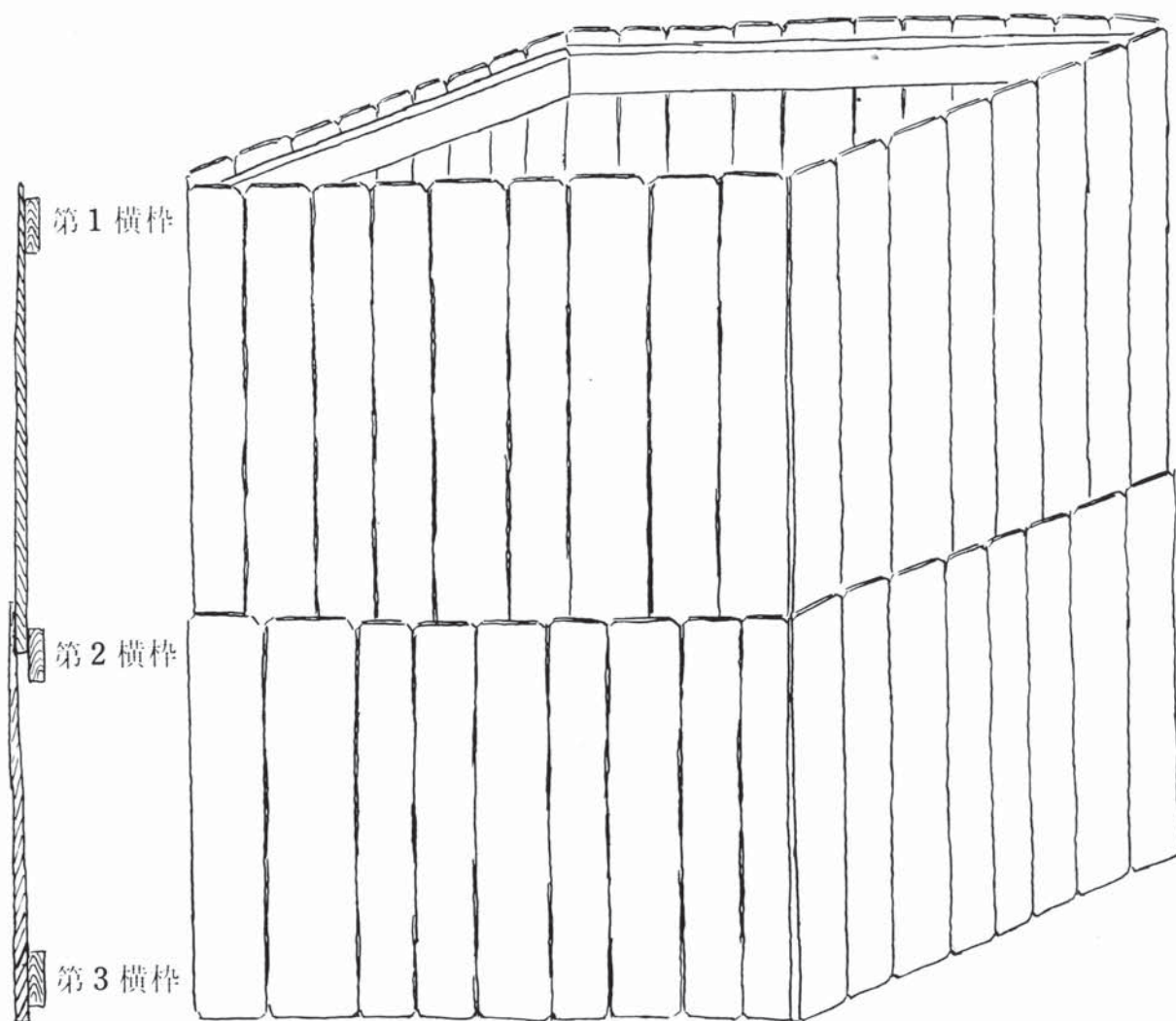
遺構は表土下約70cmを上端として、長辺110cm、短辺95cmの長方形の井戸で、幅10cm厚さ3cm前後の厚板各2本ずつの両端を凹凸に切込んで四角に組合せ、東西に長い矩形の第1の横杵とし、更に90cm下って同型の第2の横杵、更に60cm下って第3の杵とし、これへ幅10cm～35cm、厚さ3cm前後のはぎ板の上端を楔状に尖らせ、尖端を上にして杵の外側へ竪に並列する。

竪板は第2・第3の杵間は約70cm、第1・第2の杵間は約1mの竪板で、下段の竪板の内側へ重ね合せて、別図のように深さ約1m50cm（註1・2）の井戸とし、井戸杵の四周は粘土を以て固め、土崩れを防いだ形跡がある。しかしこれは、今日我々が普通に井戸と呼ぶものとは異なり、いわゆる単なる「水だめ」に過ぎないであろう、元来この辺りは海拔零米の低湿地で、普通一米も掘下げれば自然の湧水が豊富で、別段に深く掘下げる必要もない訳で、現にこの遺構を実測の際も、湧水がひどく底まで充分に調査することは不可能であったが、探って見た結果では井戸底はなく素堀りのようで、中から若干の片麻岩の割石が出土した事から推せば、底に敷石があったかとも思われる。なお本遺構発掘の際、井戸杵の堆土の中から、第32図8・910に図示した無釉陶盃山杯3個の他に、若干の同質土器片が出土して、時代を知る手掛りとなった。

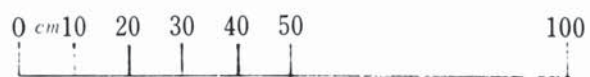
B 井戸（図版第3）

A井戸の発見された翌40年に、今度はA井戸から約350m離れた、牧野前の地内——寺野、牧野境——で、水路開鑿(かいさく)中に水路のちょうど真中にあたる個所で、またもや井戸遺構を掘当たった。——B井戸と仮称する——

しかし今度はA井戸とは構造が異り、曲物を積重ねた構造（註3）で、たまたま調査に訪れた時は、もはや水路開鑿が終り、遺構はすでに破壊された後であったので、工事に従った人々から発掘時の状況を聞くよりほかはなかった。それによると遺構は表土下約80cmを上限とし、ちょうど「せいろう」と同じ構造の曲物を積重ねてあって、一番上には蓋と思われる円形の板



$$S = \frac{1}{10}$$



第2図 方形井戸遺構実測図

と、人間の「どくろ」を思わせる半円形のえたいの知れない物が出たので、人々が好奇心で割って見ると柔くこまかく砕けた。曲物は2段位掘出したが、湧水が多いので中止したから、まだ川底に残っていると云う。遺物は厚さ5mm程の桧板——細片のため全体の幅は判らない——に鋭利な刃物で直角或いは斜に切込を入れて、直径約40cm程の曲物とし、桜の皮で綴ってあるのは、今日使用されている「せいろう」と少しも違わない。また粉々に砕かれた「がい骨様のもの」を見ると、ボロボロに腐蝕し、一面にやや固い表皮状のものがついているので、仔細に観察すると、紛れもなく瓢箪で、瓢を縦に割り、柄杓として水汲に使用していたものであることが判った。

註1. 駒井和愛著「登呂の遺跡」

登呂の遺跡のある東北方七・八百米には即ち静岡市内、久能街道に近いところには有東の遺跡がある。(中略) 楠材の臼は井戸わくの内に入っていたのを、土地の人が見つけたというのであるが、この井戸わくも弥生式土器の時代のものであって、日本で最も古い井戸わくの様子を知る材料である。

この井戸わくは長辺90cm短辺70cmの矩形の平面をもつもので、その四周を長さ約1m厚さ2cmほどの木の板をならべてつくり、その内壁に接して責めわくをはめ込んで出来ているものであった。井戸わくの底に5～6cmの砂の層があったので、これを底とみると、井戸の深さは1m近い浅いものであったと推定される。元来このあたり一帯は湧水の多いところであるから、1mも掘りさげれば立派な井戸が出来たものであろう。

註2. 一宮市萩原町附近は、弥生式土器を上限とする遺跡も多く、豊富な遺物が出土しているが、同時にこの竪杵井戸も各所に出土している。今萩原町萩原中学校々庭から出土した井戸遺構が同校に復原してあるが、それは寺野町のA井戸と全く同じ構造で、杵の大きさは長径95cm短径93cmで、長さ88cmの板を2段に並立してあって、規模に於いてA井戸と大差はない。

註3. まげ物を積んで井戸わくとした井戸の遺構は、この地方でも2・3発見されているが、その構造は凡そ、まげ物を三・四段積重ねたもののようで、従って深さは凡そ1米位かと思われる。

第 5 章 自然石群 (第3図・図版第3)

A 井戸遺構出土地から約100m 西方の、寺野町字西後田642番地 真野 強氏所有の畑で、採土中自然石群の埋没しているのが見出された。

石群は表土下約70cmで、東西の幅 2 m 70cm、南北の長さ 6 m 50cmに亘り、大は直径60cm、小は20cm位までの、いずれも角の取れた河原石50余個が不整形に並び、石群から 4 m を隔てて第17図2の土師器の甕が出土した他に、各種の土器片も採取された。

なお以前に同じ畑から出土したと伝えられる自然石2個が、近くの白山社境内にあり、1個は26cm×17cm、1個は21cm×18cmで、双方ともに一方がやや尖っている。この石も果してこの自然石群の一連のものかどうか確証はない。

そこでこの石群であるが、この土地は元来木曾川流砂によって形成された沖積層で、普通岩石の類は全然混在しない土地であるから、この石群は勿論自然の混在ではなく、人工によるものである事はたしかである。とすれば凡そ次の3点が考えられる。

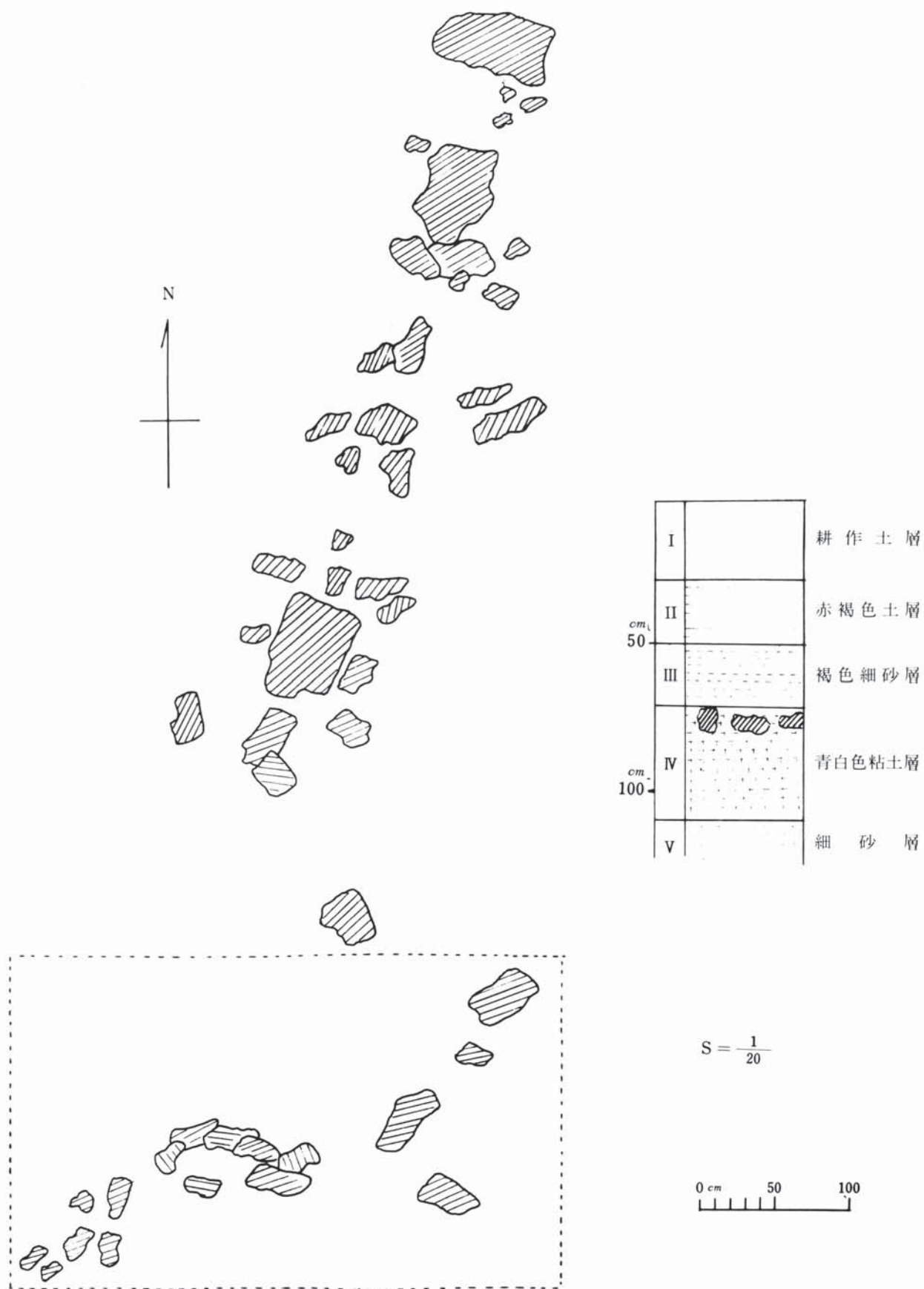
1. 古 墳
2. 住 居 跡
3. 祭 祀 遺 跡

である。

規模の大きさと方位から見て、まず第1の古墳が有力視されるが、このような表土下の古墳は一寸類例に乏しく、且つ古墳にしては石が少なく且つ大小不整である。第2の場合は柱穴、炉趾、或いは土器等住居跡に相応しい遺物もなく納得が行かない第3の場合も然りで、祭祀遺物の伴出でもなければならない。

ところでこの石群から 4 m 距って出土した、第17図2の土師器の甕の下腹に、不整な直径1.5 cmの小穴1個が穿たれている。この小穴を仔細に観察すると、焼成後外面から丹念に叩き穿った形跡があり、紛れもなく人工によるものに相違ないと思われるのは、普通鍬先などにかゝって穿たれたものならば、必ず周囲に多少のヒビ割れがある筈だが、これはそうした跡は更に見られない事でも立証出来る。

さて土師質の壺或いは甕の底に排水を考えて一穴を穿ち、火葬墳の骨壺に用いた例は各地の遺物に見るところであるから、この土器も或いはそうした用途の為に、人為的に穿ったものであるとするならば、この石群も或いは火葬墳の遺構とも考えられるが、しかし石群と甕とは伴出したわけでもないので結論はつけられない。



第3図 自然石群見取図(点線内は工事の際異動したもの)

第 6 章 遺 物 (1) 弥生中期土器

この一群の出土地点は、寺野町字牧野前の畑の下層で寺野町では最も高い畑地の、しかも田面より50cm下層、畑の表面からは、約2mにも及ぶ下層から出土した。この地点から出土した一連の土器は、外面は概ね黒褐色又は暗灰色に統一されるが、反対に内面は明るい褐色を呈している事が多く、また胎土の芯は、ちょうど餡を入れたように黒色というケースが多い。これらの中には煮沸具として、外面が煤けたと見られるものもあるが、他は焼成火度の結果によるものであろうか、中には外面に鉄分化した植物繊維らしいものが附着しているものもある。このように概ね明るい色彩をもつ、他の地点出土の土器群とは全く対照的であると共に、器形・施文に於いても著しく趣が異っている。

●甕形土器 (第4図・図版第5・6)

1：口径30cm胎土に砂粒混り黒褐色、外反した口縁は頸部でややすぼみ、下降するに従って膨張する腹部から、徐々に縮まって下胴に至る。下胴以下が欠けているが、中空の脚台が付くと思われる。やや肥厚した口縁端面の上・下の稜角に刻目を施し、口頸部から下腹部にかけて全面に、半截竹管様の器具と篋とによる条痕のような太い刷毛目が縦位に施され、また、外反する口頸の内面には、不整な横位の条痕の上に、四条の波状文が2段施されている。

外面に煤が附着しているので煮沸具として用いられたものであろう。(第4図1・図版第5)

2：口径30cmの甕の上胴部で、1よりも胴の張りは少ない。暗灰色胎土に砂粒の混入は同様である。やや肥厚した口縁端面の上・下に刻目を施すことは、1と同じ手法であるが、1と異なるところは、上端の刻目は口縁内側まで、鋸歯状に長く刻まれていることである。外面口頸部から胴部全面、縦位の刷毛目を施し、口頸から35cm下って6条の並行櫛目文と、不整な波状文が印せられ、口縁内面は横位の不整な刷毛目の上へ、波状文が一段施されている。(第4図2・図版第6)

3：暗褐色、胎土密で雲母を多く混じ、焼成は堅緻で、外面刷毛目が施される。(第4図3 図版第5)

4～8：口径20cm～26cm主に暗褐色胎土密で、多くの雲母が混入。4は整然とした浅い右傾の櫛目。6・7は篋による右傾の整形痕を印し、5・8は素文である。(第4図4～8・図版第5)

9：甕の胴部と思われる破片で、褐色、外面に粗い条痕が施される。外面に煤が附着してい

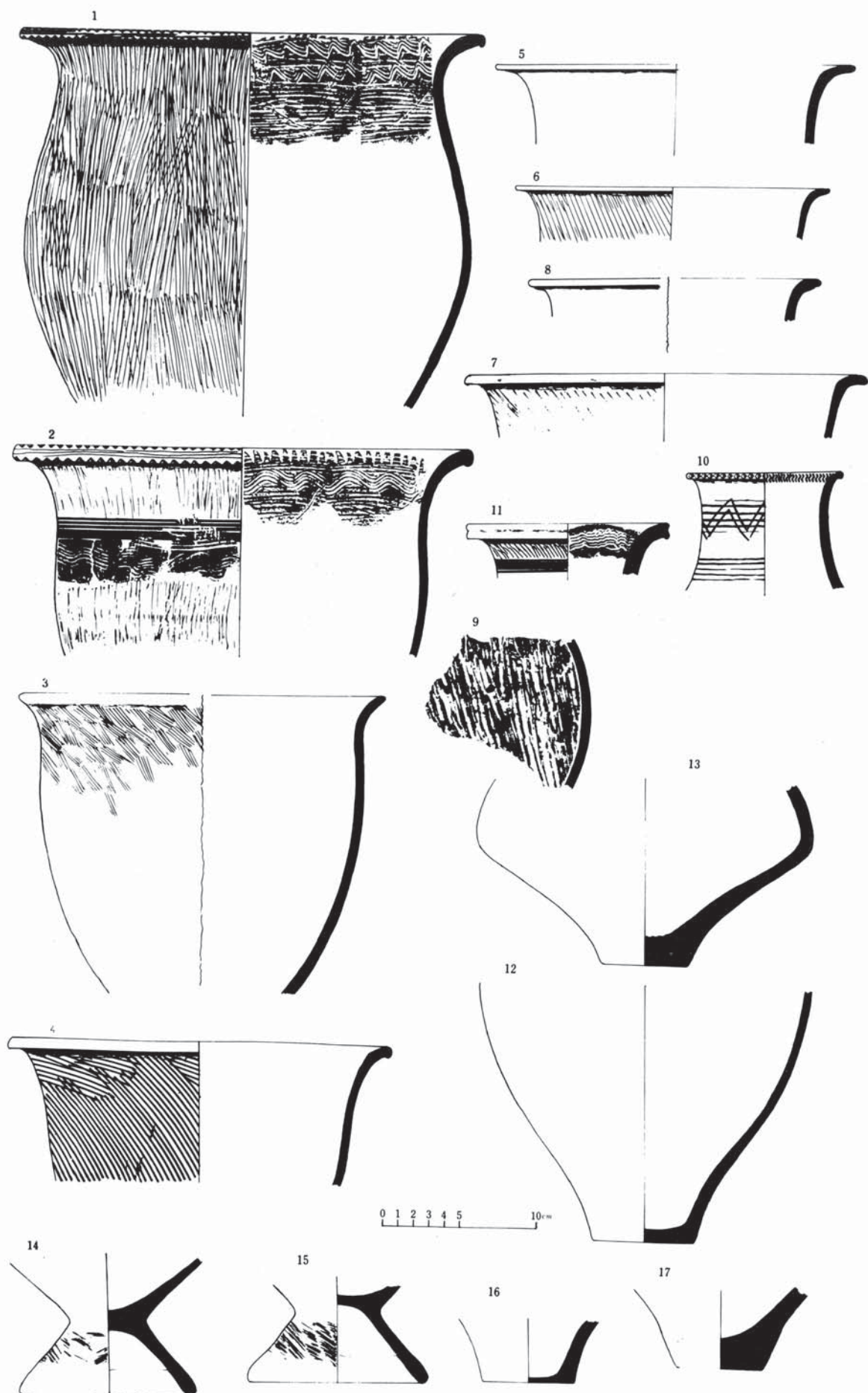
るので煮沸具であったと思われる。（第4図9・図版第6）

●壺形土器（第4図・図版第6）

- 10：口径10cm、口頸部の破片で暗灰色胎土は粗く、外反する口頸の口縁端面に刻目を施し、口縁からやや下って、不整な数条の並行沈線を2段繞らし、上段の沈線上へ、2条並行の山形連続文が施される。また口縁内面には、肋条貝の口縁を使用したと思われる。逆S字状の圧痕が繞らされている。（第4図10・図版第6）
- 11：口径13cm、口頸部の破片で黒色を呈し、肥厚した中凹みの口縁、口頸部には5条の櫛目文が施され、口縁内面にも5条並行の不整な波状文が印される。（第4図11）
- 12：多分長頸壺の下半と思われる。黒褐色素文で、雲母を多く混じ焼成堅緻、外面篋磨きによって滑沢を呈し、平底である。（第4図12・図版第6）
- 13：灰色を呈し、素文下腹部が強く角張って、算盤玉状の器体に平底をつけた、細頸壺の下半と思はれ、外面篋による整形の痕がある。器の内面が黒色を呈しているのは、液体類の貯蔵に用いられたものであろうか。（第4図13・図版第6）

●台・底（第4図・図版第6）

- 14・15：中空の脚台で、暗灰色、手捏ねらしく粗野な作りで、外面大まかなタッチで行った整形の篋痕がある。双方ともに煤が附着しているので、煮沸具として用いた土器の脚台と思はれ、あるいは1・2のような甕につくものではなかろうか。（第4図14・15・図版第6）
- 16・17：ともに暗褐色、外面は何れも篋によって磨かれているが、殊に16は12に酷似して、入念に磨かれ、滑沢を呈して美しい。（第4図16・17）



第4图 弥生中期 1~9. 甕 10~13. 壺 14~17. 台・平底

第 7 章 遺 物 (2) 弥生後期土器

本遺跡出土の弥生後期に属する土器群は、いわゆる伊勢湾沿岸第4様式に含まれる各種で、種類は多彩ではあるが、凡そ当地方に普遍的なもので、近くの一宮市周辺の遺跡群の遺物と類似するものが多い。

寺野遺跡に於いて、弥生後期に属する土器の出土は、本遺跡の全域に亘っているが、中でも第1図の遺跡図に示す通称馬三前④の地点に於いては僅か8m×6m位の狭い範囲から、熱田高蔵貝塚・瑞穂遺跡を標式とする、パレススタイルの櫛目文丹彩壺その他塗彩の各種、原始絵画のある小型壺・各種高杯等、凡そ30個体が同じ層位から出土したが、そこはやや固い地層であるいは住居跡の床面とも思われたけれども、何分当時は突貫工事中なので、詳細な調査も許されなかったのは、如何にも心残りであった。また当遺跡では、いわゆるS字状口縁の薄手甕の出土が夥しく、胎土・施文から見て、土師まで続くものと思われる。

土器は大体に赤褐色を帯びた、非常に明るい色合のものが多いが、これらの中で特に美しい色合のものは、丹彩と同じように、化粧掛けの上土(うわづち)を塗布したのではないかと思われる節があり、あるいは普通赤楽茶碗の製作に於いて赤褐色の泥土の溶液を塗布するような方法で加工がなされたのではないかと考えられる。

●甕形土器

第1類——S字状口縁土器(第5図、図版第7・8・9)

この一連の土器は、もともと弥生式に属するものか、土師に含まれるものか、あるいはその中間型式か、前後の繋りが判然としないので、正しく言えば時代不明の土器であるが、ここでは一応胎土と施文によって、弥生と土師に分類はして見たものの、将来或いは研究が進んで、この分類が訂正されることも有り得るであろう。

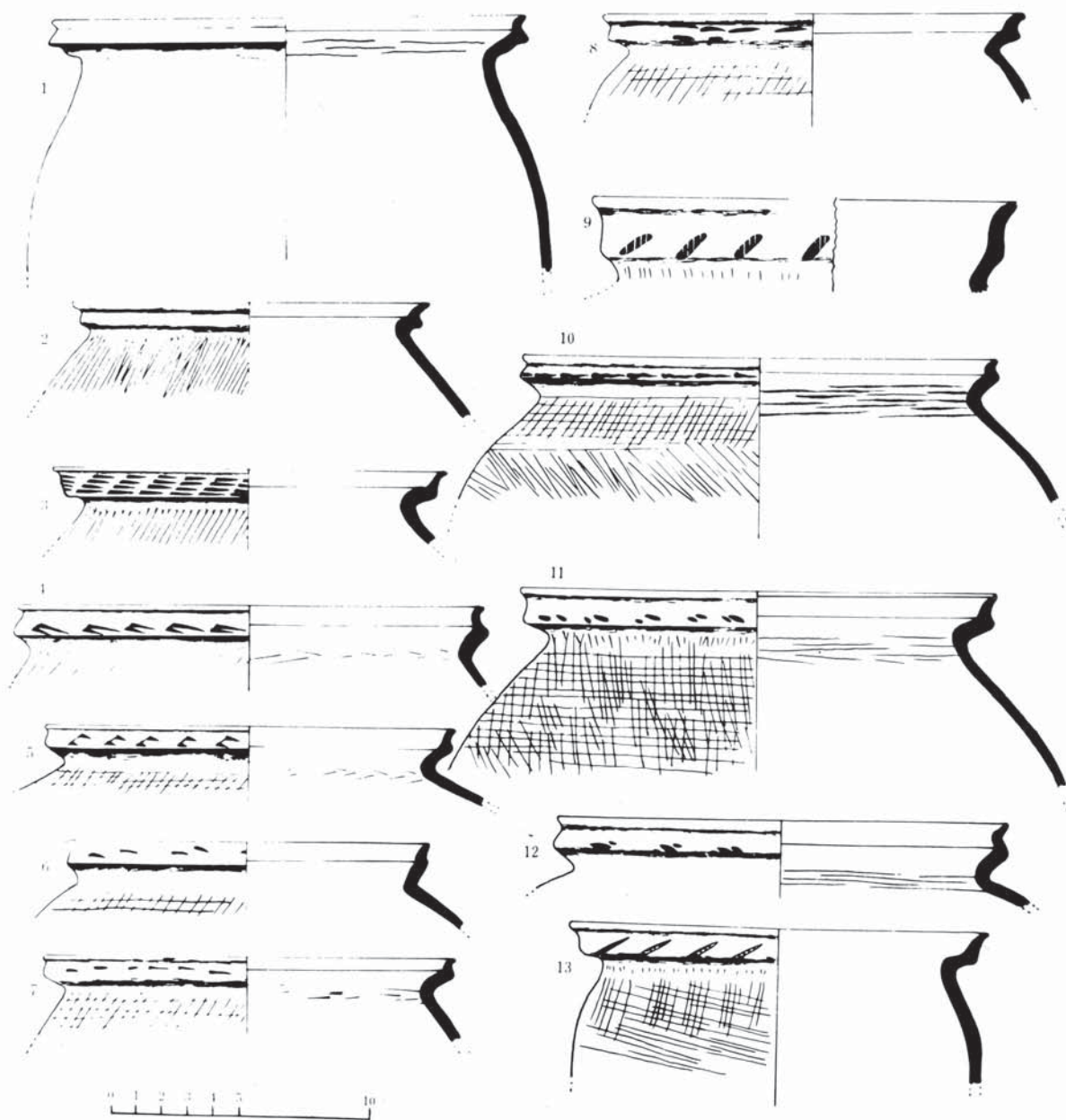
この土器は、口縁部の断面がS字状で、胴部は肩で張って下胴は甚しく収縮し、主に中空の脚台がつき、器胎は極めて薄い。外面煤けたものが多いのは、主に煮沸具として用いられたものと思われる。

この土器は東海地方をはじめ、中部山岳地方・関東・東北地方に至るまで、広く分布しているが、寺野遺跡では圧倒的に多く出土している。

1：口径18.3cm、淡褐色外面素文で、口頸内面胴との接合部には、篋による条線が引かれる
(第5図1)

2：口径13.9cmで淡褐色、口頸から胴部へかけて、器表を整形した、左傾の篋痕が印される
(第5図2・図版第7)

- 3：口径15.4cm淡い暗褐色で、胎土に雲母が多くまじる。外反する口縁端の下、いわゆる立ちあがりの面へ、櫛状具による4列の、刺突文を印し、頸部以下は櫛状具による、左傾の条線が縦位に引かれる。（第5図3・図版第7）
- 4：口径18cm淡い暗褐色で、砂粒雲母が多くまじる口縁立ち上りの面には、櫛状器具の刺突文、頸部以下は櫛状器具或いは肋状貝の縁辺で引いたかと思われる。やや太い左傾の条線が縦に引かれ、口縁内面胴との接合部には、杉葉状の条線がある。（第5図4・図版第7）
- 5：口径15.8cm、淡い暗褐色で砂粒雲母が多くまじる。口縁立ち上り面には刺突文、外面頸部以下は櫛状具により縦横線を印し、口縁内面の胴との接合部には杉葉状に条線が印される。（第5図5・図版第7）
- 6：口径14cm、淡い褐色で砂粒が多くまじる、口縁立ち上りには、不整な刺突文、頸部以下は篋と櫛状器具により水平と左傾の縦横の条線が施される。（第5図6・図版第8）
- 7：口径15.9cm、淡い褐色で、砂粒が多くまじる口縁立ち上り面には不整な刺突文、外面頸部以下は、竹管状器具で引いたやや太い横位の条線と、櫛状具による左傾の条線を印し、口頸内面胴との接合部には、不整な横位の篋痕がある。（第5図7・図版第7）
- 8：口径16cm、淡褐色、胎土に雲母がまじる。口縁立ち上り面には刺突文、頸部以下は縦横の条線が印される。（第5図8・図版第7）
- 9：小片のため口径は判らない。暗褐色で焼締りよくやや厚手、口頸のS字状は他と比べて緩漫である。口頸立ち上り面に櫛歯状器具の刺突文、頸部以下は条線があるらしいが、小片のため判らない。（第5図9・図版第7）
- 10：口径18cm、淡い暗褐色で、胎土に雲母が混じる。口縁立ち上り面には刺突文、頸部は水平位と左傾の不整な縦横の条線、上胴以下は右傾の条線がある。口縁内面胴との接合部には篋による水平の条線がある。（第5図10）
- 11：口径18cm、淡い暗褐色、口縁立ち上り面に刺突文、頸部以下は不整な短い縦横の条線、口縁内面胴との接合部には、水平の条線がある。（第5図11・図版第8）
- 12：口径17cm、淡い暗褐色で、砂粒雲母が多く混る。他の土器と異り、刺突文はS字状の稜上に印され、頸部以下櫛状器具による整型跡が僅かに見られるが、欠失していてよくは判らない。口縁内側胴との接合部には水平位に条線がある。（第5図12・図版第8）
- 13：口径16cm、淡い暗褐色で、砂粒多くまじる。口縁立ち上り面へ櫛歯による刺突文と、頸部以下縦横に櫛状具の条線が施される。（第5図13・図版第8）



第5図 弥生後期土器 1～13. 第1類 甕(S字状口縁)

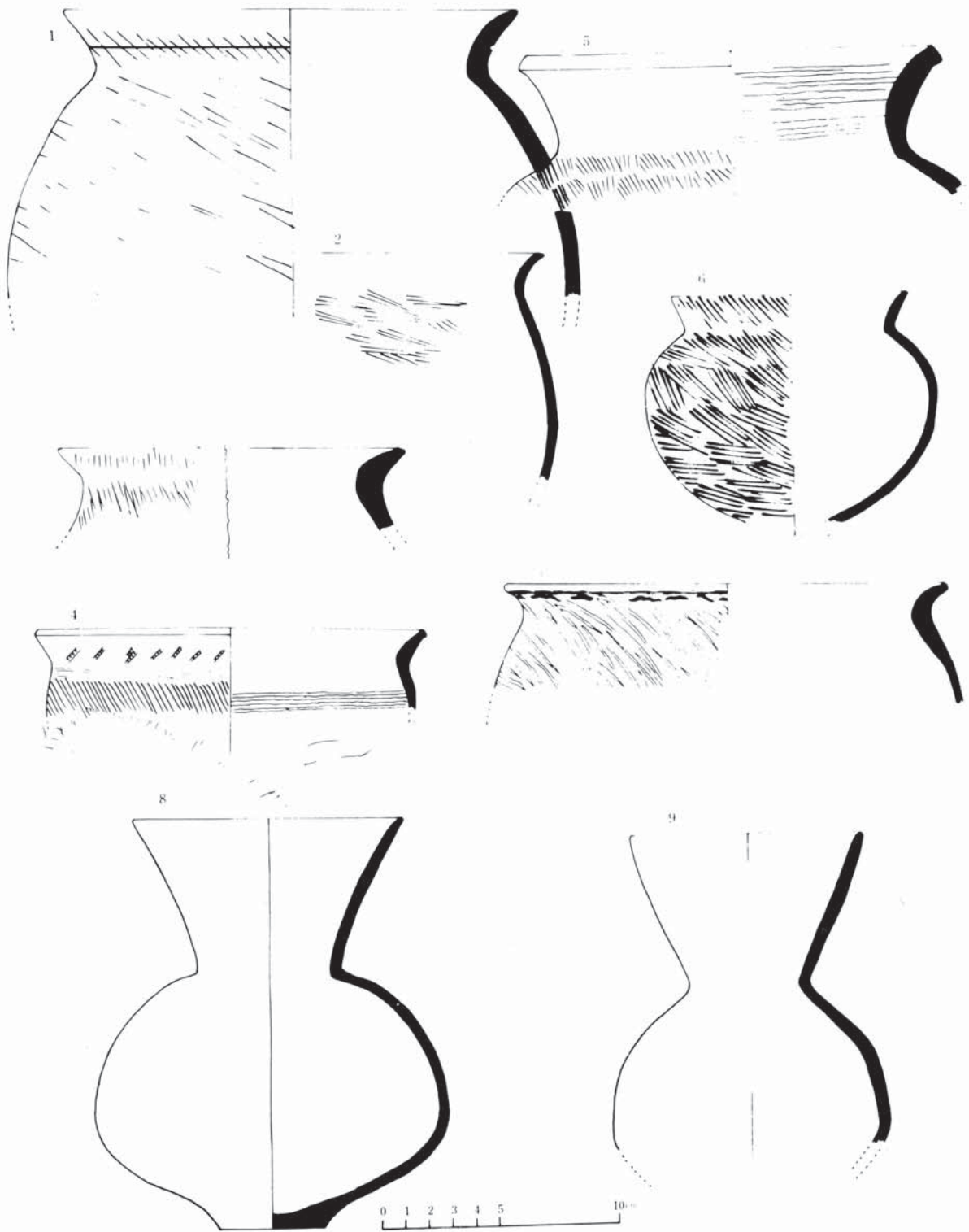
第2類（第6図）

- 1：口径19cm、くの字状の口頸部と、球状の胴部をもち、赤褐色で胎肉厚く、胎土密で焼締りよい。口縁から1.2cm下って1条の沈線を繞らし、沈線上と器体全面には、篋による右傾の擦痕がある。（第6図1）
- 2：口縁部が小片のため口径は判らない。口頸部はくの字を呈し、器胎は薄い褐色で焼締りあり堅緻、上胴に不整な篋の擦痕がある。（第6図2）
- 3：小片のため口径は判らない。口頸部はくの字を呈し厚手、褐色を呈し、外面口頸から上胴に亘って、篋による擦痕がある。（第6図3）
- 4：口径16.2cm、外反してゆるいくの字状口頸から、余り胴の張らない、薄手の甕と思われるが、全形は判らない。口縁から9mm下って櫛歯の刺突と、頸部外面に3、4条の細線を水平にめぐらし、以下は櫛目による右傾の整形痕がある。（第6図4）
- 5：口径17cm、口縁端9mmを外面へ傾斜して直截し、く字を呈する口頸は特に厚くつくられる。外面上胴部には篋の短い擦痕がつき、口頸内面には同じく篋による条痕が水平位につけられる。（第6図5）
- 6：小型の甕である。口径10cm高さも同じく10cmと推定されるが底が欠失している。くの字状の口頸から扁平球型、肩の張り12.4cmで、褐色焼締りあり、外面口頸から胴部全体に亘って、櫛による整形の痕がつけられる。（第6図6）
- 7：口径19cm、薄手で、恰も前記のS字状口縁土器に酷似している。淡褐色で胎土に砂粒が混じる。口縁から7mm下って、点点と不整な抉りを印し、その直下から上胴へかけて、全面に二ッ割の細い竹管様のもので整形したと見られる。右傾の条痕および口頸内側も同じく、同様の施文具で水平に引いた条痕がある。（第6図7）

●壺型土器

●長頸壺（第6図・図版第9）

- 8：瓢形の長頸壺で褐色素文、焼締りよく、堅緻である。器表および口頸内面は、繊細に篋磨きされて滑沢があり、姿体とともに美しい土器である。（④地点出土）（第6図8・図版第9）
- 9：同じく瓢形の長頸壺の上半で茶褐色素文、内外面の篋磨きと美しい滑沢など8と同様である。（第6図9・図版第9）

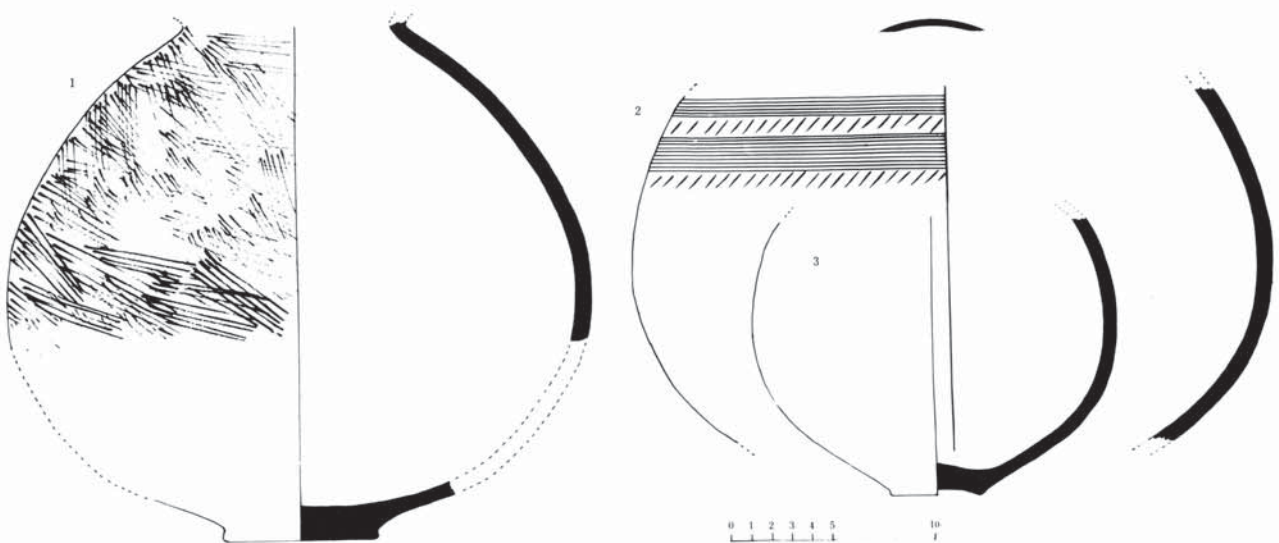


第6図 弥生後期土器 1～7. 第2類 甕 8・9. 長頸壺

第 8 章 遺 物 (3) 弥生後期土器

●壺形土器 (第 7・8・9・10 図・図版第 10・11・12 図)

- 1 : 胴の張り 28.3cm、円球状の胴と平底をもつ大形の壺で、頸部と下胴は欠失しているが、強くくの字状に屈折する短頸壺であろう。外面は淡紅色を呈して美しく、櫛状器具で右傾の短線を不整に交錯させて表面を整形する。④地点出土。(第 7 図 1・図版第 10)
- 2 : 胴の張り 31.2cm、円球状の胴部をもつ大形の壺の胴部で暗褐色、上腹部に櫛目の並行線帯と、篋による左傾並列文帯を 2 段置き、以下の空間は全面丹念に篋磨きされ、滑沢を呈して美しい。類型は名古屋の西志賀・瑞穂などに出土した広口壺がある。④地点出土。(第 7 図 2・図版第 10)
- 3 : 暗褐色で砂粒多くまじる。素文平底で肩部以上を欠くので全形は判らない。外面煤けているので煮沸具として使用したものであろうか。③地点出土。(第 7 図 3・図版第 10)



第 7 図 弥生後期 1～3. 壺形土器(1)

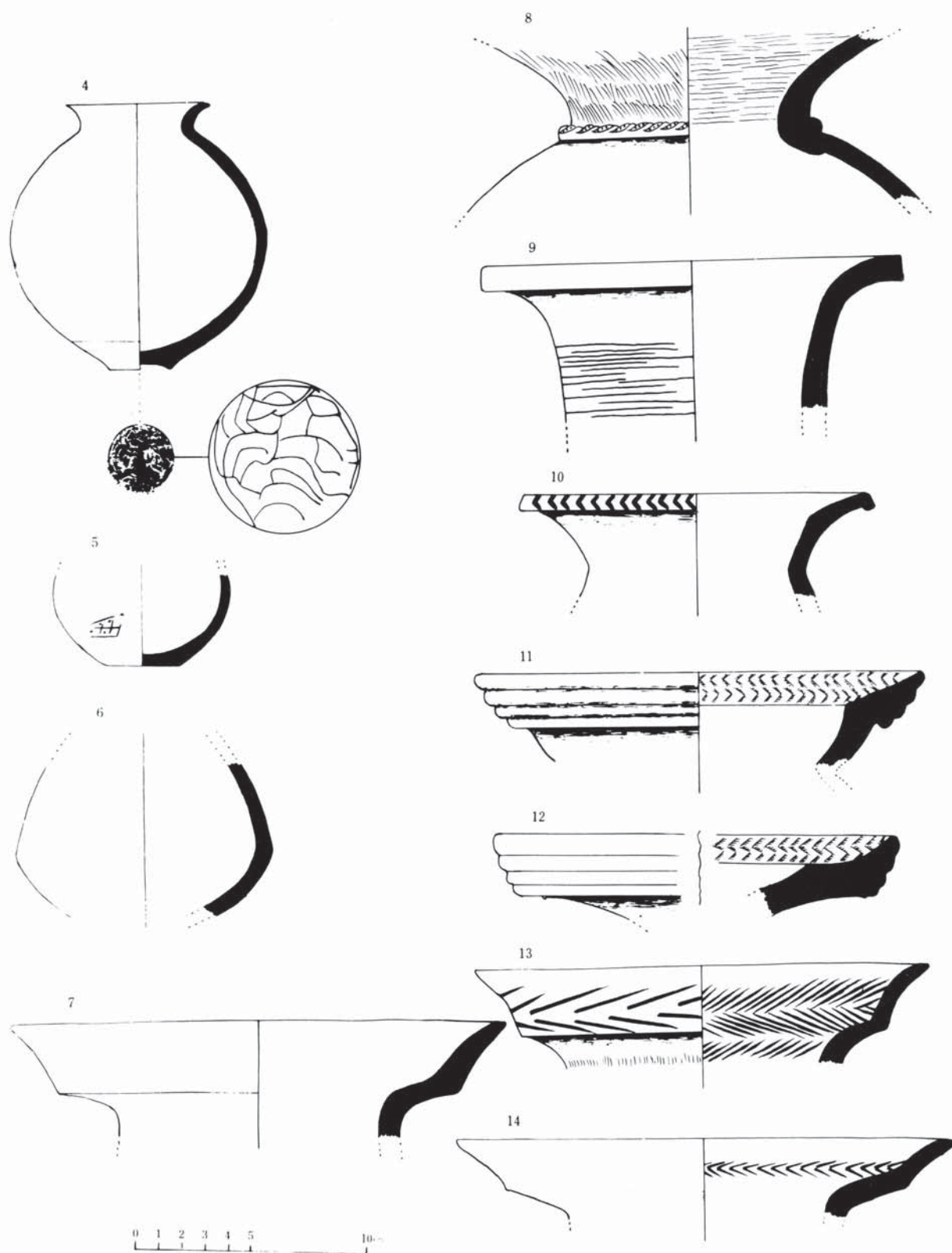
- 4：口頸 6.2cm、高さ11.3cm、胴の最大径11cm、殆んど円形平底の小形壺で、淡褐色、篋によって丹念に磨かれた滑らかな地肌が美しく、底から 1.2cm上に、極めて細い1線を繞らし、直径 2.8cmの平底一杯に、尖鋭な金属具を用いたかと思われるような、非常に繊細な線で、絵画らしいものが描かれていることは、稀少な出土例として珍重される。絵画は古鏡に見る、直弧文に類似するようにも思え、或いは人像と思はれるような個所もあるが、案外銅鐸に見るように、日常生活に映った自然の事象を、稚拙な絵に表現したものかも知れず、判断に苦しむものであるが、それはともかく、この土器を手にしてしみじみと思う事は、掌に乗る小さな壺を丹念に丹念に造り終えた喜びの弥生人——おそらく女——が、殊更に小さな土器の底へ、いとおしむかの如く、心をこめて丹念に描いた心情を憶う時、ほのぼのと詩情を感じるものである。④地点出土。（第8図4・図版第10）
- 5：縄文土器と紛う黝黒色で、当遺跡唯一の出土例である。胴の張り 7.7cm、非常に小形であるが、上胴以上を欠くので器形は判らない。全面丹念に篋磨きを施し滑沢を呈する。なおこの土器の下腹にも、線描きの絵画らしく思はれるものがある。（第8図5・図版第10）
- 6：褐色で胎土に砂粒まじる。器腹の最大径11.2cm、最大径が低く腰にあり、急に屈曲して底に至る。いわゆるソロバン玉状の土器で、全面篋磨きされて美しい。（第8図6）
- 7：広縁壺に属し口径21.4cm、褐色で砂粒混り、肌はやゝ粗い、口縁が強く外開きする大型の壺の口頸部で素文。（第8図7）
- 8：広口壺の口頸部で褐色、口頸と胴部との接合部に1条の凸帯を附し、凸帯上面へ櫛歯の刺突を並列して、恰も縄を繞らした状に作り、口頸から凸帯までの器表は刷毛目が施され、口頸内面もまた刷毛目が施される。頸部と胴とは別々に作って接合したと見られ、内面接合の肥厚部には指の圧痕が連続して残り、製作の手法がハッキリ窺われる。なお同型に一宮豊島図書館所蔵の丹彩壺がある。（第8図8・図版第10）
- 9：口頸17.8cm、大形の長頸壺の口頸部で淡い赤褐色、胎土に砂粒まじり肌はやや粗い。口縁から 3.5cm以下全面に、櫛状器具による横位の条線が施される。④地点出土。（第8図9）
- 10：口径14.6cm、淡褐色、口縁は外開きに肥厚して直截し、幅 7mmの端面へ羽状の刻目を施す。全面篋で整形し美しい。④地点出土。（第8図10）
- 11：装飾の強い広縁壺の口頸部で、口径19cm赤褐色で美しい。口縁の端面幅 2.8cmの面を取り、浅い凹線 3条をめぐらして4段とし、上段から徐々につぼんで下段の直径は15.9cmをかぞえる。

口径内面は淡褐色で、表面は剥落甚だしいが、屈折した口縁端 1.4cmの面へ、櫛歯の刺突により、羽状文を印している。④地点出土。（第8図11・図版第11）

- 12：同じく広縁壺の口頸部、淡褐色で砂粒まじり、焼成はよくない。11と同類ではあるが、口頸の外開きは強くないように思われる。口縁端面 2.8cmは3条の凹線で4段とし、上から徐々にしぼむ手法は11と同様である。口頸内面は口縁端から内彎して 1.2cmで屈折し、この面へ櫛歯の刺突による、羽状文をS字状に印している。④地点出土。（第8図12）

- 13：同じく広縁壺、口径19.2cm、強く外開きする口頸部で赤褐色、胎土に砂粒がまじるが美しい。くの字状に屈折する口頸端面 2.8cmへ、篋による杉綾文を印し、頸部以下は櫛目で調整されるらしいが欠失して判らない。口頸内面は口縁端から 8mm下って、櫛目による羽状文を印しているが、1.5段か2段かは判らない。④地点出土。（第8図13・図版第11）

- 14：口径21cm、強く外開きする口頸で褐色を帯び、砂粒が混じて肌はやゝ粗い。口頸外面は素文であるが、内面口縁端から 8mm下った内屈部へ、櫛目による杉綾文1段を印している。④地点出土。（第8図14・図版第11）



第8図 弥生後期 4~14.壺形土器(2)

15：丹彩広口壺で、伊勢湾第4様式に含まれる、パレススタイル土器で、熱田高蔵貝塚・瑞穂遺跡の出土品を標式とし、中部各地に出土する最も華麗な一群の中でも、特に装飾の強いことで知られる櫛目文丹彩壺である。④地点から破片で出土したものを復原したけれども、上下の中間の下胴部が欠失していたので補って復原した。従って高さについては、胴のカーブに従い、また他の遺跡の出土品を勘案して復原したものである。

口径19cm、口縁端面は下垂して2.5cm幅あり、端面に浅い凹線を4条めぐらして5区とし、この端面周囲に3本1組の棒状浮文を縦位に4ヶ所貼付ける。口頸くの字状に強く屈折して上胴に移行し、この接合部に浅い凹線1条を繞らした凸帯を附してある。器形はいはゆる下ぶくれ、いちじく形で、最大径が低く腰にあって17.8cmをかぞえ、直径9cmの平底がついている。高さは推定32cm前後外面は淡い赤褐色で、胎土は密、美しい肌を見せる。装飾は頸部凸帯下から胴中腹までに、3段の櫛目直線文帯を引き、直線文帯の区間2段には、櫛歯の刺突による、列点ジグザグの鋸歯文を繞らせる。最下段の櫛目文帯から更に7mm下って、山形の刺突列点文1条を施して素文帯と区分される。口縁端面——棒状浮文は除く——・頸部凸帯・鋸歯文上と山形の列点文の直下から、平底に至る下胴全体に丹彩が施してある。

口頸内面は、ゆるくくの字状に屈折して稜を作り、頸部へ下降しているが、この稜までは口縁端から1.8cmで、この面へ肋状貝の口縁で捺したと思われる羽状刺突文が3段印される。④地点出土。（口絵写真）（第9図15）

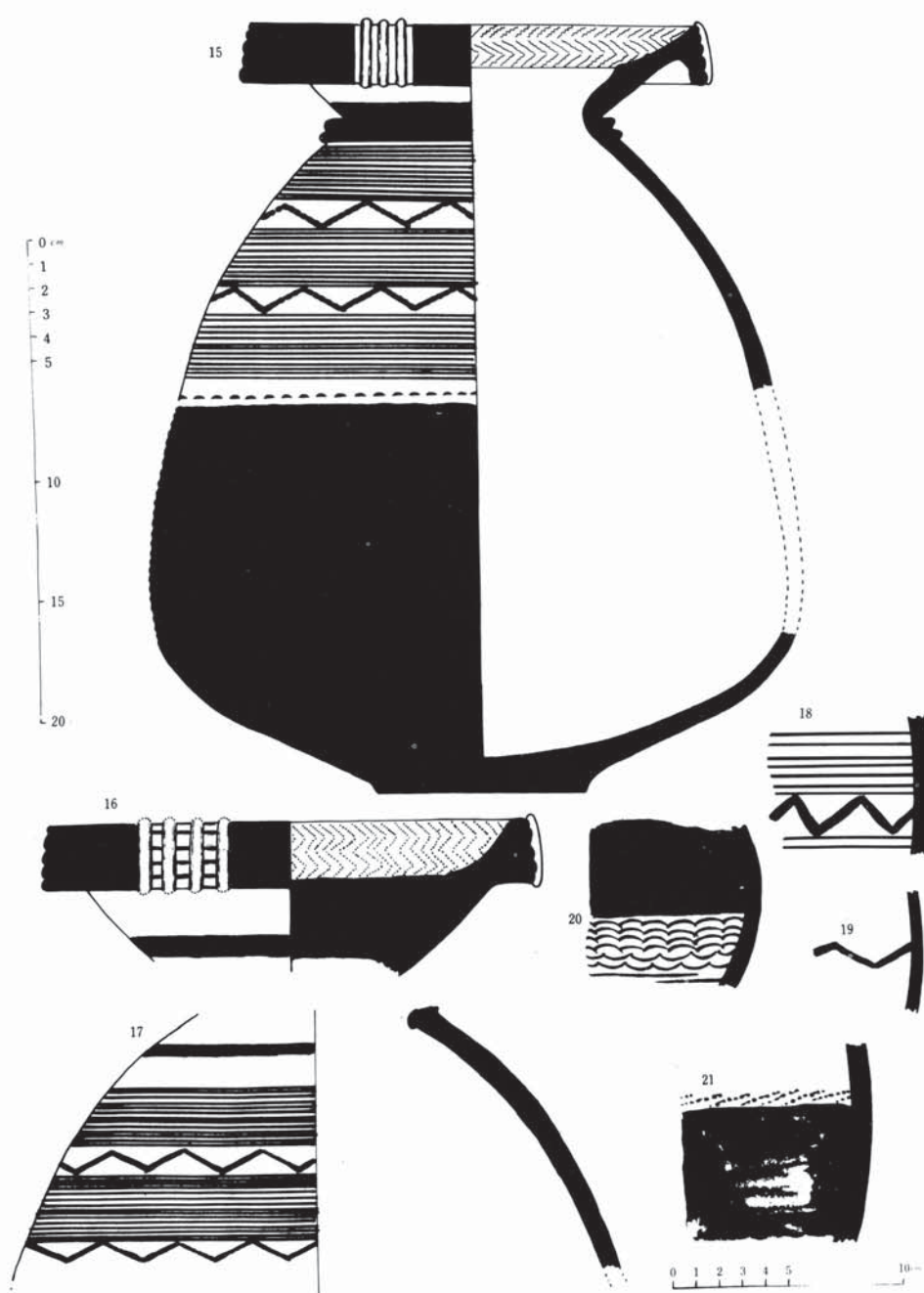
16：15と同じく丹彩広口壺の口頸で、漏斗状を呈し、淡い赤褐色胎土密でよく調整され美しい。口径20.5cm、くの字状に屈折する口頸の口縁は肥厚し、口縁端面は2.8cm、この端面へ4条の凹線をめぐらして5区とし、この周囲へ4本1組の棒状浮文を4ヶ所貼付ける。

丹彩は棒状浮文を除いた口縁端面、頸部と上胴の接合部とに施される。内面くの字状に屈折して稜を作り、口縁端から屈折部までゆるく内彎して2.4cmをかぞえ、ここへ櫛歯の刺突羽状文を2段印し、屈折部から頸部に至る間の素地には丹彩が施される。④地点出土。（第9図16・図版第12）

17：同じく丹彩広口壺の上胴で、胎土地肌は同様である。頸部の接合部から3cm下って巾2.5cmの櫛目直線文帯、1.2cm幅の櫛歯刺突の鋸歯文帯を2段重ね。口頸接合部から1.2cm下って5mm巾の丹彩1条と、鋸歯文上を丹彩でなぞって飾る。④地点出土。（第9図17）

18：同型の土器の上胴の破片と思われる。胎土地肌は同様である。間隔の広い櫛目直線文帯をはさんで、篋状器具で笹葉状に刺突した鋸歯文帯1条があり、この鋸歯文上をなぞって、丹彩してある。④地点出土。（第9図18・図版第12）

- 19：同様の器体の胴部破片と思はれる。胎土地肌の色は前者同様で、破片の中位に刺突の鋸歯文がある。18と同じ施文ではあるが、器の厚みが18よりも甚だしく薄い事から、勿論別の器体の破片と思われる。④地点出土。（第9図19）
- 20：同型の土器の胴部破片と推定される。篋状具による条線2条に続き、篋の刺突による波状文6段、その下に同じく篋による小さい、笹葉状刺突文を1段施し、刺突文以下全面を丹彩してある。④地点出土。（第9図20・図版第12）
- 21：同形の土器の胴部破片と推定される。胎土肌色は同様、櫛状器具による左傾の刺突文帯を印し、その直下から全面丹彩してある。④地点出土。（第9図21・図版第12）

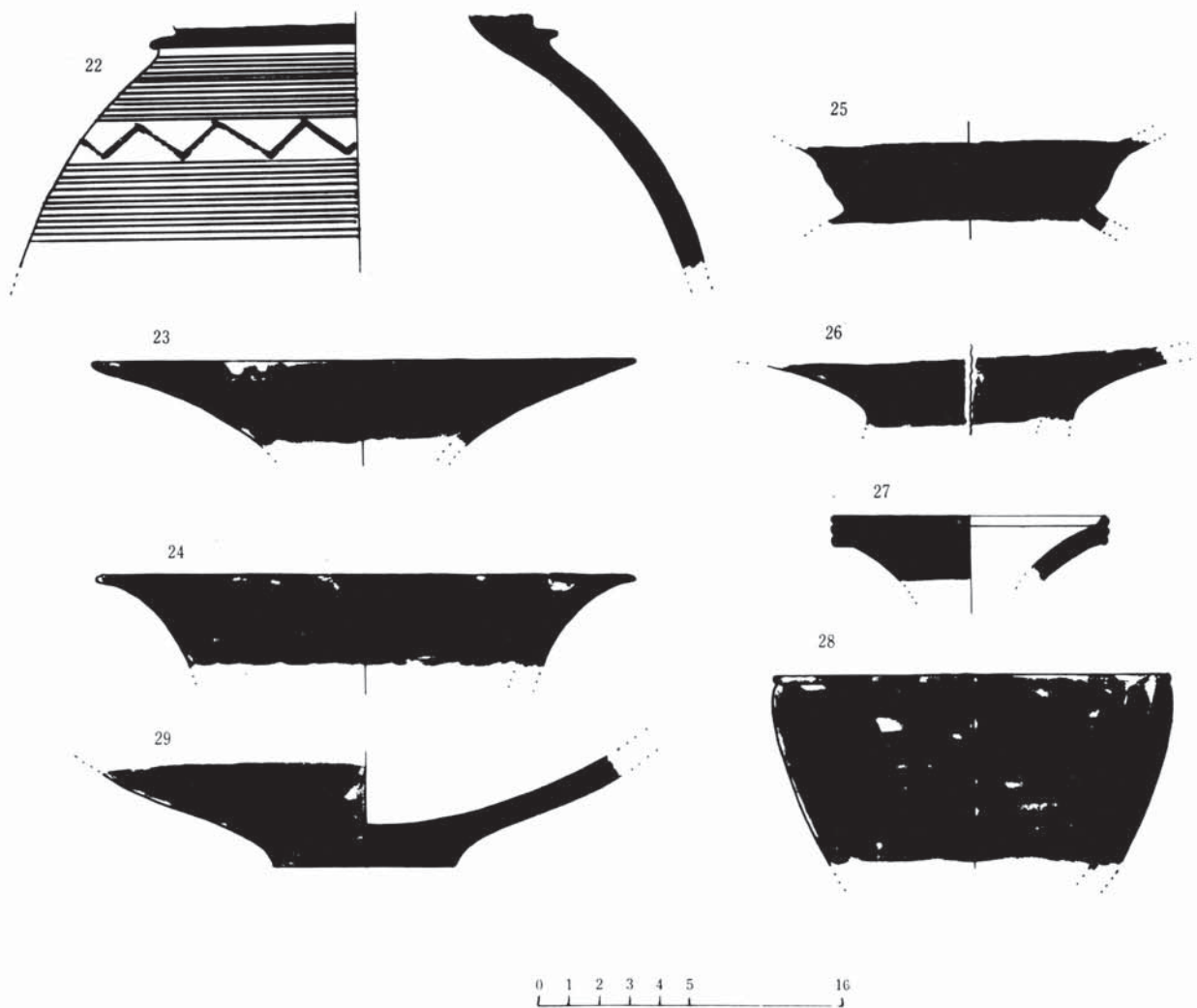


第9図 弥生後期 15~21. 壺形土器(3)

- 22：第9図15・17と同じく、広口壺の上胴で、胎土色合ともに酷似している。15と同じく、口頸部に1条の突帯、櫛目直線文帯2段の間隔へ、刺突鋸歯文帯を1条入れ、頸部突帯および鋸歯文上を丹彩してあるが、下段の櫛目文帯の下部は、少し空間があるので、文様帯はこれで終わっているのではなかろうか。④地点出土。（第10図22・図版第12）
- 23：口径13cm、口縁端からやや内彎しつつ急激に狭まり、恰も朝顔状の口頸で、焼成はよくない。素文で内外面共に丹彩してある。壺の口頸部か或いは高杯の杯部であろうか。④地点出土。（第10図23）
- 24：23に酷似する口頸で焼締りはよい。口径13cm、口縁端からやや内彎しつつ狭まり、内外面ともに1段とあざやかに丹彩される。広口壺の口頸部であろうか。④地点出土。（第10図24）
- 25：口頸部ではあるが器形は判らない。焼成堅緻、滑沢があって美しい。現存部上端の直径11.5cm、ゆるく蛇行しながらやや狭まり、強くくの字状に屈折、外開きして上胴に移行する。内外面ともに一段とあざやかに丹彩されている。④地点出土。（第10図25）
- 26：広口壺の口頸部であろうか、小片のため口径は判らないが、くの字状に屈折し、屈折部は稜をなしている。内外面ともに丹彩してあるが、厚手であるから大形の土器破片と思われる。④地点出土。（第10図26）
- 27：小形の壺の口頸で漏斗状を呈し、口径9.1cm、口縁端を肥厚して端面1cmの面へ、浅い凹線2条を施して3区とし、外面丹彩で飾る。口頸内面は淡褐色を呈している。④地点出土。（第10図27）
- 28：長頸壺の口頸で、口径13cm、口縁上端から3mm下って、急激に胎肉を厚くするために、恰も凹線1条がある如き感じを与える。内彎しつつゆるやかに狭まっている器の内外面に、丹彩が施されている。④地点出土。（第10図28）

●平 底

- 29：広口壺の平底と思われる。底の直径6cmで外面丹彩が施されている。④地点出土。（第10図29）



第10図 弥生後期 22～28. 壺形土器(4) 29. 平底

第 9 章 遺 物 (4) 弥生後期土器

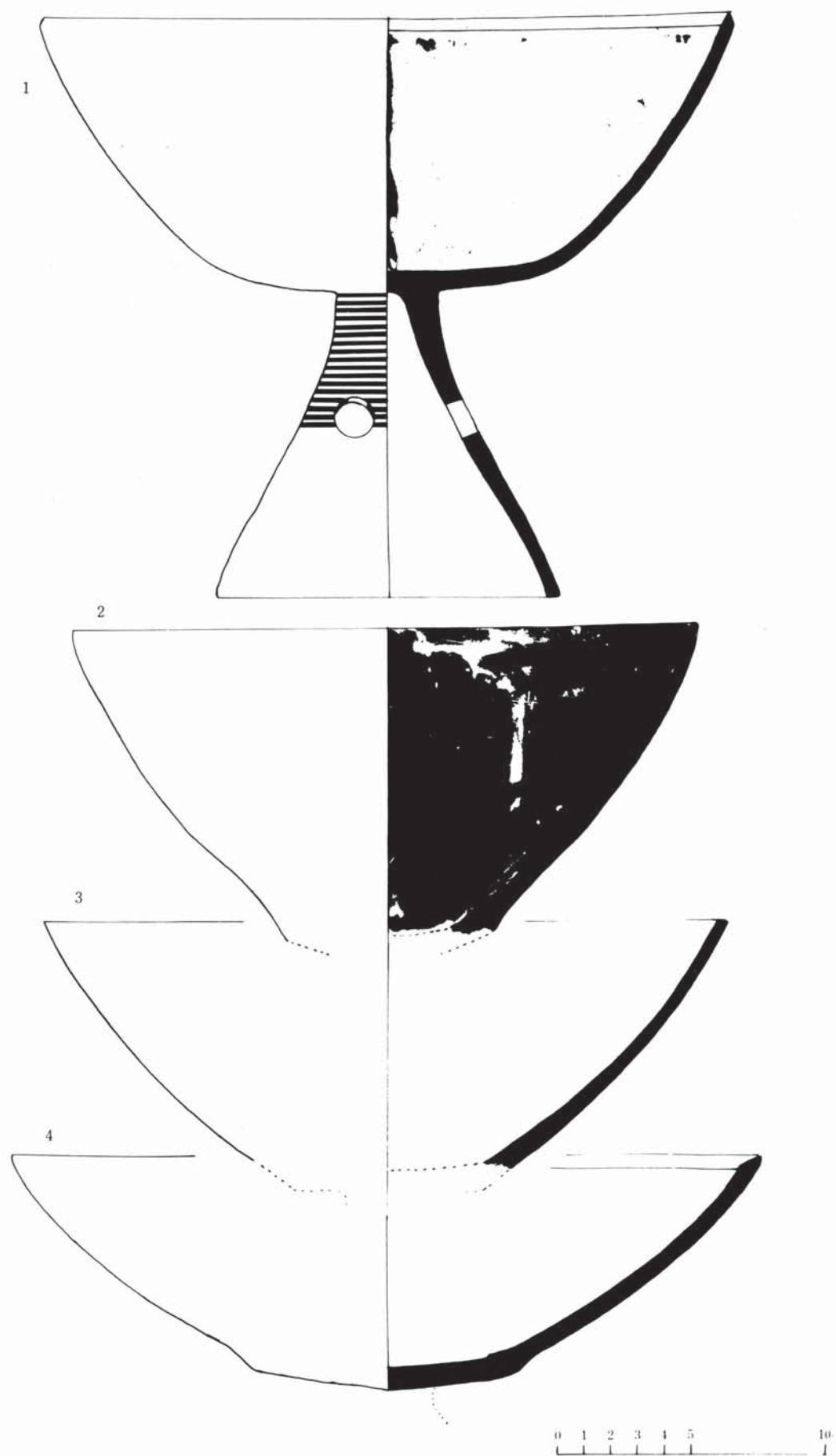
●高杯形土器（第11・12・13図・図版第13・14）

寺野町遺跡で高杯形土器は、遺跡全域に亘ってかなり多く出土したが、中でも④地点砂田から出土した弥生後期のパレススタイル土器に伴出したものが最も多く、しかもここから出土したものは、概ね明るい褐色または淡褐色で、内外面を篋磨きされ、滑沢を呈するものが多く、その他丹彩・櫛目文などで飾られるものがあり、また脚部に於いても、形態が多彩に亘っている。

しかし一部のものを除いては、発見した層位もハッキリしない上に、器形にもそれ程の差異がない以上、これを弥生と土師器に区分することは、甚だ困難な場合もあるため、ここでは層位のハッキリしたものと、胎土の観察から区分し、一応弥生式の範疇に入れたのが、ここに挙げた遺物である。

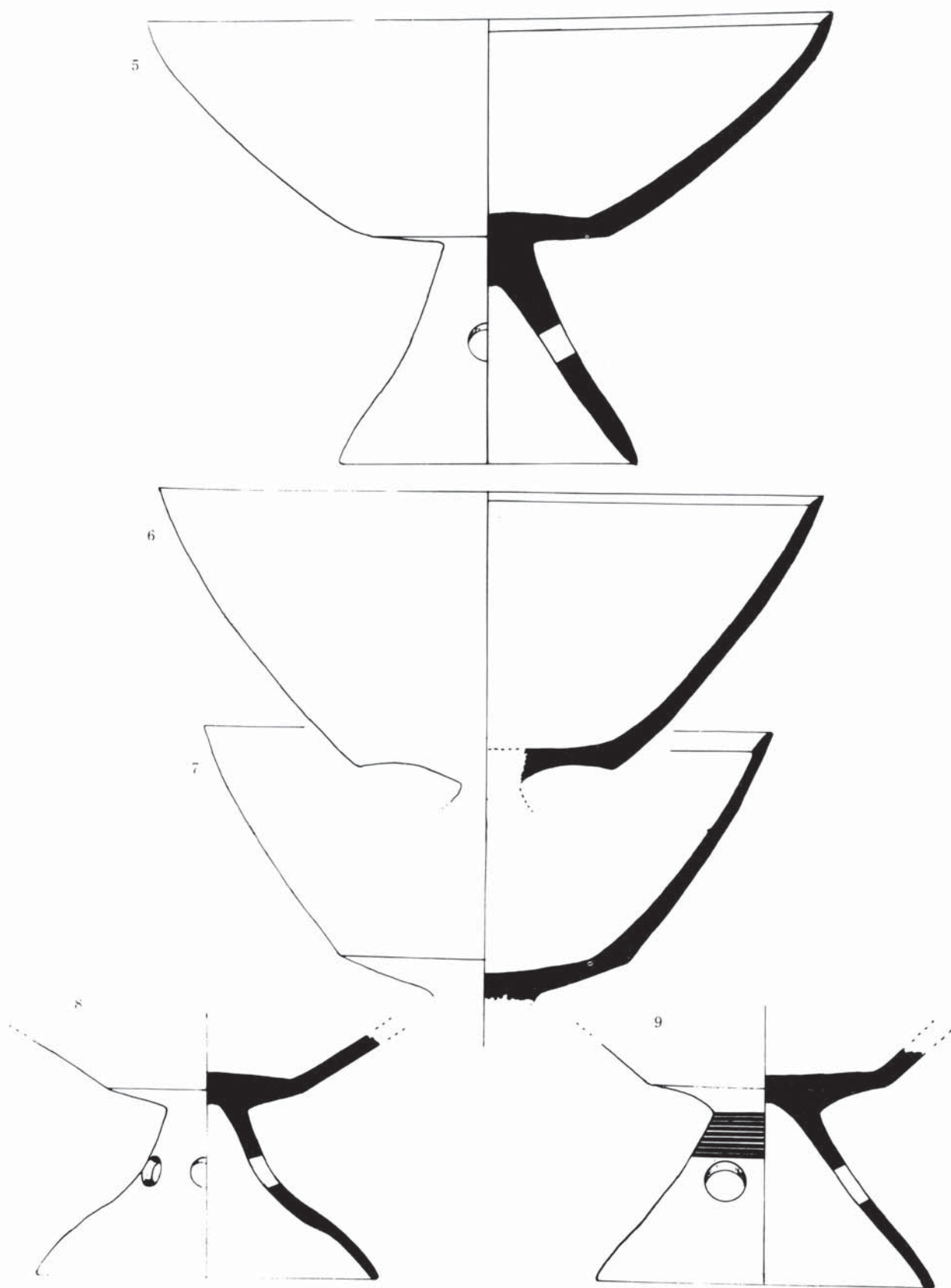
なおこの他に、杯部・脚部の破片は頗る多く、ここに掲げた遺物とは、全く別個体ではあるが、実測不可能なものは悉く省略した。

- 1：口径25.2cm、総高21.6cm、淡褐色で焼成よく、篋で調整されて美しい。殆んど平らな底面から屈曲し、僅かに外彎しつつなだらかに大きく外に開いて、恰も碗状の姿をもつ杯で、口縁端外面は斜めに切欠き、内面は5mmを厚くして折曲げた如くに見せている。脚は取付部の径3.9cm、やや内彎しつつ外開きし、裾に至って僅か膨らみをもたせる。下端の径13cmで、杯の取付部から5cmの間へ櫛目文を施し、透穴3個がついている。全体均整がとれていて美しい。④地点出土。（第11図1・図版第13）
- 2：杯部のみ出土した。淡褐色で焼成はよい。口径23.6cm、内底までの深さは推定11.5cmで、口径の割に深く、恰も深鉢形を呈する。底内面の推定5cmで、やや膨らみを見せながら昇り、口縁部はややしぼみ、口縁端は尖らせる。外面を篋で調整し、内面は丹彩してある。④地点出土。（第11図2・図版第13）
- 3：杯部のみ出土、口径25.9cm、褐色で内外面を篋で調整されている。これも口径の割に深く、深鉢状である。内底面の径は推定6.5cmで、底からやや膨らみをもたせながらそのまま口縁に至り口縁端は水平に作る。④地点出土。（第11図3）
- 4：同じく杯部のみ出土、口径28.3cm、赤褐色を呈し内外面を篋磨きされる。内底面の径7.4cmで、湯だまりのように一段低く、底からやや膨らみをもたせながら口縁に至り、口縁端外面3mmと内面端4mmとを面取りして、恰も鍋状に尖らせ、内面5mmを折り曲げた如くに肥厚させてある。また外面の底は一見肥厚させた如く作られる。④地点出土。（第11図4・図版第13）



第11図 弥生後期 1～4. 高杯

- 5：口径26cm、杯部の高さ 8.8cm脚台 8.7cmをかぞえる。褐色で全面を篋で調整されている。外面は底 9 cmを水平に作り、稜をなして屈折、やや膨らみを見せながら上昇し、口縁部に至ってややすぼまる。内底面は中高で、中心から 3.7cmで屈折し、なだらかに上昇した内壁の口縁端を片刃状に尖らせ、内面 4 mmを折曲げた如くにやや肥厚させる。脚部は殆んど直線で裾開きし、裾の径10.2cmで透穴 3 個がつく。④地点出土。（第12図 5・図版第13）
- 6：杯部のみ出土、深鉢型で口径25.4cm、内底までの深さ推定10.1cmで、褐色、全面篋で調整される。5 と同類で、外面の底は中心から 5 cmで稜をなして屈折し、やや膨らみを見せながら外に開いて口縁部に接続する。内底面は直径 7 cm、殆んど水平の底から屈曲し曲線を描いて口縁部に至る。口縁端は片刃状に尖らせ、内面 4 mmを折曲げた如くに肥厚させる手法は前と同じである。（第12図 6・図版第13）
- 7：6 と同類の深鉢型で、口径21.8cm内底までの深さ 8.8cm、全面篋で調整される。外面の底は中心よりゆるく上昇し、中心から 5.5cmで稜を作って屈折し、やや膨らみつつ外開きして口縁に接続する。内面底はやや中くぼみして、中心 4 cmで彎曲し、口縁端 8 mmを肥厚させてある。④地点出土。（第13図24）
- 8：杯部の底の一部と脚部のみ出土した。杯部は底外面に稜を作り、ゆるく屈曲して口縁辺に接続する形式である。杯内面の底は直径 6 cmやや中高で、屈折して上昇する。脚部は高さ 6.8cm、大きく裾が広がって裾の径13.3cm、透穴 3 個が穿たれる。（第12図 8）
- 9：杯の底の一部と脚部のみの出土。杯の底の形式は 8 と同類で、外面は中心から 5.5cmで稜を作り、ゆるく屈折して上昇する。内面底は直径 8 cm、殆んど水平で、屈折して上昇している。脚部は高さ 7.2cm、大きく裾が開いて裾の径12.9cmあり、脚上端には杯との接合部以下 1.8cm巾の平行櫛目文帯を繞らし、透穴 3 個がつけられる。④地点出土。（第12図 9）

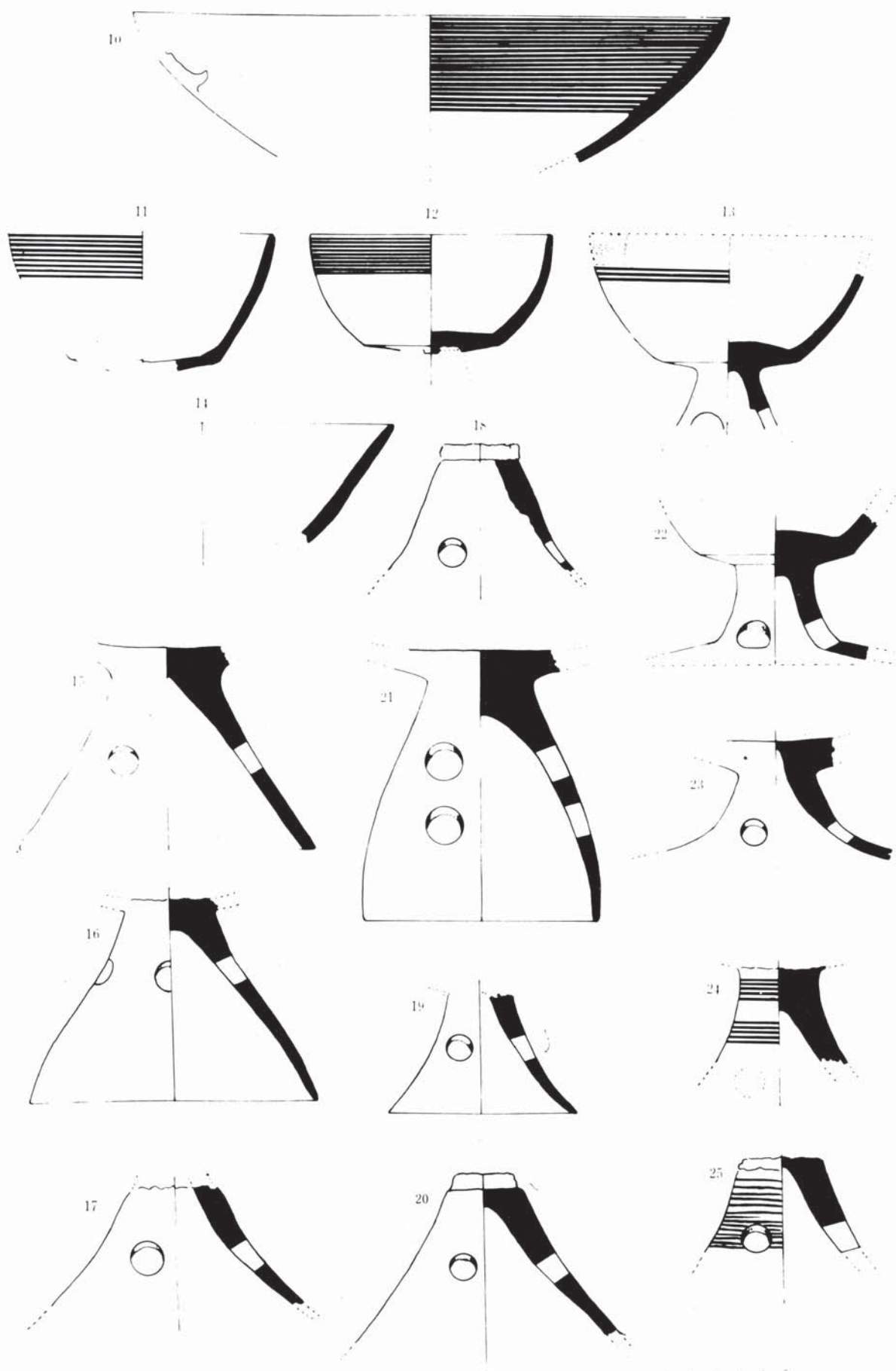


0 1 2 3 4 5 10cm

第12図 弥生後期 5～9.高杯

- 10：杯口縁のみ出土。淡褐色で焼成はよく外面は篋で整形される。口径25cm、やや外彎しつつ大きく外開きする浅鉢形で、口縁端は尖っている。口縁内面は口縁端以下 5.7cmを肥厚させ、肥厚部一杯に平行櫛目文を施している。（第13図10・図版第14）
- 11：小形の碗形高杯で、杯部のみ出土。淡い赤褐色で焼成はよい。口径10cm、内底までの深さ 5.3cmで、外面の底は中心より 3.3cmで稜をなして屈折し、やや外彎しつつ口縁部に続く、外面口縁端以下19mm巾で、9条の平行櫛目文を施し、余地は篋磨きされて美しい。内面は底の中心からゆるい傾斜で昇り、屈曲して口縁に至っている。④地点出土。（第13図11・図版第14）
- 12：同類の杯部のみ出土。淡い赤褐色で焼成よく、篋で調整されて美しい。口径10.2cm内底までの深さ 4 cmで、外面の底は中心から 2.9cmで稜をなして屈折し、外彎しつつ上昇、口頸から殆んど直立して口縁部に至っている。口縁端から 1.7cm下までに、10条の平行櫛目文で飾られる。内面の底は中高で、中心から 2.5cmで屈折し、口縁部まで上昇している。なお外面の底の中心には、脚部へ差込んだ突起が残り、製作手法が判って興味深い。④地点出土。（第13図12・図版第14）
- 13：口頸部から脚上部までの出土。赤褐色で焼成よく、内外面を篋で研磨されて美しい。口径12cm、内底までの深さ 4.3cmと推定される。12と同様に外面は中心から 3 cmで屈曲し外彎しつつ口縁へ移行する。口縁部に施された平行櫛目文は、残存部では3条のみ残っているが以上は欠失して判らない。内面の底は中高で、中心から 2.5cmで屈折し口縁部に移行する。脚部の形態は判らないが、外面の底から 1.7cm下へ透穴3個が穿たれる。④地点出土。（第13図13）
- 14：杯の口縁部のみ出土。褐色で焼成固く内外面は篋で研磨されて美しい。口径16cm、底から外彎しつつ昇り、やや外反りする口縁え移行する深鉢形。（第13図14）
- 15：下底の直径12.3cm、高さ 7.7cmで、淡赤褐色、杯接合部から殆んど直線で大きく裾が開き、透穴4個がつく。外面篋磨きされて美しい。（第13図15）
- 16：下底の直径12.2cm、高さ13cmで淡褐色、前同様に大きく裾が開き、下底近くになってややすぼまる。外面篋磨きを施し透穴は4個つけられている。（第13図16）
- 17：上部のみの破片で暗褐色を呈し杯接合部から内彎しながら大きく裾が開いている。透穴は3個つけられ、外面は篋磨きをされ滑沢があって美しい。④地点出土。（第13図17）
- 18：これも上部のみの出土で、淡い赤褐色を呈し、焼成堅緻で外面は丹念に篋磨きをされ、滑沢があって美しい。やや内彎しながら大きく裾が開くと思はれるが、欠失してよくは判らない。透穴は2個つけられる。手捏ねになると見られ、表面にも多少の凹凸はあるが、内面の凹凸は甚だしい。また一部分に丹彩の痕跡らしいものが見られる。（第13図18）

- 19：下底の直径 8 cm、高さ 5 cm で小形の脚部、褐色で焼成堅緻、外面は篋で研磨され滑沢を呈して美しい。やや内彎しつつ外開きする普通の型で、透穴 3 個がつけられる。④地点出土。（第13図19）
- 20：上部のみの破片、褐色で胎土に砂粒まじり、外面は篋で調整されるが肌は粗い。やや内彎しつつ大きく裾が拡がり、透穴 3 個がつく。なお脚上端には、製作時に杯の下底え差込んだ凸起がある。（第13図20）
- 21：下底の直径 10 cm、高さ 10 cm で、淡い暗赤色を呈し、篋で調整されるが、焼成やや悪く柔らかい感じがする。杯接合部からやや内彎しつつ、裾は直立し、透穴は上下 2 個宛の 3 ケ所、合計 6 個つけられるが、穴の直径は普通よりも大きい。（第13図21）
- 22：淡い赤褐色で、残存する杯の内外面と、脚部外面ともに篋磨きされて美しい肌を見せる。脚は腰で折れて大きく裾が開き、3 個の透穴はちょうど腰の折れる真上に穿たれる。脚の裾は欠失して不明。④地点出土。（第13図22）
- 23：淡い褐色で篋調整をされるが、肌はやや粗である。これも杯の接合部から内彎しつつなだらかに大きく裾開きするが、前者のように腰は折れていない。透穴は 3 個つけられる。④地点出土。（第13図23）
- 24：上部のみ出土、暗褐色で杯接合部の下へ並行櫛目文を 2 段施してあるが、下部欠失のため全体の形や透穴等は判らない。④地点出土。（第13図24）
- 25：同じく上部のみ出土、赤褐色で地肌は余りよくない。杯接合部直下に、不整な並行櫛目文を施し、櫛目文帯へ透穴 3 個が穿たれる。④地点出土。（第13図25）



第13図 弥生後期 10~25. 高杯(3)

0 1 2 3 4 5 10
1 1 1 1 1 1 4

第 10 章 遺 物 (5) 弥生後期土器

● 櫛目文 (第14図・図版第14)

当遺跡で出土した土器片は、細片まで入れると実に夥しい数にのぼり、その中で弥生式に属する土器片は相当量を数える。

しかしその中で、純粹に櫛目文が施された土器片は案外に少ない。

広口壺や高杯の一部に用いられるものは、それぞれの部門に図示したが、ここに「櫛目文」とわざわざ一項を設けたのは、細片のために器形はハッキリしないが、櫛目文が施されるものをとり挙げたのである。

- 1：黄白色で当遺跡では稀に見る色合である。非常に薄手で焼成も良好でない。縁辺のみの破片で、周縁から 2 mm 間に 12 条の櫛目と列点文、更に 1 mm 間に 7 条の櫛目文と列点文、更に 5 mm 間に 4 条の櫛目文と列点文というように、非常に繊細な並行線文を描いて美事な施文であるが、中心の部分が欠けているので、器形は判らない。

高杯の杯部かとも思われるが、それにしては反りが少なく、且つ文様がデリケート過ぎる感があり、また非常に薄手であるから、重量にも耐え難く思われ、いささか判断に苦しむ土器である。(第14図 1・図版第14)

- 2：大形の壺の胴部と思われる。淡褐色で焼成はよい。

器表の全面右傾の刷毛目の上へ、数条の太い並行線と、半截竹管で引いたかと思われる。2 条並行の波状文が 2 段施されている。(第14図 2・図版第14)

- 3：同じく大形の壺の胴部と思われる、赤褐色焼成はよい。櫛目の波状文と直線文を、交互に配して構成される。

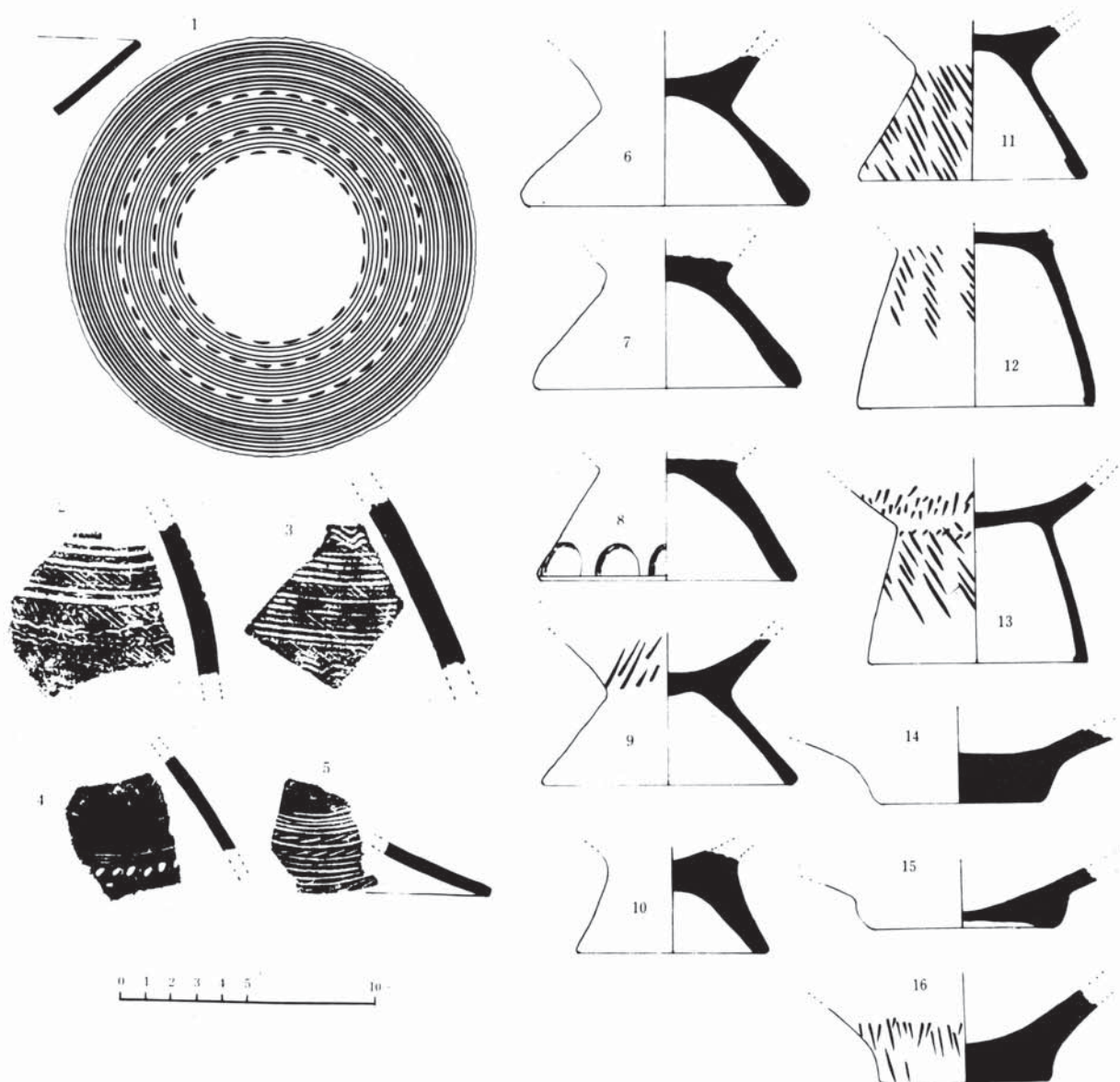
この破片は、④地点から、20m 位隔った地続きの畑で出土した。(第14図 3・図版第14)

- 4：やや褐色を帯びた暗灰色で、ちょっと特異な色合である。内側の胎肉が剥落したもののように薄い。

表面上部に幅 13mm の黒色の部分が 1 段あるが、これは丹彩広口壺の頸部に見るような、凸帯が付いていた痕跡かと思われる。非常に軽いタッチで不整に、櫛目を引き、櫛目文帯の中へ刺突列点文を 1 条巡らしているこの破片は、あるいは球状の胴をもつ、壺の頸部ではなかろうか。(第14図 4・図版第14)

- 5：1 に酷似し、黄褐色で胎土密、内外面ともに篋磨きされ、外面の口縁 4 mm 間へ非常に繊細な斜行刺突文、次に 1 cm 間に 5 条の並行櫛目、更に 1 条の細線を挟んだ上下へ、斜行刺突文をおき、更に 7 mm 間に 5 条の櫛目文を施し以内は素文である。

細片のため正確には判らないが、直径は凡そ14～18cmと推定される。高杯の杯部のよう
に思われるが、縁辺からやや内反り気味で素文部に至っており、あるいは蓋でないかと
も思われるので、一応口縁部を下にして図示した。(第14図5・図版第14)



第14図 弥生後期 1～5. 櫛目文 6～13. 脚台 14～16. 平底

第 11 章 遺 物 (6) 弥生後期土器

●脚 台 (第14図)

本遺跡出土の土器底には、中空の脚台が多く、平底は割合に少い。これは当遺跡の場合、後期弥生から土師器にかけて多く見られた中空の脚台がつく広口壺や、S字状口縁をもつ薄手甕が多量であることに比例するものである。

6：褐色を帯びた灰色、手捏ねで素文、外面は篋で調整した痕がある。古式に属する壺の脚台と思われる。(第14図6)

7：同じく褐色を帯びた灰色、砂粒が多くまじり、素文・手捏ねで外面は篋で調整される。同じく古式に属する脚台と思われる。(第14図7)

8：赤褐色手捏ねで、裾に5mm～10mmを隔てて、指の圧痕がめぐらされる。整形とともに装飾の技法であろう。(第14図8)

9：暗褐色で胎土に砂粒が多くまじり手捏ねによる製作。残存の下腹と台との接合部には、篋による施文が見られる。胴部全面に、篋で施文された土器の破片であろう。牧野前出土。(第14図9)

10：暗褐色で胎土に雲母がまじり手捏ねで素文、やや小形の土器の脚台と思われる。④地点出土。(第14図10)

11：暗灰色で胎土やや粗、薄手で手軽く、台の下端を約1cm内側へ折曲げてあり、外面は右傾の櫛目がある。薄手甕につく脚台と思われる。(第14図11)

12：暗灰色、胎土に砂粒が多くまじり、前同様非常に手軽く作られる。外面に整形の篋痕が残り、且つ整形時の櫛目が点在する。内面は凹凸があり、手捏ねの痕がハッキリしている。薄手甕の脚台である。(第14図12)

13：淡い暗褐色を帯び、胎土に砂粒が多くまじって胎肉は薄く、手軽く作られる。台の下端は内側へやや折れ、外面は胴下腹から脚台へかけて、櫛による整形の痕が見られる。(第14図13)

●平 底 (第14図・図版第15)

14：淡い暗褐色で砂粒が多くまじり、手捏ねによる。大形の土器につく平底と思われ、靱痕が1個ついている。(第14図14・図版第15)

15：暗灰色で胎土はやや粗い。手捏ねで、内面の底は中凹みとなり凹凸がある。外面の底も中凹みに作り且つ黒く煤けているので、煮沸に用いた土器の平底であろう。(第14図15)

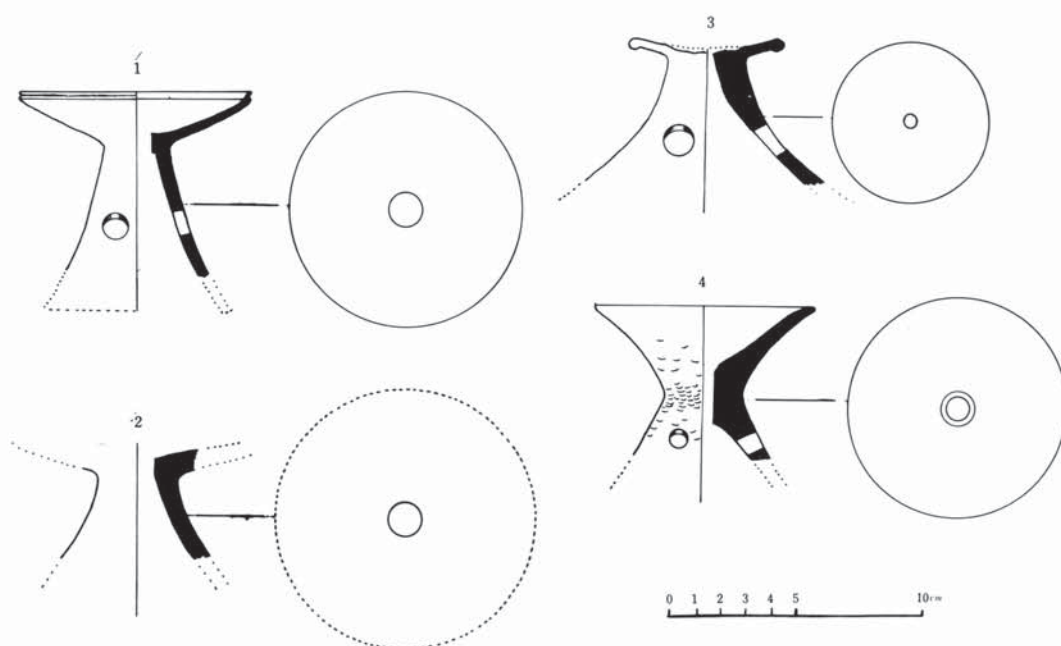
16：淡い褐色の平底で、外面は不整な櫛の調整痕がある。胴部から続く施文であろう。内面にも櫛状器具による。整形の痕が見られる。(第14図16)

第 12 章 遺 物 (7) 弥生後期土器

●器 台 (第15図・図版第15)

- 1 : 口径 9 cm、高さの推定 8.5cmで茶褐色、内外面ともに篋で丹念に磨かれ、薄手作りで端正である。直立した低い口縁側面に、一條の浅い凹線をめぐらし、口縁からなだらかな曲線で外弯する、受皿の底の中心には直径 1.4cmの穴を穿ち、裾拡がりの脚部には、3 個の透穴で飾られる。(第15図 1・図版第15)
- 2 : 破片で総体は判らない。赤褐色、胎土は密で焼成堅緻、表面は丹念に篋磨きをされ、滑沢を呈して美しい。杯部の中心には直径1.3cmの穴を穿っている。(第15図 2・図版第15)
- 3 : 淡褐色、胎土に砂粒がまじり肌はやや粗い、手捏ねによる小形の杯部は、やや内弯気味殆んど水平につけられ、口縁端は肥厚している。杯部の中心には、直径 5 mmの不整な穴を穿ち、杯部付根から大きく裾拡がりの脚部には、3 個の透穴で飾られるが、裾は欠失して判らない。なお杯部は、甚だ稚拙な手造りで、脚部取付の痕がハッキリ見られて面白い。(第15図 3・図版第15)
- 4 : 脚部の裾を欠く上体の破片で、直径 8.6cm赤褐色胎土は密で、内外面は篋磨きされて美しい。やや外反りする漏斗状の杯部の中心には、成形後に抉ってあけたと思われる、直径 8 mmの穴が穿たれ、杯部の底のくびれから、屈折して裾拡がりに伸びる脚部には、3 個の透穴で飾られ、外面杯部下部から脚上部へかけて、細かい爪形状の、不整な列点が施される。

この器台は、恰も鼓の胴を思わせる、美しい形をもっている。(第15図 4・図版第15)



第15図 弥生後期 1～4. 器 台

第 13 章 遺 物 (8) 土 師 器

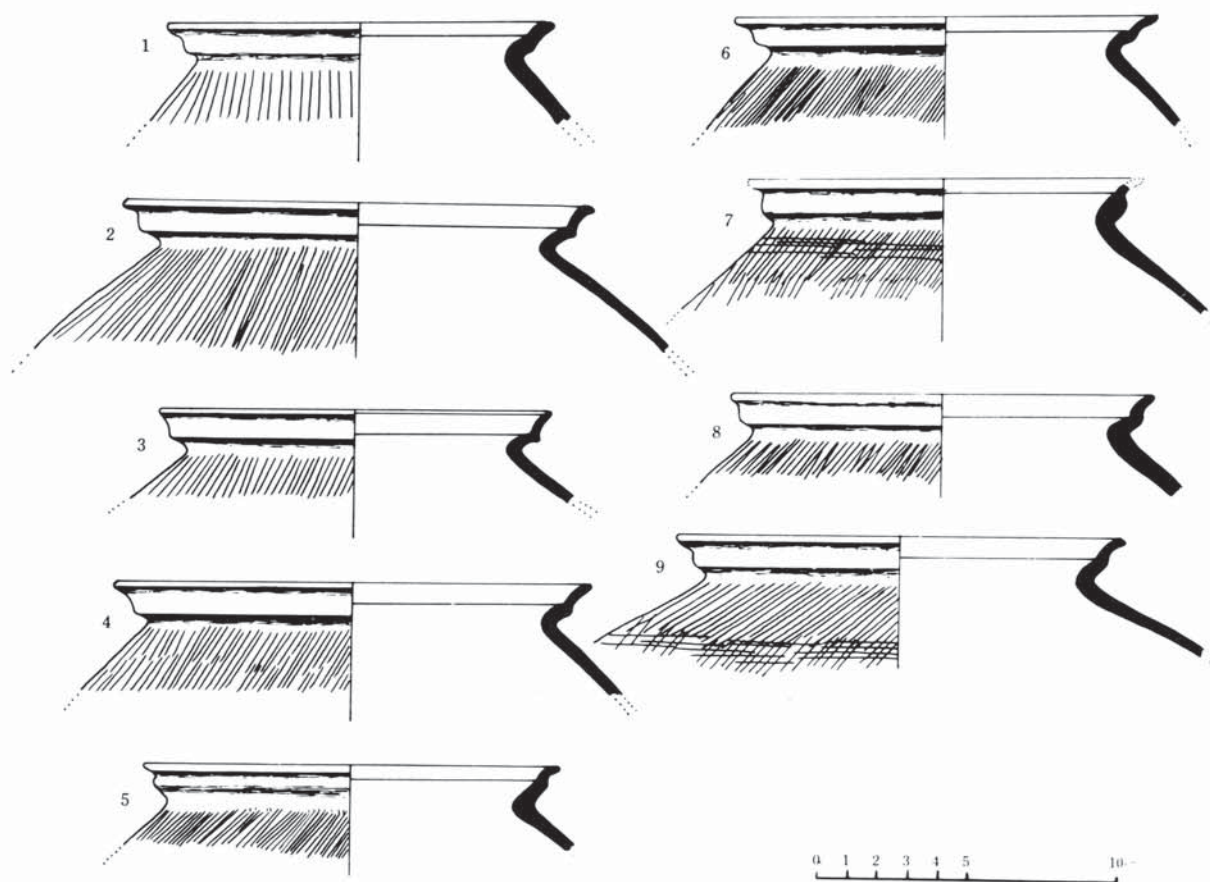
●甕形土器（S字状口縁土器）（第16図・図版第15）

この一類はすでに弥生式土器の、甕形土器に挙げた通り、口頸がS字状を呈することと、上胴の施文が、左傾単方向の櫛目状擦痕で統一されること等は、弥生式と余り差異はない。たゞ異るところは、胎土が極めて密で焼締りあり、上胴はおよそ左傾の櫛目によって統一されることと、弥生に普通見られるところの、口頸端面に集約して附けられる施文は見られず、ことごとく無文であることである。

成形はたくみな轆轤(ろくろ)で仕上げられているが、あるいは口頸と胴部とは別々に作って、後から接合したのではないかと思われるのは、S字状口頸部から、急角度に屈折して上胴に移るくびれに、竹管状の器具で強く引いた一条の圧痕が見られることである。

その他すべては、弥生式に於いて述べた遺物と大差はない。

- 1：口径13cm、赤褐色、胎土密で焼締りあり、外面の頸部以下粗い櫛目が殆んど垂直に引かれ、やや厚手である。（第16図1・図版第15）
- 2：口径15.8cm、褐色で焼締りあり、頸部以下左傾の櫛目が引かれる。（第16図2・図版第15）
- 3：口径13.2cm、褐色で焼締りあり、外面頸部以下の施文は前同様である。内面口縁端直下が段をなしていることが他と異なる。（第16図3）
- 4：口径15.8cm、褐色で焼締りあり、外面の施文は前同様である。（第16図4・図版第15）
- 5：口径14cm、褐色で焼締りあり、外面はやや目のこまかい左傾の櫛目文が施される。（第16図5）
- 6：口径14cm、褐色で焼締りあり、施文前同様である。（第16図6）
- 7：口径13cm、淡褐色で焼締りあり、外面は左傾の櫛目を引いた上へ、頸部からやや下って水平位に数条の不整な並行線を引く。（第16図7）
- 8：口径14cm、褐色で焼締りあり、左傾の櫛目が施される。（第16図8）
- 9：口径14.7cm、褐色焼締りあり、施文は6と同様に左傾の櫛目文の上へ、頸部から2cm下って、不整な数条の並行線が引かれる。（第16図9）

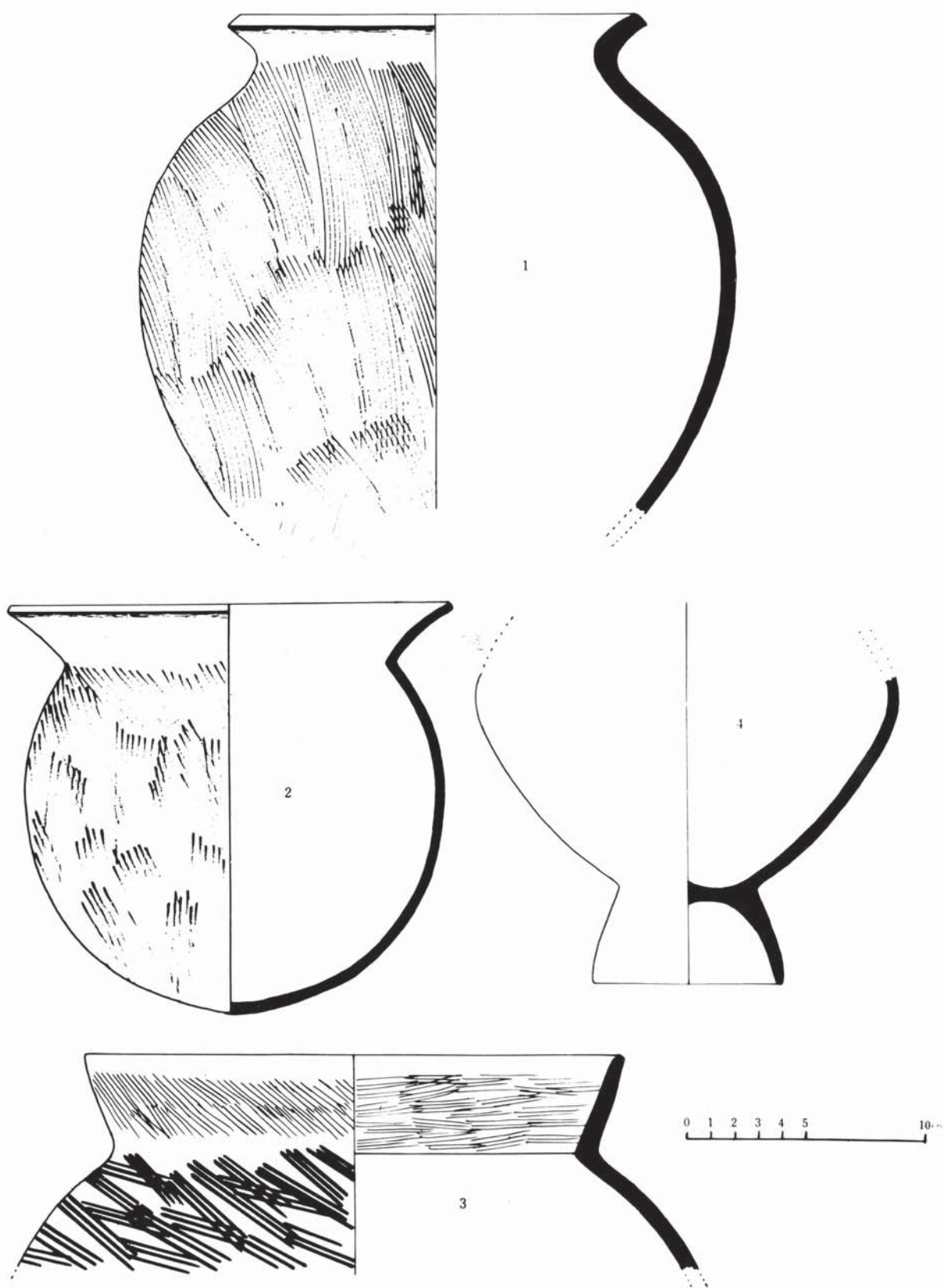


第16図 土師器 1～9. 甕形土器(S字状口縁)

第 14 章 遺 物 (9) 土 師 器

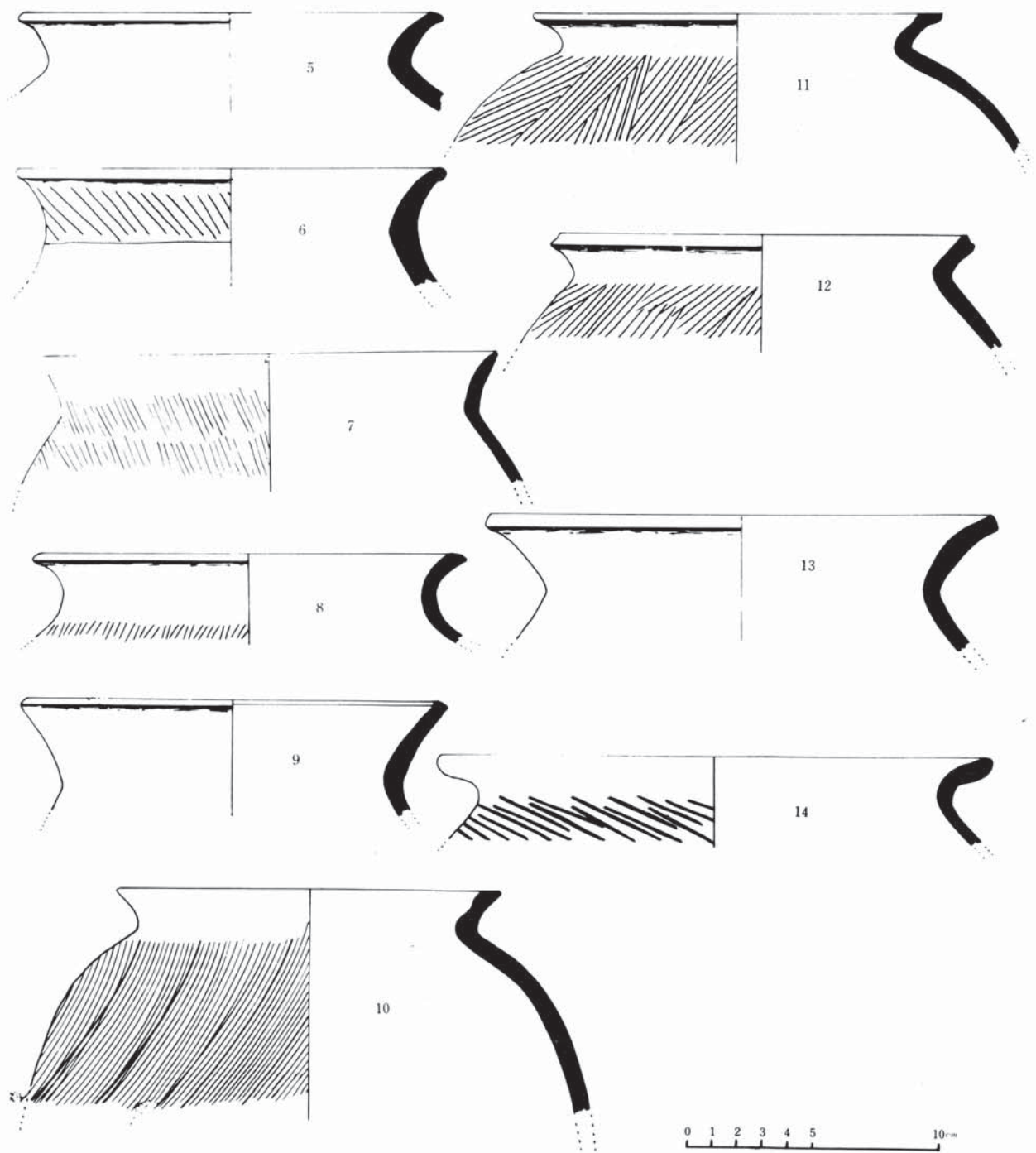
●甕形土器（第17・18図・図版第16）

- 1：口径11.5cm、現存部の高さ20.7cm、褐色で焼成は良好である。外反りする短い口頸で口縁端は水平である。なつめ状に張る胴部をもち、頸部以下全面、櫛目で整形されている。下胴以下が欠失しているが、寺野遺跡に出土例の多い、中空の脚台をもつ、大形の甕と思われる。瓦土出土。（第17図1・図版第16）
- 2：口径18.7cm、高さ17.2cmあり丸底の甕である。上述した自然石群出土の畑から出土したもので、褐色、大きく外反りする口頸部から、球状丸底の胴部に移行し、外面は刷毛目で仕上げられ、器の最大巾は胴部中央にある。
胴下腹部に直径 1.5cmの不整な穴があり、焼成後故意に穿たれたものの如く見受けられるので、上述の通り自然石群とともに興味ある遺物である。（第17図2・図版第16）
- 3：口径22.7cm、大形の甕の破片、褐色で胎土に砂粒を含み、焼成は堅緻である。口縁外面は右傾の刷毛目、頸部以下3条並行の、右傾の櫛目を印している。また口縁内面は、水平位に刷毛目で調整される。（第17図3）
- 4：下胴の破片で淡褐色、胎土に小石を多く混じ、焼締りなく雑器の感じがある。上胴を欠くが、おそらく、くの字状に外反りする口縁から胴に移行し、中腹部で屈曲してすぼまるそろばん玉状の胴部をもつ壺と思われる。外面刷毛目仕上げ。（第17図4）



第17図 土師器 1～4. 甕形土器(1)

- 5：口径21.2cm、褐色で焼締りあり、口縁端面はやや膨らみを見せながら、水平に張り出す。
無文。（第18図5）
- 6：口径17cm、暗褐色で胎土は密、焼締りあり。口縁端は側面えふくらみを見せ、口縁端から3cm下って、篋による1条の横線で画した間え、同器具によるあらい右傾の並行線を引いている。（第18図6）
- 7：口径18cm、褐色で砂粒が多く混り、器肌は粗い。飾り気のない尖った口縁端から下降し、ゆるいくの字の口頸は肥厚していく。外面刷毛目仕上になる。（第18図7）
- 8：口径16.5cm、淡褐色で焼成はよい。口縁端の手法は5と同様である。口縁から2.7cm下って、左傾の櫛目調整がされているらしいが、以下欠失しているから判らない。
（第18図8）
- 9：口径16.5cm、淡い暗褐色で焼成はよい。口縁端面は水平に切り、端面の内側2mmを肥厚させてある。口頸の曲折はゆるやかで、装飾は施されていない。（第18図9）
- 10：口径15.2cm、暗褐色で胎土は密、焼成はよい。口縁端は水平に仕上げられる。頸部以下整然とした左傾の櫛目で調整される。牧野前出土。（第18図10）
- 11：口径16cm、淡い褐色で胎土密、焼成はよい。急角度で屈曲する口頸をもち、口縁端を肥厚させて大きく水平に張出す。
口頸屈曲部以下は、やや荒い左傾の櫛目で調整される。（第18図11）
- 12：口径16cm、暗灰色で胎土は密、外反りする短い口頸をもち、口縁端面を肥厚させて、端面の中心を浅く凹ませている。口頸屈曲部以下、左傾の櫛目で調整される。牧野前出土。
（第18図12）
- 13：口径19.8cm、暗い淡褐色を呈し、器肌は粗雑である。屈曲のゆるやかな口頸をもち、口縁端は垂直に近い傾斜で直截し、装飾はない。（第18図13）
- 14：口径21.7cm、褐色、胎土に砂粒が多く混り焼成はよい。大きく屈曲する短い口頸部で、肥厚した口縁端は水平に張出している。口頸屈曲部以下は、太い右傾の並行線で調整される。（第18図14）
- 追記** この一群の土器中には、あるいは弥生式の範疇に入るものも含まれるかと思うが、一応胎土等によって土師器にあてたまである。総体に焼成堅緻なものが多く、中で6・10・11などは或いは伊勢湾地方第5様式、または第5～第6様式の間形式に比定して、弥生式に入れることが至当かも知れない。



第18図 土師器 5~14. 甕形土器(2)

第 15 章 遺 物 (10) 土 師 器

●壺形土器（第19図・図版第16）

1：赤褐色、胎土に砂粒まじり、器表は粗雑である。口頸はやや外反りするくの字状を呈し
口径11cm、なつめ形の胴部をもち素文である。内面淡い黒色を呈していることは、液体
貯蔵に用いたものかと思われる。（第19図1）

2：口径14.6cm、直口大形の壺の口頸部、赤褐色で胎土粗く、ザラザラした器表をもち、焼
成はよくない。（第19図2）

3：口径13.5cm、やや外彎する直口の壺の口頸部、淡褐色で砂粒が多く混り、焼成は余りよ
くない。外面は篋で調整されている。（第19図3）

以上2個の口頸部は、非常に似通ったものであるが、これらは熱田・美濃太田などに出土
例を見る。球状の胴がひしゃげて、胴の最腹部が低く腰にある。長頸壺であろうと思われる。

4：口径12cm、褐色で、漏斗状に直線外開きする口頸部をもち、口縁端は外面へ水平に直截
される。内外面篋磨きされて地肌は美しい。（第19図4）

5：口径10.8cm、褐色で砂粒多く混り、地肌は粗雑である。前同様に直線外開きの口頸部を
もち、前者よりは一段と高い。

この二者ともに、口頸部だけの出土で、確かとは云えないが、おそらく瑞穂・東郷梅貝塚
などに出土例を見るなつめ形に張る胴部、あるいは算盤玉状の胴部をもつ、細頸壺であろ
う。（第19図5）

6：口径10.8cm、高さ 7.5cm、淡褐色で小型の丸底、手捏ねで器表には凹凸がある。（第19
図6・図版第16）

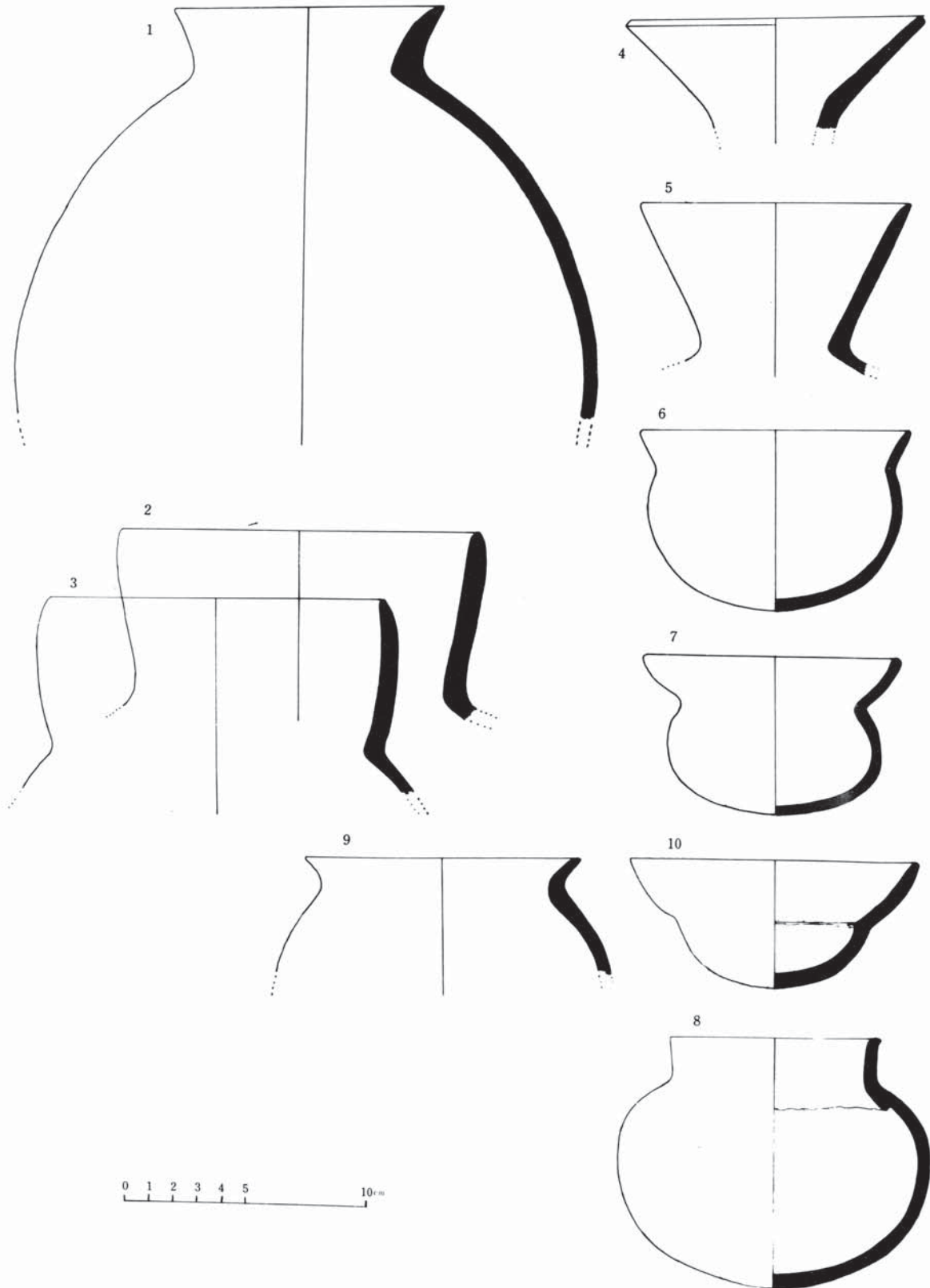
7：口径10.2cm、高さ 6.5cm、淡褐色、やや外彎して大きく開く口頸から屈曲して、浅い丸
底の胴部をもつ広口壺。手捏ねで器表に凹凸があり、口頸の内外面は篋で調整される。
これはおそらく祭祀土器であろう。（第19図7・図版第16）

8：口径 8.5cm、高さ10.4cm、暗褐色直口丸底の広口壺で、手捏ねにより器表には凹凸があ
る。初め胴部と口頸部とは別々に作り、口頸部を上胴部へ挿入の上、土器を廻しながら
内側から指で圧して接合した指痕が、そのまま残って居て、土器製作の過程が知れるの
も又おもしろい。（第19図8・図版第16）

9：口径11cm、褐色で砂粒多く混り、器肌は粗雑である。6と同じく、小形丸底の壺と思わ
れる。（第19図9）

10：口径11.5cm、高さ 5.3cm、深鉢形で外面は赤褐色、内面は淡褐色、胎土に砂粒も混じて
いる。

大きく漏斗状に外開きする口頸は、ゆるく屈曲して碗状の浅い小形丸底の胴に移り、屈曲部の内面は稜をなしている。これも7と同じく祭祀土器であろう。西後田出土。（第19図10）



第19図 土師器 1～10. 壺形土器

第 16 章 遺 物 (1) 土 師 器

●高 杯（第20図・図版第16）

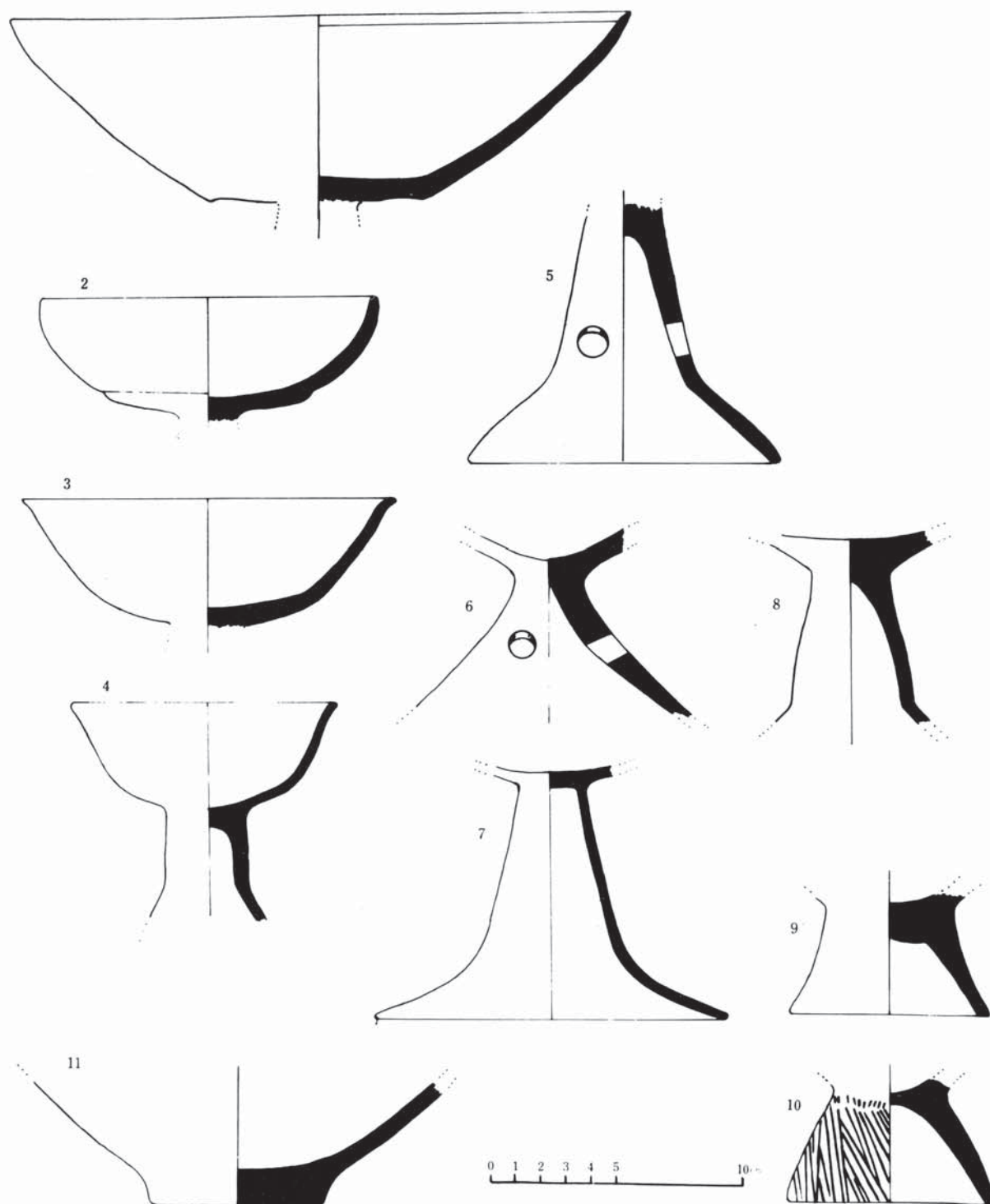
さきに弥生式の高杯の項で述べた通り、ほとんどの遺物は、出土地点、層位ともにハッキリしないので、器形と胎土によって一応弥生式と区分した。

相当量出土した破片の中で、纏まったもののみを図示したに過ぎないが、これを見ても弥生に引続き土師に於いても、高杯が多く使用されていたことが窺われる。総体にやや曇った褐色が多く、胎土に砂粒の多くまじるのが普通で、弥生式の明るく、滑沢のある土器とは対照的で、やはり退化の様相を呈している。

- 1：口径24.7cm、褐色の胎土に小石を多く混じている。内外面篋磨きされているが、小石まじりのために器表はザラザラしている。口縁内面4mmを片そぎし、やや外彎しつつなだらかに下降し、屈折して殆んど水平位の底となる。杯部のみの出土で脚台の様式は判らない。大字瓦土の表土下50cm出土。（第20図1・図版第16）
- 2：口径13.5cm、碗状小形の杯で、暗褐色、胎土に砂粒が多くまじり、器表はザラザラしている。外面下胴で肥厚し、一見2枚重ねの感じを与える。杯部のみ出土。（第20図2）
- 3：口径15cm、赤褐色で手捏ねによるものと見られ、内外面凹凸がある。外反りする口縁端から、なだらかに下降し、外彎のまま底に移行する碗形である。（第20図3）
- 4：小形の高杯で、口径10.8cm、褐色、胎土は密である。杯部はやや深い碗形で、器肉は薄い。脚は杯の接合部から2.8cm下までは、やや膨らみを見せながら直立し、ここで屈折して外開きしている。透穴はないらしく見られるが、以下は欠失しているので判らない。（第20図4・図版第16）
- 5：高杯脚部、褐色で器表はザラザラしている。杯接合部からやや拡がりつつ5.5cm下降したところで屈折し、大きく裾拡がりの脚部で、透穴3個がつけられる。（第20図5）
- 6：黄褐色で胎土あらく、器肌は滑らかでない。遺物は杯の底の一部と、脚の一部で、杯はやや強い傾斜をもち、脚は接合部からいきなり、大きく裾拡がりを見せ、これに透穴が3個つけられる。器肉が厚いことは形が端正なものと相まって、ドッシリと落ち着いた感じを与える。（第20図6）
- 7：暗褐色を帯び、器表は篋で調整されて滑らかである。平らな杯の底から、やや拡がりつつ下降し、杯から約6cm下って屈曲し、大きく裾拡がりを見せる脚部で、総体に薄手作り、透穴はない。（第20図7）
- 8：淡い暗褐色で、外面は篋で調整される。杯接合部から膨らみを見せながら、5.3cm下降したところで屈折し、大きく裾拡がりする脚で、裾は欠失しているが透穴はないものと

見られる。(第20図8)

附記 高杯に於いては以上図示の他に、杯部と脚部の破片は数多くあるが、これらは出土地点もハッキリしない以上、復原の際軽々に組合わせる事を許されない。



第20図 土師器 1～8. 高杯 9・10. 脚台 11. 平底

●脚 台（第20図）

9：暗褐色、手捏ねによるもので、やや小形の土器の脚台と思われる。外面は篋で調整してあるが、内面脚台の裾に、数ヶ所の縦筋が見えるのは、成形時に篋で切込を入れて、収縮した痕跡と見られる。④地点出土。（第20図9）

10：暗褐色で、焼成はよく堅い。外面は右傾の櫛目で調整される。櫛目調整の胴をもつ、壺の脚台であろうか。（第20図10）

●平 底

11：淡い暗褐色を帯び、土師器特有の胎土で焼成は悪く、雑器の感じである。かなり大形の土器の平底である。

なお脚台、平底の類は、この他にもかなりの数が出土しているが、煩を避けるために1点ずつの例示に留めた。（第20図11）

第 17 章 遺 物 (12) 土師質土器

●皿形土器（第21図）

- 1：口径16.6cm、茶褐色の浅い碗形の皿で、胎土は密であるが余り焼締りはない。
（第21図1）
- 2：口径13.2cm、淡紅を帯びた明るい白色で、心持ち外反りの口縁から、なだらかに底へ移行する手捏ねの皿で、胎土と色彩は当遺跡の弥生式高杯等に普通見る所とほとんど同じだから、あるいは弥生に入れるのが至当かも知れないが、格別特徴もない土器の事であるから一応ここへ入れた。（第21図2）
- 3：口径10cm、淡い褐色で焼成はよい。轆轤は用いず手捏ねになるもので、内面はよく均らされているが、外面は凹凸が甚だしい。（第21図3）
- 4：口径 8.6cm、小形の皿で淡褐色幼稚な手造りになり、形も整わず凹凸も甚だしい。

以上の2個に類する素焼のかわらけは、古代から使用され、今でも神仏の祭祀等、特定の所では、普通に使用されていて、何等時代的特徴もないものではあるが、粗雑な手捏ねによる手法から見て、日用の具ではなく、祭祀遺物と見るべきではなかろうか。

（第21図4）

●把 手（第21図・図版第17）

当遺跡で土師器の出土は非常に多い。即ち土師器を使用した当時、当遺跡には多くの人々が住み、それらの人等は当時の常食である強飯——蒸し飯——を食した事はもちろんであるが、この強飯を作る器として普通に用いられた甑（こしき）の把手と見るべきものは4個出土した。しかし厨房具として、甑と組合せになる器具類は見付かっていない。

- 5：赤褐色で胎土に砂粒まじり、器肌はザラザラしている。断面は真円に近く、先端は上反りになっている。（第21図5・図版第17）
- 6：淡褐色で胎土あらく、器肌はザラザラしている。楕円形の把手の上面を圧してやや凹ませ、その反動を利用して、先端を著しく上反りさせている。（第21図6・図版第17）
- 7：淡褐色胎土は粗く、器肌はザラザラしている。断面楕円形、やや上反りしているが、出土による損傷が甚だしい。

把手に続いて、僅か残っている土器の表面には、土師特有のこまかな刷毛目調整の痕が見られる。（第21図7）

- 8：赤褐色で胎土は粗、損傷が甚だしく、僅かに把手と判断される程度で、太さ、大きさなどの正確なところは判らない。（第21図8）

●土 錘（第21図・図版第17）

- 9：直径 3.7cm、長さ 4.9cm、赤褐色、粒子のあらい土質で、焼成はよい。もちろん手捏ね

で凹凸があり、また大きさに比して縄通しの穴は太い。(第21図9・図版第17)

10: 直径3cm、長さ5cm、赤褐色で土質焼成等は殆んど同じである。前者とは反対に、縄通しの穴は極めて細く出来ている。(第21図10・図版第17)

11: 直径5.1cm、長さ9.6cm、赤褐色、土質焼成は殆んど前者と同じであるが、前2者に比し頗る大形である。

波の荒い外海ならばいざ知らず、この辺り、かつては木曾の本流、あるいは伊勢海の内湾にして、このように大形の錘を使用する必要があったであろうか。

しかし、大字砂田と呼ばれる場所の砂層から出土した事から見て、漁具であることには間違いないと思われる。(真野慶泰氏所蔵)(第21図11・図版第17)

●角形脚台土器(第21図・図版第17)

12: 俗に角形土器と呼ばれるもので、当遺跡では1個のみ採集した。淡褐色、下部に向け先細の破片で、現存部の直径1.5cm、総長は判らない。

角形土器については定説がなく、従来は謎に包まれた存在であったが、その後調査が進んだ結果、今日では製塩具の脚台という見解がとられている。というのは、この土器は

1. 海岸遺跡に多い
2. 角形土器は、盃形の土器の脚で、地面に突立てられた状態で、多数固まって出土する。
3. 角形土器の上面に接する土中には、塩分が多く含まれる。
4. 上皿の内面に焼けた海草が見られることがある。

等の理由から、角形土器は盃様の上皿の脚台で、上皿へ海水を注ぎ、下から火を燃やして煮詰め、採塩をしたものであろうという見解である。

塩が人類の健康保持に不可欠のものであり、日常生活に無くてはならぬ、重要な食味であることは昔も今も変わりはない。しかし機械文明の発達しない時代に、塩を採るということは、極めて難事であったことと想像される。

古歌に「藻塩草」という言葉がよく使われる。辞典を引くと

「海藻に幾度も汐水を注ぎかけて塩分を多く含ませ、これを焼きて水に溶かし、その上澄を煮つめて採りたる塩」(辞林)

と書かれる。古歌の時代、すなわち奈良・平安の頃には、そうして製塩したものと思えば、前記4条件にもかなうものと思われる。

他遺跡出土の角形土器には、太さ・形ともに区々で、太さの直径3cmに及ぶもの、1cmに満たないもの、また先端が尖らないもの等色々あり、従って製塩皿にも、大小さまざまなものが有ったと思われる。(第21図12・図版第17)

●埴輪(第21図・図版第17)

本遺跡の発見頭初、遺跡調査と遺物採集に赴いた際、たまたま大字東後田地先で、部落の

瓦礫捨場に積まれてあった、ガラクタの中から採集したのがここに示す3個の埴輪片である。当時は未だ整地工事の頭初で、出土遺物も少く、本遺跡の様相を十分に把握する迄に至っていなかった。最初この埴輪片を見付けて持帰ったものの、もとより半信半疑で、確信がもてなかった。というのは、当遺跡の立地は、何等起伏もない一茫の耕地で、古墳の名残を留めるようなものは、何一つ見当たらない現状で、どうして古墳の存在が考え得られようか、しかしその後工事の進展につれて、古墳の副葬品と見られる品々も多く出土し、且つその後の調査や聞き込みの結果、部落の人等の記憶の中に、かつて耕作中に河原石を整然と長方形に積上げた、石組を掘出した事が1、2度有ったと聞かされ、規模・方位・構造等おぼろでは有るが、当時の様子を聞及んだ結果では、夫等は横穴古墳の石室であったに相違ないと確信を得たのである。このような次第で、ここにはかつて埴輪を用いた、相当規模の古墳が営まれて居たと見て間違いはない。ここで残念に思う事は、前記瓦礫捨場は、当時耕地整理と併行して進められていた。市道の敷設によって間もなく整理され、再び遺物の物色が出来なかった事は、返す返すも心残りであった。

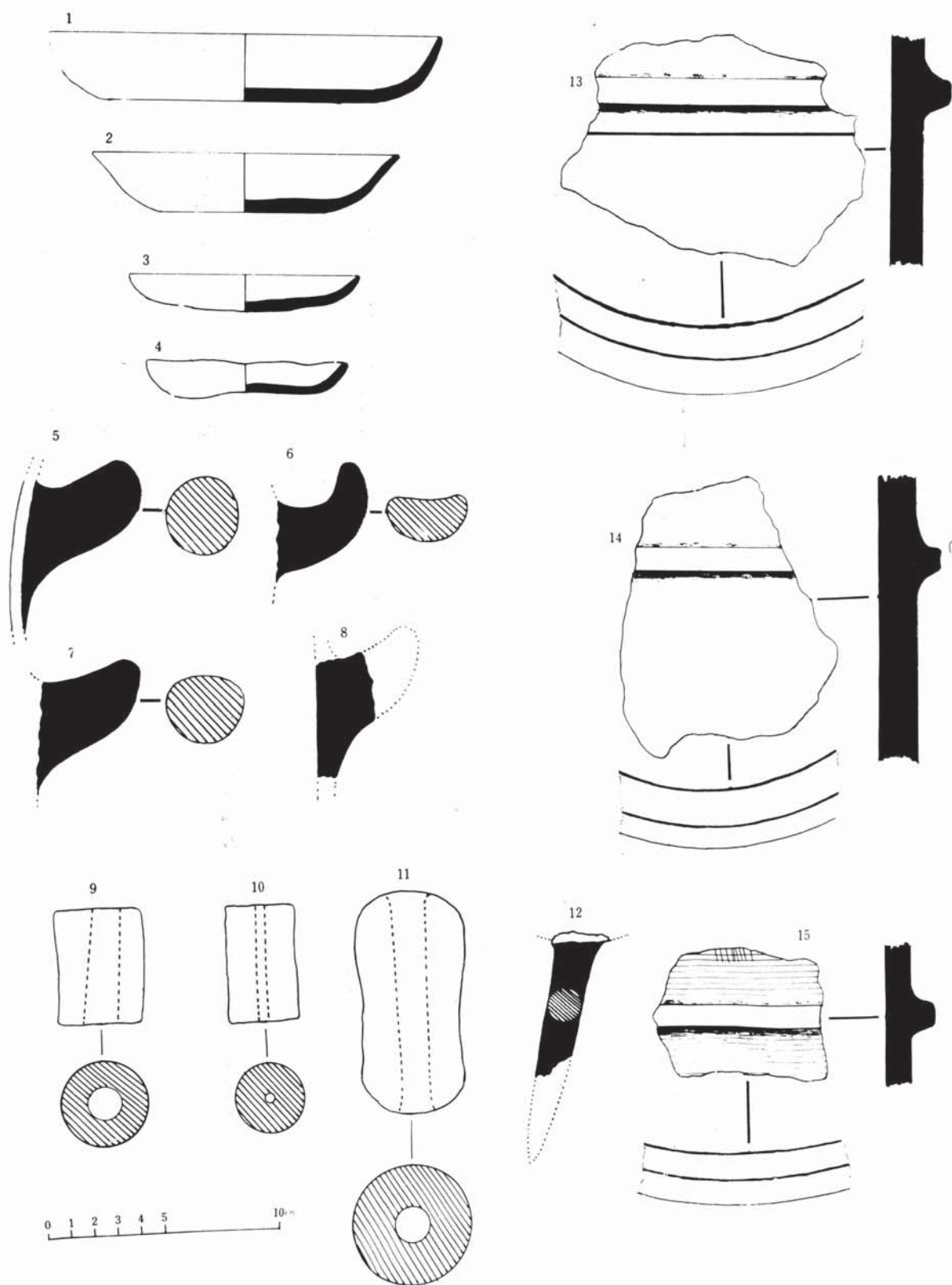
遺物はいずれも細片であるから、勝手な推量は許されないが、普通の円筒埴輪と思われる。

13：褐色で焼成はよい。厚さ 1.4cm、円筒の直径の推定26cmで、凸帯から1cm下って、一条の沈線が繞らされる。(第21図13・図版第17)

14：褐色で焼成はよい。厚さ 1.6cm、円筒の直径推定22cmで何等特徴はない。(第21図14・図版第17)

15：淡い褐色で厚さ 1.1cm、円筒の直径35cmで、凸帯の上下には、あらい櫛歯状器具で引いたと思われる。平行線が水平に引かれる。

以上3個の内、13・14は、実測の結果、普通に用いられる埴輪円筒よりも、やや細いようであるが、これは小片のため、正確に測り難い結果か、あるいは墳丘が小規模で、小形に造られたものであろうか。(第21図15・図版第17)



第21図 土師質土器 1~4. 皿 5~8. 把手 9~11. 土錘
12. 角形脚台土器 13~15. 埴輪

第 18 章 遺 物 (13) 須 恵 器

弥生・土師器に続く時代の土器として、須恵器の出土も非常に多い。

凡そ 6 世紀、古墳時代以降、平安時代に亘る古墳関係と日常器具を含めた各種の須恵質土器のうち、飾台付土器などは、優秀稀少なものであるが、他に高杯等は、県下東春日井郡、名古屋守山等の、古墳副葬品と揆を一にするものと思われ、当地方須恵器の文化圏の一翼を担うものである。

土師質の埴輪片の出土と考え合わせ、かつては永劫の奥都城（おくつき）（墳墓）として、嚴重莊重に築かれた祖先の墳墓も、時代の流れとともにいつしか破壊されて、今はその痕跡もとどめない事に、うたた哀惜の情を禁じ得ない。

●高 杯（第22図・図版第18）

- 1：淡いセメント色を呈し、焼成堅緻、所々自然釉が浮く、凡そ 5 世紀末ないし 6 世紀初のもので、口径 16cm、高さ 14cm、殆んど完形で出土した。椀状の杯部の外面は、少し外反りする口頸から、杯部を凡そ 3 分する位置に、受口様の稜を 2 条つけ、一見恰も 3 段重ねの状に見せ、その中央の区画に、波状文帯を繞らして飾る。又やや太目の裾広がりの脚部には、長三角形の透穴 3 個をつけ、下底は小さい角段の下へ、大きい半円状の段を組合わせて、台の状を示し、重厚な感じを出している。（第22図 1・図版第18）
- 2：淡いセメント色、焼成堅緻、所々に自然釉が浮く、1 と殆んど同じ形式の高杯で、杯部のみ出土した。大きく外反りする口頸から、なだらかに下降し、口径 16cm、杯部のほぼ中位に 2 条並行の稜線と、下段の稜から 1.5cm 下って、1 条の沈線を周らし、沈線の上下にそれぞれ異った形の波状文が繞らしてある。（第22図 2・図版第18）

●脚付蓋杯（第22図・図版第18）

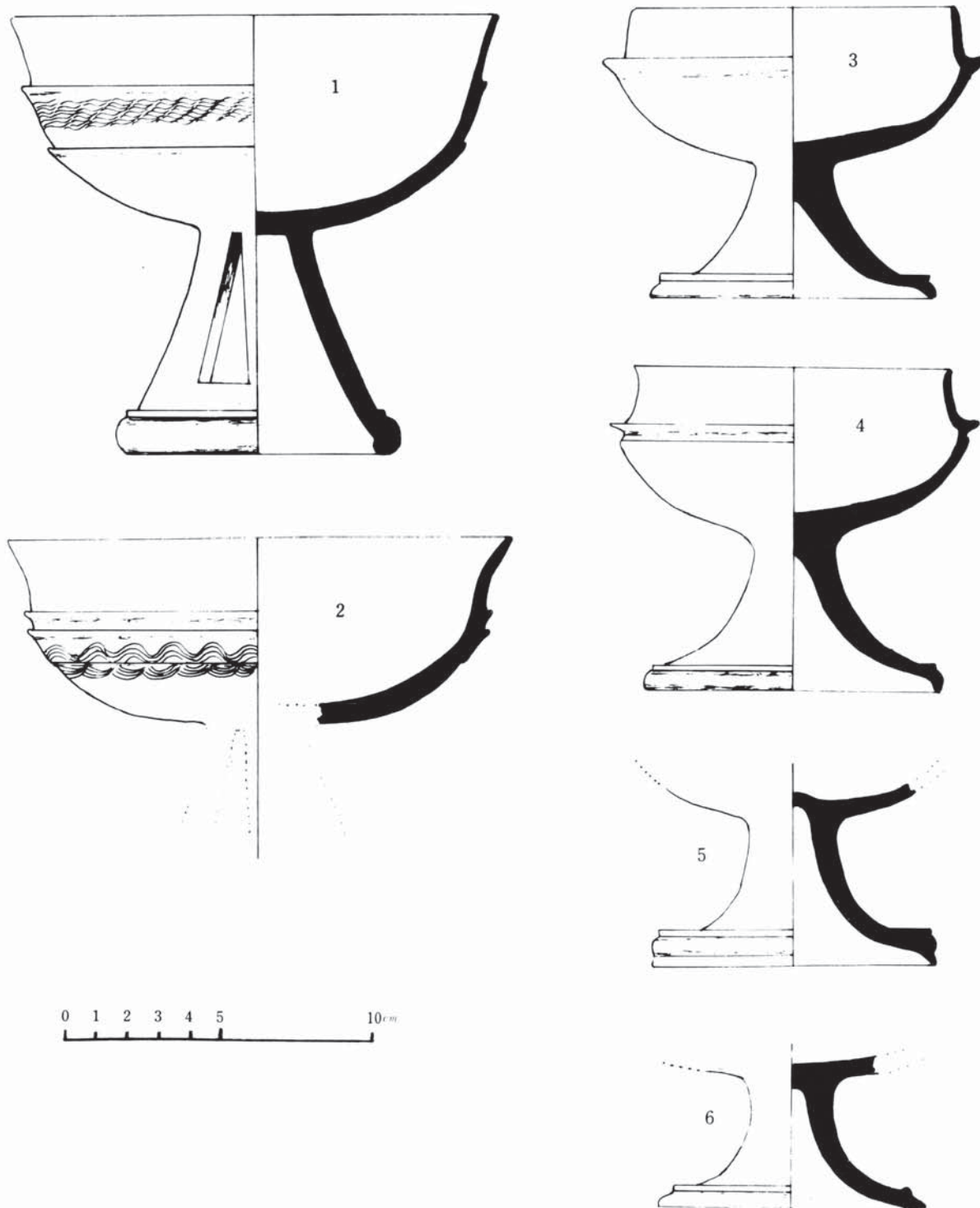
- 3：胎土密で焼締りあり、須恵器特有のセメント色、口径 10cm、高さ 9cm、やや内すぼみの高さ 1.5cm の口頸、大きく角状に突出するつばから、なだらかに底へ移行し、脚部(台)は、杯の付根から、なだらかな曲線を描いて、大きく裾広がりを示し、下端は別記高杯の台と、相似た形式であるが透穴はない。脚部下端の拡がりの最大巾は、ほとんど杯の最大巾に匹敵していて、ドッシリと落ち着いた感じを与える。（第22図 3・図版第18）
- 4：口径 10cm、高さ 10.1cm、セメント色で焼締りあり、完形で出土した。やや内彎内すぼみの口頸から、水平に大きく突出したつば、つばから下底に移る接合部は凹ませてある。脚部の形式は 3 と同じである。（第22図 4）
- 5：台のみの出土、セメント色を呈し焼締りあり、全面に灰釉がかかり、大きく裾広がりの脚部下端の台は、半円を挟んだ上下へ小さい角段で挟み、恰も 3 段に見える高さ 1.2cm

の台が付けられる。(第22図5)

6：同じく脚部のみ出土。セメント色で焼成堅緻。

大きく裾拡がりの脚部下端の台は、3の形式と殆んど同じである。(第22図6)

なお以上4例に蓋は伴出しなかった。



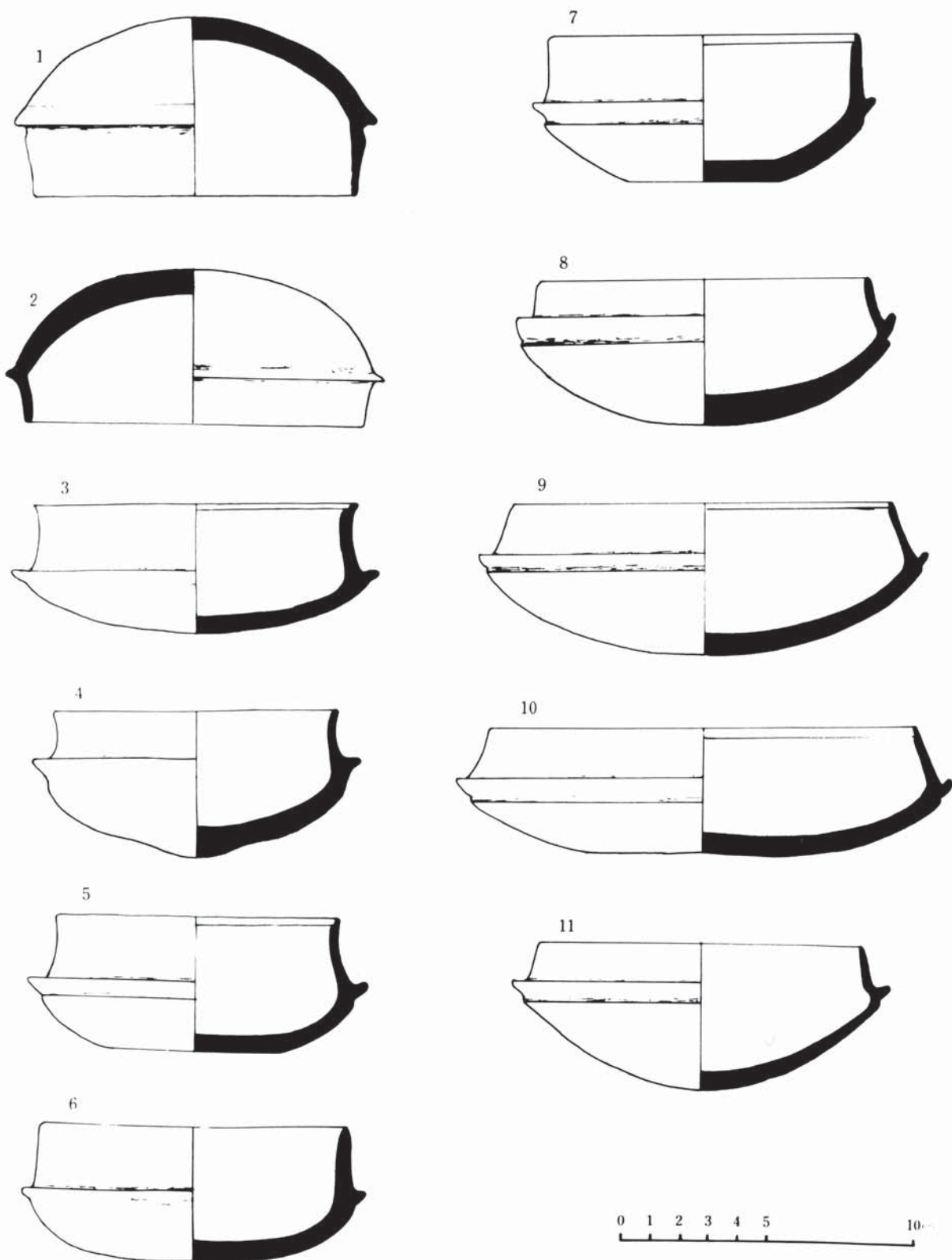
第22図 須恵器 高杯(1・2) 脚付蓋杯(3～6)

第 19 章 遺 物 (14) 須 恵 器

●蓋杯（第23図・図版第19）

蓋杯は小片をも含めて相当数が出土したが、蓋と身と伴って出土したものは1個もなかった。これらの中には、或いは上記の脚付蓋杯に一連のものも含まれていると思われる。すべて一般的な、何等特徴のない形態で、一部のものを除いては、これを蓋と身とに区分することはまことに困難である。従って実測図は一応の分類を試みたに過ぎない。

- 1：口径11.4cm、高さ 6.1cm、灰白色を呈し焼成は悪い。これは焼成に際し火度が足りなかったか、あるいは焼成後火に逢って還元された土質かである。口径に比して深く、しかも甲張りの彎曲度は強い。（第23図1）
- 2：口径11.9cm、高さ 5.3cm、セメント色で焼締りあり美しい。胎肉は厚く、甲張りの彎曲度も強く、つば以下の口頸部は低い。（第23図2・図版第19）
- 3：口径11.4cm、高さ 4.3cm、灰色を呈し、焼成堅緻である。口縁端2mmから肥厚させ、口頸は内彎する。鐏は大きく底の彎曲はゆるやかである。（第23図3・図版第19）
- 4：口径10cm、高さ 5cm、セメント色を呈し、外面は篋で調整されているものの本来手捏ねによるらしく、内外面凹凸がある。内反する口頸部は低く、底の胎肉は厚い。（第23図4・図版第19）
- 5：口径10cm、高さ 4.6cm、灰色を呈し焼成はよくない。外面篋で調整される。口縁3mmから以下を肥厚させ、口頸部は高く、大きな平底に作られて安定はよい。（第23図5）
- 6：口径10.7cm、高さ 4.6cm、暗灰色、胎土は粒子があらう。端正な形で、口頸部はほとんど直立である。（第23図6）
- 7：セメント色で、焼成堅緻、口頸部は殆んど直立し、内面の口縁端3mm以下を肥厚させる。底は平底に作り、全体整った美しい形である。（第23図7）
- 8：口径11.2cm、高さ 4.9cm、セメント色を呈し、口頸部は内すぼみになり、鐏の先端からやや入って底に移行するに従い著しく肥厚し、底の彎曲はなだらかである。（第23図8）
- 9：口径12.9cm、高さ 5.1cm、セメント色を呈し、焼成堅緻で美しい。大形の杯で、口頸部は著しく内すぼみする。口縁内面は、口縁端から2mm以下を肥厚させる。底の彎曲は割合なだらかである。形式上後期に属する。（第23図9・図版第19）
- 10：同じく後期に属する杯で、口径14.5cm、高さ 4.2cm出土中最大である。セメント色、焼締りあり美しい。口頸部は著しく内すぼみとなり、口縁内面は、口縁端から4mm下って、肥厚させる。（第23図10）
- 11：口径11cm、高さ 4.9cm、同じく後期に属する杯で、暗灰色、焼成は良好でない。口頸内すぼみで合せ目の低い割に底の彎曲は大きく、為に甚だ不安定である。（第23図11）



第23図 須恵器 1~11.蓋杯

第 20 章 遺 物 (15) 須 恵 器

この 1 類の土器の中には、胎土・高台から観察して、或いは猿投窯の無釉陶器に入れることが正しいかと思われるものも含まれるが、ここではそうしたものは、一応過渡期の須恵と見做し、器形の分類に従って一括した。

● 盥 (第24図)

- 1 : 大形の盥でセメント色を呈し、口径19cm、高さ 4.5cm、大きく外開きする口頸から、なだらかに下降し、内面殆んど水平の底をもち、端正な低い高台が付けられる。(第24図 1)
- 2 : 小形の盥でセメント色、焼成よく美しい。口径11cm、高さ 4.5cm、やや外開きした口頸から、腰で屈折し、内底は僅か中凹みに作られ、外面も腰で屈折して外開きし、端正な高台がつけられる。(第24図 2)
- 3 : 小形の盥で、口径10.9cm、高さ 4.8cm、暗灰色で焼成はよくない。口縁から美しい曲線を描いて下降する、いわゆる碗形で、外面の底は一段肥厚させて、高台状につくる。(第24図 3)
- 4 : セメント色、焼成堅緻で叩けば金属音を発する。口径11.8cm、高さ 3.6cm、大きく外開きする直線の口頸から屈折し、そのまま平底に移る。平安期。(第24図 4)
- 5 : 淡いセメント色を呈し、胎土はやや粗いが焼成は堅緻で、器の内外面には、植物質の酸化物が附着している。口径14.2cm、高さ 6 cmで、やや外開きの口頸は、腰で彎曲してそのまま底へ移行する。丸底で安定を欠く。古墳期。(第24図 5)

● 盤 (第24図)

- 6 : セメント色、焼成はよい。外反りした低い口縁の外面には 1 条の凹みをつけ、浅い中凹みの盤で、口径14.5cm、高さ 2.4cm、器の割に大きい外開きの端正な高台がつき、安定した姿である。口縁から内面 2 ~ 3 cm巾で、やや白色を帯びているのは、自然の釉色か人為的な手法によるものか、判断に苦しむ。(第24図 6)

● 長頸壺 (第24図・図版第18)

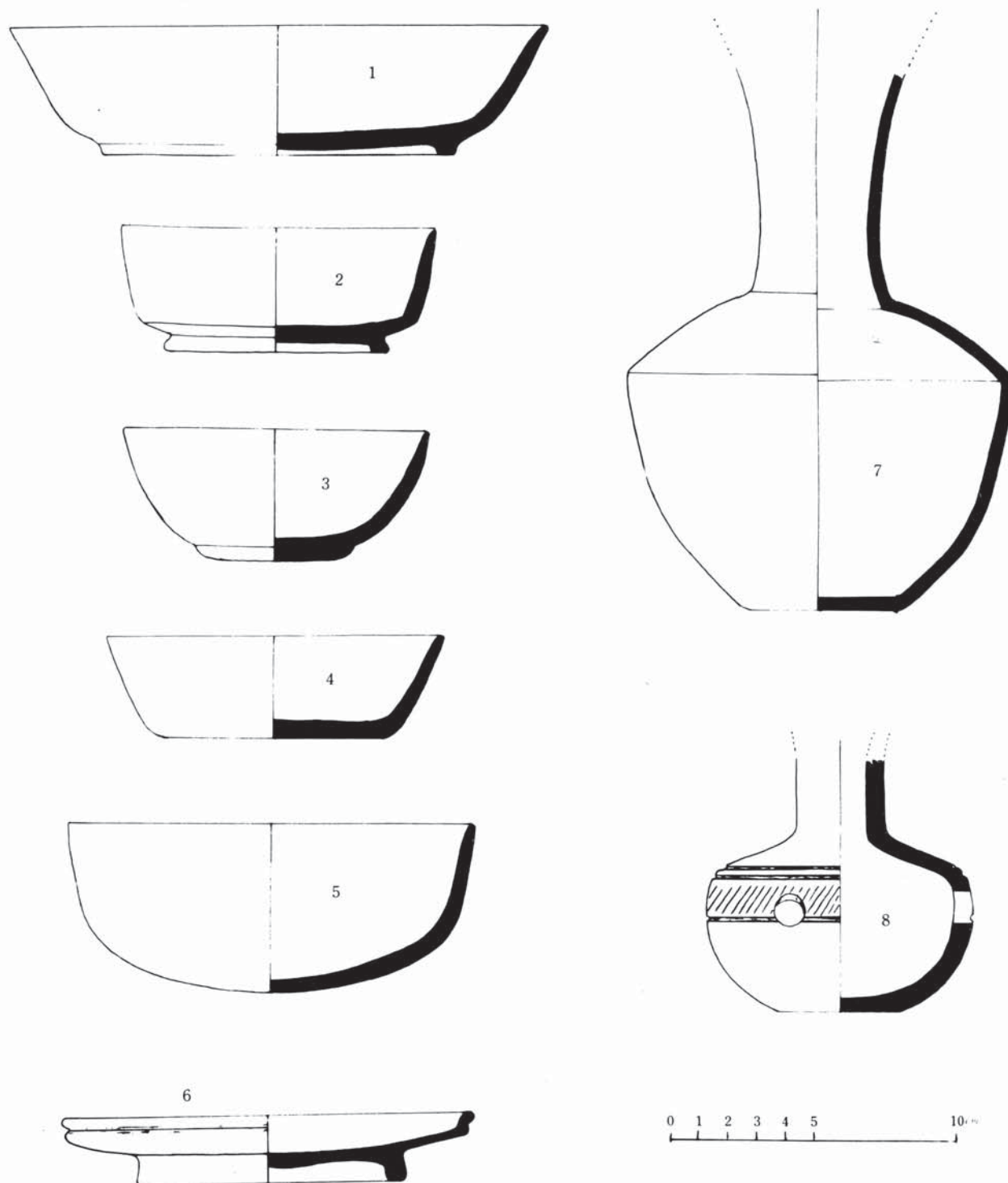
- 7 : 淡いセメント色、ラッパ状の長い口頸から屈折して大きく広がる肩部の径13.5cm、ここで稜をなし、やや膨らみをもたせながら下降する胴は、徐々にすばまって平底に達し、残存部の高さ19cmあるが、口頸が欠失しているので、総高は判らない。(第24図 7・図版 18)

● 甗 (はそう) (第24図・図版第18)

当遺跡では 1 個のみ出土したが、口頸上部が欠失している。

8：セメント色で焼締りあり、灰釉が若干かかる。胴の最大巾は9cm、平底であることは特異である。

型の如く胴の肩部に2条の並行沈線と、更に1.6cm下って1条の沈線を繞らし、沈線間には、篋状器具によって施された、左傾の並行斜線を印し、この斜線帯の中位から下へかけて、直径1.3cmの穴が1個穿たれている。なお残存部の高さ8.9cmある。(第24図8・図版第18)



第24図 須恵器 鉢(1~5) 盤(6) 長頸壺(7) 甗(8)

第 21 章 遺 物 (16) 須 恵 器

● 壺 (第25・26図・図版19・20)

壺は下記の 1 に示した完形品を除く以外、口頸部の破片のみ各種が出土した。

この種類も、須恵と無釉陶器に区分する上に於いて、甚だ紛らわしいものもあるので、ここでは胎土と手法によって、一応の区分を試みた。

- 1：セメント色焼成堅緻で、非常に手軽い。口径16.5cm、高さ21.5cm、胴腹部20.4cm、丸底の壺である。

外聞き直線の口頸部から、強くくの字状に屈折して、球状丸底の胴部をもつ。

口縁端の側面は肥厚させてやや下垂し、端面から8mm下位と、更に2.2cm下位に2条の凸帯を附し、この凸帯間の空間と、下位の凸帯と胴の接合部までの空間2.7cmの2区一杯には、鮮やかに波状文が印せられる。

上胴は篋様施文具により、目の荒い左傾の条痕を印した上へ、胴の接合部からやや下った肩部へ、数条並行の櫛目文帯を3段と、それよりやや下った上胴と、中腹部へ各々十数条の並行櫛目文帯で飾り、下胴から底に至る全面には、篋描きによる不整な左傾の並行線文や、杉綾文で飾られる。④地点出土。(第25図1・図版第19)

- 2：暗灰色を呈し焼成は堅緻、1と同型の壺と思われるがやや大形である。口縁を欠くが、口頸の中央と思われる個所へ、三角形の隆線1条を繞らし、この上下に、手法のやや異なる波状文を印している。頸部から急角度に屈折して胴に移り、胴部全面にやや彎曲する右傾の条痕を印した上、肩部に数本並行の櫛目文が1段繞らされる。

なお、1、2と類形の壺が、当遺跡に隣接する蛭間町から出土した。詳細は後段の「蛭間町出土遺物」に記した。(第25図2・図版第19)

- 3：淡いセメント色焼成堅緻、大形の壺の口頸部の砂片で、轆轤による鮮やかな仕上げを見せる。口径22.8cm、やや外反りした朝顔状の口頸は、口縁端面僅かに肥厚、更に1.3cm降って段をつけ、段から2cmおよび2.7cm下へ、2条の沈線を繞らし、下位の沈線から2.5cm下って、強く屈折し上胴部に移る。この段と上位沈線間へ、篋による擬似波状文を印し、なお胴の肩部から、左傾の条痕が施される。(第25図3・図版第20)

- 4：頗る大形の壺の口頸部破片で、口径27cm、残存部の胴肩部の径は53cmある。黄色を帯びた灰色を呈し、焼成堅緻、口縁端は外面へ肥厚し、やや内彎しつつすばまり、屈曲して胴肩部へ移行する。高さ13cmの口頸部上位へ、2条並行の沈線を3段繞らし、並行線間の2区へ櫛歯状器具によるやや左傾の刺突文が、経位不整に印せられ、胴肩部以下は全面を調整した櫛目の不整な擦痕が見られ、口縁端面から口頸内面および胴肩部は、焼成

時の灰釉がかかり、全面滑沢があって美しい。(第25図4・図版第20)

- 5：広口壺の口頸部破片で、口径22.3cm、淡いセメント色、薄手であるが焼成堅緻、轆轤によって非常に鮮やかに仕上げられている。

外反する口頸は、口縁端面を1cm肥厚させ、肥厚部の中央へ、非常に細い隆線1条を繞らし、隆線の上下は凹ませる。素文の頸部は強く屈折して胴部へ移り、上胴までの破片の限りでは素文であって、簡素ながら端正である。(第26図5)

- 6：口径20cm、同形の壺の口頸部破片、セメント色を呈し焼成堅緻、口縁端面はやや肥厚し内面1.2cm程は僅かに凹ませる。大きく外開きする口頸は、口縁端から4cm下降して屈曲し、胴肩部には篋による、左傾並行の条痕が印されるが、以下は欠失して判らない。(第26図6)

- 7：同形の壺の口頸部破片・口径20.8cm、セメント色を呈し焼成は堅緻で、口縁部を肥厚させたのみの、素文の口頸部だけで、以下欠失のため判らない。(第26図7)

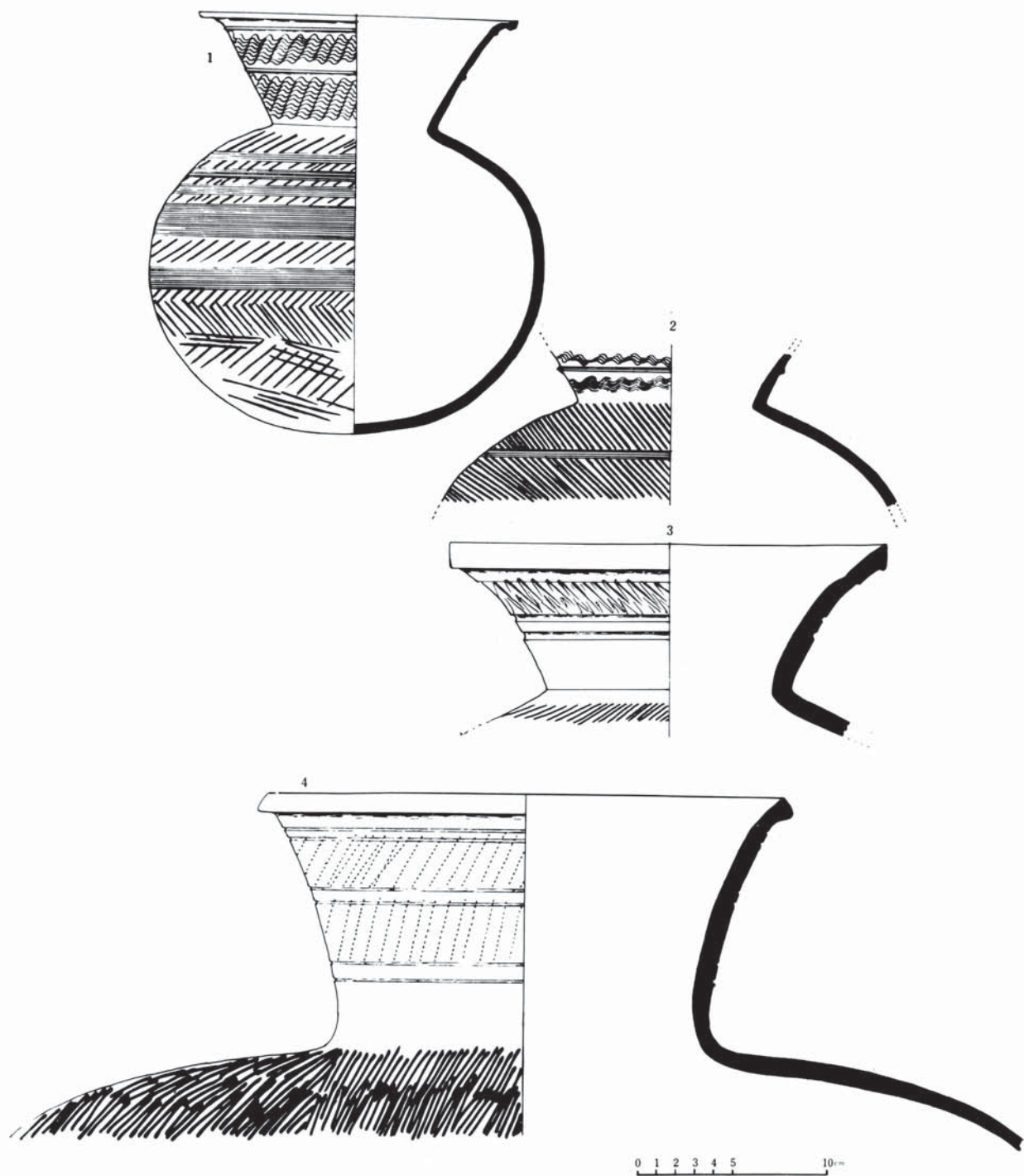
- 8：広口の壺の口頸部破片で、口径20.8cm、暗い灰色を呈し、焼成はやや不良で吸水する。くの字状に屈曲する、短い口頸から、大きく広がる上胴へ移り、上頸部以下全面に、やや右傾する縦位の櫛目を引いて、器表を調整する。(第26図8)

- 9：やや淡いセメント色、焼成堅緻で、器体の大きさに比し薄手である。

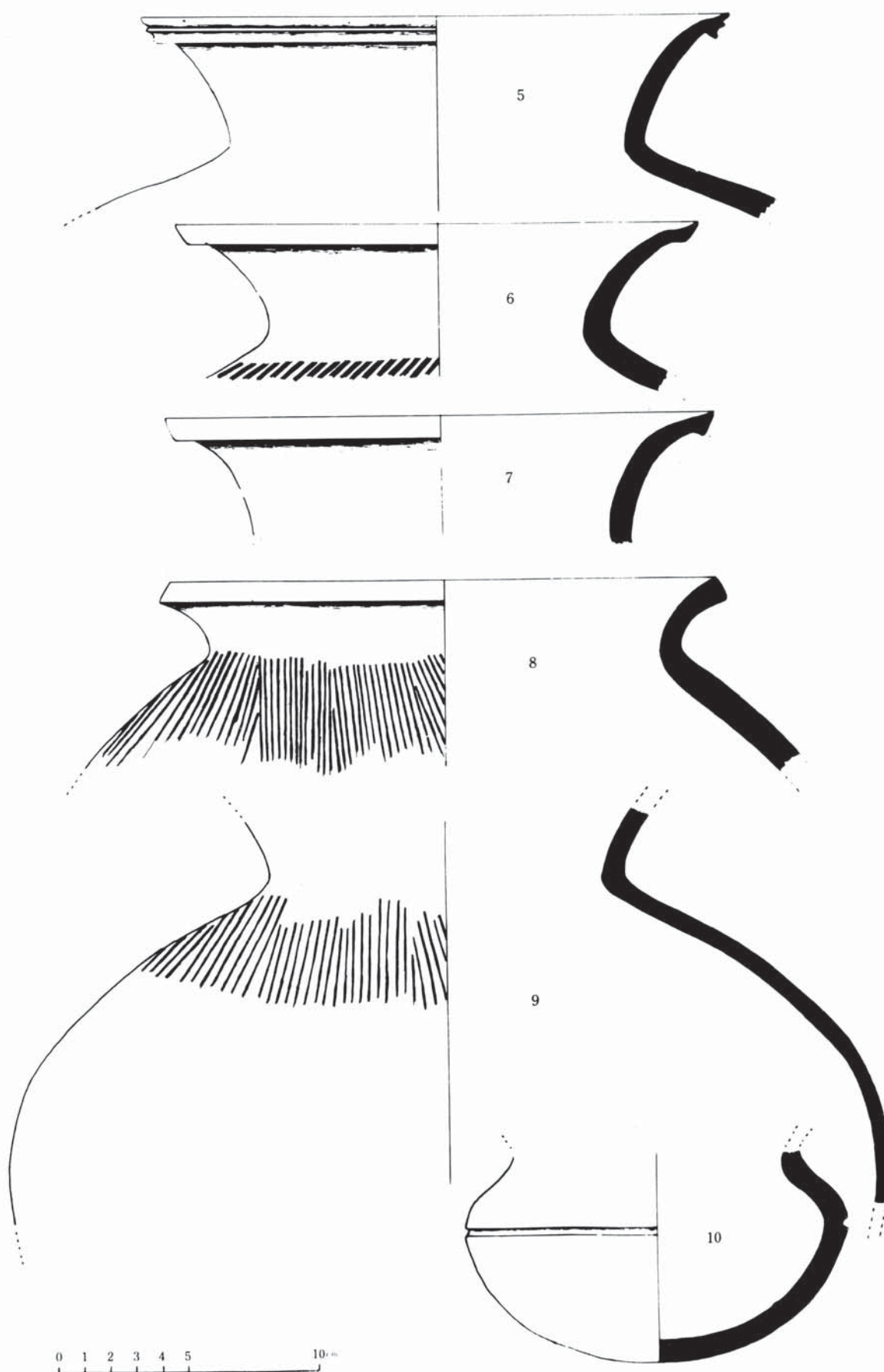
広口壺と思われるが、口頸部下半から上胴までの破片で、外反りする口頸部から、急角度で屈曲して胴部へ移り、大きく膨れる胴部全面へ、殆んど垂直位の粗い条痕がある。が、この条痕は櫛目を用いたようにも見られるが、また肋状貝の腹縁を用いたようにも考えられる。(第26図9)

- 10：小形丸底の広口壺で、口頸部は欠失している。セメント色を呈し、焼成は良い。

胴の最大径19.7cm、上頸部までの高さ7.8cmで、上胴部に1条の沈線を繞らしたのみの、簡素な土器であって、古墳の副葬品によく見るところの、短頸広口壺と同類であろう。(第26図10・図版第20)



第25図 須恵器 1～4. 壺



第26図 須恵器 壺 (5~10)

第 22 章 遺 物 (17) 須 恵 器

●平 瓶 (第27図・図版第21)

当遺跡では3個出土したが、何れも若干つつ破損していて、完全なものはない。

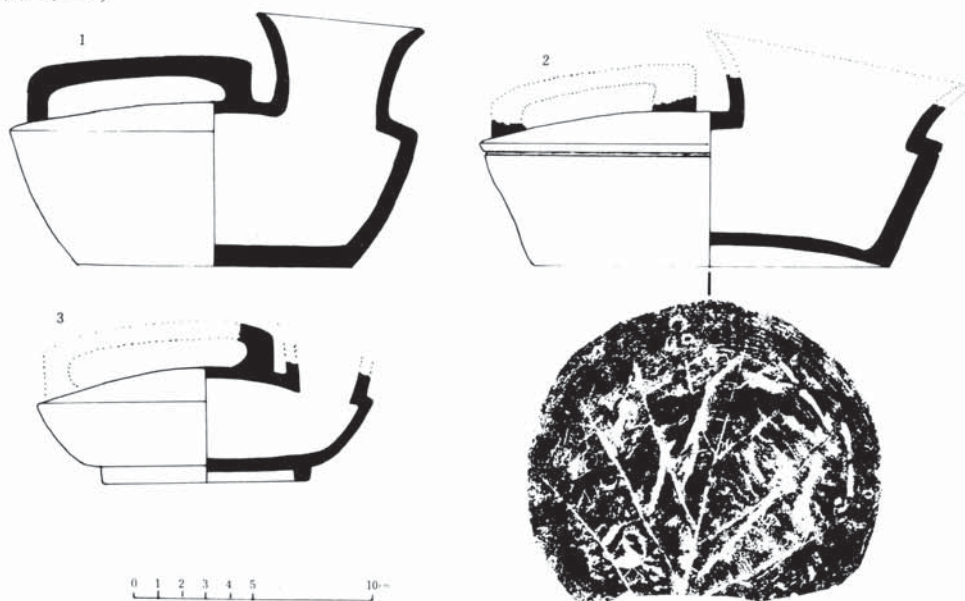
1：灰色で胎土に砂が多く混じ、器肌はザラザラしている。

肩部の径16.8cm、高さ10.3cmでやや大形である。山形の肩部から屈折し、かすかに外彎する胴腹部から、平底に移り、胴上面には、外反りする短い注口と、低い把手が付けられ、総体に直線的な姿体である。(第27図1・図版第21)

2：暗灰色を呈し、表面に自然釉がかかっている。1と同型で肩部の直径19cm、山形の上面から胴部へ屈折し、肩から3mm下位に1条の沈線を繞らしている。直径14.5cmの平底一杯に、木の葉の圧痕が印せられる。木の葉は葉脈の太い、大形のものであるが樹種は判らない。

注口は半ば欠失しているが、口径11cm内外と推定せられ頗る大きい、把手も付根のみ残しているが、1と同形であろう。時代は奈良朝末期と推定される。(第27図2・図版第21)

3：暗いセメント色を呈し、焼成堅緻で表面自然釉がかかり、滑沢がある。肩部の直径14cm高さは上部欠失のため判らない。山形の上面から急角度で屈折した胴は、やや外彎しつつなだらかに底へ移行して、恰も浅い椀状を呈し、直径8.8cmの端正な高台がつく、注口は付根だけ残っているが、口径は小さい。把手もまた付根だけ残っているが、恐らく角形のものであろう。なお類似のものは、一宮市その他にも出土している。(第27図3 図版第21)



第27図 須 恵 器 1～3. 平 瓶

第 23 章 遺 物 (18) 須 恵 器

●装飾付器台（第28図・図版第22）

1：セメント色を呈し、全面に暗緑色の自然釉がかかり、焼成は堅緻な下半の破片である。

直径 7.5cm、円筒状直立の軸は、下端に 2 段の突帯を繞らして、恰も軸受の状に作りこの突帯の下段から外彎して、丁度碗を伏せた形の飾台に移る。

下段の突帯から 6mm 降って、3 条の並行沈線と、更に 4.5cm 下って、2 条の並行突帯を繞らし、下位の突帯から更に 4.9cm 下って、2 条の並行沈線、更に 2.2cm 下って外反りの飾台基部となる。台の高さ 12.8cm、基部の直径は 28.8cm ある。

直立した軸部には、全面段状に波状文を印し、飾台中央の突帯を挟んで、上の区画には波状文を一段（註）と、矩形の透穴（推定 4 個）をつけ、下の区画には、波状文 3 段と透穴（推定 4 個）を穿っている。

上記のようにこの飾台は直立した軸と、碗を伏せた形の台との組合せになり、恰も燭台を思わせる特異な形をしている。上部が欠けているのでハッキリとは断言出来ないが、相当大形の土器であろうと想像される。しかしこの地方では余り類型を見掛けないので全貌を判断することは困難である。

ところで、この器形から想起するものに、いま神宮徴古館に飾られている、福岡県早良部金武村出土の「据台付子持盃」と呼ばれる、古墳期の須恵器がある。

すなわち碗を伏せた形の台は、突帯で 3 区に画し、各区に透穴と波状文・杉綾文で飾り、台の上へ直立した円筒形の軸が立ち、軸は、並行沈線で 4 区に画し、各区に透穴と波状文・杉綾文を印し、且つ曲玉・亀などの浮文を配して飾り、軸上には扁円形の頭部と、それにつづく大形の受台を据えて中央に大形の盃を据え、盃の肩へは 3 個の小坩を配し、総高さ 1 m 程もあろうか、甚だ稀品であることは、次の説明書によって判る。

「子持盃及び装飾付台（古墳時代）

3 個の小坩のついた盃と装飾付台よりなっている。後期古墳時代にあらわれた須恵器の 1 種であるが発見例の少ない珍しいもの、神酒を供える祭器と思われる。」

とある。

本遺物は、こんな大形の、しかも装飾に富んだものではないにしても、飾台及軸の形式から見て、これに酷似する器形と思われる。

註：碗状の台部は、自然釉が全面を覆って生地はよく判らない。しかも突帯上部の区画は、特に濃く、この区の波状文は 1 段のみ見られるが、あるいは自然釉の下になお存在するのではなかろうか。（第28図 1・図版第22）

2：セメント色で焼成堅緻、大形の飾台の破片である。

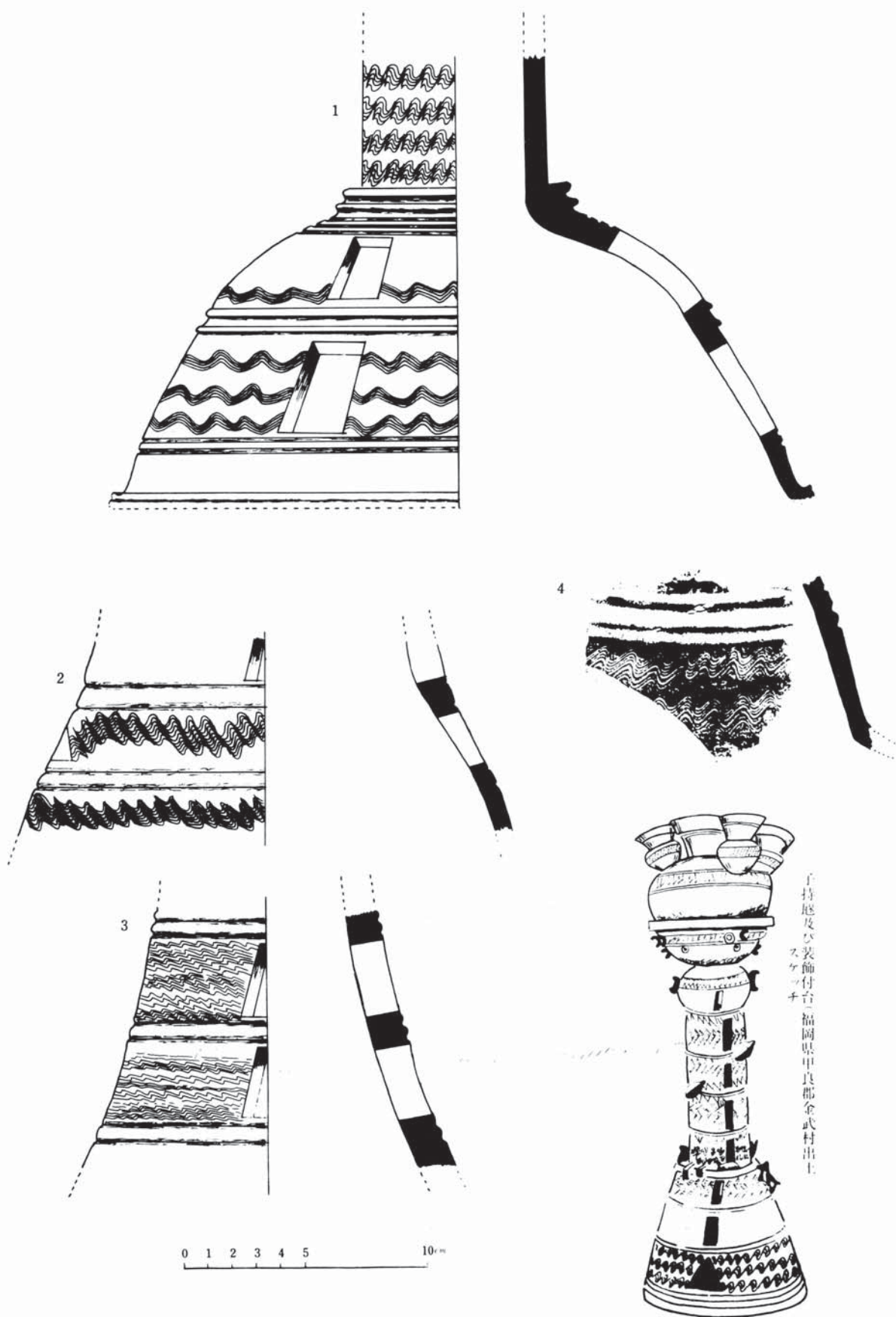
水平に太い2条1組の並行沈線を、上下2段繞らして3区に区画し、各区へ長三角形の透穴を、2、3の両区には、波状文を各1段宛繞らしている。（第28図2・図版第22）

3：淡いセメント色で焼成堅緻、胎肉は相当に厚いから、かなり大形の飾台の破片と思われる。

前者と同様、横位の太い2条並行の沈線を、3段に繞らして4区画し、現存部では上から2、3両区に長三角形の透穴をつけ、各区一杯に小波状文が描かれる。（第28図3図版第22）

以上2・3の2つの飾台類似のものに、後記「大木町出土遺物」の項に掲出した、大木町西運寺所蔵の飾台付壺がある。この出土地の大木町は、寺野町とは地続きであって同じ生活圏であることに疑いを挿む余地はなく、しかもこの2個の飾台は、大木出土のそれと、ほぼ同じ大きさである点から見ても、およそその全貌を類推することが出来る。

4：セメント色、焼成堅緻な破片である。3条の広い並行沈線の下、波状文が2段印せられ屈曲している個所から折損しているが、これも2・3類似の、裾拡がりの飾台であろう。（第28図4・図版第22）



第28図 須恵器 1～4. 裝飾付器台

第 24 章 遺 物 (19) 須 恵 器

●三耳壺（第29図・図版第22）

1：淡い灰色で、焼成は良好であるが、器表はザラザラし、若干の自然釉がかかっている。

口頸から肩部までの破片で、当遺跡では1個のみ出土した。

口径10.7cmの短い頸部から屈曲し、僅かな傾斜で拡まって行く肩面に、口頸から2cm距って2条の沈線、更にわらび手状の釣手3個（推定）をつけ、急角度で屈折する肩部と、上胴との接合部は凹ませて、恰も蓋をした状に見られる。胴部以下は欠失して判らない。平安期。（第29図1・図版第22）

●有鈕蓋（第29図・図版第23）

有鈕の蓋は、古墳期の高杯や、台付蓋杯などに伴い、ついで須恵末期の、いわゆる陶杯（すえつき）と呼ばれる範疇の土器にも、蓋は屢々用いられているが、それはあくまでも土器の附属である。ここに敢て「蓋」と云う名称で掲げたのは、本遺跡では、身に伴って出土したものは1個もなく、いずれも単独の出土であるから、蓋のみを挙げたまでである。

なお此の他にも破片は若干あるが、細片のため省略した。

2：セメント色を呈し、胎土やや粗である。直径16cm高さ3cm、鈕は低く中心はかすかに凸起している。

山形にゆるい傾斜で拡がり、屈折して高さ7mmの齔となり、つば下端は外面1mm程を削って飾りとしている。

なお蓋の上面端に沿って、細く三日月形に、白色の釉らしいものが見られ、焼成の際土器の重なりで出た自然釉か、人為的なものか一寸判断がつかない。（第29図2・図版第23）

3：暗いセメント色を呈し、胎土密で一見やや古式と見られる。直径14cm、高さ4cm、鈕の突起は附根から、そのまま立上っている。つまみからなだらかに拡がる、蓋上面のつまみ基部から3cm隔たった肩に1線を引き、以下齔までの上面は、表面凹凸があり、そのまま彎曲して重ね目に至る。なお裏にX状の窯印が捺される。（第29図3・図版第23）

4：上半分だけの破片で、茶色を呈している。焼成不良の結果か、あるいは使用時に火に逢って土に還元されたものであろうか、鈕は付根から突立ち、蓋上面1cmを水平にして稜をなし、以下なだらかに下降しつつ拡がる。蓋内部中央に、窯印Xが窺描される。

（第29図4・図版第23）

5：前と同じく上半分の破片で、しかも同じく茶色を呈している。鈕は付根から突立ち、中心のつまみはや 突起している。蓋上面は鈕から彎曲して、なだらかに下降しているが、

以下は判らない。(第29図5・図版第23)

6：灰色を呈し、小片の出土、直径の割に低い鈕は、中央を山形にして周辺を凹ませる。

蓋上面は、鈕付根からゆるい傾斜で広がっているので、かなり大形の蓋と見られる。

(第29図6・図版第23)

7：暗い灰色を呈し、同じく上半分の破片である。鈕は6と同形であるが、蓋上面の傾斜は急である。(第29図7・図版第23)

8：セメント色を呈し、器表は少しザラザラしている。蓋の周縁を欠く破片で、内・外面には植物繊維の酸化物が付着している。鈕は低く、しかも周縁を高くして、中央は凹ませてある。蓋は鈕の付根から2cm程は傾斜ゆるく、こゝで屈曲して落込む姿で広がっている。(第29図8・図版第23)

●甑(第29図・図版第21)

9：淡いセメント色で焼成堅緻、口径33cm、外反りする低い口頸から、急角度で屈曲し、やや外彎しつつ尻つぼみする胴部の深鉢形で、下胴以下は欠失しているので判らない。

口縁端側面をやや肥厚させ、端面に凹線1条を繞らせ、口縁端から7cm下って、小さい把手が付いているが、付根が残って居るのみで全容は判らない。なおこの把手付根の周囲には、取付によって胎土を搔寄せて盛上げた製作の手段がその俚見られて面白い。

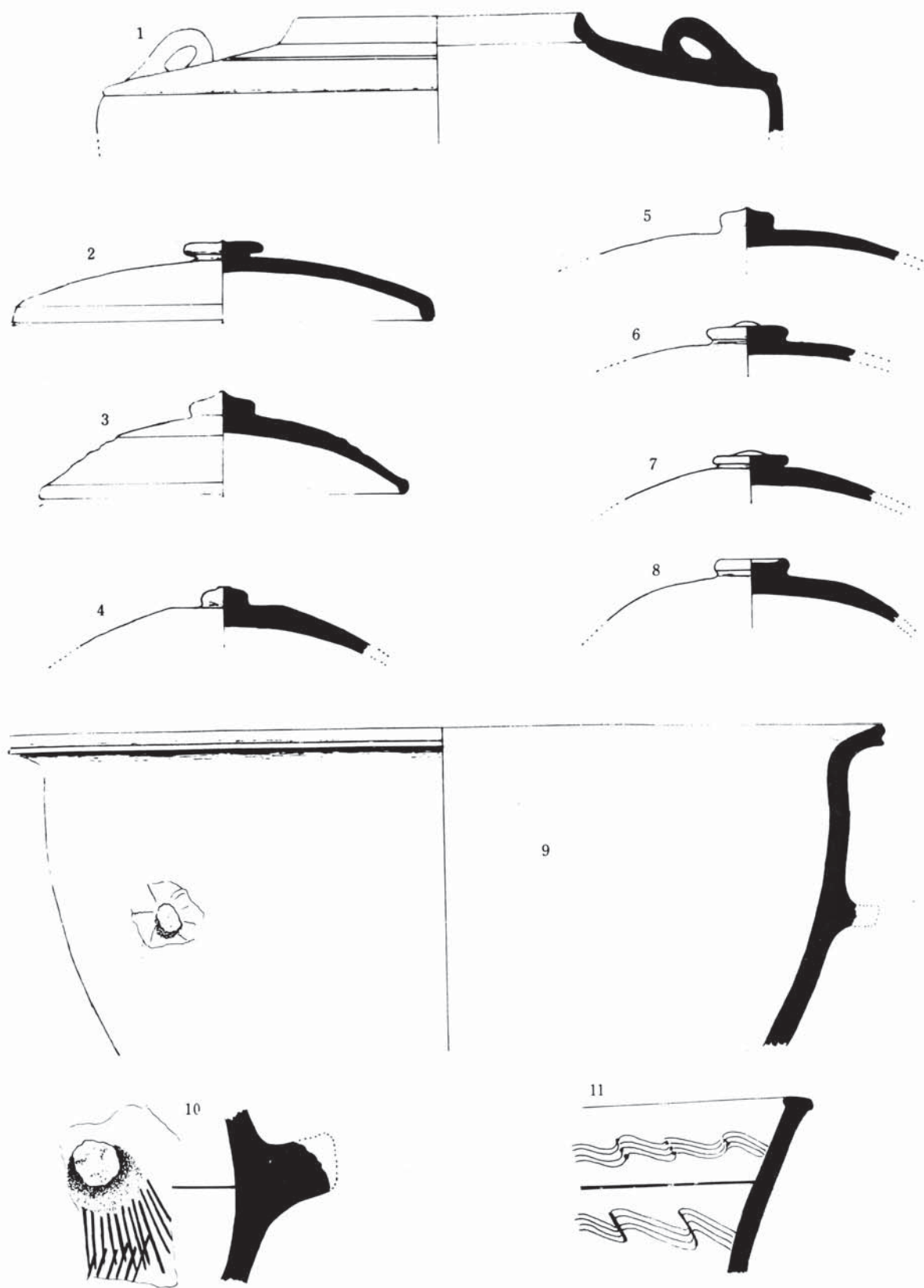
器表には刷毛目を施した上、篋で均した豎位の調整痕、把手間を結ぶ篋の浅い並行沈線、横位の篋痕などが見られる。

なお内面黒く煤けているのは、日常生活の器具として使用した痕跡である。平安期。(第29図9・図版第21)

10：暗灰色を呈し焼成堅緻、把手部分の破片である。9に比し、胎肉も厚く把手も遥かに大形であるから、相当大きな器の破片であろう。やや上そりの把手は、先端を欠くが、把手付根から以下は、全面櫛目で調整した。浅い整形痕が印せられる。(第29図10・図版第21)

●鉢(第29図・図版第21)

11：小片で器形はハッキリしないが、一応鉢と仮定した。濃いセメント色を呈し、殆んど直線の口頸で、口縁端を圧して肥厚させ、口縁からやや下って、大胆な手法の波状文と、浅い1条の沈線下に、異形の浅い波状文を印している。(第29図11・図版第21)



0 1 2 3 4 5 10cm
1 1 1 1 1 1

第29圖須惠器 1. 三耳壺 2~8. 有鈕蓋 9·10. 甑 11. 鉢

第 25 章 遺 物 (20) 須 恵 器

●平 底 (第30図)

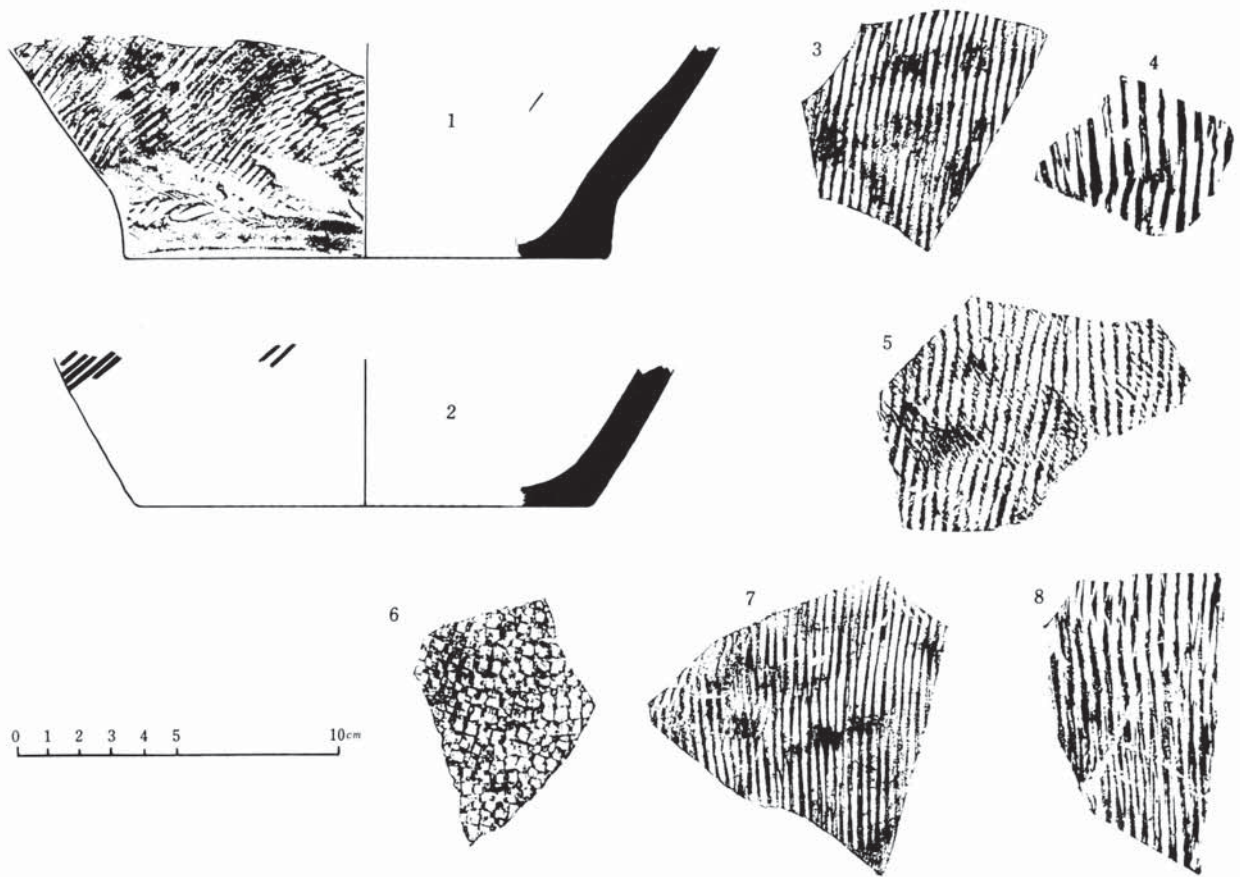
1 : 淡いセメント色を呈し、焼成は堅緻である。平底の破片で、器体は判らないが、残存の、下腹が直線になって居る所から、厚手、大形の鉢のようなものであろうか。器表一面に反覆調整した左傾の叩文が不整に印せられる。(第30図1)

2 : 淡いセメント色を呈し、焼成は良い。同じく平底の破片であるが、1は下腹から底へ移る部分は、一担直立するが、2は下腹から屈折して、そのまゝ底に移っている。下腹の一部に、左傾の叩文が僅かばかり見える他は素文、又内面には同心円の叩痕が見られる。

この2つともに、器胎の厚さに比べ、底の薄いことは、用途に関連がある如くにも思われる。(第30図2)

●叩 文 (第30図・図版第24)

3～8 : 須恵器には、器壁に印せられた色々の叩文がある。素より器表の凹凸を均整するとともに、装飾を兼ねたことは言うまでもない。いずれも圧痕によるもので、この文様によって当時の施文器具が窺われる。ここでは寺野遺跡の出土品中から種類の異なるものを集めて見た。(第30図3～8・図版第24)



第30図 須恵器 1・2.平底 3～8.叩文

第 26 章 遺 物 (21) 無釉陶器

●壺（第31図・図版第25）

1：大形の壺の口頸部の破片で、口径26.4cm、口縁端は外面へ肥厚やや下垂し、内彎しつつ高さ8cmの口頸から屈折して上胴へ移る如くである。何等飾気のない素文で、口頸の外面は暗黄色の上塗を施し、内面は暗褐色の上塗がなされている。（第31図1）

2：大形の壺の頸部の破片で焼成堅緻、地肌は須恵のセメント色を呈しているが、口頸部外面の大部分と、内側全面は黒褐色の上塗が施される。

外反りする口頸へ、極めて浅い沈線を上下2cm隔てて2条繞らし、一沈線の位置は口頸の中位と思われる一上段の沈線を挟んだ上下へ、右傾並列の圧痕を印し、胴肩部には全面左傾の条痕を印している。（第31図2・図版第25）

3：大形の壺の口頸で、口頸部のみの破片である。素地は淡いセメント色、口径13cmで、口縁から1.3cm下って、1条の細い隆線を繞らし、以下内彎しつつ、高さ6cmの頸部から、急角度で屈曲して上胴へ移行する。

外面は非常に淡い緑色の釉薬が見られ、表面滑沢を呈するが、これは自然釉とは考えられない。内側は全面暗灰色で、上塗を施した形跡がある。なお口縁部の技巧は、一見古式の須恵を思わせるものがある。（第31図3）

4：口頸部の小破片で灰色を呈し、壺の口頸と思われる。口縁から2.2cm下って太い凹線と更に1.2cm下ってやや細い凹線を繞らし、凹線間へ篋による左傾の刻目が施される。かつて施釉になるものと見られ、口縁と沈線内に僅かに残存している。小片であるが、口径15cm程の広口壺と思われる。（第31図4・図版第25）

●甕（第31図・図版第25）

5：無頸の甕と思われる。暗褐色口径25.8cmで、口縁よりやや下って、篋で施したと思われる。浅い沈線が1条と、更に下って非常に浅く、且つ細い1条の沈線一或いは輪積の痕かーが見られる以外は、何等装飾のない土器で、色合と焼成から見て、これは常滑焼ではないかと思われる。（第31図5）

6：同じく直口の甕の上胴で、灰色を呈し、口径26cm、素文で地肌には凹凸がある。（第31図6）

7：口頸のみの小破片で、暗灰色焼成堅緻、甕の口頸と思われる。水平の口縁端には細い棒状の器具で圧したと思われる。2.5cm間隔の圧痕を印し、口縁から1cm程下って、2条の並行沈線が引かれる。（第31図7・図版第25）

●片口と平底（第31図）

8：片口の破片で灰色を呈し、器肌は少しザラザラしている。小片のため詳細は判らないが、

厚手であるからかなりの口径をもつものと思われる。

類品はかって、別記宇治町字中新田及古杵、旭羊毛工業株式会社構内遺跡から出土している。（第31図8）

9：平底の破片で、灰色を呈し、外挟りの端正な高台がついている。鉢又は片口類の底と思われるので、ここへ掲出した。（第31図9）

10：同じく平底の破片で、灰白色、胎土は非常に密で焼成は堅緻である。内面はなだらかな傾斜で、底へ移行しているが、外面は器表にやや凹凸があり、外挟りの端正な細い高台が付けられる。

内面の一部分に淡緑色の釉薬が見られるが、これは人工か自然釉かは判りかねる。

（第31図10）

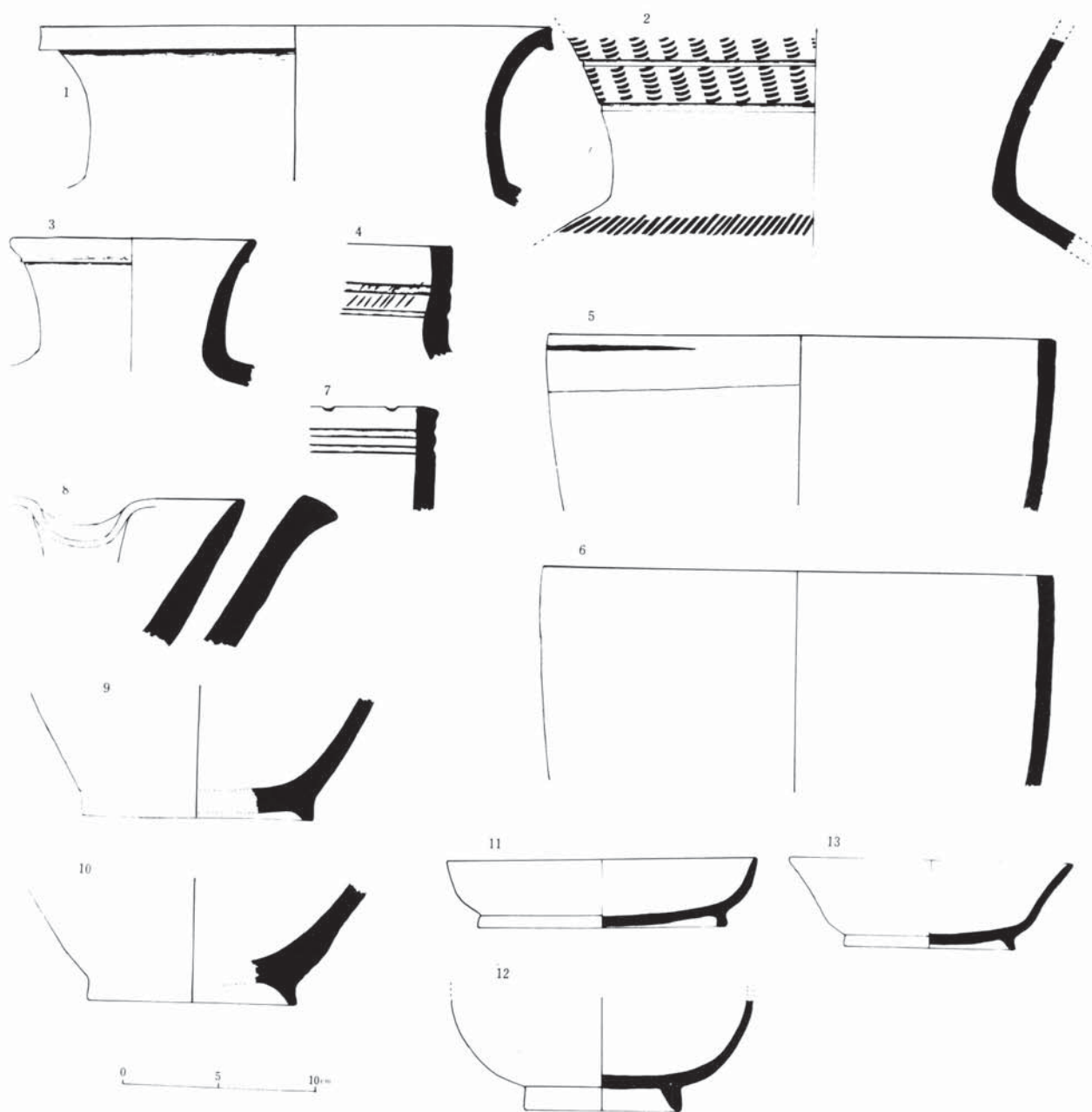
● 盃（第31図）

11：口径15.9cm、高さ 3.4cm、灰色を呈し、やや外開きの口頸からなだらかに移行して底に至る。下ぶくれの高台は器の割合に大きい。（第31図11）

12：下半部の破片で、灰色を呈し、焼成は良好。残存部は美しい曲線をもつ碗形で、やや外開きで高い端正な高台がついている。（第31図12）

13：盃の同型式とも見られるが、いわゆる山杯と比べ胎土・高台など、全く異っているのでこの類に入れた。

口径14.5cm、高さ 4.5cm、灰色を呈し焼成は良い、外開きした口頸から、やや内彎しつつ下降し、腰で屈曲してそのまま中凹みの底となる。高台は外開きした端正な作りで、平安期と見られる。（第31図13）



第31図 無釉陶器 1～4. 壺 5～7. 甕 8. 片口 9・10. 平底 11～13. 鉢

第 27 章 遺 物 (22) 無釉陶器

●山 杯（第32図・図版第25）

靱痕土器とも呼ばれる山杯は、以下掲げる図以外に、破片は相当に多く出土した。中には別記の通り、A井戸遺構の中からも発見し、以って井戸遺構の時代判定の手掛りになったものも有る。

- 1：口径11.7cm、高さ5cm、胎土は密で焼成堅緻である。薄手で中胴部はやや膨らみ、外開きの端正な高台がつけられ、幾分時代の遡るものと思われる。（第32図1）
- 2：口径13cm、高さ5cm、前と同じく胎土密で焼成堅緻、口縁端の内面は肥厚させ、なだらかな曲線で底に移行し、内面の底には湯だまりがつけられる。高台は外開きで端正に付き、靱痕がついている。これも時代はやや遡るものと思われ、両者共に轆轤仕上げで手軽く出来ている。（第32図2）
- 3：口径13cm、高さ5cm、胎土は粗い、胴は直線に近く、内面の底は中高に作られる。高台は低く靱痕が付く。（第32図3）
- 4：口径15.5cm、高さ4.5cm、外彎する胴部をもち、内面は口縁から底までなだらかに下降する。高台は附いてないが、これは剥落したものと思われる。（第32図4）
- 5：口径14.2cm、高さ4.5cm、胎土は粗い、やや外彎する胴の内面は下胴で屈曲して底に至る。高台は外開きで低く、靱痕がついている。（第32図5）
- 6：口径14cm、高さ5cm、胎土は粗く厚手作りである。口縁からやや外彎して下降し、高台は中央を凹ませ、外輪を高台にあて、靱痕がついているが雑器の域を出ない。（第32図6）
- 7：口径12cm、高さ5cm、胎土粗く厚手作りである。直線の胴から屈曲して底に移行し、底内面は屈曲部から山形を呈し、中央は凹んでいる。高台は前と同じく中央を凹ませ、外輪を高台に形作り靱痕が付く。これも雑器の感じである。（第32図7）
- 8：口径13.5cm、高さ5.4cm、胎土粗く厚手作りで、口縁端面は斜に直截する。殆んど直線の胴部は下胴で屈曲してやや凹凸のある底となる。高台は中凹みで、外輪を高台に充て靱痕が付く。A井戸遺構出土3個の内。（第32図8・図版第25）
- 9：口径13.3cm、高さ5.3cm、胎土粗く厚手作り、同じく口縁端面を斜に直截し、ほとんど直線の胴部は、下胴で屈曲して内底はやや凹凸がある。外開きの高台には靱痕が付く。A井戸遺構より出土3個の内。（第32図9・図版第25）
- 10：口径14cm、高さ5.8cm、胎土粗く厚手作り、前2者と同様口縁端外方を斜に截り、殆んど直線の胴から屈曲して内底に至る。高台は僅かに中凹みとし、周縁を高台にあて、これにも靱痕が付く。全体如何にも粗野な作りで、雑器そのままである。A井戸遺構中よ

り出土3個の内。(第32図10・図版第25)

11：口径14cm、高さ5.7cm、胎土粗く厚手作り、ほとんど直線の胴部は下胴で屈曲してやや中高の底に至る。胴外面は下降すると共に肥厚し、且つ数段に起伏させる。高台は中凹みとし、外輪を高台にあて、同じく靱痕がついている。粗雑な作りであることは前者同様である。(第32図11)

●小 杯 (第32図12～21・図版第26)

小杯は日常の食器として、庶民と生活を共にした土器で、中世の庶民の簡素な生活に相应しく、一般的に雑なうつわである。当遺跡に於いて出土した完形・破片の数は相当にのぼるが、凡そ胎土は粗く、器表はザラザラしているものが多い。形も区々であるが、口径は8cm前後と規格に当嵌めたように一定して居り、平底には糸切の手法が多く使われている。いずれ陶造りの工人によって轆轤で手慣れた手つきでしかも大量生産された雑器と云う域を出ない。

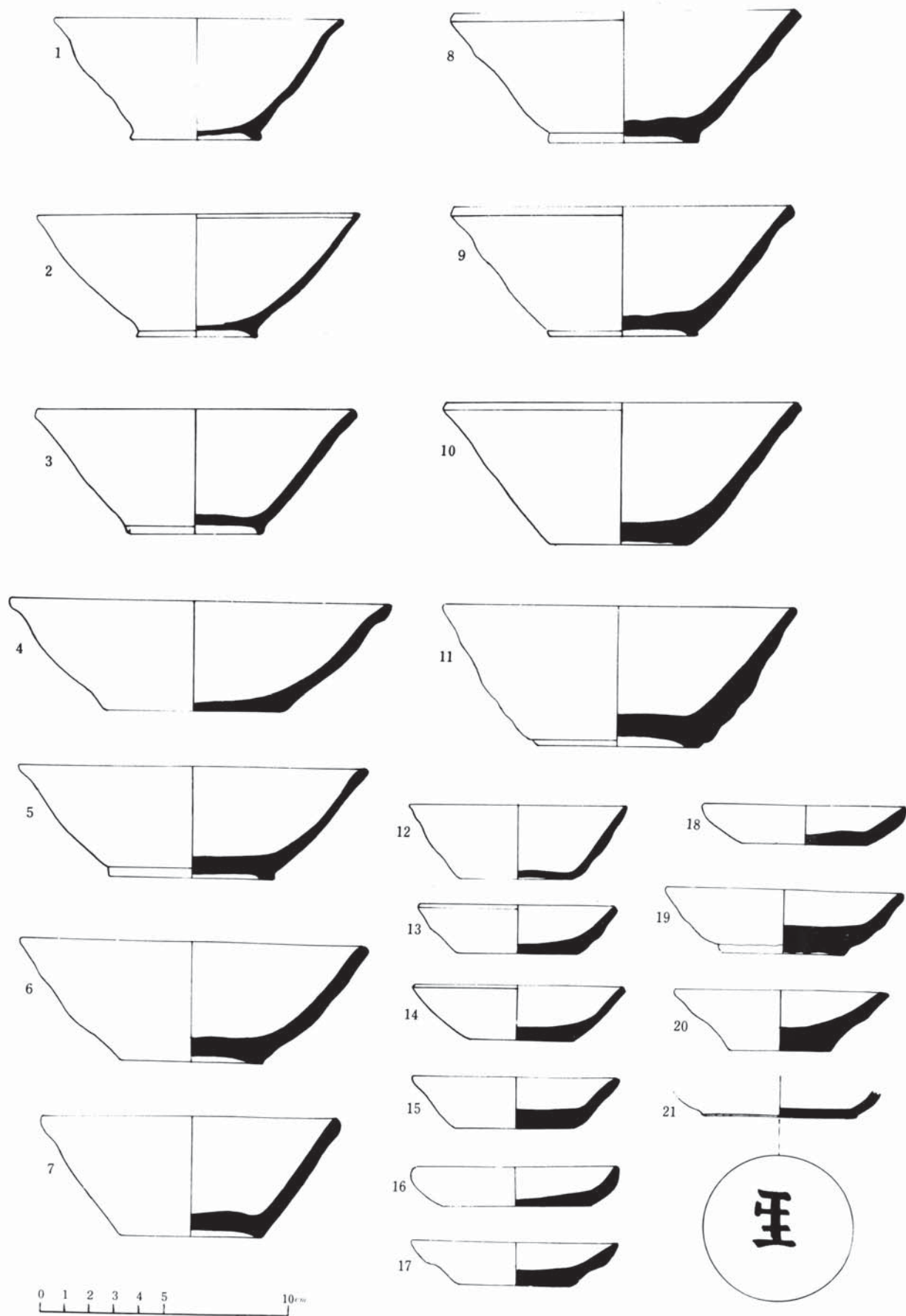
ここでは数多い出土品のうち、やや形態の異ったものを撰んで図示した。

12：口径8.7cm、高さ3cm、小鉢にも通用する。冴えた灰色で薄手、胎土は密で焼成堅緻、内外面滑沢があり、若干の自然釉がかかり、底は糸切になっている。以下示す小杯とは全然趣きを異にし、平安期のものと思われる。(第32図12)

13～20：前記の通り口径8cm前後で統一されるが、高さは1.6cmから2.5cm、底も糸切の平底、低い高台の付くもの等いろいろあり、又貼着けた高台が剥離したものもある。

総体に粗雑な造りである。(第32図13～20・図版第26)

21：小杯の下半部の破片で、平底に墨書があるが、字義は判らない。(第32図21・図版第26)



第32図 無釉陶器 1～11. 山杯 12～21. 小杯

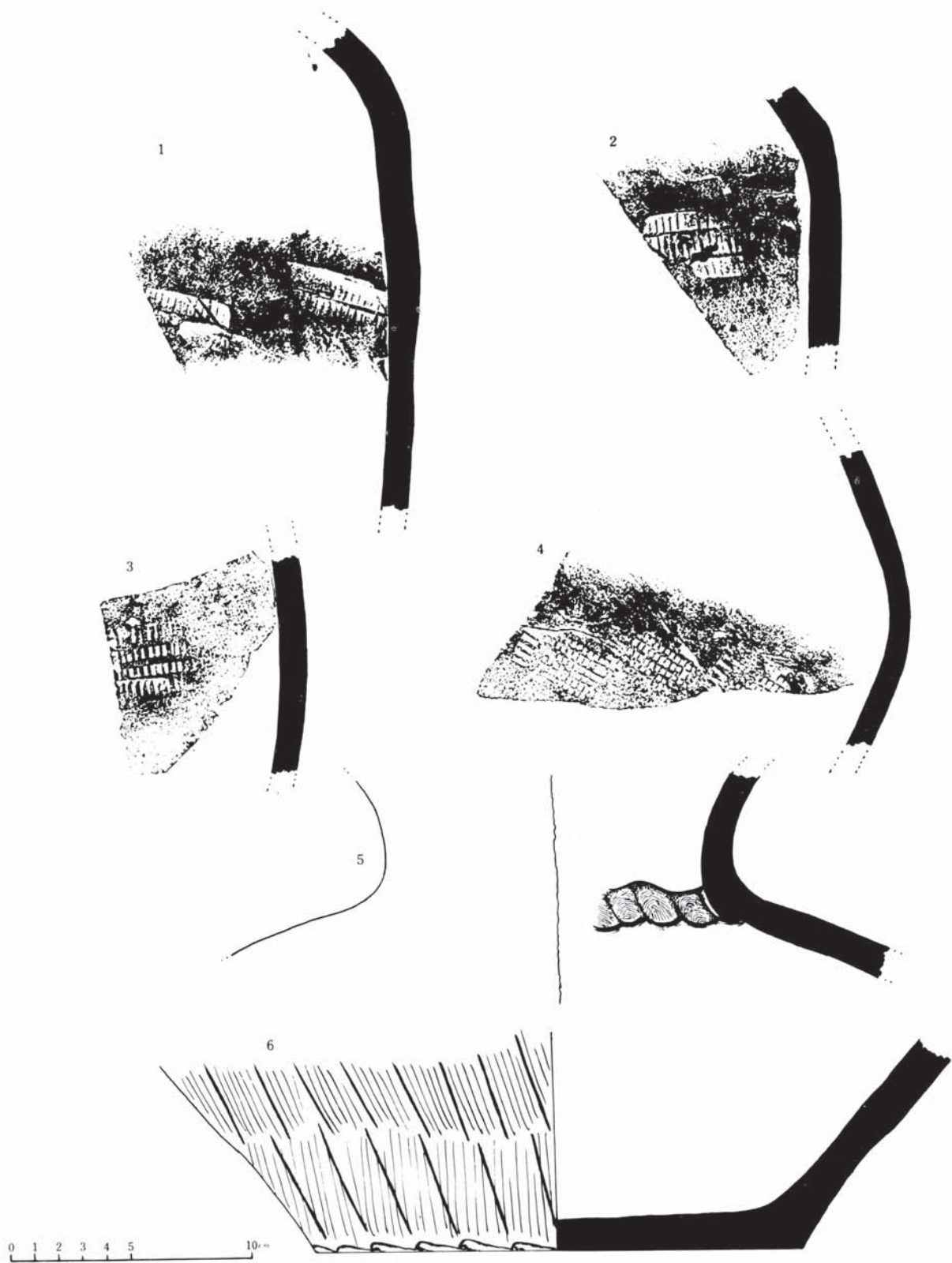
第 28 章 遺 物 (23) 常 滑 焼

● 甕 (第33図・図版第26・27)

この種の甕は普通外開きする短い口頸から急角度で屈曲し、大きく張った肩部から屈曲して、裾すばみの下胴をもち、わりに小さな平底がつく。色は常滑焼特有の黒褐色で、大きく張った肩の直下に叩文が横位一列に繞らされる大形の甕で、形、大きさともにいろいろあるが、高さは凡そ70～80cmから、1mmに及ぶものもある。貯蔵用の甕で容量は20～30立に及ぶ。

当遺跡では上記一類の破片のみ出土した。

- 1：黒褐色、上胴の破片で厚さ1～1.4cm、肩部から8cm（推定）下に、横位1列にすだれ状の叩文が見られる。（第33図1・図版第26）
- 2：黒褐色、同じく上胴の破片と推定され厚さ1.3cm、1と同系統の叩文が施されている。（第33図2・図版第27）
- 3：黒褐色の破片で、破片の位置は判らないが、叩文の常識から見て上胴の部分と思われる。厚さ1.1cm、前2者とは異った列点状の叩文が印せられる。
以上3個の破片はいずれも、下記の埴輪と共に瓦礫の捨て場から採集したもので出土地点はハッキリしない。（第33図3・図版第26）
- 4：前3者とは全く異り、灰色の陶質で焼成は堅緻であるが地肌は粗くていわゆる行基焼系統と思われる。厚さ9mm～1cmで、やや強く彎曲した位置に、横位一列に柵目様の叩文が施される。（第33図4・図版第27）
- 5：黒褐色の頸部の破片で、小片のため大きさ等は判らないが、屈曲の度合や、厚さ1.3cmある所から推して、叩文のある大形の甕の頸部と胴部との接合部であることには間違ない。内面屈曲部は1段肥厚し、この肥厚部には指の圧痕が列点状に印せられ、指紋までハッキリと残って土器製作上の手法が見られるのも参考となる。残存部外面は素文である。（第33図5）
- 6：黒褐色で焼成堅緻、大形の甕の底と思われるものの破片で、厚さは1.4cm～1.5cm、平底の径20cmある。下腹から底に至る外面は、篋で整形した大胆なタッチの跡と、その表面へ更に櫛状の器具で引いた刷毛目が印せられる。（第33図6）



第33图 常滑焼 甕

第 29 章 遺 物 (24) 土師質土器

鎌倉期の厨房具と言われている一連の素焼土器類の出土は余り多くない。もとよりこれら土器は薄手の上に、低い火度で焼かれていて、甚だ脆弱なために、出土品は細片のみであった事も止むを得ない。

●鍋（第34図・図版27）

- 1：淡褐色で口径25.5cm、薄手で口頸部のみの破片である。S字状に外反する口縁を内面へ1cm折曲げて厚くし、口縁から1.8cm下って釣穴が穿たれる。この釣穴は3～4個であろう。ここへ紐か針金様の金属などで釣下げ、煮沸具として用いたものと思われ、外面は煤けている。（第34図1・図版第27）
- 2：赤褐色で内耳の部分のみの破片である。口縁端面を平に肥厚させ、直線の口頸は2.5cmで、90度に屈曲し、上胴に移るもので恰も逆L字形をなす。このL字の両端を繋ぐように、口縁内面へ巾1.7cmの耳を外彎して貼付け、L字の角と外彎する耳とで生じた穴を釣手として、煮沸具に用いたもので、外面はやや煤けている。（第34図2・図版第27）
- 3：暗褐色で同じく内耳の部分のみの破片である。口縁端面はやや外面へ傾斜して直截し、口縁から外彎しつつ2.3cm下って屈曲、つぼまって上胴に移る。この頸部の高さは凡そ4cmである。この外彎屈曲する頸部内面へ、凡そ1cm巾の棒状耳を内彎させて、上下端を口縁内側へ貼合わせ、横位に生じた釣し穴によって、煮沸に用いたものと解されるが、釣耳は何ヶ所あるかは判らない。本器も前図と同じく外面は煤けている。

なお2・3はともに内耳の部分のみの破片で、大きさとともに器形は判らない。従って図に示す口頸の傾斜度は、正確な実測によったものでないことを付言しておく。

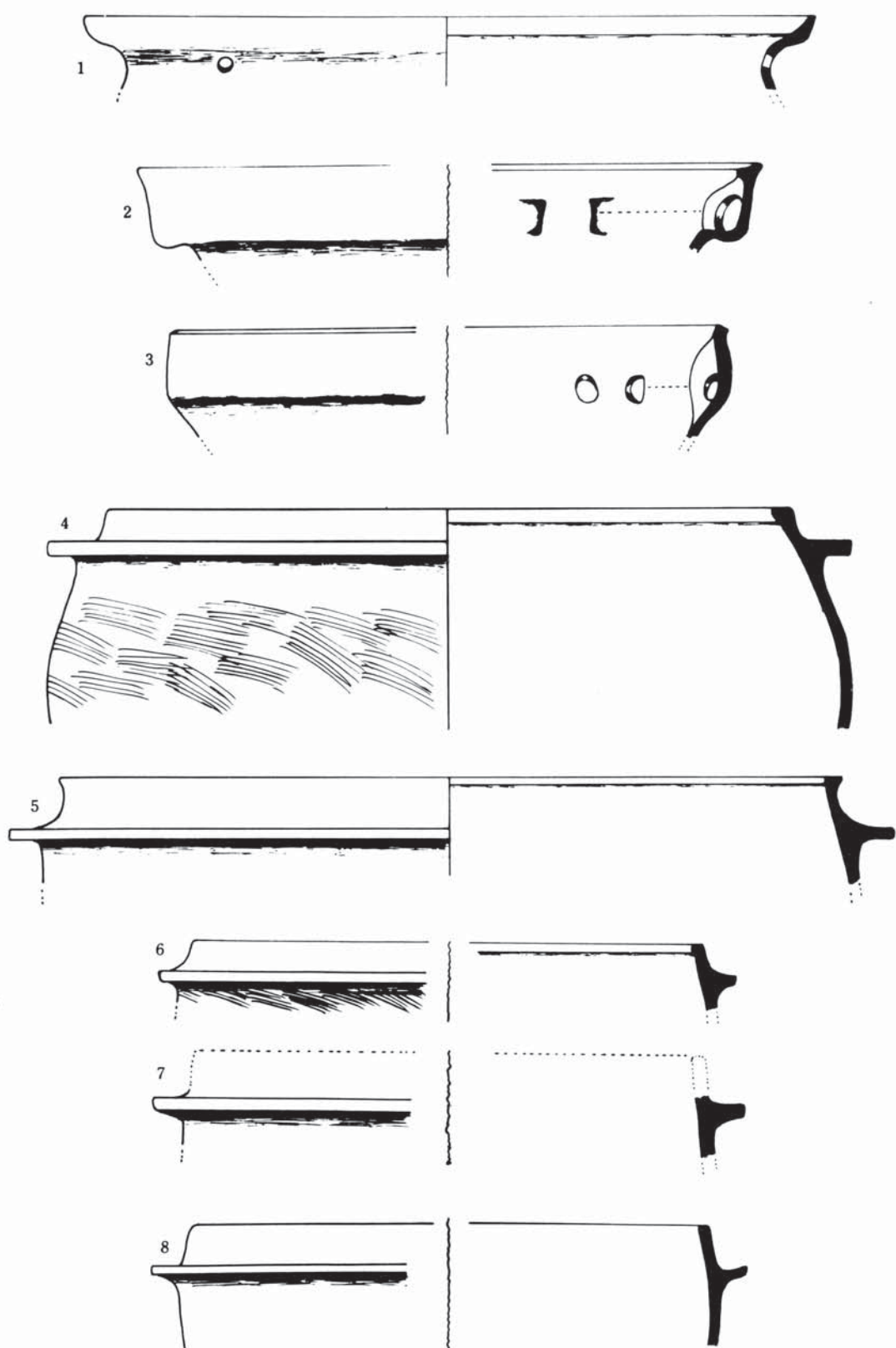
（第34図3・図版第27）

●釜（第34図・図版第27）

数例出土したが、いずれも比較的丈夫な齔を中心とした口頸部のみで、全形は判らない。

- 4：器の上半部の破片、茶褐色で胎土に砂と雲母が混じ、器表はザラザラしている。
口径24cm、口縁端内面を5mm折曲げた状に肥厚させ、外彎しつつ口縁から1.2cm下って水平に張出した齔、齔以下は膨らみつつ胴部へ移行している。齔以下胴部全部に刷毛目を施し、器の内・外面には異物が付着した痕跡が残る。（第34図4・図版第27）
- 5：齔を中心とした上下の破片で、口径27.8cm、茶褐色を呈し、焼成は4とほとんど同等である。口縁端は外面へ水平に張出し、内面は3mmを内側へ折曲げた状に作る、口縁より1.9cm下って水平に大きく張出した齔、やや外開きして胴部に移るあたりまでの破片で、外面は黒く煤けて、煮沸した痕跡が歴然見られる。（第34図5・図版第27）

- 6：鐔の上下のみの破片で、口径なども測れない。茶褐色を呈し、口縁端を内面 3 mm 折曲げて肥厚させ、口縁から 1.1cm 下って余り大きくない鐔が水平に張出している。
外面鐔の直下は全面刷毛目で調整されている。（第34図 6・図版第27）
- 7：同じ個所の破片で、口頸部は欠失している。水平に張出した鐔と、鐔からやや外開きに移る上胴部の破片である。（第34図 7・図版第27）
- 8：茶褐色、同じく鐔の上下の小破片で、口径も測れない。技巧のない口縁から 1.7cm 下って、少し上向きの鐔がつき、鐔以下はややすぼまる如くである。（第34図 8・図版第27）



0 1 2 3 4 5 10cm

第34図 土師質 1. 鍋 2・3. 内耳鍋 4～8. 釜

第 30 章 遺 物 (25) 陶 磁 器

当遺跡の範囲は広く、出土遺物は破片も含めると夥しい量でもあったので、無釉陶器以後の陶磁器の破片までは、仔細に採集する時間的余裕もなかった。従って採集した遺物も極めて少数である。

●皿（第35図）

- 1：口径10.7cm、高さ 2.3cm、黄白色の生地で、口縁から内・外面ともに、3mm～6mmまで黄瀬戸釉がかけられ、底は糸切になっている。（第35図1）

●鉢（第35図）

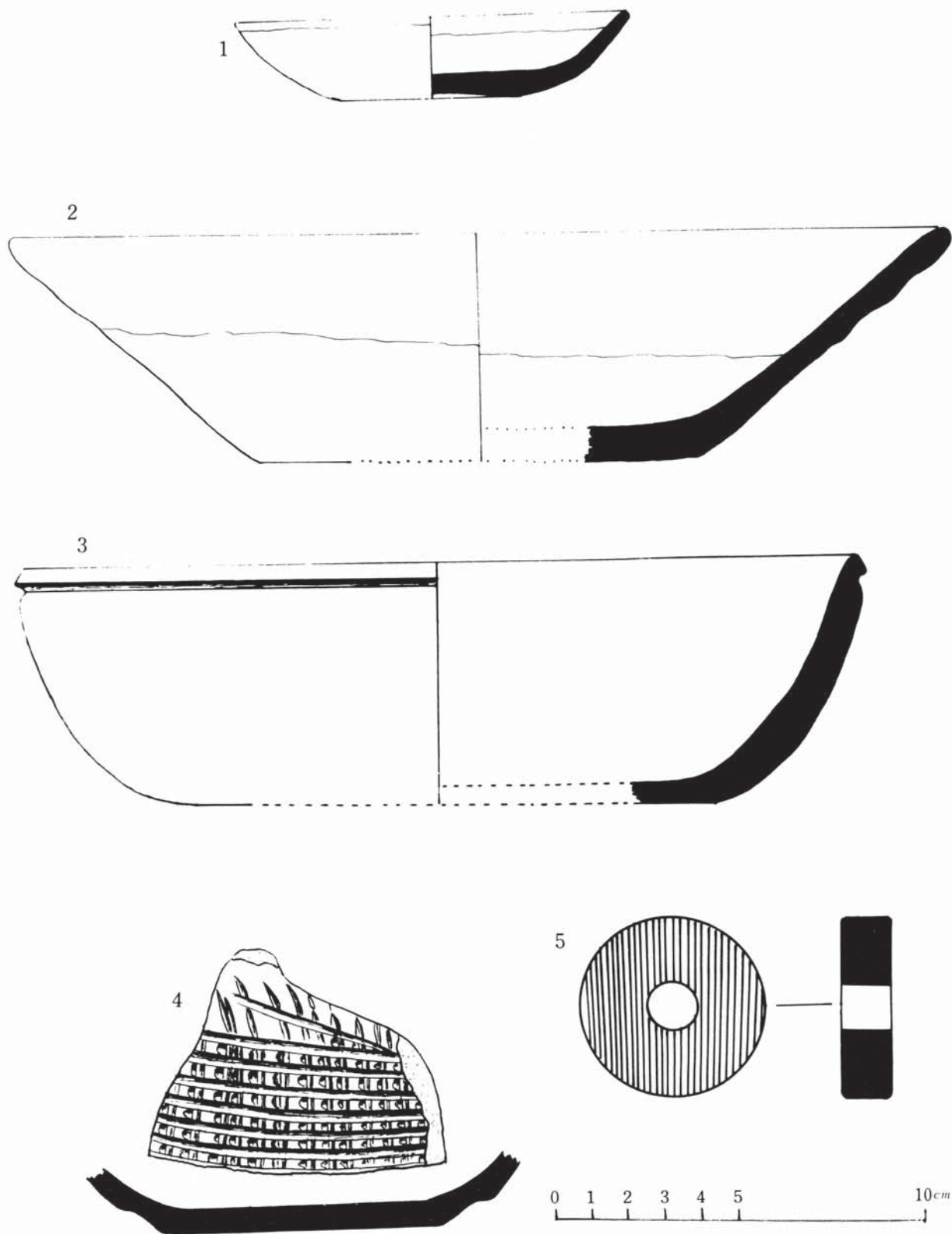
- 2：直口の鉢の破片で、口径25cm、高さ 6.3cm、1と同質の陶器で生地は黄白色、口縁から内・外面へかけ、各3～4cm程黄瀬戸釉が掛けられる。（第35図2）
- 3：俗に云う井鉢の破片で、口径22.7cm、高さ 6.8cm、生地は灰白色を呈し焼成堅緻である。底を除く内外面には自然釉もかかっているが、なお全面に鈍い光沢があって、施釉があるらしく思われるが、ハッキリ識別は出来ない。（第35図3）

●おろし皿（第35図・図版第27）

- 4：いわゆる行基質円形のおろし皿で、破片であるが、直径14cm、高さ 2.5cmと推定され、平底となっている。外開きの口頸から内底へ、篋状器具で2mm～4mm間隔で切込をつけ、これと直角に凡そ5mm間隔で切込を入れている。（第35図4・図版第27）

●紡錘車（第35図・図版第27）

- 5：直径5cm、厚さ 1.9cm、中央の穴の直径 1.2cm平安期の車輪形紡錘車で、轆轤による製作、胎土やや砂まじりの白色で、焼成は非常に焼締りあって極めて堅緻、あたかも現代の磁器の生地を思わせる。従って器の大きさの割に重量があり、紡績の機能を発揮させるべく、計算上の製作と推測される。器の縁辺を面取し、中心穴と外周には白釉が遺っている。なお器の両面は、磨擦によって生じた「すれ痕」が残っている。（第35図5・図版第27）



第35図 陶磁器 1. 皿 2・3. 鉢 4. おろし皿 5. 紡錘車

第 31 章 遺 物 (26) 瓦

● 鐙 瓦 (第36・37図・図版第28)

鐙瓦の破片は4種類5個が出土し、これを測図で復原して見ると、大小と共に文様も幾分の差こそあれ、ひとしく、法隆寺式鋸歯文帯複辨蓮花文である。ただし、寺野の場合法隆寺の鐙瓦と異なる点は、法隆寺を初め法隆寺式の瓦を用いている、各所の複辨蓮花文はみな8辨で、東海地方について見ても一宮市浅井町黒岩廃寺跡、岐阜県揖斐郡大野町大霊烏寺跡の出土瓦は何れも8辨であるのに比し、本遺跡のものは悉く6辨で統一される相違がある。

寺野の鐙瓦に多少大小のあることと、構図に幾分の差違があることは、即ち大小各種の建造物があり、その規模に合わせた瓦が葺かれてあったことと推察され、その間別に時代差はないと思われる。

なお鐙瓦とともに軒平瓦(唐草瓦)も出るはずと物色したが相当夥しい平瓦の出土にもかかわらず軒平瓦の破片らしいものの見当らないのは或いは文様のある軒瓦を用いなかったのであろうか。

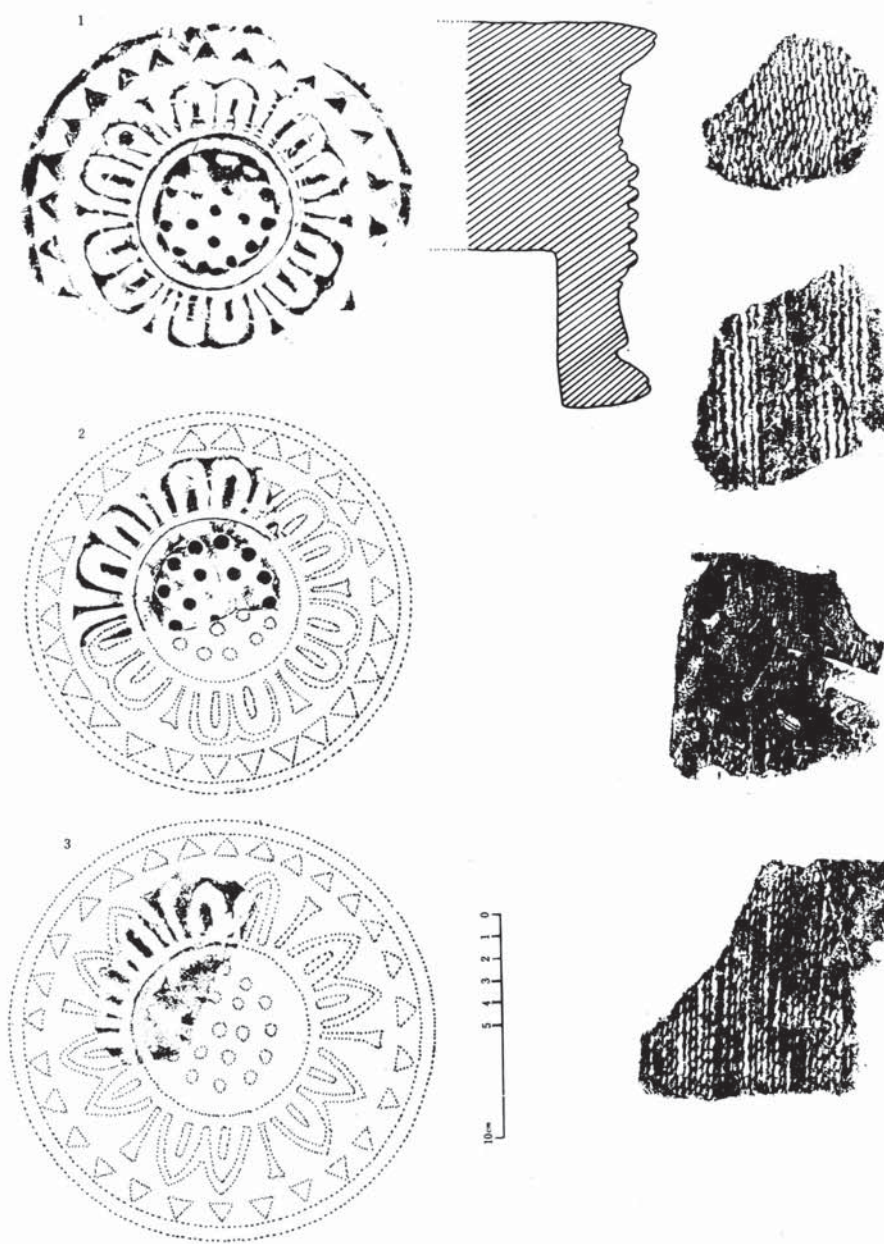
以上のように、尾張に於いては数少い白鳳期の遺構であるから、今後機会があれば寺跡の発掘調査を行い、遺構の闡明と記録の保存を望むものである。

- 1：直径17cm、1条の細い周縁と約25個の鋸歯文帯の中へ複辨の6葉の蓮花文を入れ、各辨には胡桃形1個宛をつけ、更に細い素縁1条を繞らした中へ、大形の子房と17個の蓮子が付けられる。(第36図1・図版第28)
- 2：中央部のみの破片で周縁が判らないがこれは1と同種と見られる。ただし2個を比較して見ると1はやや文様の崩れが目立っているが、2は総体に文様がシッカリしている。これは両者ほとんど同じ大きさではあるが、必ずしも同じ型による製作とは思われず1の型は相当磨滅したものを用了もののようである。(第36図2・図版第28)
- 3：小片であって、外縁が判らないのでハッキリとは云われないが、測図して見ると前2者よりはやや大きく、直径18.5cm位かと思われる。文様は勿論同じであろうが、ただ蓮花文が角尖形になっている。(第36図3・図版第28)
- 4：これも小片であるが幸いに外縁まで判るのでそれによって測図した結果は、直径20.8cmでやや大形、外縁は重圈文で蓮子はやや小粒である。又蓮弁の輪廓は複線になって居るように見受けられるが遺物の表面が十分に荒れているので、ハッキリとは云われない。(第37図4・図版第28)
- 5：外縁と鋸歯文の破片である。前と同じく重弧文であるが、測図して見ると更に大形で、直径22.2cmで外縁は前者より著しく太い。鋸歯文帯の内部を欠くので、ハッキリとは云

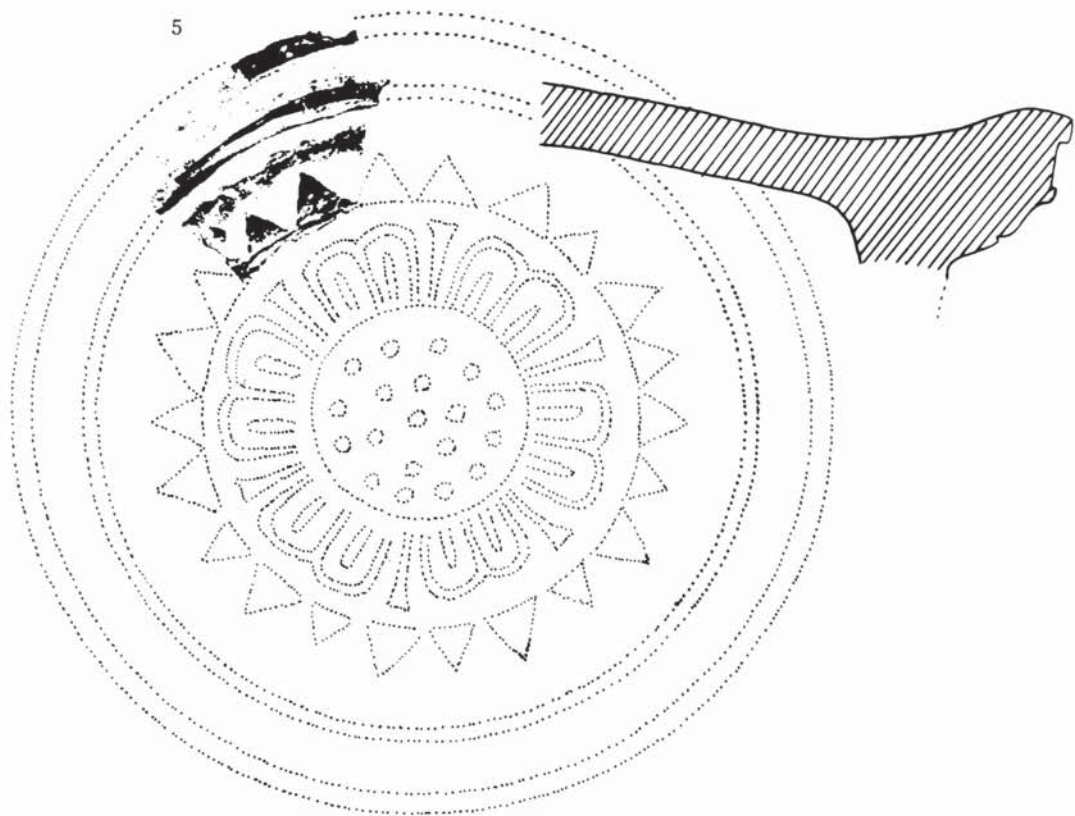
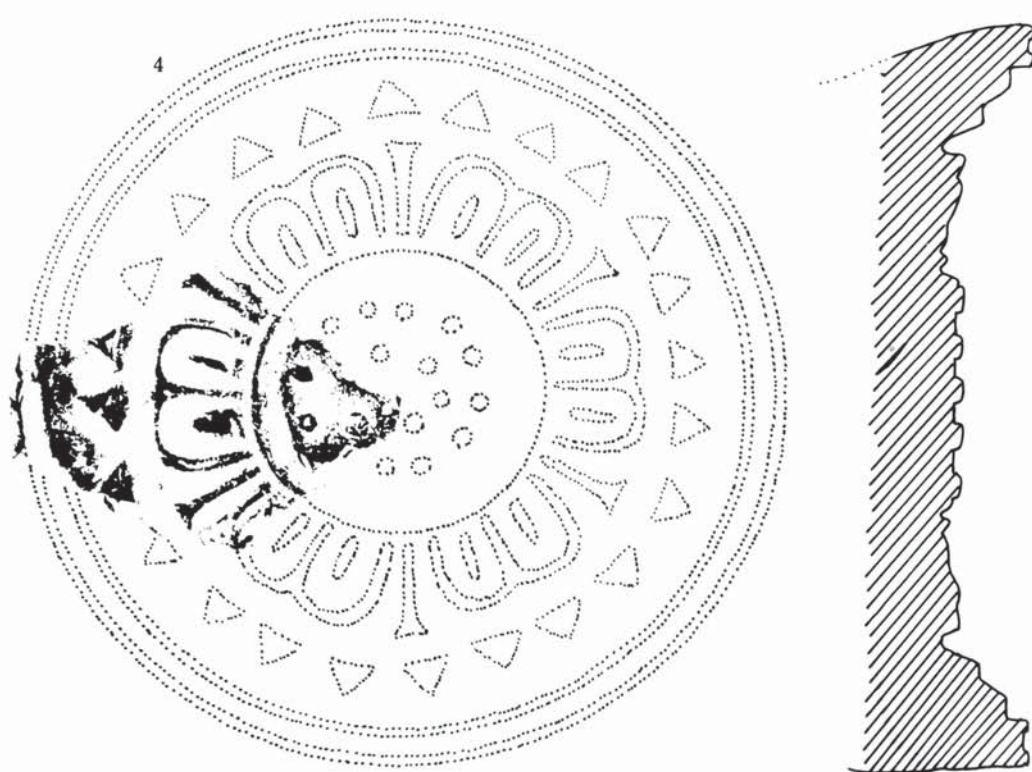
われないが、鋸歯文帯の径は他のものよりも一段と小さいもので、同じ文様としても蓮花文・子房共に小形であろう。（第37図5）

●平 瓦（第36図）

数多く出土した平瓦には、褐色のものがかなりまじり、恰も火に逢ったもののようである。平瓦は普通見るところのもので、格別に異ったものは見当たらないので、こゝでは叩文のみを挙げた。（第36図）



第36図 1～3. 鐙瓦・平瓦叩文



0 1 2 3 4 5 10cm

第37図 鏡 瓦

第 32 章 遺 物 (27) 石器・鉄鋳

寺野町遺跡では、石器は1個も発見されなかった。しかし普通、縄文・弥生遺跡に於いて、石器の原石として普通に見掛けるようないわゆる石屑に類する割石は、本遺跡の各所で非常に多く見掛け、むしろ石器の無いのが不思議にさえ思える。それらはいずれも非常に堅緻な石質で石鏃等に多く見るサヌカイトに酷似し、一見河原石を打欠いたとも見られる直径10cm～20cm程度の大きさで、何等かの目的のもとに打割ったものに相違はないが、果してこれを加工屑と仮定して何を作ったかと云う事になると石器と考える以外に思い付かないけれども、肝心の石器が見当らない以上、軽々に断定は禁物で謎の石屑である。

しかし、別記「蛭間町出土遺物」の項で述べるように、隣地の蛭間町で蛤歯の石斧を採集したと聞くから（蛭間町松永一義氏談）—（現物は今散逸して無い。従って実見した訳でないから、或いは石斧によく似た自然石であったやも知れないが、旧蔵者松永氏は石斧と断言されている）—当遺跡に石器は全然無いとは断定出来ないのである。

●砥 石（第38図・図版第28）

たまたま採集した3個の砥石を挙げた。しかしこの砥石も目についたものを拾ったと云う程度で、正確に土器と伴出したとか、発掘によって採集したと云うような確証のあるものではなく、又時代の特徴とてもない砥石でこれを以って直ちに古代の遺物と決めてかかるのは危険で、あるいは後世の品の混入であるやも知れない事を附言して置く。

1：灰色の水成岩で密度は高い。多少吸水性はあるが堅緻で、現今のいわゆる「おろし砥」程度に見られるが、試みに刃物を研いで見ると、上すべりがして刃物になじまない。

巾7cm、厚さ2.8cmの破片で、図示の通りAは裏面で割った生地のまま、Bは表面で自然石の面を研いで半ば平滑とし、鋭い刃先でも鋭いと思われるような、幾条もの研痕が見られる。C・Dは共に側面で、双方とも研いで平滑になっている。（第38図1・図版第28）

2：完形品で長径7.3cm、短径3.2cm、厚さ中央部で1.3cmある。暗緑色を呈し恰も今日の青砥に似ているが、質はかなり硬く、全面に「そぶ」と呼ばれる、地下水の酸化鉄分が淡く附着し、なお各所に凝固した鉄分がこびり着いて居て、永い間水分の多い土中に埋もれていたことを立証している。

両端を丸く、且つ薄く擦ってあるがしかし先端は鋭くない。

図のAは背面で割ったままの素地、Bは表面で砥石として使用され、やや凹凸はあるが全面平滑で更に鋭い刃先でも研いだと思われる溝がついている。Cの側面は研がれて平滑、毛彫のような細線がある。Dの側面も矢張り平滑で、且つ毛彫のような細線があ

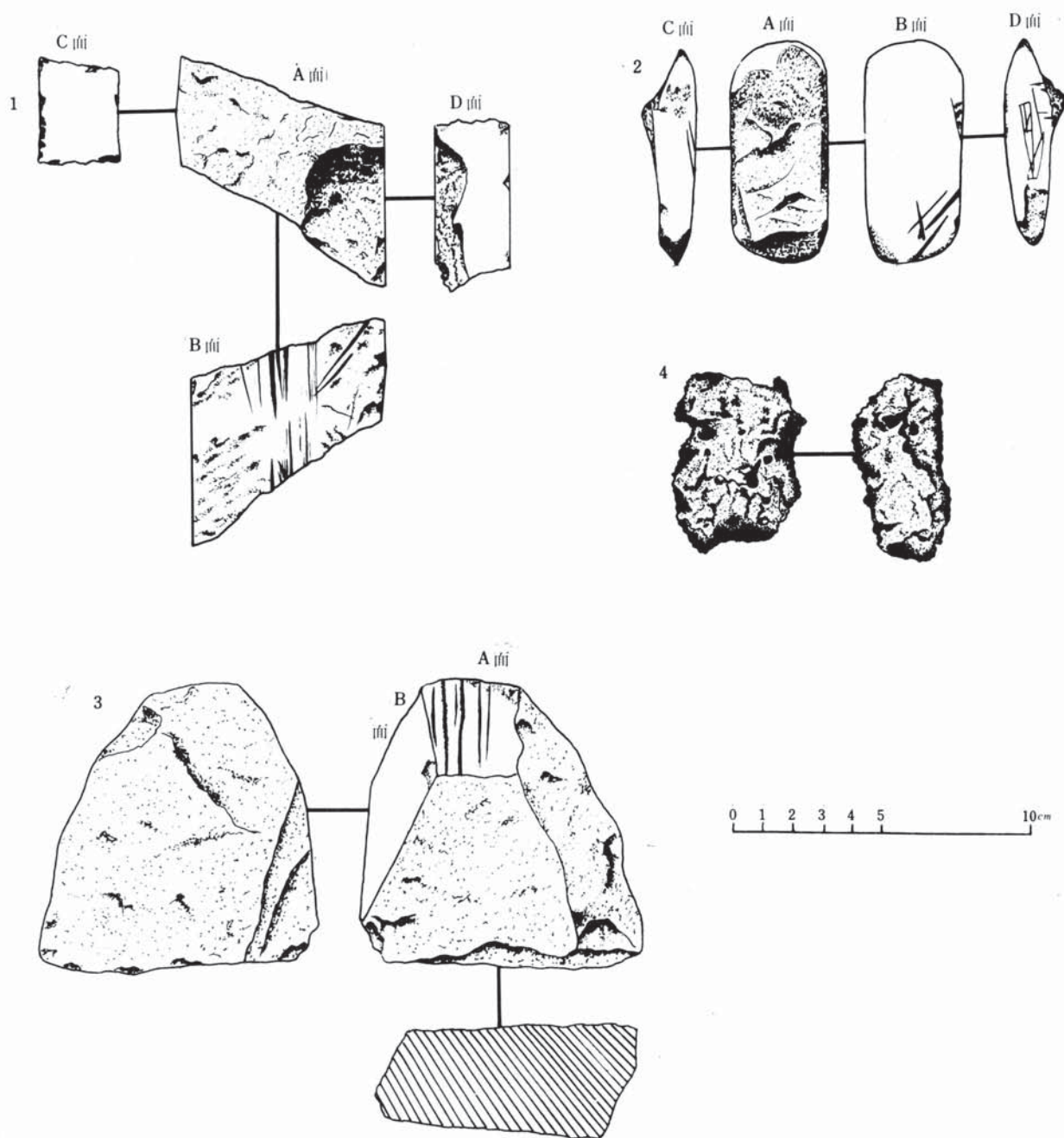
り、一見幼稚な絵画のようでもあるが、勝手な判断は危険である。

なお両端はA面の方からも若干つつ研がれ、全体の形から見て、小形の石斧を彷彿とさせるが、しかし先端を使用した形跡はないので、一応砥石として扱った。(第38図2 図版第28)

- 3：暗灰色を帯び、恰も俗に言う荒砥—おろし砥—に似て粒子は荒いけれども、石質は頗る堅緻である。現存部は巾8 cm、厚さ3 cmで、A及B面を平滑に砥ぎ、A面には鋭い刃先でも砥いだかと思われる。数条の条痕があり、全体に淡いそぶが附着する他、条痕の一部に酸化鉄分が埋り込んでいる。(第38図3・図版第28)

●鉄 鋅 (第38図・図版第28)

- 4：長径6 cm、短径5.5 cm、厚さ2.5～3 cmの1個のみ採集した。表面黄褐色の錆が全面に浮き、やや凸面の所々に大小10個余りの気泡孔があり、気泡孔の周辺は黒褐色を呈している。なお当遺跡に於いて、鉄鋅はこの他にも出土したと思われるが、土器を主に採集する他は余り注意を払わなかった結果によるものである。(第38図4・図版第28)



第38図 1～3. 砥石 4. 鉄鋸

第 33 章 考 察

以上述べた通り寺野町遺跡は、農閑季の短時日に、しかも、かかる埋蔵文化財については、一片の智識も持たない人々によって、工事が進められた過程において発見されたものではあったが、幸いにして土地に真野慶泰氏のごときよき協力者があり、又工事に従事した人々も、全部自町の人等であったからこれまた非常に協力的で、たとえ小片と雖も目にうつったものは悉くまとめて置いて貰えた事は自分等の郷土の歴史が解明されると云う明るい希望と善意に依るものであった。

又2ケ年にわたる調査の期間を通じ、貴重な資料が散逸することをおそれたが、幸いにして遺跡が荒らされる事も、資料が散逸する事もなかったのは、まことに幸せであったと思われる。

上述のように遺跡は広範囲の上に突貫工事であって、道路の敷設・畑の異動と云う作業の性質上、場所によってはあちらこちらの畑から土を運んだため、果してどこの畑から異動したのか不明の場合もあり、又シャベルで大きく土を掘起すため、そのまゝ埋れた破片も多いことと思われる。そのような次第で、それぞれの地点で、遺物を地域別に検出する事は不可能であったがただ、中期弥生式土器の出土した③地点と、パレススタイルを伴う弥生後期土器の出土した④地点だけは、遺物もハッキリと異なるため、他と区分することが出来たが、他の遺物に至っては概ね正確な出土地点は指摘出来ない。

遺物について見ると、中期土器は乏しい出土例ではあるが、その中で口縁端に刻目をつけ、内側に波状文を印して、胴部にあらわな刷毛目のある甕などは、貝田町式の系統を引くものだろう。

④地点出土の丹彩広口壺や、一連の丹彩土器群は、この地方にしばしば見るものであるが、殊にここでは、弥生の高杯が数多く出土したことと、そのいずれもが、非常に明るい赤褐色・淡褐色であることで、曩にも述べた通り、これ等の一群は明るい泥を用い、上塗したものでなかろうかと思われることである。

またこの遺跡では、いわゆるS字状口縁と呼ぶ、薄手の甕の出土が非常に多く、その装飾文様に於いては多岐にわたって居るのが目につく。大体この地方はこの種土器の出土が多く、吉田富夫氏は埋田遺跡において、これを「埋田型」と設定された。この土器の時代区分については、未だ結論づけられていないが、寺野遺跡の場合、胎土小石まじりで、雲母が多くまじっているものは、口頸端面へ各種の連点文が繞らされ、胴部は刷毛目で調整されるが、逆に胎土密で雲母もまじらないものは、口縁端面は素文で、胴部はおよそ櫛歯状器具で左・右傾の不整な櫛目で調整される。こうした観点からここでは胎土と施文によって一応弥生と土師に区分して見た。この土器はいずれも中空の脚台がつき、外部が煤けている事が多いのは、煮沸具として

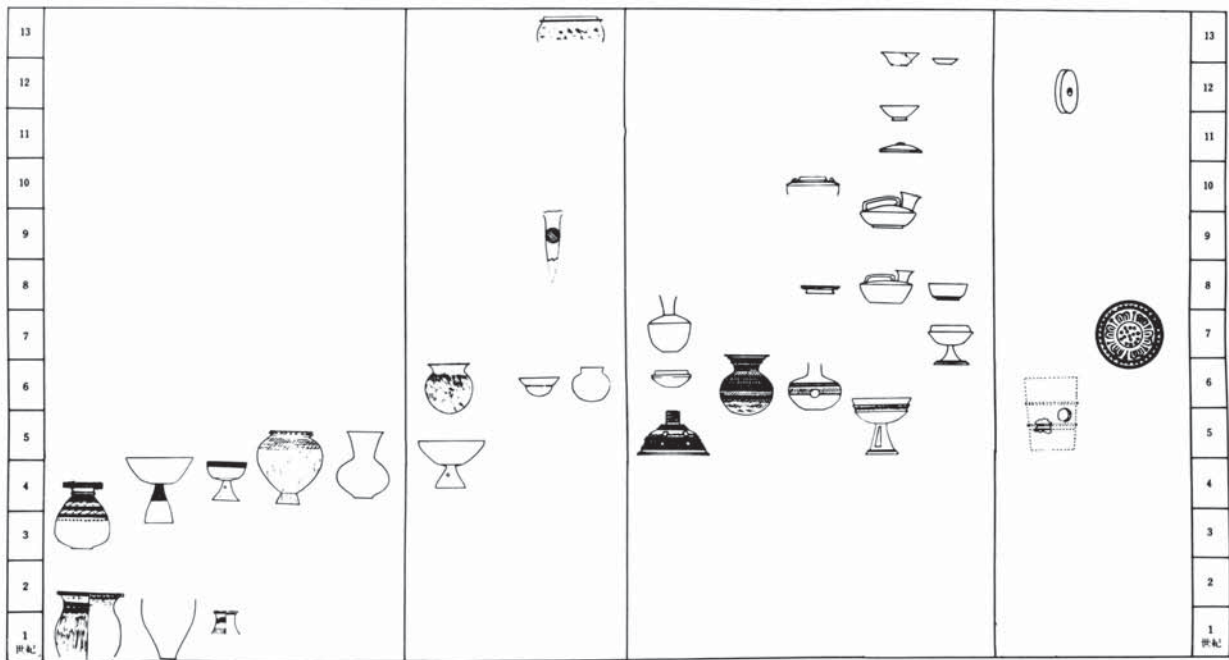
使用した器種でなかろうか。

土師については格別着目すべきものも見当たらないが、依然として高杯が盛行したようである。

須恵器は出土例も多く、古墳期以降各時代に亘っているが、その中で装飾付器台の各種は特に目立つ。いずれ東春日井郡・名古屋東部の古墳出土品と、軌を一にされると思われるが、中で挿図第29の1の如きは特異である。

白鳳期の瓦は思いもよらぬ出土であったが、もともとこの地方は中世以来仏教が盛行し、仏寺に因む地名も多く、各所に布目瓦の出土が見られるから、追々当地方各所の遺跡調査が進んだ場合、その関連が解明されるものと信ずる。

以上不十分ながら遺跡・遺物の概観を述べ、最後に出土遺物の主なものによって、寺野遺跡の模式図を作製した。



第39図 寺野遺跡出土遺物編年模式図



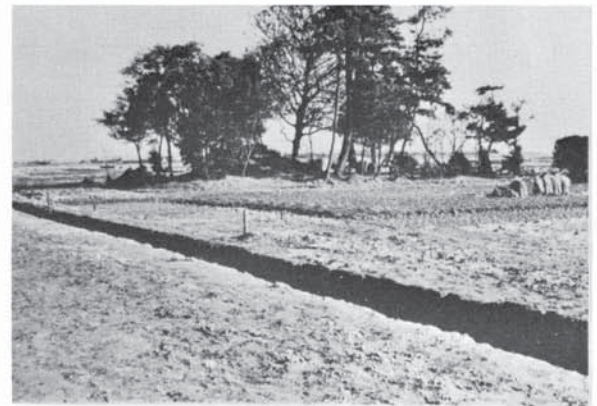
土地改良事業状況



④地点発掘状況



中期弥生式土器出土地付近



布目瓦出土地付近



④地点弥生丹彩壺類出土地点

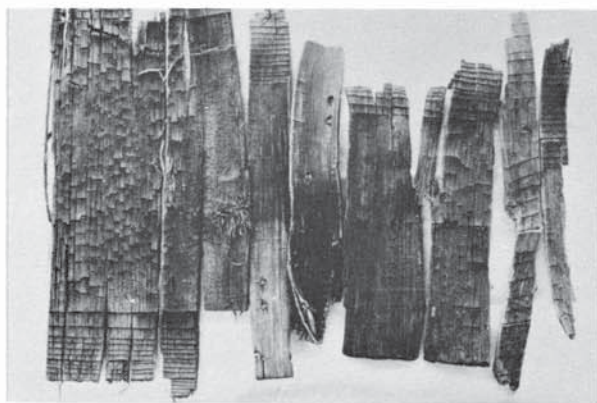


布目瓦密集地地層

寺野遺跡



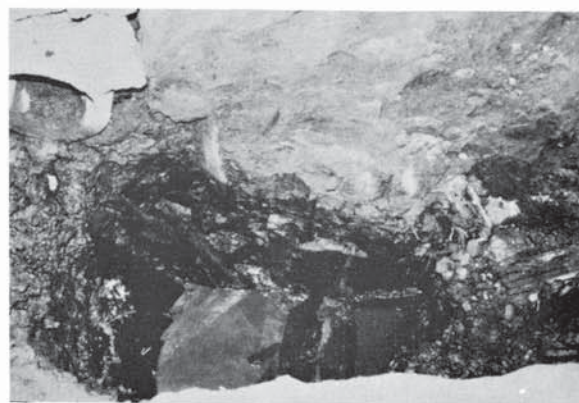
自然石群



B井戸 井戸枠



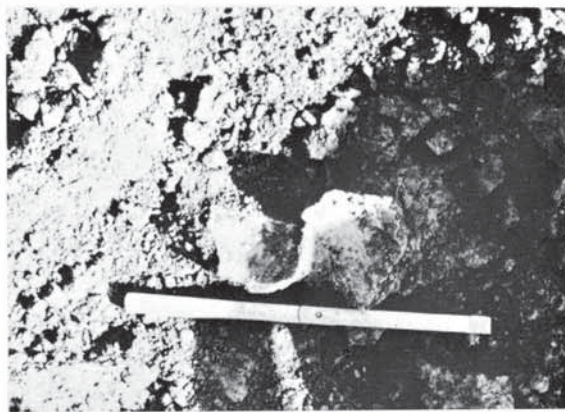
遺物出土状態(④地点)



A井戸(方形)遺構小井戸枠

寺野遺跡

図版第 3

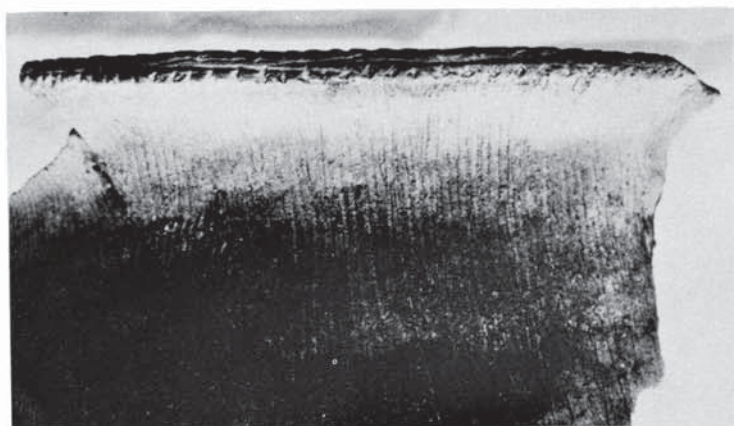
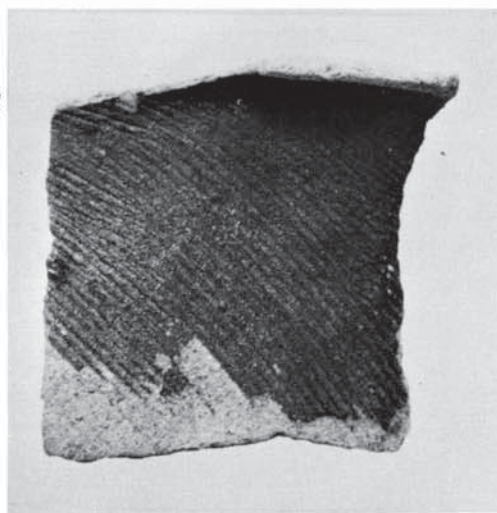


寺野遺跡遺物出土状態(④地点)

1



2



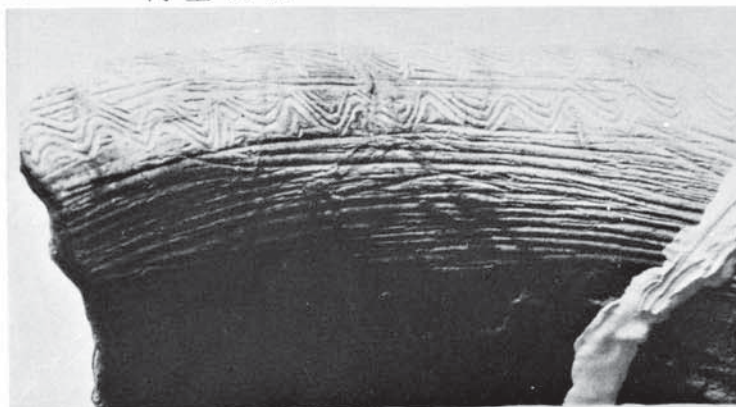
口縁部外面

3



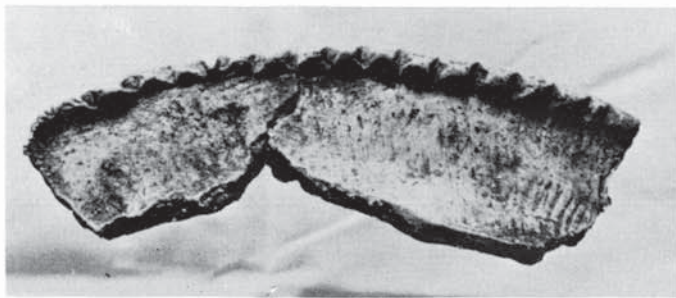
3

同上内面

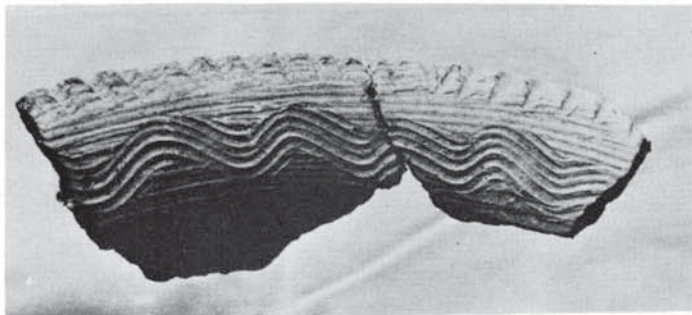


寺野遺跡出土弥生中期 甕

1



2



3



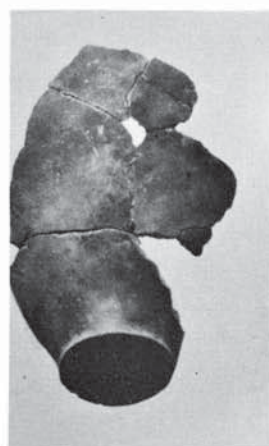
4



5



6

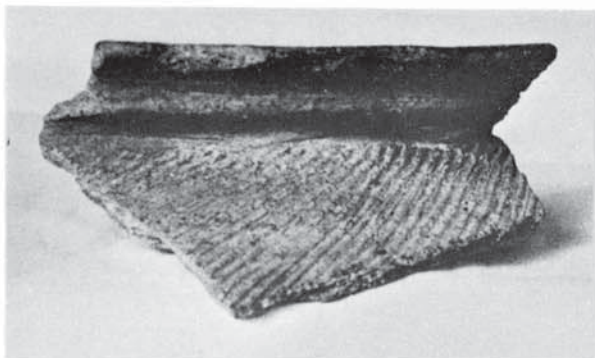


7

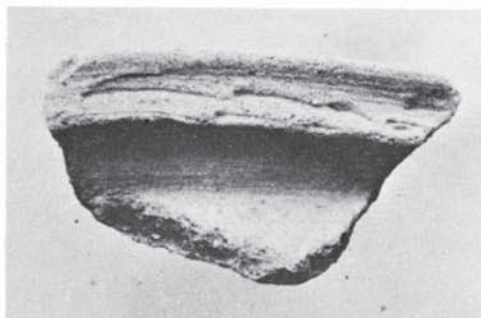


寺野遺跡出土弥生中期 1～3. 甕 4～6. 壺 7. 平底・中空脚台

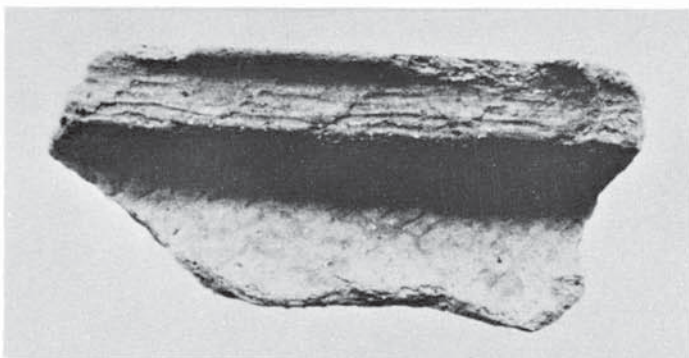
1



5



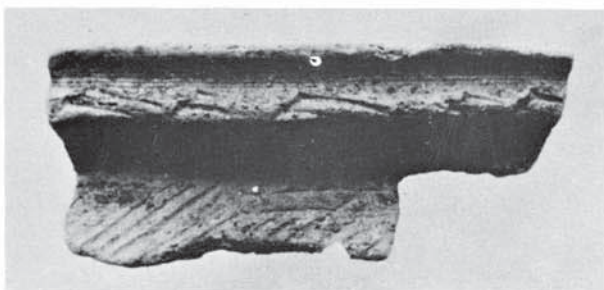
2



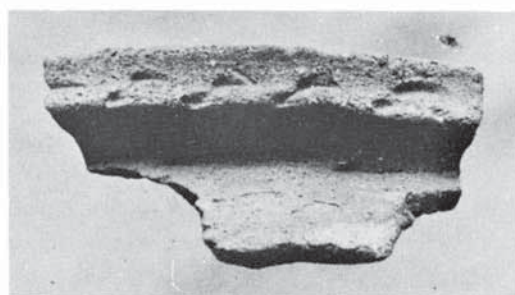
6



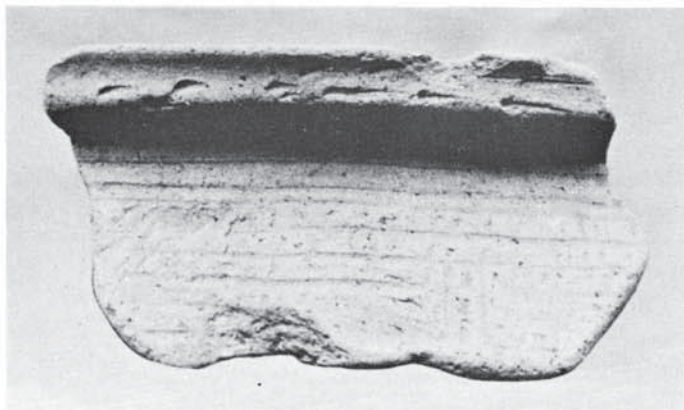
3



7



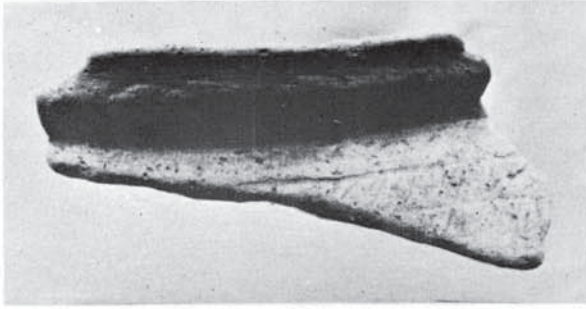
4



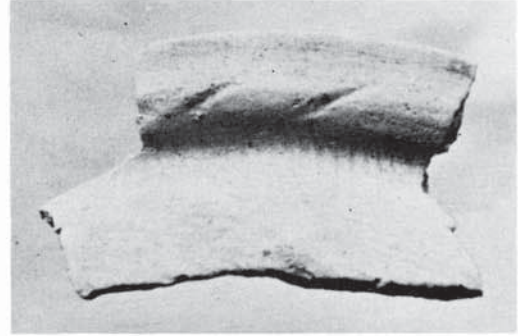
8



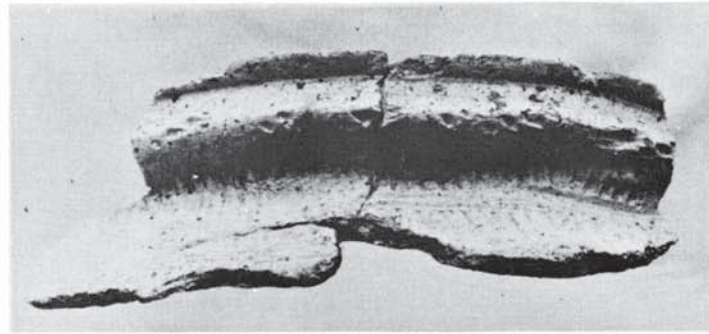
寺野遺跡出土弥生後期 甕口縁部(S字状口縁)



1



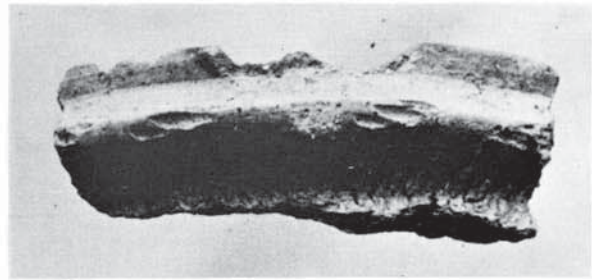
2



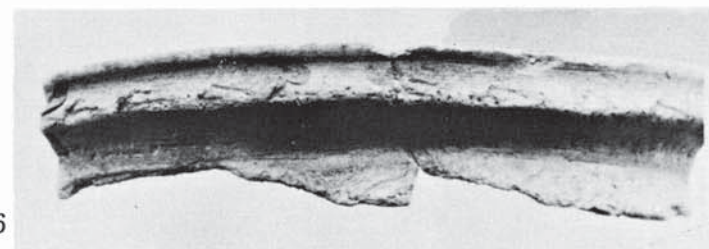
3



4



5



6

寺野遺跡出土弥生後期 甕口縁部(S字状口縁)



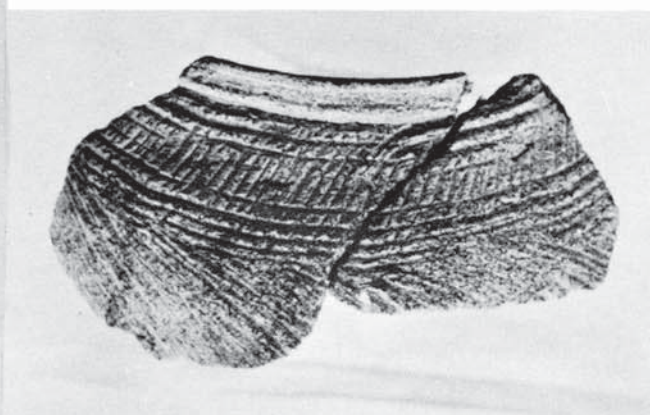
1



2



3



4

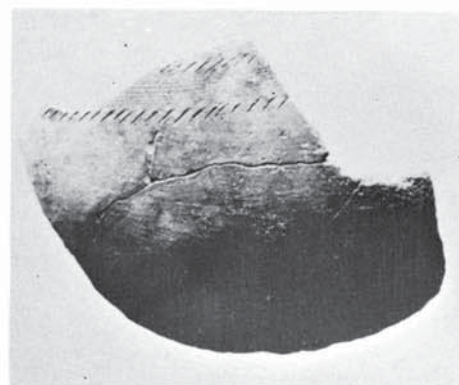
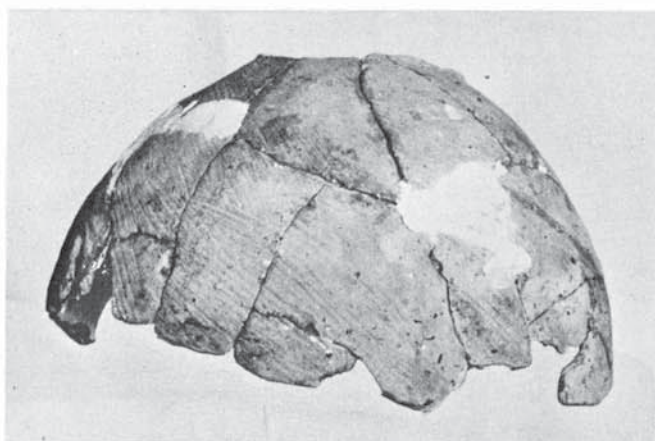


5



6

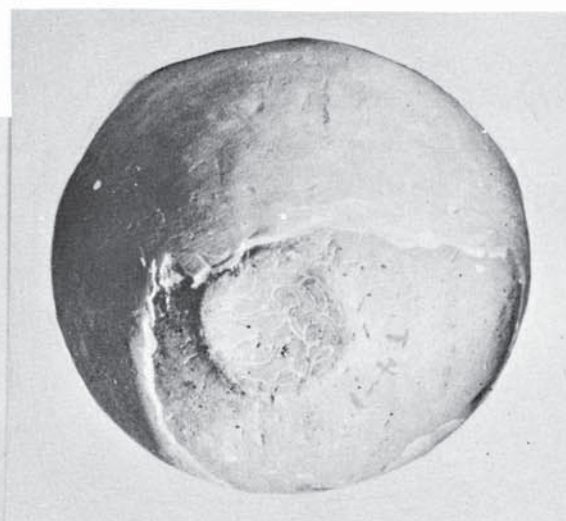
寺野遺跡出土弥生後期 1～4. 甕(S字状口縁)胴部 5・6. 長頸壺



2



5



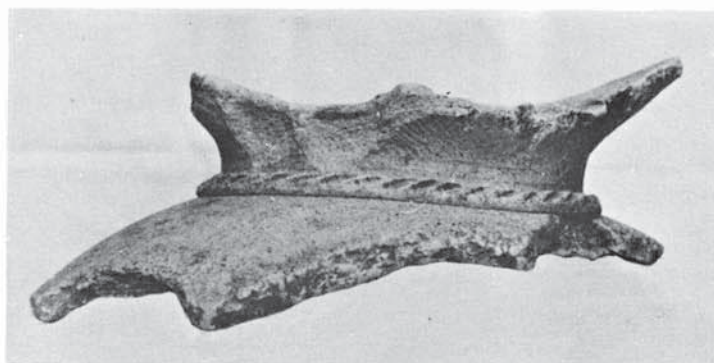
平底に原始画あり

6

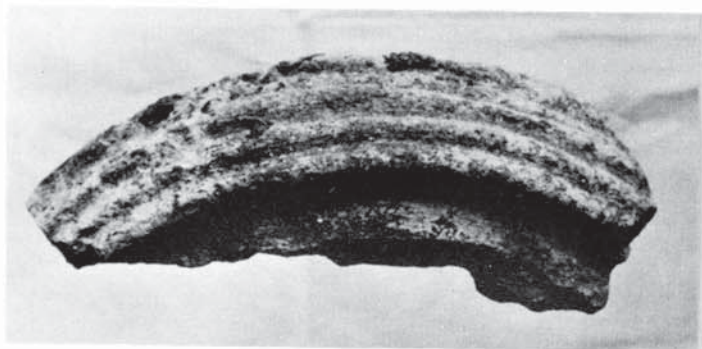


下腹部に原始画らしきものあり

3



寺野遺跡出土 弥生後期 1～4. 壺 5・6. 小形壺

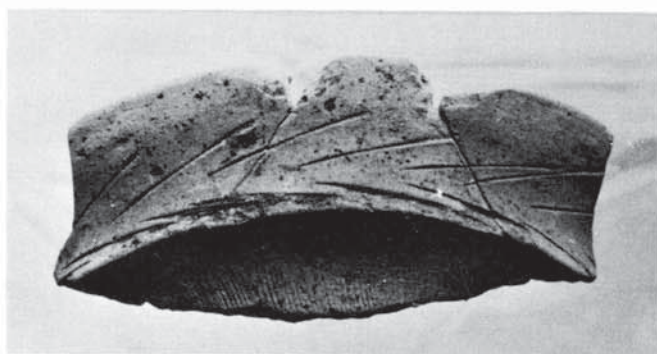


1

表



裏



2

表



裏

3

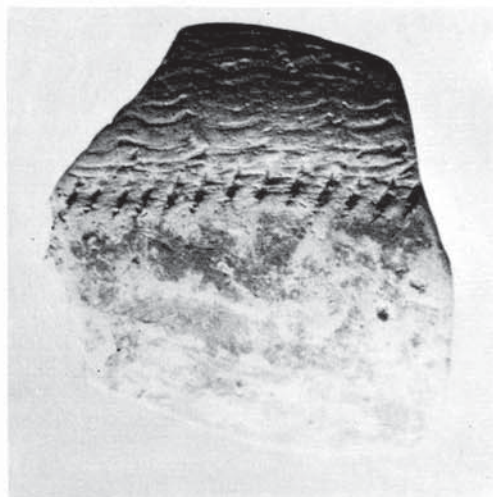


寺野遺跡出土 弥生後期 広口壺

1



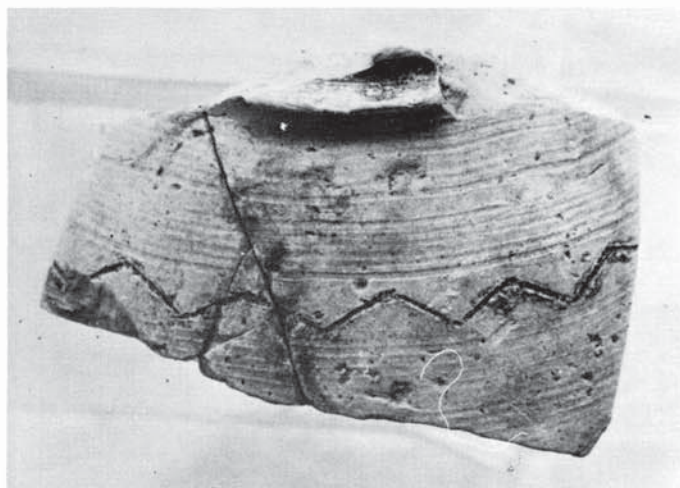
4



2



5



3



6



寺野遺跡出土 弥生後期 壺(丹彩)



1



4



2



5



3

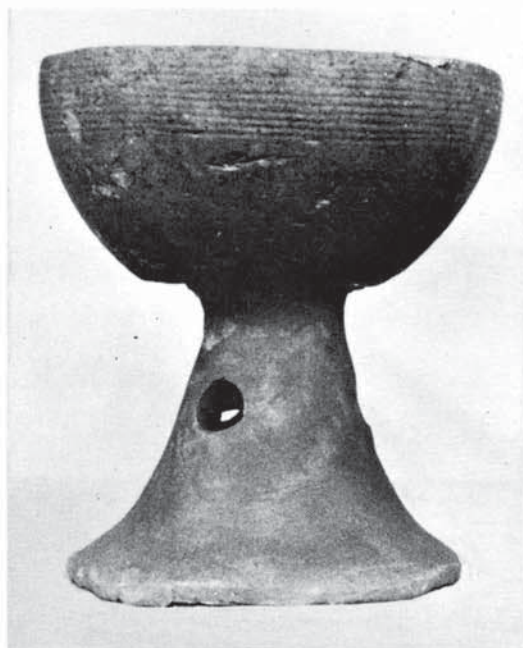


6

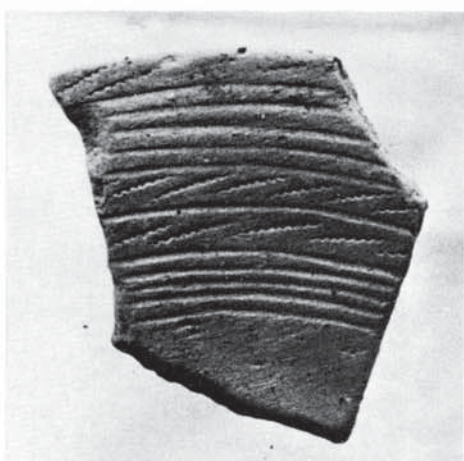
寺野遺跡出土 弥生後期 高杯



1



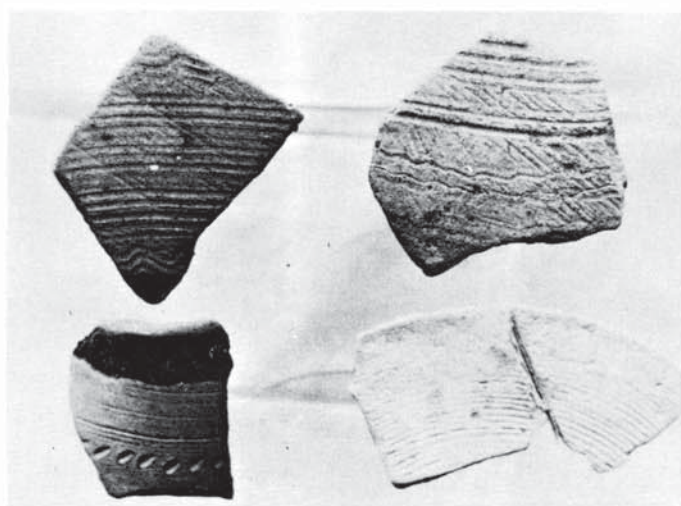
2



4

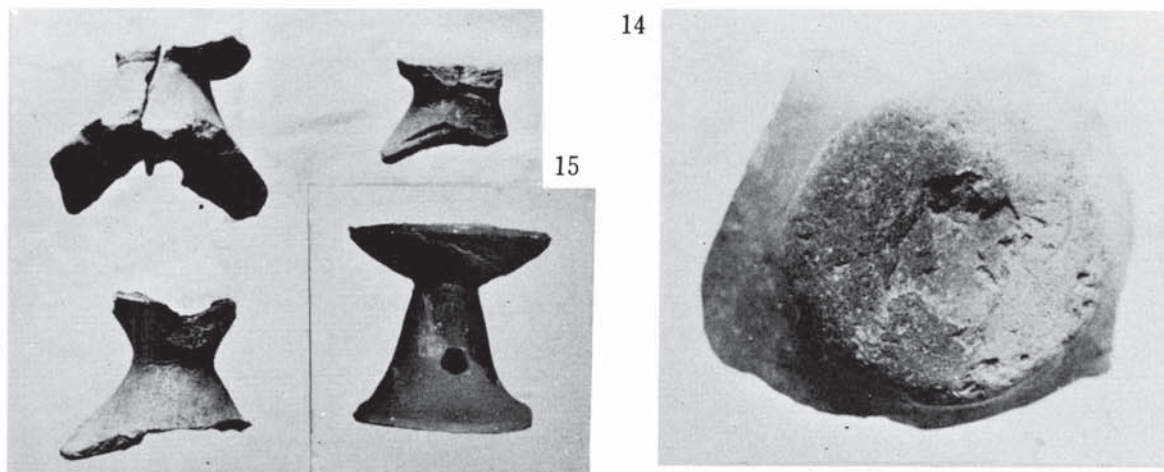


3

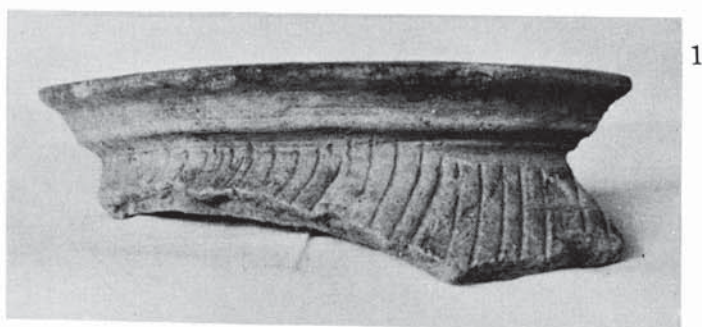


5

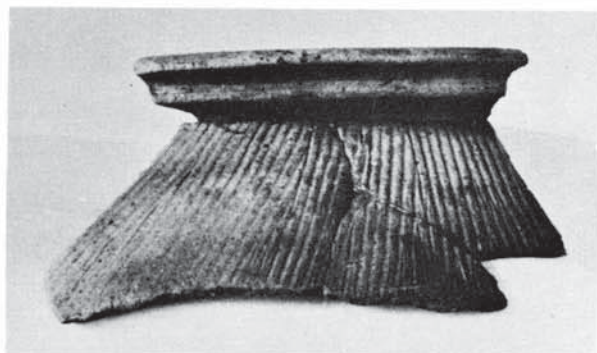
寺野遺跡出土 弥生後期 1. 高杯 2・3. 小形高杯 4・5. 櫛目文



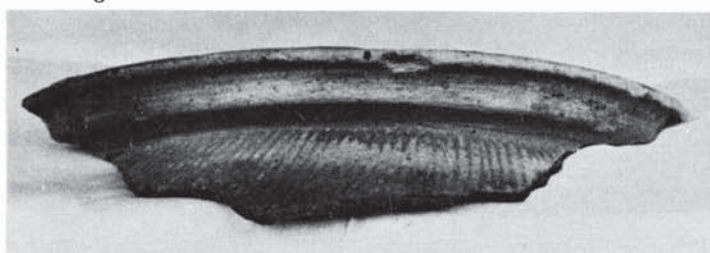
寺野遺跡出土 弥生後期 14. 平底(靱痕あり) 15. 器台



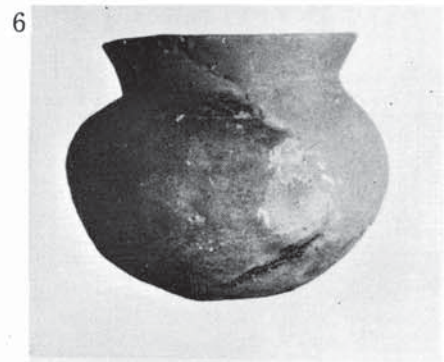
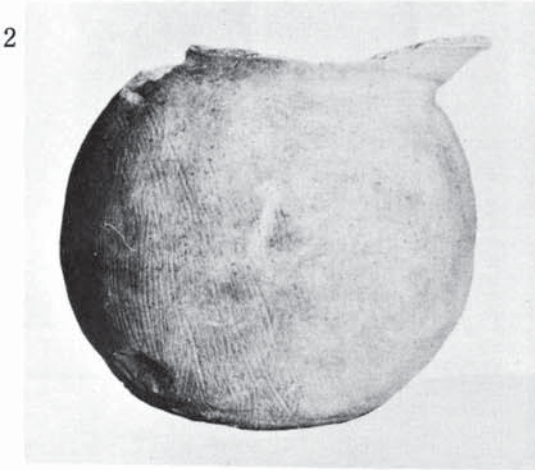
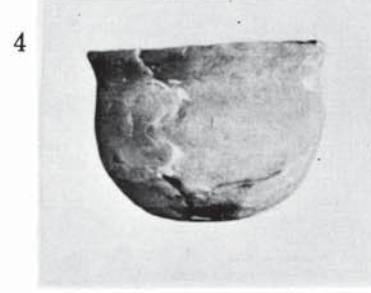
2



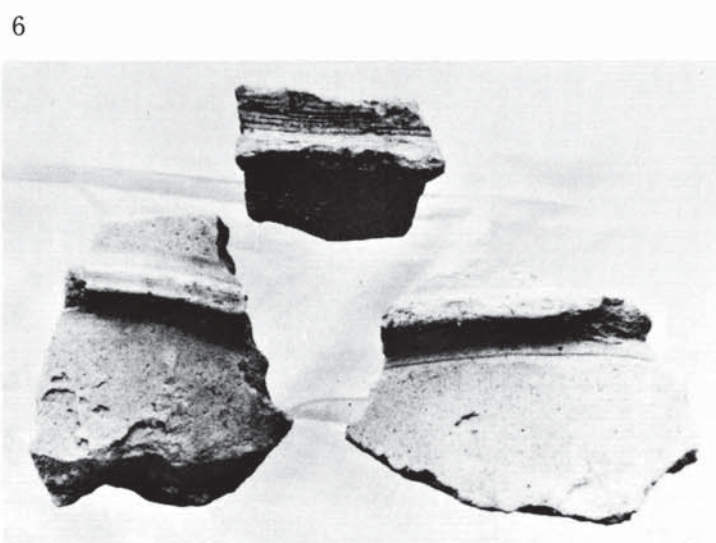
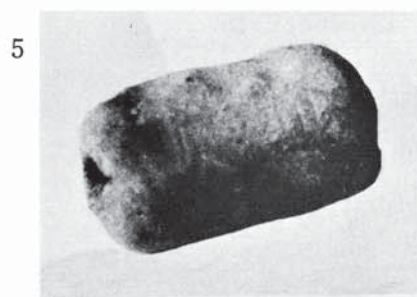
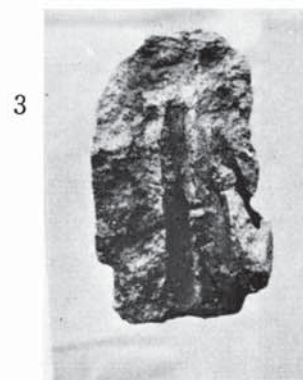
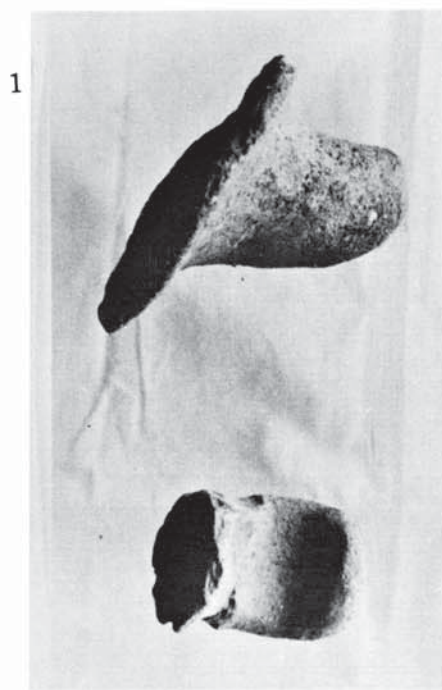
3



寺野遺跡出土 土師器 1～3. 甕(S字状口縁)



寺野遺跡出土 土師器 1・2. 甕 4～6. 小形壺 3. 高杯 7. 小形高杯



寺野遺跡出土 土師質 1. 把手 2. 角形土器脚部 3~5. 土錘 6. 埴輪



寺野遺跡 須恵器 1・2. 高杯 3. 台付蓋杯 4. 甕 5. 長頸壺



1

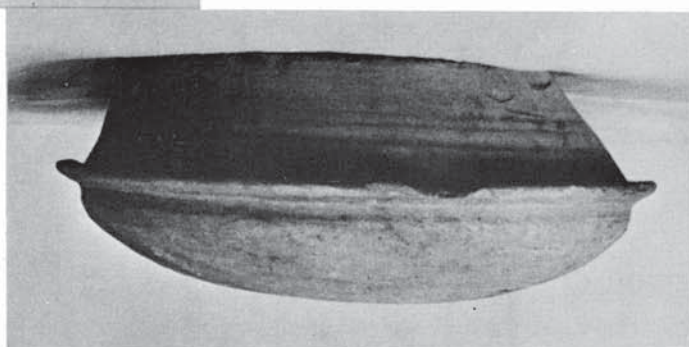


2



3

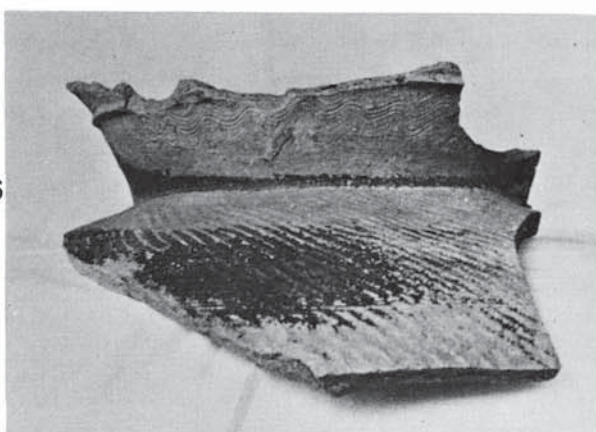
4



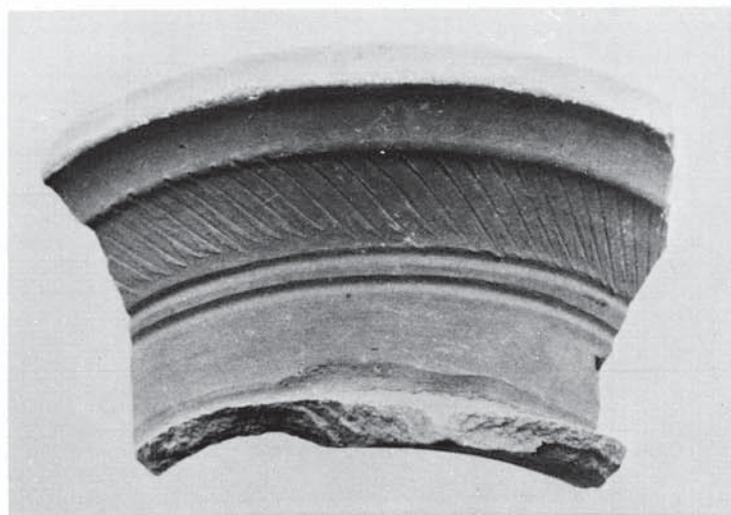
5



6



寺野遺跡出土 須恵器 1～4. 蓋杯 5・6 壺

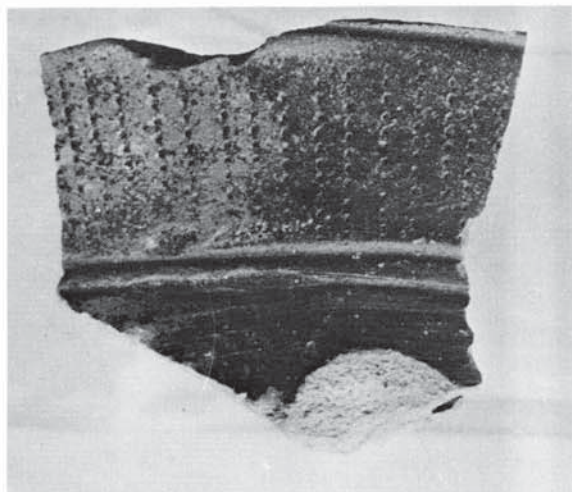


1

2



3



4

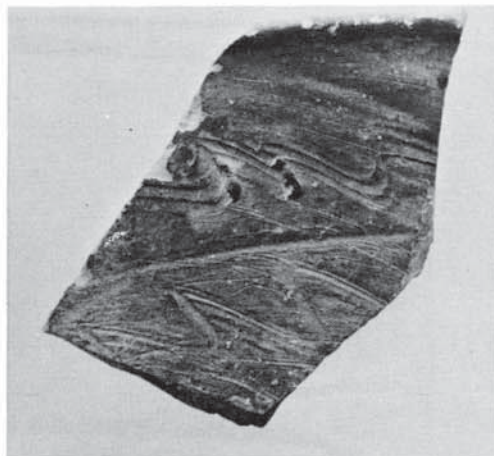


寺野遺跡出土 須恵器 壺

2



1



3



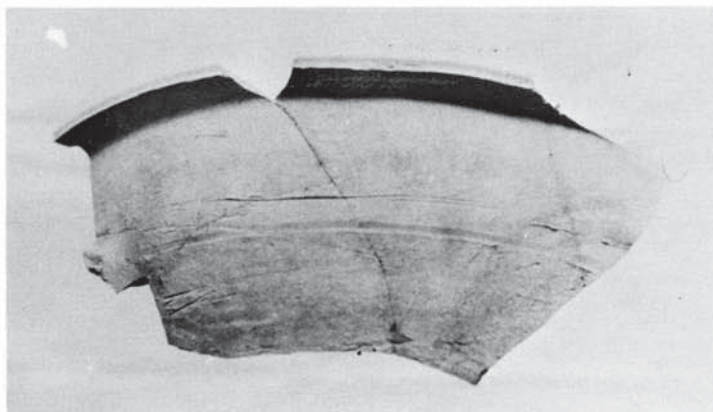
5



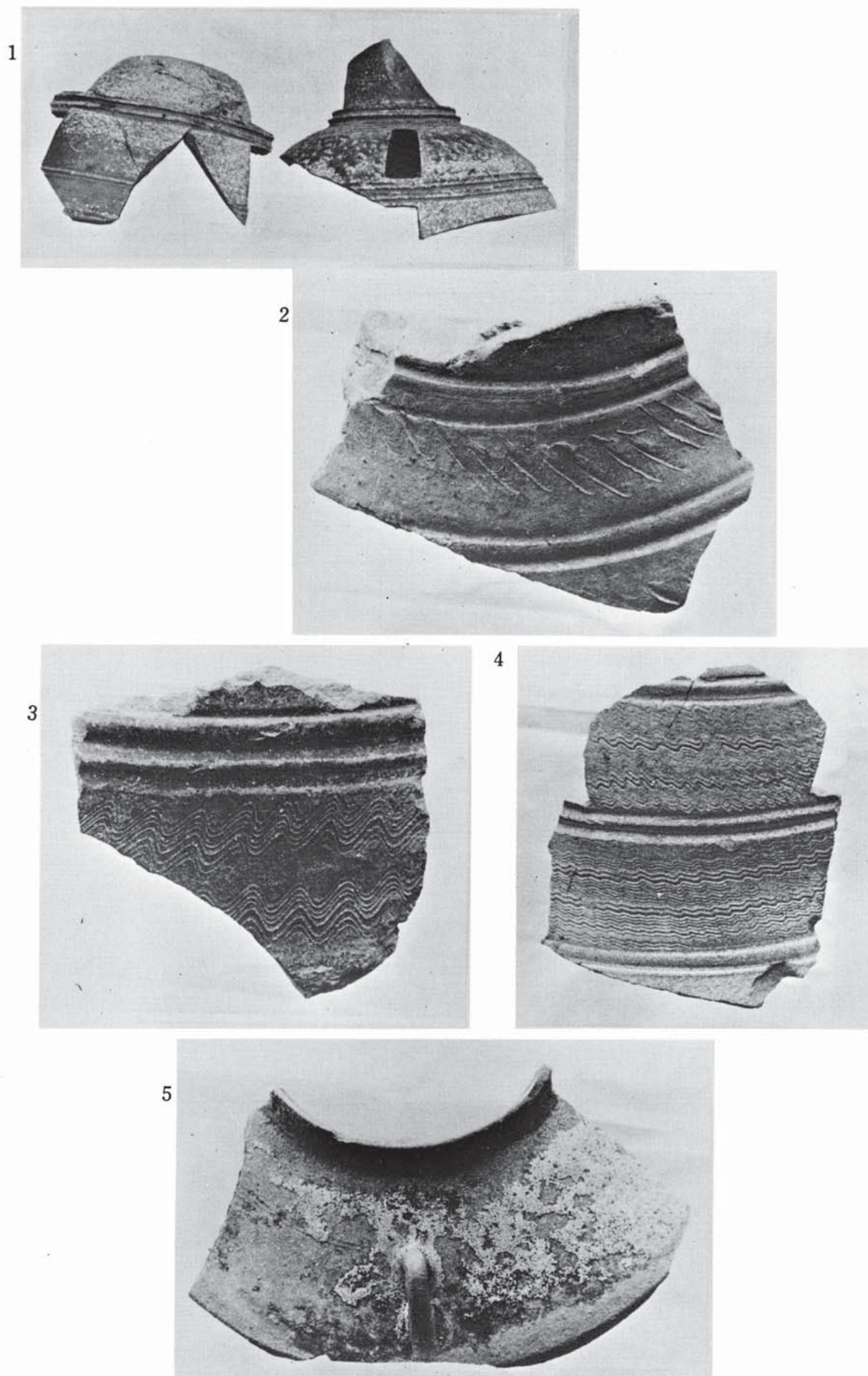
4



6



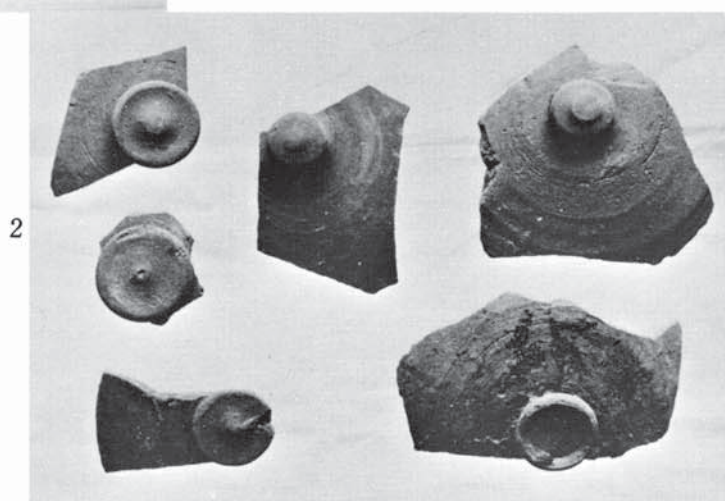
寺野遺跡出土 須恵器 1. 甕 2～4. 平瓶(平底の木葉圧痕) 5・6. 甕



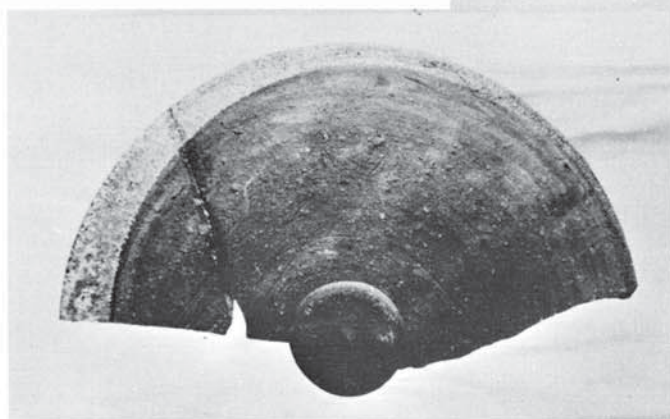
寺野遺跡出土 須恵器 1～4. 裝飾付器台 5. 三耳壺



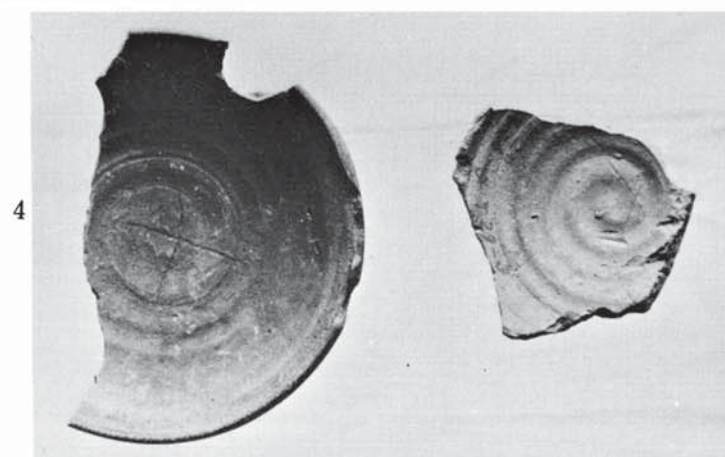
1



2

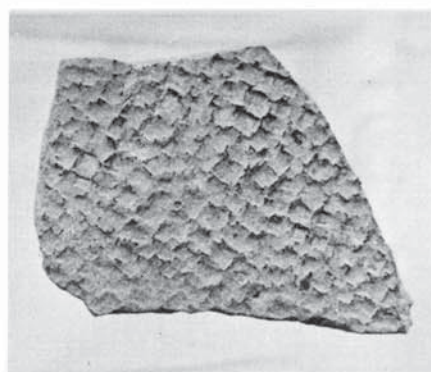
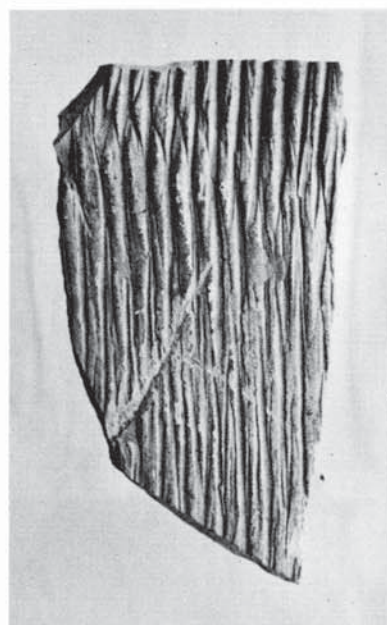
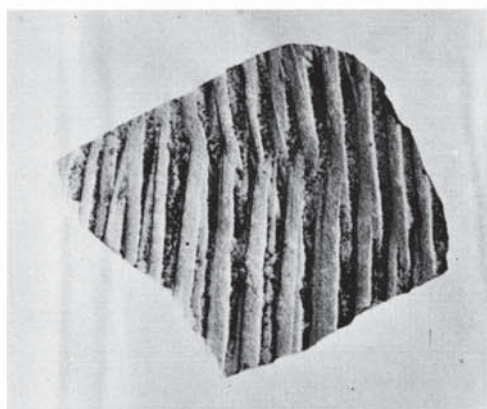
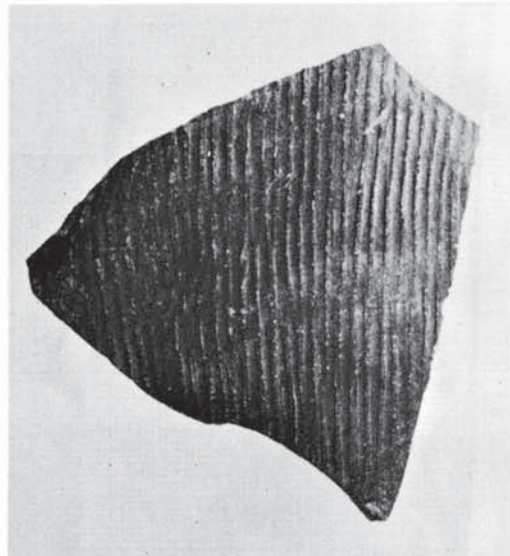
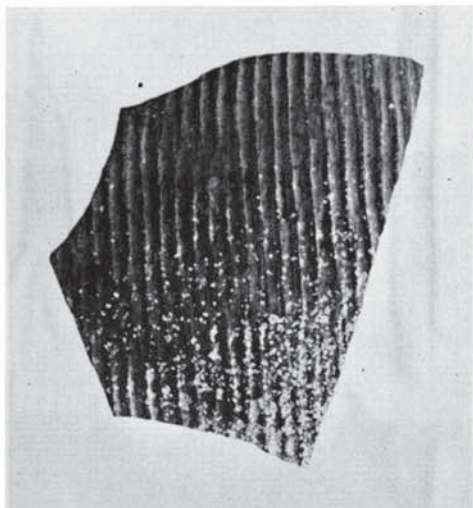


3



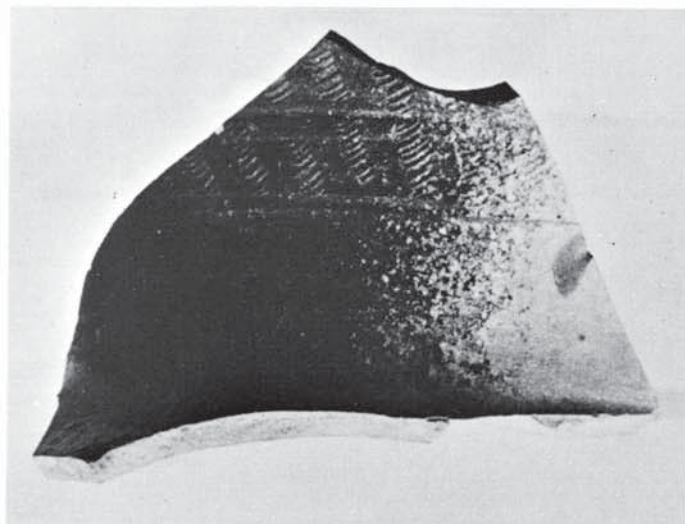
4

寺野遺跡出土 須恵器 1~4.有鈕蓋



寺野遺跡出土 須恵器 叩文

1



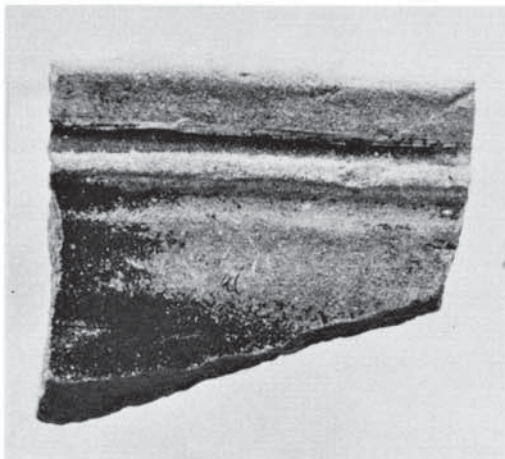
2



5



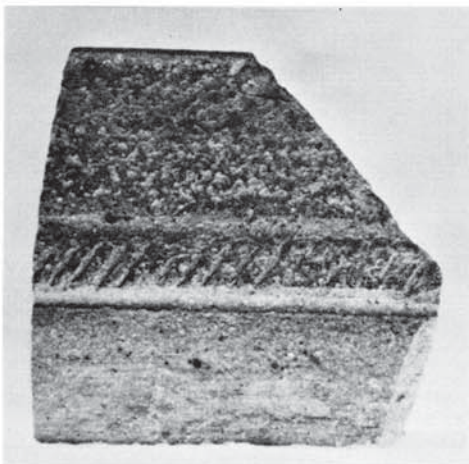
3



6



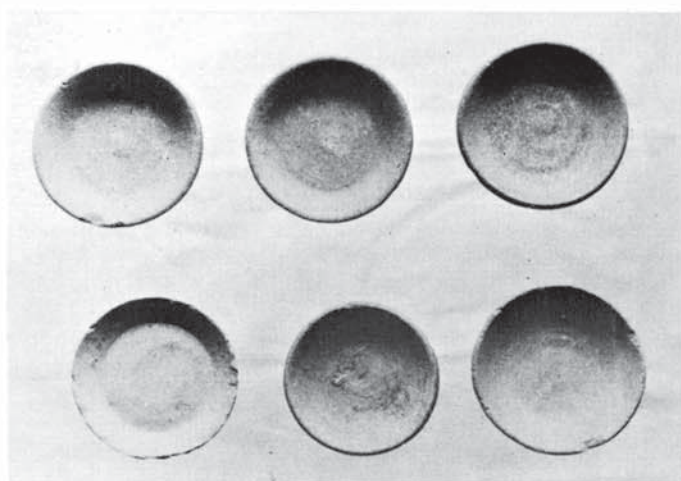
4



7



寺野遺跡出土 無釉陶器 1・2. 壺 3・4. 甕 5～7. 山杯



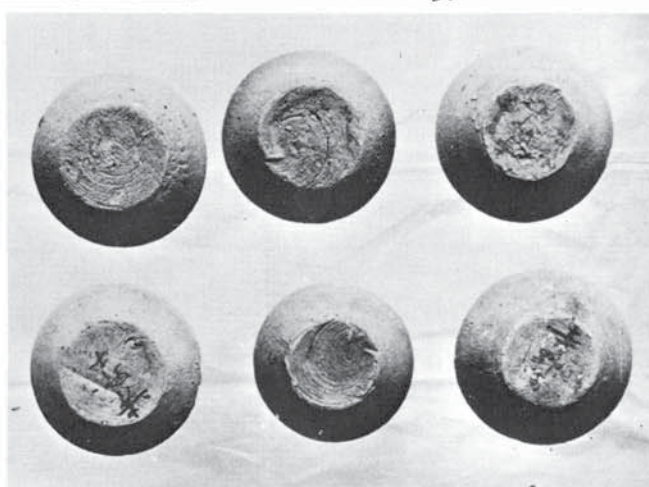
1

裏

2



平底墨書



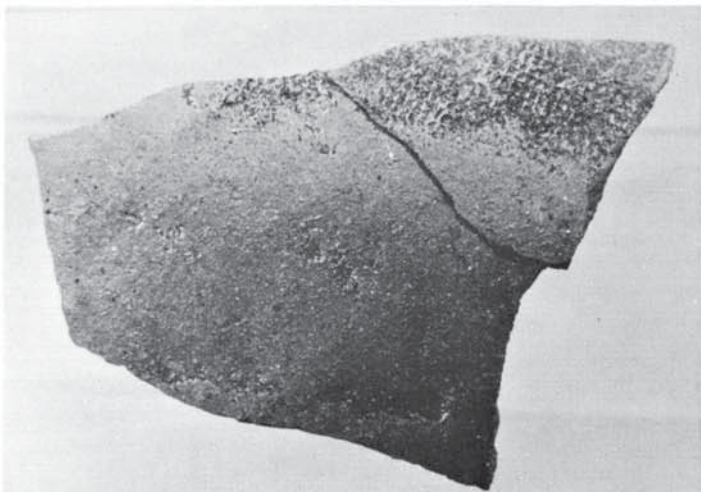
3

4

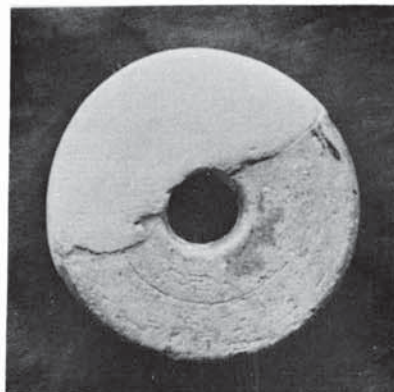


寺野遺跡出土 1・2. 無釉陶器小杯 3・4. 常滑焼甕

1



6



2



3



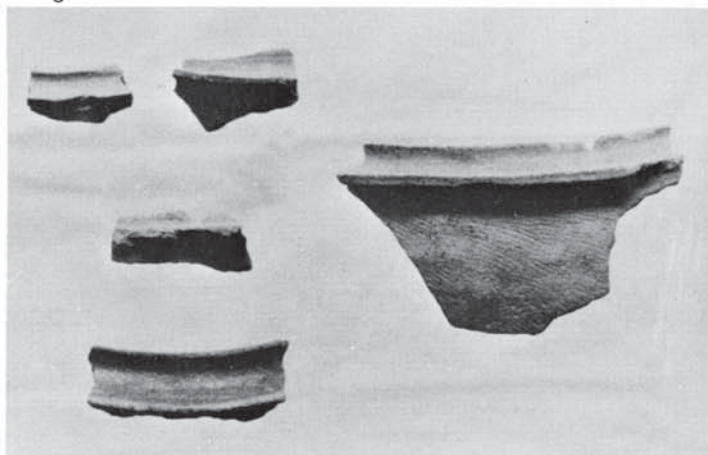
4



7



5



寺野遺跡出土 1・2. 常滑焼甕 3～5. 土師質 鍋・釜 6. 陶製紡錘車 7. 陶器おろし皿

1



2



3



4



5



寺野遺跡出土 1・2. 鏡瓦 3・4. 砥石 5. 鉄鋳

2. 宇 治 町

旭羊毛構内遺跡



宇治町旭羊毛構内遺跡全景

第 1 章 位置及発見の動機

津島市宇治町、旭羊毛工業株式会社津島工場では構内敷地になっている宇治町字中新田及字古杵に渉る、もと田圃の土地約10,000平方メートルの整地にあたり、地盛の表土に充てるために敷地内に、巾約4～5m、深さ約2m程度の溝を数条、パワーシャベルで掘上げる作業を行なった。この工事に際し各地点から夥しい貝殻や、土器の破片などが混る事に気付いた会社当局は、早速津島市教育委員会へ通報せられ、これが調査を文化財専門委員へ依頼された。

第 2 章 調 査 経 過

昭和39年9月17日、津島市教育委員会教育長初め係員・文化財専門委員等は現地に出向き、既に旭羊毛工場の事務所に保管してある表面採集による土器破片・獣歯・鉄製品等を調査の上なお構内の工事現場から若干の土器片・鉄製品等を採集した。

ついで9月21日 委員は単独で終日にわたり現場を調査、土質の観察と土器片の表土採集を行なった。(図版第1)

第 3 章 遺 跡 の 様 相

遺跡は国道名古屋津島線の道路から約 300m 北へ入り、日光川東堤防に沿ったもと田圃で、今は各所に真菰・葦等が自生している低湿地である。

現場は数条の溝を掘上げた堆土が高さ 4 ～ 6 m 位にも及び、堆土の表面は概ね白い粘土でツルハシでなければ容易に砕き得ない位に固く締り、その所々に黒褐色土又は貝の混土層が表われている。採土溝には溢水が充満し、土層の調査等は勿論不可能であるが、凡その観察によると、約 30cm 前後の耕土に続いて褐色土層、黒土層が 40cm 前後あり、次はやや黒みを帯びた砂層から白色が強い、いわゆる基盤となっている粘土層と思われ、表土から粘土層迄は凡そ 1 m 前後と推定される。

又堆土の数ヶ所に小規模ながらシジミを主体としハマグリ・カキ等 2 枚貝の純貝層と、黒色土に混じた貝層が見られ、この貝層の部分からは殊更に土器片が多く出るところから推察して、たとえ小規模であっても、貝塚が存在したことは間違ない。その事は又ここの 5 ～ 6 cm 或いはそれ以上大形のハマグリの、ちょうど蝶番の部分が多く欠けているのは、肉を取出す場合、こうして蝶番の部分を叩き潰せば、容易に中身を取り出し得られる筈であるから、この貝は食用の滓と想像されるので、この貝層は自然の混入ではなく、人為的のものと確信するものである。

(図版第 1)

第 4 章 遺 物 (1) 須 恵 器

若干出土した須恵器はすべて小片で、図示する程のものはなかったが、破片によって推察すると、蓋杯又は皿類と思われる 3～5mm 程の薄手の破片と、7～10mm 程の甕あるいは壺類と思われる厚手の破片とがある。厚手の破片には、普通見られるところの圧痕が施されるものも混っている。

(2) 無釉陶器

●片口・鉢（第 1 図・図版第 1）

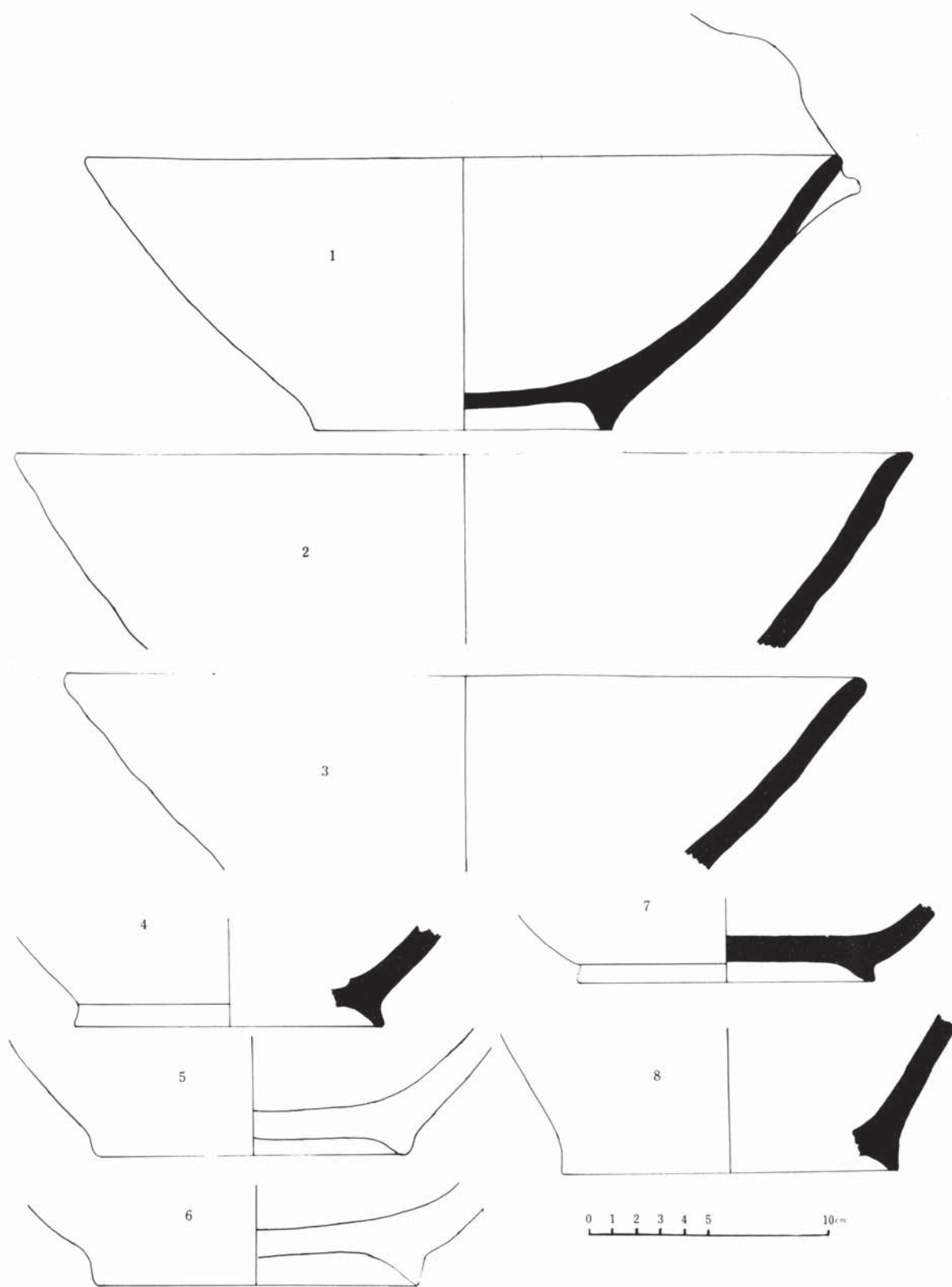
1：口径 32cm、高さ 11.5cm、鉢形でシッカリした高台が付く淡灰色で粒子細かく非常に焼締りあり、素文で注口 1 個がついている。

全体に亘り焼成時の灰釉がかかり、微光沢を帯びる。（第 1 図 1・図版第 1）

2：口径 38cm と推定される鉢形の口頸部のみの破片で 1 と同形の片口ではなかろうか。淡灰色で胎土は粒子細かく、焼成はやや悪い。（第 1 図 2）

3：口径 34cm と推定される鉢形土器の口頸部破片で、淡いセメント色、胎土密で焼成堅緻、一部分灰釉がかかっている。（第 1 図 3）

4～8 鉢又は片口類の底の破片のみで、焼成は何れも堅緻、概ね淡いセメント色を呈しているが、中で 5 の内外面と 7 の内面には煤けた痕があり、煮沸具に用いたものであろうか。（第 1 図 4～8）



第1図 旭羊毛構内遺跡出土遺物 無釉陶器 片口類

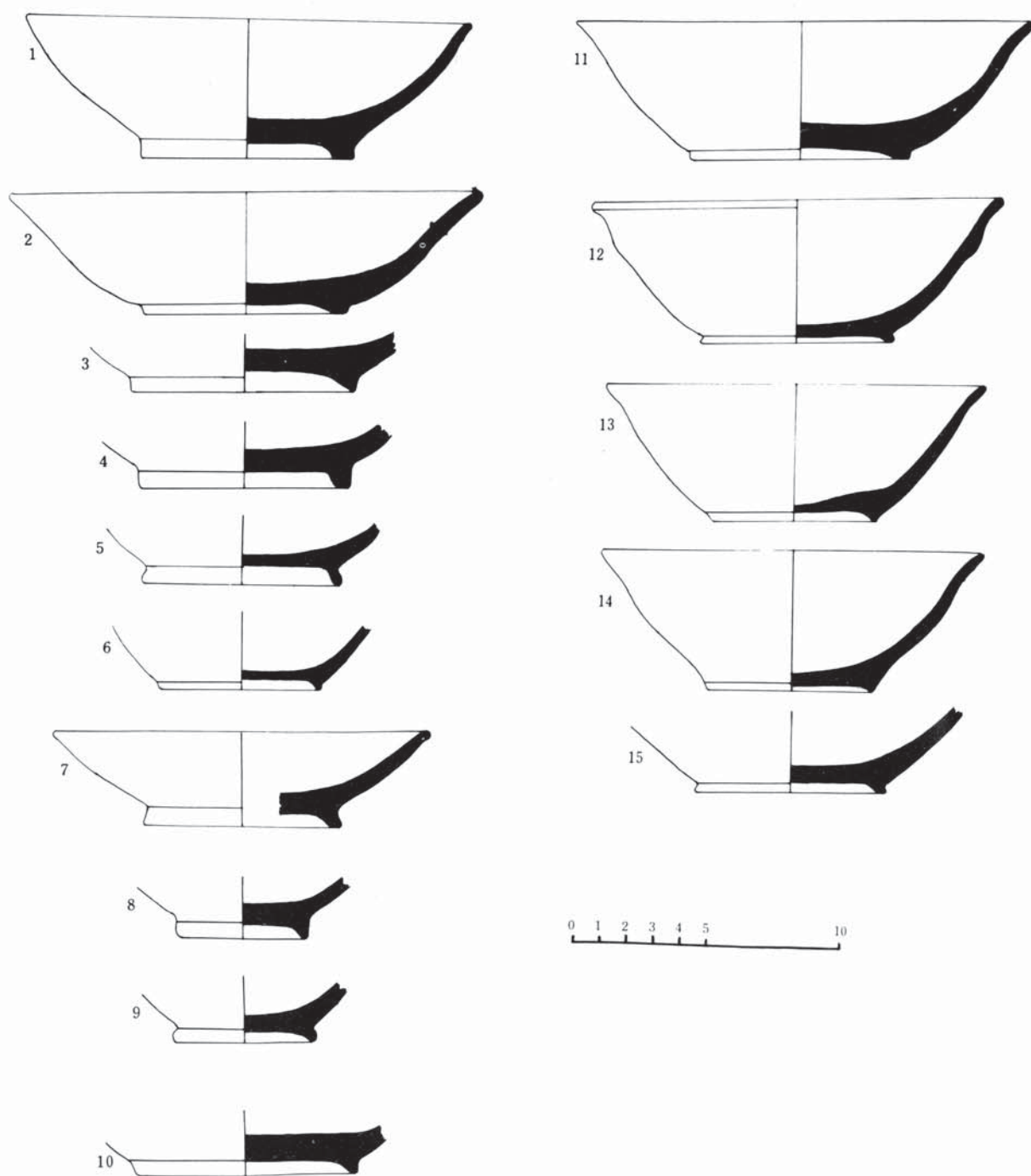
(3) 無釉陶器

● 皿 (第2図)

- 1 : 口径17cm、高さ 5 cm、淡いセメント色、胎土密で焼成堅緻、端正な高台がつく。内面の一部に真黒の異物が附着している。(第2図1)
- 2 : 口径18cm、高さ 4.5cm、淡いセメント色、轆轤仕上美しく、胎土密で焼成堅緻、端正なつけ高台がつく。外面口頸部及内面口縁から底へかけて、自然釉がかかり滑沢がある。(第2図2)
- 3・4 : 底部破片で1、2程度の口径を有する碗の破片と思われる。4の底は糸切になっているから高台は後から貼付けたものと思われる。(第2図3・4)
- 5・6 : やや小形の碗の底と思われる。両者ともにやや赤味を帯びた明るい白色で、胎土密焼成もよい。5はつけ高台になっている。(第2図5・6)
- 7 : 破片であるが、推定の口径14.3cm、高さ 3.5cm、淡灰色で胎土密、焼成堅緻で端正な高台がつく、内面下底及外面の底を除き、器の内外面へ灰釉が施してあり、平安期と思われる。(第2図7)
- 8・9 : 小形の碗の破片と思われる。器胎の色及焼成等は前者同様で、特異な点は見当らない。(第2図8・9)
- 10 : 底部の破片であるが、底の内面が扁平なところから見て、盤でないかと思われる。淡灰色焼成堅緻、端正な高台がつく。(第2図10)

● 山 杯 (第2図)

- 11 : 口径17cm、高さ 5 cm、暗灰色を帯び胎土に砂粒まじる。焼成堅緻で底は糸切になり、貼付けた低い高台には靱痕がつく。(第2図11)
- 12 : 口径15cm、高さ 5.3cm、暗灰色で焼成堅緻、轆轤仕上げで薄手に造られる。底は糸切になり、低く粗雑な貼付高台で靱痕がつく、内面が黒く煤けていて用途の判断に苦しむ。(第2図12)
- 13 : 口径14cm、高さ 5 cm、暗灰色で器肌あらく極めて粗雑な器である。底は糸切になり、貼付けた低い高台は中ば剥落している。(第2図13)
- 14 : 口径14cm、高さ 5.1cm、暗灰色で胎土に砂粒がまじるが、轆轤で薄手に手軽く仕上げられる。低い高台は粗雑で靱痕がつく、焼成は堅緻で、内外面自然釉がかかって滑沢があり、内面は黒く煤けている。(第2図14)
- 15 : 底部破片で、やや明るい灰色を帯び、胎土は密で焼成堅緻、貼付けた低い高台には靱痕がつく。(第2図15)



第2図 旭羊毛遺跡出土遺物 無釉陶器 1~10. 盤 11~15. 山杯

(4) 常滑焼

●甕（第3図）

- 1：口径43.3cmの口頸部破片で、広口大甕の口頸と思われる。大きく外反する口縁端の内面5mmを薄くし、段をつけて口頸へ移る。胎土密で焼成堅緻、胎土は淡いセメント色で須恵質をなし、内外表面は暗褐色で内面上部及外面には自然釉がかかって光沢がある。

（第3図1）

- 2～6：いわゆる叩文のある破片である。いずれも普通見る所の肩の張る大甕と思われるが、2・3は肩部、4は下腹部、5・6は胴部と見られる。胎土はいずれも密で、淡いセメント色をなし焼成は堅緻である。2・5は外面淡い暗緑色で、2は更に暗緑色のタレ葉が見られる。3・4・6はいずれも暗褐色で、4には同じく暗緑色のタレ葉が見られる。叩文は3には上下2段の並列が見られるが、4の下腹部に1段見られるからこれにも上下に叩文が施されていたと思う。（第3図2～6）

- 7：下腹部の破片で平底がつく、胎土は密で淡いセメント色、外面は暗褐色を帯び、焼成は堅緻である。手捏ねで作られ内外面整形の指紋がつく他に、外面下腹から底に移る接点には、筥による整形痕がつく。（第3図7）

- 8：同じく下胴の破片で、或いは壺の下胴かと思われる胎土と内外面ともに暗褐色、手捏ねの製作で、内面は水平に整形した痕がある。底は低い高台がついている。（第3図8）

- 9：大形の甕の底部破片で、胎土は淡いセメント色、外面は暗褐色で焼成は堅緻、小片のため詳細は判らない。（第2図9）

(5) 土師質土器

●土 鍾（第4図・図版第1）

土鍾は普通見る所の卵形と、やや長卵形で特異な点はない。完形品1個の他は2個共破片である。第4図6の長軸は4.8cm、太さ2.7cm、ある。7・8は破損品。（第4図6～8・図版第1）



第3図 旭羊毛構内遺跡出土遺物 常滑焼 甕

(6) 鉄製品・木製品・獣歯

●鉄製品（第4図・図版第1）

3個出土したが、いずれも甚だしく腐蝕しているので原形は判らない。

- 3：長さ10.2cm、平面の最大巾 1.7cmで、上端 5mmは折曲る。厚さは最腹部で 7mmあり、下半 5cmは 2mm厚で、且つ下端は尖っている。平面の上下 2ヶ所に木片が付着しているので、全体の形や木片付着の状態等から見て、船釘と思われる。（第4図3・図版第1）
- 4：長さ 8.4cmで、内 4.3cm程は 7mm前後の棒状を呈し、余は太さ 3mm前後と急激に細くなり、その先端は尖っていたらしい。全体の形から見て、これも釘の一種ではなかろうか。（第4図4・図版第1）

- 5：残存部の平面の長さ 7.5cm、最大径は 3cmで、徐々に狭くなり先端は尖っている。側面の厚さ 4mm前後で、甚だ扁平である。平面の一部に 2ヶ所程貝片が付着していて、水底にあった如くである。

平面の形態と、側面の両端が尖っていることから見て、利器であったと思われる。

（第4図5・図版第1）

●木製品（第4図）

- 1：長さ60cm、平面広い方の巾凡そ 6.8×7.5cm、徐々に狭くなり、巾凡そ5.5cmとなる。厚さは板の広い部分が 2cmあり、徐々に薄くなり先端は尖っている。材質は槇と思われる割板で一部に刃物で加工したと思われる痕跡がある。

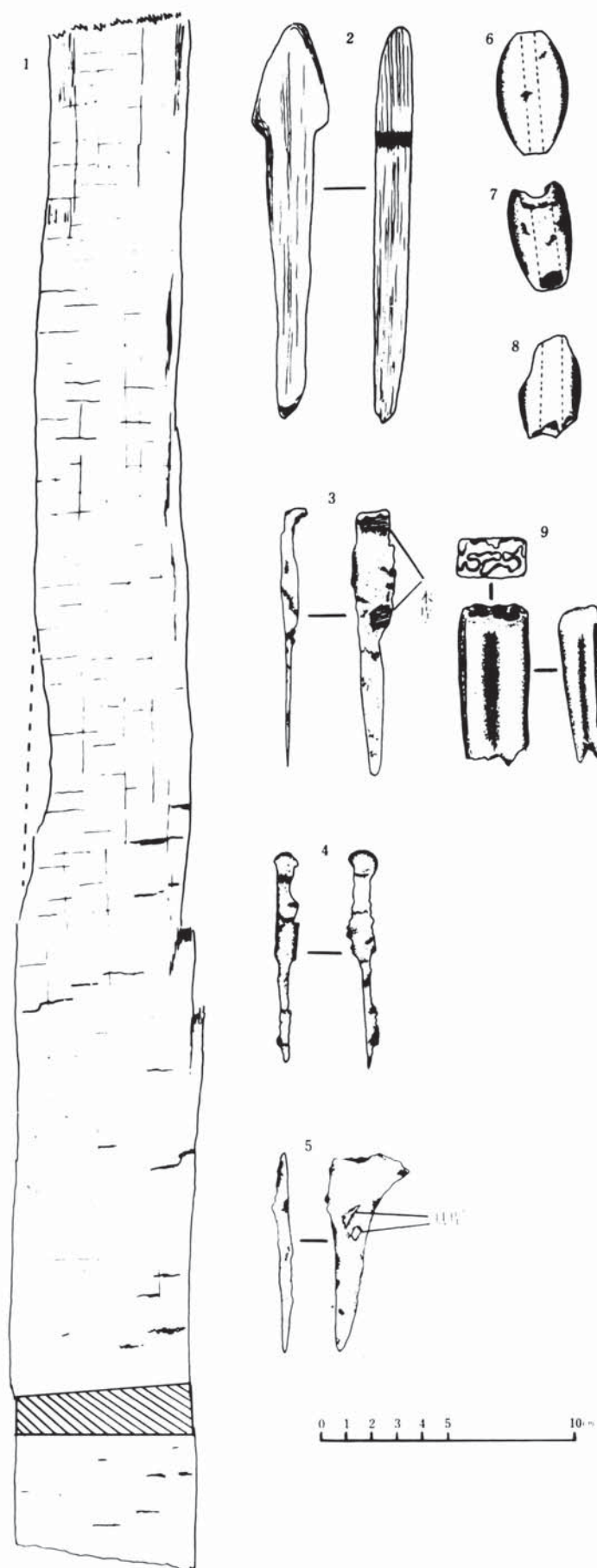
たゞ1枚きりの出土であるから、用途についての判断に苦しむが、形と大きさから見て寺野町遺跡の項で掲出したA井戸の竪板と酷似しているので、あるいはA井戸同様のものがあったものかと思われるが、又一つには登呂遺跡に見るような矢板の存在も考えられるが、何にいたせ1本きりでは何とも分別がつかかねる。（第4図1）

- 2：現存の総長15.5cm、頭部は長三角形で、最大巾 3cm、下部は恰も柄の状を呈し、巾は15cm内外で不整である。厚さは 1.3cm前後で、上下端はいずれも鈍角である。材質はマキ或いはヒノキかと思われる。人工に成ることは確かであるが、用途の程は判らない。

（第4図2）

●獣 歯（第4図・図版第1）

1個のみ採集した。端面2.5×1.5cmの角形で、長さ現存部で 6cmある。端面にはみみず状に珞瑯質が浮出し、全体黒ずんではいるが、原形がよく保たれている。馬の臼歯と判断される。（第4図9・図版第1）



第4図 旭羊毛構内遺跡出土遺物 1・2. 木器 3～5. 鉄器 6～8. 土錘 9. 獣歯

第 5 章 む す び

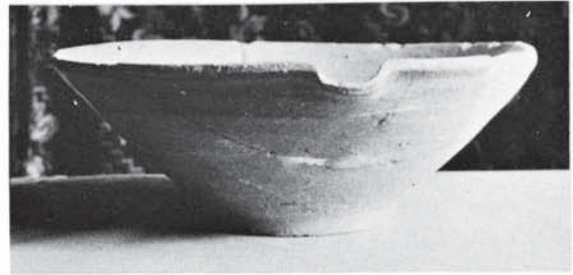
以上のように、本遺跡は低湿の沖積層に立地した住居遺跡である。即ち河岸或いは入江の岸に位し、農耕と共に主鹹性の貝類を採って、生活の糧としたものである。

遺物について観察すれば、凡そ須恵器を使用した、千数百年を上限とし、いわゆる行基焼を伴う鎌倉期が最も栄えたもののようであるが、近世初期以降の遺物は極めて乏しいもののである。もっとも、遺跡は巨大な機械力による掘鑿（くつさく）で、かなり下層の土壌が表面へかぶさり、かんじんの遺物包含層は下積になった結果、表面へ現われた遺物が少ないことにも原因していると思われる。

そののち本遺跡は掘鑿した溝を川砂で埋立て、堆土を均して整地の上、自動車の練習場となったが、この間再調査の機会もなく、すべて埋もれてしまったことは遺憾であった。



調査状況



無釉陶器 片口



混土貝殻



土錘・鉄製品・獣歯



鉄釘出土状態(ピース箱左)

津島市宇治町旭羊毛構内遺跡

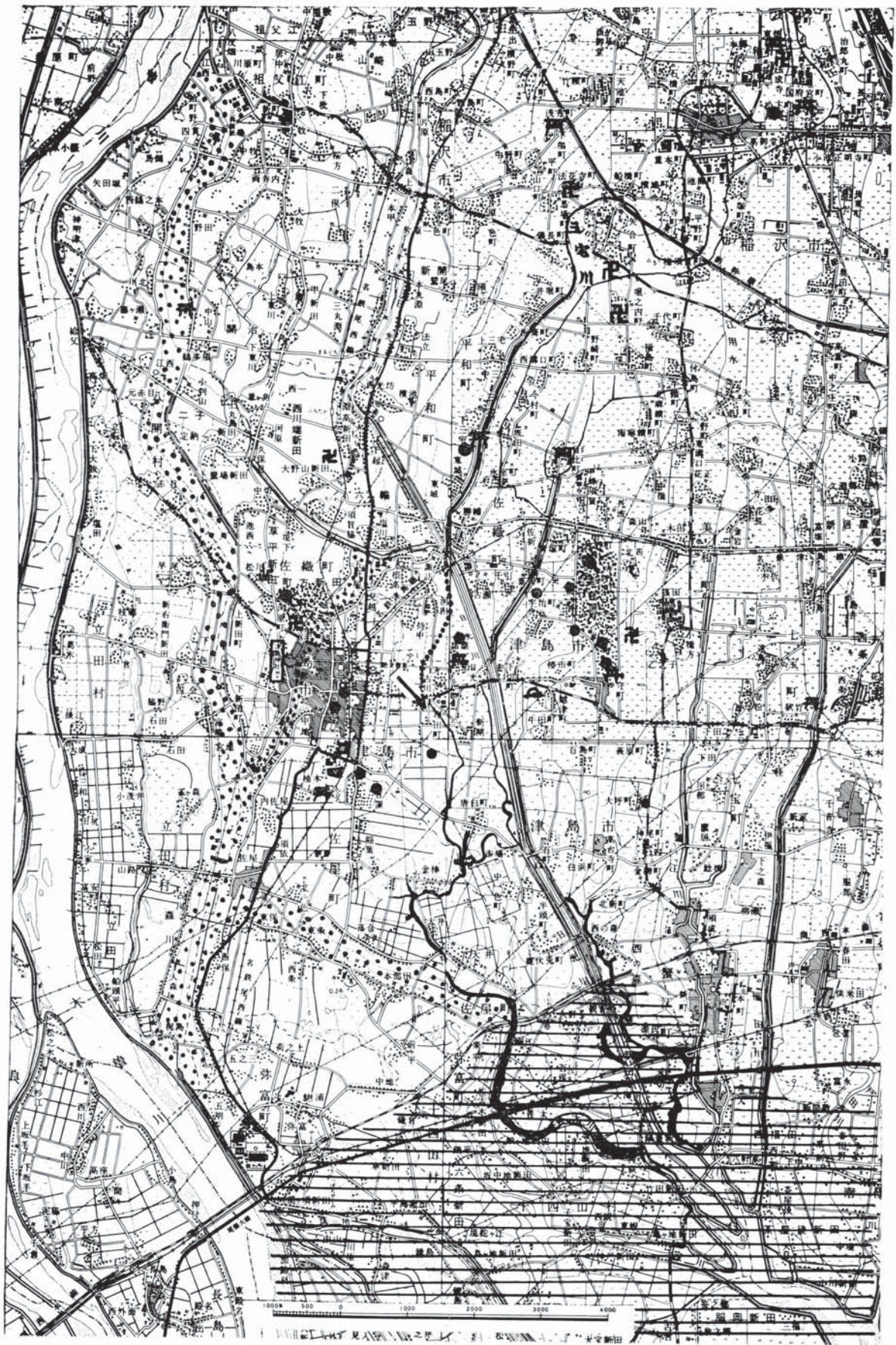
3. 埋 田 遺 跡

第 1 章 遺跡の発見と発掘

埋田遺跡（巻頭図版・第1図）の存在が世に知られたのは、そんなに古いことではなく、第2図右辺中央に見える乾田が、以前はそれに隣する畑と同様な高さを保つ畑地であったところ、昭和32年秋のころ、土を取って、今見るように約65cm切り下げたわけであるが、その際多くの弥生式以降の土器破片ならびに土錘などが出土した。ところが最近になって、付近が年月とともに、段々と住宅地化する実状に心を碎き、早く発掘調査をしなければ、いつかは必らず滅失のおそれがあるだろうと調査の機会を待っていたが、幸いにして昭和42年津島市史編纂の議がおこり、市史の資料として、早速その待望していた早期発掘の実現に努力したわけであった。

昭和43年度の調査事業として、それを取り上げるためには、ある程度の価値づけが必要であるというわけで、とりあえず遺跡の状態を確認するため、3月16日に小規模の試掘を試みることにしたが、その結果は、後章に述べる通り、全く思いがけなくも、緑釉皿・碗破片各1片等を出すに及んで、予想外の重大さに驚喜して、直ちに正規の手続きを踏んで、ある程度まとまった発掘調査を実施したのである。

遺跡は広大であり、またさらに後日隣接する地域の発掘を続行する機会に恵まれるかもしれないが、とにかく今回の調査の結果を、ここにまとめることになった。従ってここに記載する事実は、遺跡全体としては、ほんの一部にすぎず、考察の章に述べるところも、また自然将来の所見が増加するにつれて、多かれ少なかれ改変するの余儀なきに至る場合も、あるいは生じて来るかもしれないということを、あらかじめ断っておかなければなるまい。



第1図 埋田遺跡 (ノ) 付近地図

- | | | | | | |
|-------|------|-----|----|----|-----|
| ■ | □ | ● | △ | 卍 | 卍 |
| 近世干拓地 | 旧河川跡 | 遺跡群 | 遺跡 | 古墳 | 寺社等 |

第 2 章 調 査 の 経 過

昭和43年3月16日（土）晴

委員等調査班は、人夫2名を使役して、25番の1の畑の南端4m×1.5mを試掘。厚さ約1mの褐色および黒色土層のうちに遺物多数を発見したが、褐色と黒色との土層の区別以外は攪乱を受けているせいか、遺物の層位的な変化は、混乱以外の何物でもなかった。

しかし弥生以降の土器・須恵器・無釉陶碗等の破片のほか、小さいながら緑釉皿の破片1個を発見して、一同驚喜した。雪まじりの強い雨風に一時作業を中止したが、その大発見で苦にもならなかった。のち整理精査して、さらに緑釉碗破片1個のあることを確認した。

その結果、試掘終了後、にわかにこの遺跡を正式に発掘調査するよう熱望が高まり、直ちにその手続きをすることを約して散会した。

4月18日から発掘開始の予定であったが、雨天のため順延。

第1日 4月19日（金）晴

調査班は現地到着後、人夫3名とともに、直ちに発掘ならびに実測準備。前回試掘トレンチに接して北方へ3m、うち東半を第1区、壁を隔てて西半を第2区として発掘開始（第3図参照）
実測図は全体を100分の1に縮尺、作製記入。

第1区では小柱穴が並び、第2区では南東隅に大きな楕円形ピットあり、黒土充満、無釉陶碗破片を出した。

土師器・須恵器・無釉陶等出土。

第2日 4月20日（土）晴

前日に引きつづき以下順次北方へ第3区（4×3.5m）設定。第2区では前日同様のほか、中国青磁諸種小破片出土が顕著な事象として目をひいた。

ほかに第3区では柱穴のしっかりしたものが現われた。柱受け・根固めに須恵器大破片を利用している。

午後第4区（2×4m）設定。

聞社取材。

第3日 4月21日（日）晴

堀田・伊藤両委員・吉田・相村課長、人夫4名。会計課黒田主事・蛭間小の服部教頭・同小島教

第3区を掘り下げて、東半で遺物群に当たり、単独出土の隙のほか、無釉陶小皿・碗をはじめ、蓋杯その他土師器・土錘等を発見、10分の1の実測図を作る。灰白磁輪花碗破片も近くから出る

第4日 4月22日(月) 曇午後雨

第1・2区境界壁を一部分落とし、第3・4区境界壁を除く。前者では大きい鉄鏝が単独出土(第3図) 角形土器・土錘も出た。また後者からは青磁蓮弁文鉢破片を出したのが注目せられた。



第2図 発掘区域実測図

第5区(2×4m)設定。ここでは中央に遺物群があり、弥生高杯・土師壺・甕のほか、さらに石囲みに類する施設があり、その下には深いピットがあって、深さ1.7 mに達し、その底に後期よりは遡り、よく磨いてはいるが刷毛目を残す弥生式土器片1片が出て、このピットが本来貯蔵穴であり、のちに炉に転用されたい状態を示していた。雨を冒し日没に至るまで10分の1の実測図作製。

第5日 4月23日(火)

人夫の都合で休業。

第6日 4月24日(水) 晴

第6区(3.1×2.7m)設定。

弥生パレース式壺・高杯・須恵器・青磁・天目・鉄器・鉄鋳等出土。

第7日 4月25日(木) 晴

第7(3×3.3m)・8区(2.5×4m)設定。第7区では従来の種類のほか、粗製平瓦・鉄器・甕・天目釉・志野白色釉陶片などが注意せられたし、第8区では長楕円形のピットのほか、高杯の大破片と土師器小形壺との出土が顕著なものであった。

第8日 4月26日(金) 晴一時薄曇

第9(2×4m)・10区(2.5×4m)設定。第9区では、大坪方面視察中、人夫の手により遺物群出現。西側に偏って土師器・石製模造品勾玉・須恵器等を出したので、早速10分の1実測図を作製。

午後第10区のやはり西側に近く、銅鏃を検出、大いに驚喜したが、夕刻のためカラー写真を業者に依頼。

第9日 4月27日(土)

第10区発掘続行、北東隅にピット2個発見、土師器を出す。以後埋戻し、発掘終了。

午前11時、各新聞記者共同会見し、所見と考察とを発表。

土地所有者、耕作者をも招き、記念撮影をして解散。

5月7日より、市立津島図書館において整理作業に入り、引続き原稿作製、9月半ば脱稿。出土品の主なものは同図書館に展示され、調査事業は全くここに完了した。

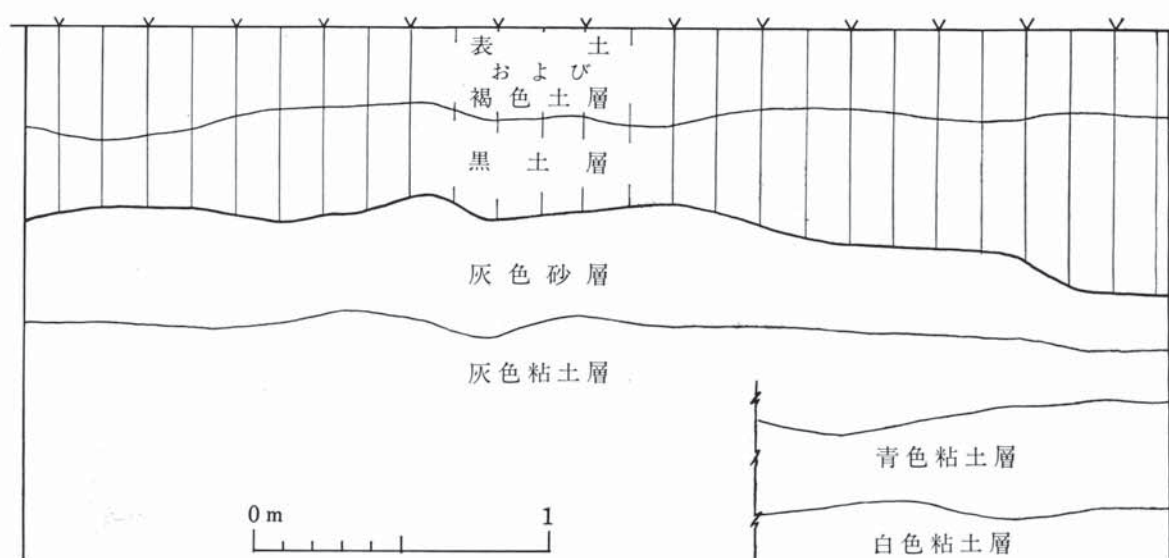


第3図 第1・2区 鉄 鋅 出 土 状 態 (右の人物の左手先)

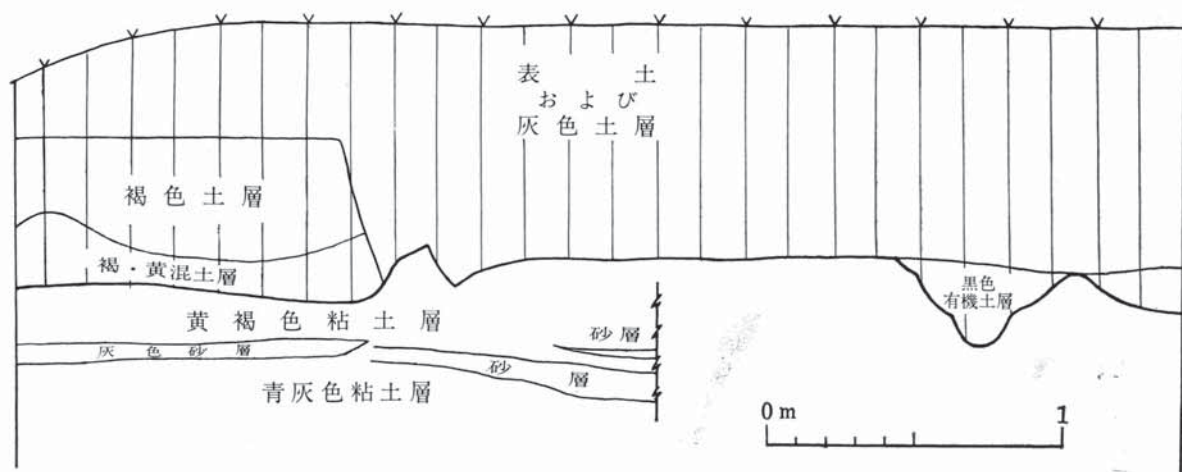
第 3 章 遺跡の地形と構成

津島市ならびにその近郊は、国土地理院発行の土地条件図によれば、すべて木曾川等による三角洲から成り立っているが、かつて行なわれたボーリングの結果から纏められた加賀宣勝氏の論考（註1）によれば、地表下35mあたりを境にして、以下は砂層・礫層・粘土層等の互層で形成されるが、洪積世の所産であるとせられ、その上に載る沖積層は粘土層・砂層・粘土層の三層で形成せられているという。

今回の発掘調査においては、試掘区と第10区とにおいて、文化層（第4・5図の断面図で縦線で



第4図 試掘区南側断面図



第5図 第10区北側断面図

満した部分）以下を特に深く掘り下げ、集落形成以前の地層の状態を明らかにしたが、やはり厚さ平均20～30cmの比較的薄い粘土層と砂層とが互層を成していて、短期間に沈澱と洪水とを繰返

註1 加賀宣勝「津島市の地形地質の二・三について」（『名古屋地学』14 昭和34年）

して形成された洲であることを示すと見られたのであった。

その上に載る有機土層以上が、遺物を出す文化層であるが、これは今回の発掘区域のみならずさらにその四周に広く広がるであろうことは、本遺跡発見の端緒となった東側の土取りの結果はもちろん、北方の畑の断面にも見られるし、また推測ではあるが2丁目92番地 加藤孫一氏宅付近の畑からも無釉陶碗3個を出していることから、おそらく西方へも広がっているだろうし、また前出加賀氏の論考付図1に見える遺跡分布図によると、南方4・5丁目にも土器の出土が記されているから、南方へもその存在が推測せられ、かなり広範囲にわたる遺跡らしいことが想定できるわけである。

遺跡付近の現在の標高は、わずかに海拔0mを下るようで、伊勢湾台風の際も、もちろん浸水の厄を蒙ったし、現在も地表下1m以下は地下水で満たされているが、厚さ平均70～80cmを数える文化層が形成されつつあったころの地表は、住居跡の存在を意味する柱穴の発見などから考えて、海拔0mよりは抽んで、もっと高かった陸地のはずである。濃尾平野は特に近年工場等の関係で地下水の減少が目立ち、その結果としても、一般に地盤沈降を招いているようであるが、それを別としても、地盤のきわめて柔らかい地域として、変動の結果と認めるべきであろう。(註2)

ところでその文化層は、発掘地点によって多少の相違は見られるけれども、概して厚さ10cmばかりの表土を除くと、以下厚さ50cmを越える単一の灰色乃至黒色か、または地下水の鉄分で褐色に汚染せられた有機土層であるか、さもないと、それが上下の二層に分たれて、厚さ20cmばかりの褐色土層の下に、それよりやや厚い灰色乃至黒色土層が横たわるか、またはその逆であるかである。

しかし第10区北側では第5図・図版第5下に見られる通り、褐色土層が断ち切られて西半には台状に残り、東半はにわかに深くまでが灰色土層の単一の堆積に成る状態が観察せられた。

その他、集落形成以前の地表が、必ずしも平坦であったかどうか、文化層の底は一応水平に近いけれども、第4図に見られるような試掘区の自然の凹凸らしい部分もあれば、次章の第6図の立面図で見られるように、文化層中における同時期の出土遺物群の深さに、若干の高低の差が認められて、文化層の形成もまた必ずしも一様に水平にはなかったであろうことも推測できるわけである。

註2 井関弘太郎「生活と自然」(『日本の考古学』Ⅶ 歴史時代(下) 昭和42年)

第 4 章 遺物・遺構の出土状態

まず総じて言えば、発掘区域全般に亘り、前章に述べた通り、ほぼ水平かつ平坦に堆積する文化層中に、古くは弥生後期から、古墳時代以下鎌倉時代に亘る遺物を含み、室町以降の遺物をも少量を混じて出すが、中世ごろにおける攪乱が著しかったのだろうか、鎌倉初期ごろの無釉陶碗などが比較的深位にも、しばしば見出されるかと思えば、また第4区と第6区とから発見された土器の破片が、互に接合し得るものであったようなこともあって、必らずしも、平面における位置もまた深位もともに、原位置を示すものとは限らなかったことが普通であった。そのため一応作業の進捗に従い、平面的位置については第10区まで設定したものの、遺物出土の深位については特に注意するもののほか、余り意味がないように観察せられた。

しかし地点によっては、攪乱を免れ、文化層の最下位に、わずかながらも原位置を保つと見られる遺物群の存在が知られ、それらについては、詳細に実測図（第6図）をも作製することができた。それらの遺物群は全く単に群集して残存しているというにすぎない場合と、多少なりとも遺構を伴なうと言うべき場合とがあるが、それらのことどもについては、各群ごとにあとで詳説することとしたい。

ところでそうした主たる遺物群とは関係なく発見せられる遺構も多少あり、大小各種各様のピットとか、やはり大小の柱穴が至るところに見出された（第2図）。しかし地盤軟弱のため、必らずしもすべてが完全に残されているとも言にくい状態で、注意して発掘を進めたにもかかわらず、それらは断片的に位置して、完全に住居またはその他の構築物の構造を知り得るような形態では発見できなかった。

以上一般的な概況であるが、各区の発見状態につき、もう少し詳しく述べてみたい。

試掘区について特記することはないが、ただ緑釉皿等の破片は層の下位、底近くから須恵器破片等とともに出土したことが注意せられた。

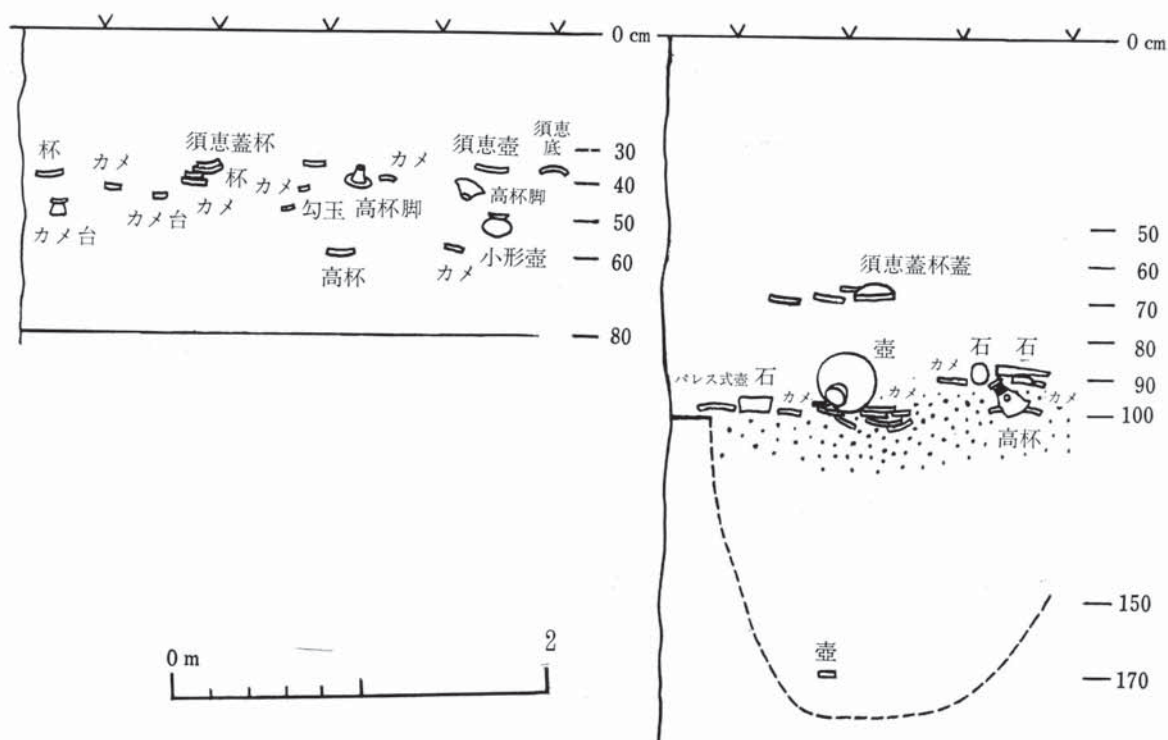
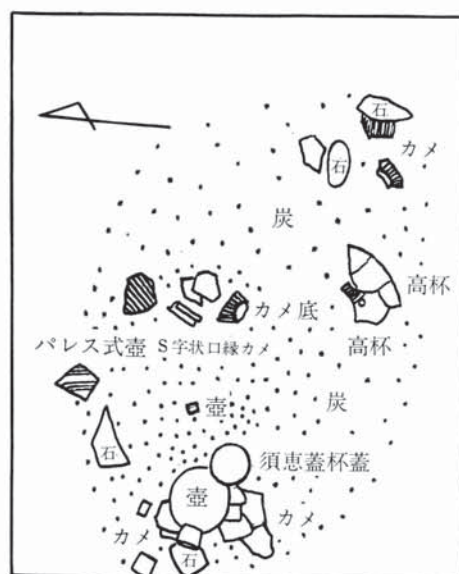
第1区では、規則正しく心々約70cm間隔で並ぶ径約15cmの柱穴列が3個1列と、やはり約70cmの距離を隔て2個1列とが並び、そのうち北側のものは径25cm深さ30cmとやや大きかった。平面形の全体は不詳にしても、かように柱穴が規則正しく配列されていることから、何等かの建造物の存在を思わせるに充分だった。しかし地表下70cmの地盤（粘土層）上に、さらに高さ10cmを数えるだけ、柱穴中と同じ黒土層が柱穴と同じ径で残るのが認められたので、これは灰色土層形成中、しばらくしてからの構築にかかるものと考えることが正しいであろう。

これら柱穴群と関係あるかどうかはわからないが、その長軸に直角よりはやや北に傾いて、長楕円形の大きいピットがあった。長径150cm、短径50cm以上、深さは地下水湧出と側面崩壊のた

この長いピットの端にもう1つ小さなピットが存したが、何物をも出さなかった。

第5区B

杯
カメ口
須惠蓋杯
カメ台
杯
カメ
カメ口
カメ台
カメ
高杯
勾玉(石製模造品)
高杯脚
須惠壺
須惠底
小形壺
カメ
高杯脚



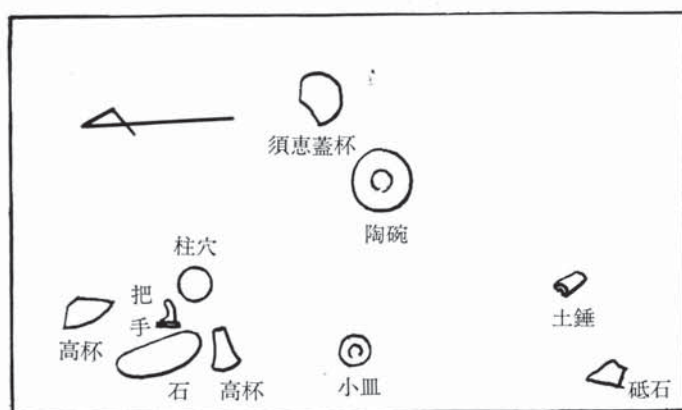
第6図 遺物出土状

味するものであったかもしれない。いずれにしろ将来もしさらに発掘の機会があるようなら、細密な注意を必要とする。

第3区にはいと、大きい柱穴1個と遺物群とが注意にのぼる。

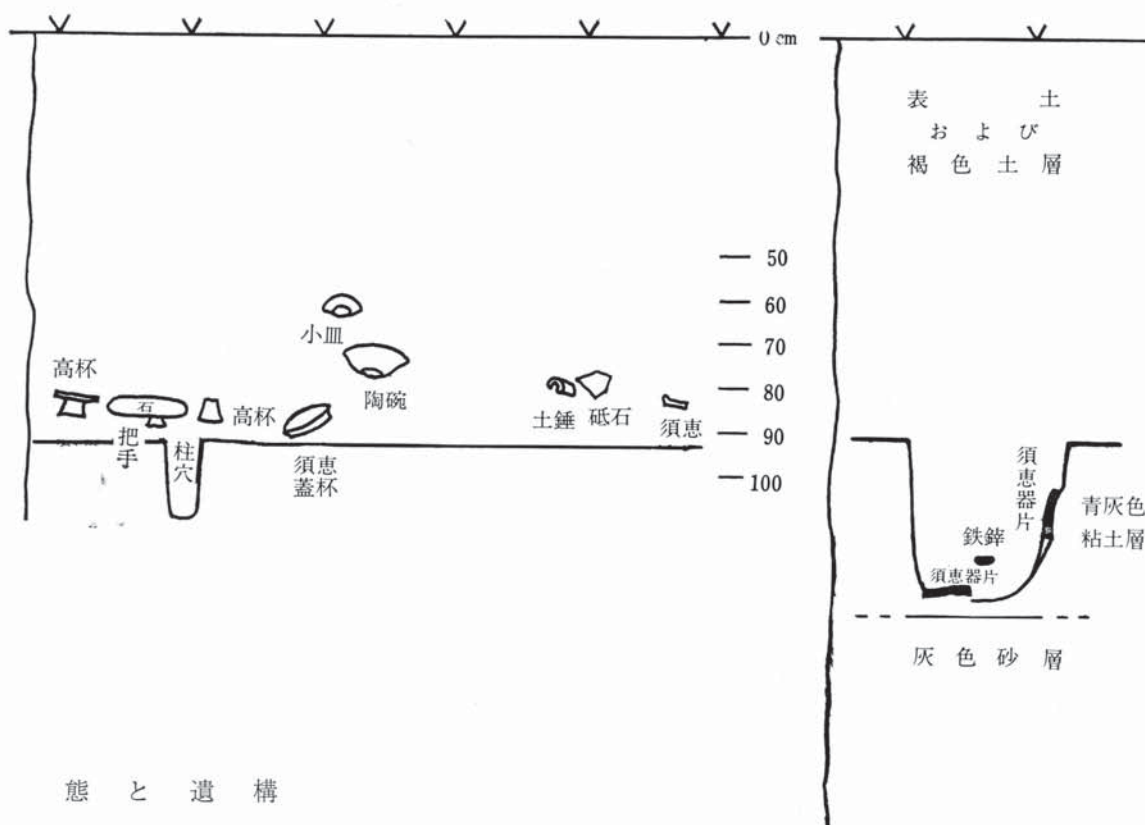
柱穴は、地表下90cmの深さにおいて、径35cm、深さも35cmで、下方ほどわずかに細くなり、底は地盤の粘土層を貫きほとんど砂層に達しているの、柱受けのための須恵器片（第18図1・図版第16下右）を平らな内側を上にして置き、また側面に根固めとしての須恵器片（図版第16下左）を挿んでいるものであった。

第3区A



須恵

第3区柱穴断面



態 と 遺 構

この柱穴自体保存状態良好であり、また興味深い付帯施設を有している点で貴重であったが、周囲を随分と丹念に探したにもかかわらず、これと構成をともにする他の柱穴については、同じ第3区における小形の柱穴1個と、第4区中央のそれとの以外に、その痕跡さえも見出すことはできなかった。おそらくは柱の朽損とともに全く崩壊し去ったのではあるまいか。この柱穴は、使用している須恵器から見て、おそくとも平安初期ごろの所産であろう。

次に遺物群は、今かりにA群と名づけたもので(第6図右・図版第2上)厳密には第3区から第1・2区に亘る範囲に及ぶ。地盤との境が—90cm、遺物群はその直上から—60cmに及ぶ間に存し、土師器と須恵器とはほぼ等深位で、無釉陶碗・小皿が明白に上位にあった。須恵器は蓋杯(第17図17・図版第13第2段左)などで、5世紀末か6世紀初のものと思われる。とすると等深位の土師器(甕・高杯・土鍾等)も大凡その時代のものと見てよいであろう。

この群の下に1個の径8cmばかり、深さ地盤内—17cmの細い柱穴があったが、これも単にそれだけが認められたにとどまるもので、他に同一構成の類似遺構が伴っていたかどうかは不明と言うほかはない。

A群の範囲からやや外れて、瓦葺1個(第18図10・図版第13上右)が—73cmの深位から単独出土。

もうひとつ注意すべきは、やはりA群の外になるが、灰白磁輪花碗破片が、—70cmの深位から出ていることで、地点は異なるが、枇杷色青磁で内面に篋描き文のある碗が同じ第3区から、砧ほどではないとしても、灰青色の美しい蓮弁文碗その他の青磁片が、第2区から第3・4区中間壁にかけて出ていることである。

第4区に移ると、先きに述べた柱穴以外に特記することは、何物もない。

第5区にはいると、再び遺物群B(第6図中・図版第2下・第3・第4)に遭遇する。

この群は、ただ単に偶然多くの土器片等が集積しているというよりは、あるいは炉跡とも言うべき遺構を主体としていたと言うのが正しいであろう。

すなわち、その炉跡と思われるものは—100cmの深位で、ほぼ地盤面に接し、長径130cm、短径110cmの範囲に、若干の自然石を丸く配置し、その中には木炭の細片ことに多く分布し、長軸の一侧に片寄せて横転する土師器細頸壺(第12図1・図版第11上右)と、その下に台付甕(第14図1・図版第9上右)とが重なるようにして置かれ、あるいは、甕で湯を沸かし、壺はその上に掛けられて温められていたのかもしれないとさえ、思わせるに充分であった。

周辺にはパレース式壺の破片も見られたし、他方には、長軸の反対方向にやはり弥生後期というべき有文高杯(第9図22・第6図版上の中下)や甕破片、およびやや高く位置してやはり2個の自然石などが遺存した。炉の上方には—70cmから—65cmあたりに、土師器台付甕ことにS字状口縁

のものと、須恵器蓋杯の蓋（第17図1・図版第13上右）とがあったが、炉の位置が記憶されていたのか、偶然位置が一致したのかは明らかでない。

ところでその炉らしい遺構は、底が深くて—180cmほどのものであったが、—170cmでは、磨かれた面に刷毛目をもつ、おそくとも弥生中期の壺の破片と思われるもの1個を出したが、ほかには何物も知られなかった。

かように広く深い穴が、最初から炉として用いられたかどうか。むしろ貯蔵穴がのちになってその少なくとも一部が、炉に転用されたと見た方がいいのではあるまいか。それは炭が—100cmの深位を中心に分布していることから、また一方完形に近い点で、炉中炉上における原位置と推定できる壺・甕の位置が、偏って穴の側壁に接していることから考えられることである。ほかに第5区北東隅では—80cmで花崗岩製磨石（第22図4・図版第7下の上）が1個出ている。

第6区は特記事項なし。各種土器の薄片を散見するにとどまり、特別な遺物・遺構を発見せず所見上特に留意するところもなかったのであるが、一応パレース式丹彩壺の破片や鉄器片が、わりに目立って出たことなどは記しておいていいであろう。この区は、後世攪乱の疑いが濃いわけである。

第7区も第6区に続いて同様な状態で、ただ布目痕等もはっきりしない薄手の平瓦片2個を出したことから、深位—90cmで、長さ150cm以上、巾50cm、深さ10cmの浅くて細長い溝状のピットと深位—80cmで、径15cm、深さ10cmおよび20cmの柱穴様のもの2個を、地盤上にそれぞれ見出したことなどが、注意に上った程度である。

出土遺物はやはりパレース式土器から室町・天目茶碗に至るもので、土師質の甕や土鍾も見出されている。

第8区は、やはり第6区の溝に直交する形で、—95cmの深位で長径110cm短径50cm深さ25cmの楕円形のピットがあって、中から土師器、須恵器片を出し、やや離れて—80cmの深位に径30cm深さ20cmの柱穴状ピットが1個あったほかは、土師器小形壺で、胴は完全だが口を頸から欠くばかりでなく、その破れた部分を擦って再使用した痕を残すもの1個が、—90cmの深位から高杯の大破片と伴出したのが注意に上った程度である。その余は、中世以後のものが比較的少なかったことが知られた。

第8区から第9区にかけては、第3の遺物群C（第6図左・図版第4）に遭遇した。これは土師器・須恵器に、石製模造品の勾玉1個を含む群で、浅く深位—60cmから—30cmまでに遺存するが、ことに須恵器は大凡—40cmから—30cmの間に限られ、これも原位置を動いていないと見ることができる点で重要であった。

土師器には、群の最も外側に位して、第8区と全く同大の小形壺の胴部のほか、高杯・台付甕

など普通に見られるものばかりで、須恵器も混在する。

須恵器は蓋杯・壺など簡単な器形のものばかりである。蓋杯には底に三角形の窯印のあるものがあり、また壺には内面に同心円叩目文を付けたものの破片も見られた。

石製模造品の勾玉は、深位—42cmから、1個だけ、水平に横たわって出土した。

第9区では、ほかにこの遺物群に接し、—60cmの深位に、径50cm、深さ10cmの浅いピットと離れて—80cmの深位に、径30cm、深さ20cmの柱穴様ピットとが各1個ずつ発見せられた。

第9区もわりに中世以降の遺物が少なかった。

第10区では—30cmの深位で、篋被ある銅鏃1本を出した。ほぼ水平に横たわっていて、付近のほぼ同深位には、柳ケ坪型壺をはじめとする土師器片等も散在していたが、特に伴出関係を認めるほどのものはなく、単に同期の遺棄という以外には、むしろ無関係と考えていいだろう（図版第5上）。古墳時代銅鏃が古墳から出ず、かように集落跡から出るのは珍しい。これが、もしもここにあったかもしれない古墳が破壊された結果、かような状態で遺存するというのではなく本来廃棄せられた形だとすれば、ことにおもしろい。

第10区北東隅には2箇のピットが並ぶ形で発見せられたが、ともに道路にかかると思われたので完掘してないが、少なくともひとつはやや大きなピットの底に、また狭くて深い穴が掘られており、少量の土師器小片を出したことが知られた。穴の径は20cm深さは10cmである。

個々の発掘区の遺物出土状態の記述は以上で終るが、これをさらに表にして示すと、次のようになる。

この表から、弥生式土器は、発掘区の北半に、また緑釉は南端に、白・青磁類は中央部に、そして平安—鎌倉—室町の無陶釉小皿・碗類は、南に古式が多量に、北に新しいのが、しかも少なくなるという傾向が見られ、第6区のごとく、小破片ばかりを多量に出して、何等の遺構も、原位置に残存する遺物群もない地区および隣接区では、特に天目以下の近世の陶器を出して、その攪乱の時期を示しているようである。その他の遺物においては、そういう意味での偏りは、あまりなく全体にわたって見られるので、濃密か散漫かの差こそあれ、特徴として挙げることはないように見受けられた。

最後に全体を総括すると、本調査区域における廃棄・堆積の状態は、弥生後期から順次鎌倉時代にかけて、北方より南方に逐次移動していると見られる。

これは全体から見ればまことにわずかな小部分の所見による事実なので、本当に集落全体に通じて言えることかどうかはわからないが、のちに述べる三宅川の流れについて言えば、上流から下流へ方向にそっていることになるが、もしさように集落が移動したことを意味するものとするれば非常に興味深いことである。

ただし中央の第4～9区、ことに第6.7両区は、室町・江戸のころに、大きく土を動かしているというわけであろう。

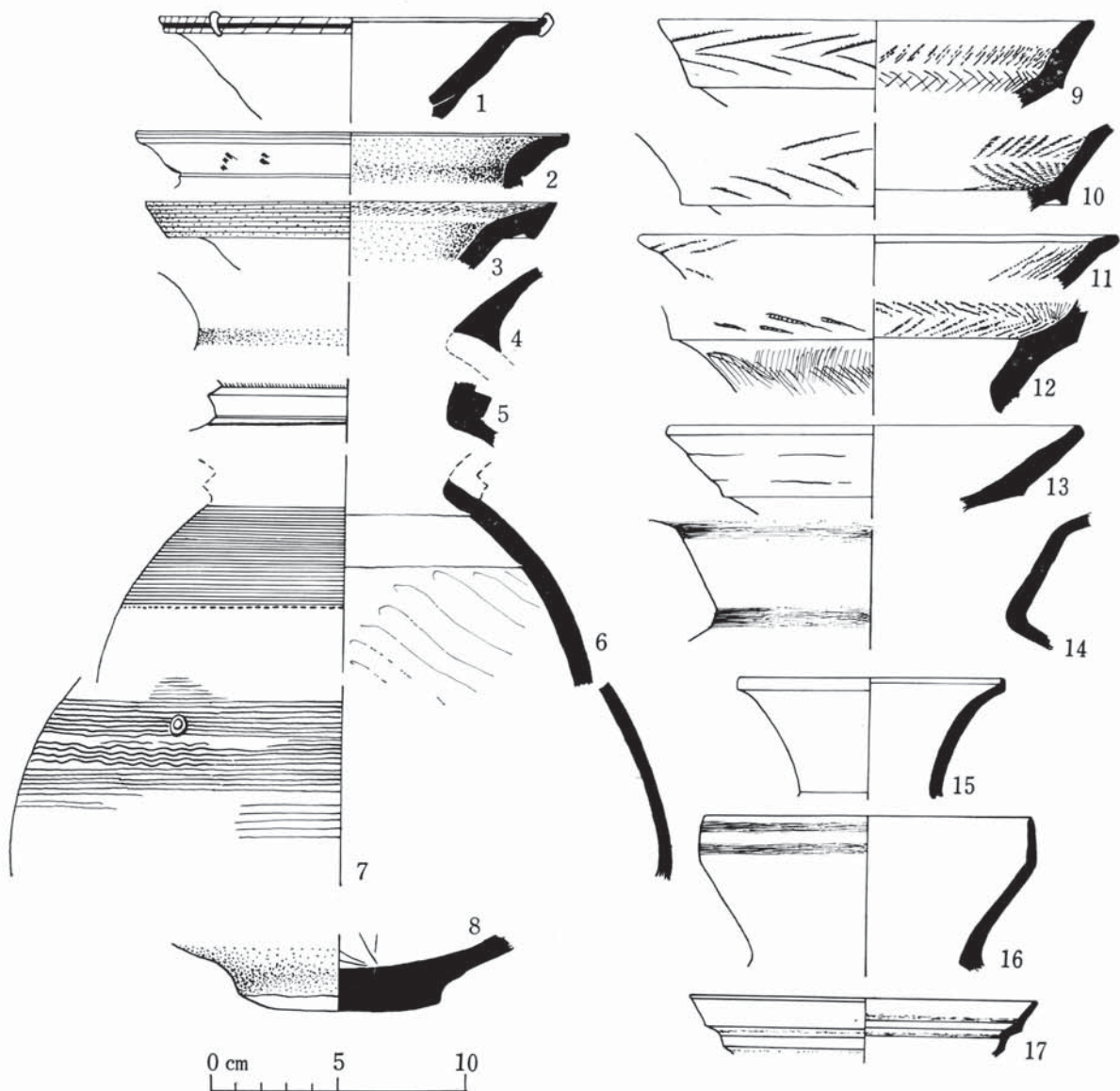
遺物 発掘区	弥生 土器	土師 器	甗	土錘	角形 土器	須恵 器	同心 円文	奈良 緑釉	平安 白・青磁	平安 白色灰釉	安 無釉陶 皿	碗 緑色 灰釉	常滑	土釜	平瓦	天目	柿釉	染付	鉛釉 (尾呂)	黄瀬 戸	白釉	播鉢	鉄鉢	鉄器	銚子	石器	石製 模造品	銅鉄
試掘		○		○		○		○		○	○多 I													○				
1		○				○				○	○多 I・II																	
1・2		○	○	○				○			○II III														○			
2		○				○		○			○多 III		○															
3		○	○	○		○	○		○		○II・IV・V		○											○	○砥石			
3・4		○	○把手			○	○		○		○II								○					○				
4		○				○	○				○IV		○								○							
5		○				○	○			○	○II・IV・V	○				○										○磨石		
6	○丹	○	○				○	○	○		○IV・V		○	○		○	○						○	○				
7	○	○	○	○		○	○	○	?		○IV・V		○		○	○						○		○	○手持 砥石			
8	○丹	○	○	○		○少	○	○			○IV・V						○	○										
9	○丹	○	○	○		○	○			○	○少 I・IV・V													○	○手持 砥石	○勾玉		
10	○丹	○				○				○	○I・V	○																○

第 5 章 遺 物 (1) 弥 生 式 土 器

埋田出土の弥生式土器は、ただ1片を除いては、すべて後期に属すると言ってよく、量もそんなに多いものではない。出土地点も前章記述の通り、北半に限られて偏在する。

広縁壺（第7図・図版第6・8上）

最も明白な弥生式に属する土器のひとつである広縁壺はいわゆるパレース式で、丹彩を加えられることが普通のようなのである。



第7図 弥 生 後 期 以 降 壺

第7図1は第6区出土、口部特に厚みを増さず、屈折した口縁端は1条の凹線で分たれた複縁に、あらく斜線を配置し、ところどころに豆状の装飾突起を付加して飾っている。同図2・3は、それぞれ第5・7区出土、通例の広縁に丹彩（図中の点々で示される部分）を加えられるもの、4は第9区出土の珍しく頸部を丹彩のみの狭い帯で飾るもの、5は第8区の凸帯ある頸部、6は第5区遺物群Bに属するもので、広い平行直線帯の下に楕円の連点文を列ねている。7は同様第5区出土の巾広い平行線帯が、ときとしてかすかに波状に揺れているのは廻転台のせいとしても、その中に円形浮文を加えているのが目立つ。この浮文は胴の周囲をどのようにめぐり構成に成るのかはよくわからないが、同一個体の小破片に浮文が少なくとも2個並列する例が別にあるのでかりに2個並列として、作図に用いた浮文1個を有する大破片は、ちょうど胴周の6分の1に当たるので5箇所以下おそらくは3乃至4箇所に配置されていたものと思われる。8は丹彩壺の底部で、突出した底面を除き、外面は全体に塗彩されている。ほかに櫛描きによる波状文（第10区）格子文（第9区）や山形文に丹彩を加えたもの（第6区）などが出土している。

第7図9～15（図版第8上）は、やはりこのパレス式の形態の特徴をおおよそ具えてはいるけれど、口縁端の厚みがただ上方にのみ伸びて行く傾向と、そこに刻まれる文様が、平行直線でなく綾杉状の斜行点線文である点とが異り、第10区銅鍍付出土の1例を除いては、丹彩を欠くことと合わせて、別に新しい型式を構成している。これはかつて杉崎章氏が「柳ヶ坪型」（註1）と呼ばれたもので、弥生式の最後に属するものとされている。古墳時代にはいり、土師器の壺にも引き続きこの形態の特徴は残るが、一般に無文化するので、丹彩有文か無文かで、弥生・古墳の区別をすることもできるのであろうが、しかし丹彩壺自体がかなりおそくまで残るので、「柳ヶ坪型」はすでに古墳時代にはいつてからのものなのではないかという可能性は甚だ大きい。

さて図9は第7区出土、10は第9区、11～15はともに第10区出土である。

壺（第7図・第8図・図版第6）

広縁壺以外には細頸壺に近いものから、広口壺までであるが、おおむね口縁が単純なことが普通である。

第7図15は第10区出土、口縁立上がり、細頸壺の系統のなごりであることを見せているが、頸部に1線を有する以外全く無文であるのは、やはりおくれて終末期の所産であることを示すであろう。16は第9区出土、やはり口縁が立上がるがその巾が広く、そこに太形凹線2条をめぐらす点は前者より古様である。17は第8区出土、柳ヶ坪型に似るが全く無文で、しかも頸部に移るところで、段がもうひとつ多いことになろう。後述する甕のいわゆるS字状口縁の影響を受けているかもしれない。

第8図7は試掘区出土、厚みがあって堂堂たる作りに成る。8は第7区出土、口縁端に1線を加えて複縁にしている、頸はきわめて短い。9は第8区北西隅出土、細頸壺であろうが、口縁端にも口縁上内面にも凹線1線を加えている。

第8図1～6は、広口壺というべきものだが、一見甕と区別し難いものもあるようで、実は第7図

註1 杉崎章『柳ヶ坪貝塚』（昭和28年）

17のように、柳ケ坪型の文様が消えてなくなれば、2や3のようになるので明白だけれども、1は口縁の切り方が甕にしては特異であるとして、4～6のごときは、人が口縁端における平行線文や凹線などを見逃がせば、あるいは本当に甕であるかもしれないと疑うほどである。

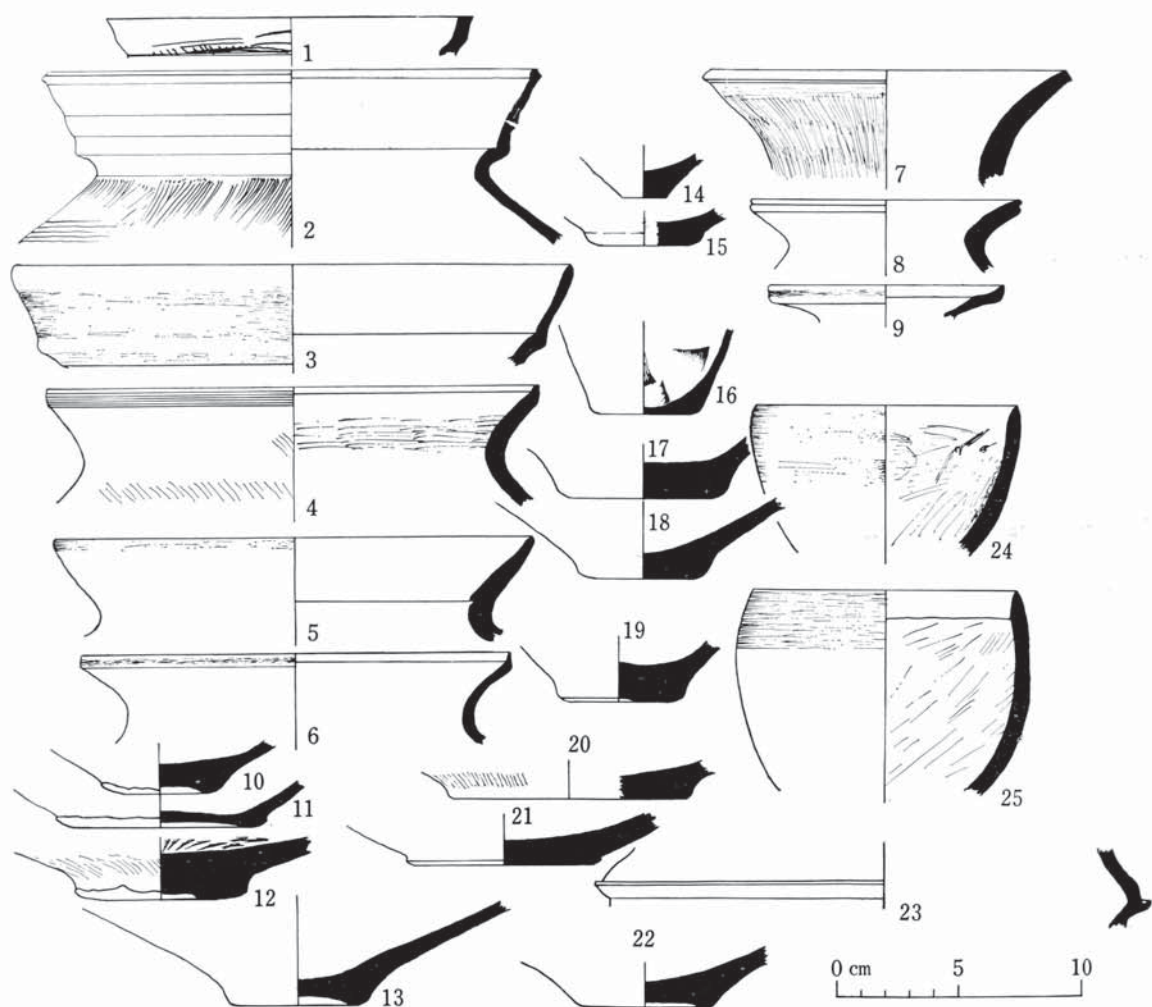
第8図1は第4区、2は第7区、3は第6区、4は第9区、5は試掘区、6は第7区出土。

第8図10～22（図版第6下、ただし下段中央は甕なのでこれを除く）は壺の底部と思われるものおおむね平底だが、10～13や22のように、いくらか上げ底、または付け高台に類するものもある上げ底様に凹めたものと付け高台風と二者のいずれであるにしろ、平底乃至凸面底のものに比べて多少時代の下降を思わせるようである。

10は第9区遺物群C、11・12・20は第9区、13は第3・4区、14・17は第8区、15・22は第6区、16は第5区、18は第10区、19は第7区、21は第4区出土。

手焙形土器（第8図23）

小破片なのでよくわからないが、残存部から図のように推定せられる。第5区出土。



第8図 弥生後期以降壺・碗・壺底部・手焙形土器

碗（第8図24・25）

器壁わりに厚く、口辺を巾広く平行直線で飾っている。製作は粗雑で、手づくねの感が深いので、土師器かもしれないが、装飾を加えるという点で一応弥生式に入れておく。24は第9区、25は第10区銅鑛付近出土。

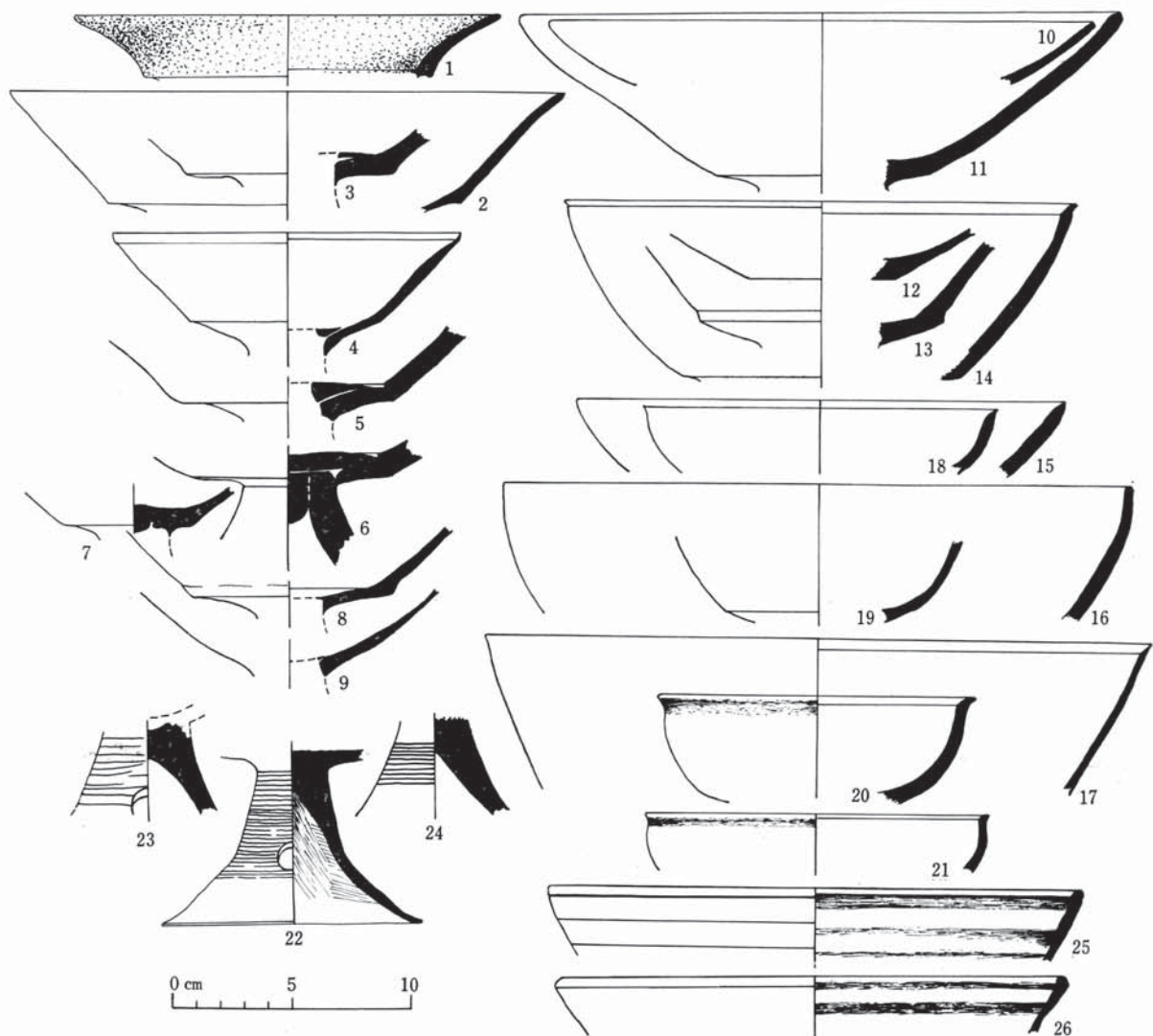
高杯（第9・10図・図版第6右上・第7左上）

高杯には、杯部が浅くて皿状のものと、深くて碗形のものがあり、脚部は総じて外反して、膨らみのあるものを見ない。

(1)杯部皿状のもの（第9図1）は、平らな底から稜をなして立上がり低く外反している型で、後者よりは相対的に古い型である。本例は内外両面に丹彩を施す。第9区出土。

この型には22～24のような平行直線文を、上部の杯部に接するあたりに飾る脚が付く。孔は3個が普通である。22・23は第5区遺物群B、24は第6区出土。

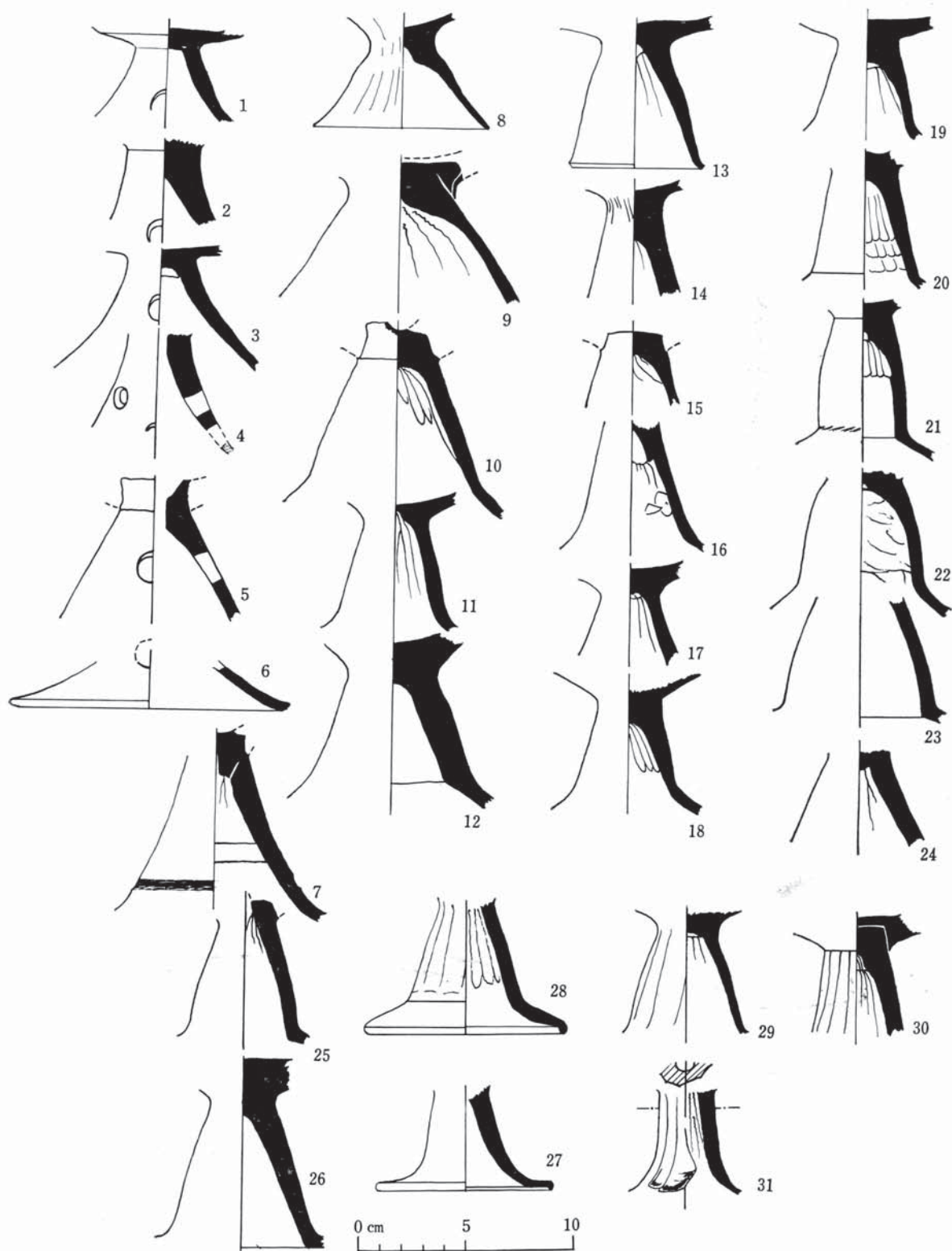
(2)杯部皿状ながらやや深く、やはり底から稜をなして立上がるけれど、底径小さいわりに、立上がりが深くて、やや内彎する傾向があり、碗形との中間形をなすもの（第9図2～8、10～17）は



第9図 弥生後期以降高杯類

すべて無文である。このうちのどれが弥生式に属し、または土師器と言うべきかは、器形だけから区別することはむづかしい。2は第3・4区中間、3は第9区の出土。

8と13とはよく似て、稜外面に1つの段があるが、これは別に作られた底板の上に、立上がりの部分をのせて接合することによって、底板の厚み（木口）が外面に見えるせいである。これは弥生式に見られる特徴と言ってよからう。8・13ともに第6区出土。



第10図 弥生後期以降高杯・器台脚部

10以下特記することはないが、12と14とは橙色の化粧掛けが施されていることだけを記しておく。10は第7区、11・15・16・17は第5区遺物群B、12・19は第5区、13・14は第6区18は第4区の出土である。

図版第7上左の上から2段目中央の小破片は、高杯杯部の内面に、巾広い平行直線文を飾るもので、ほかになお数例がある（第3・5区出土）。これは濃尾平野西部の美濃地方に分布する型式である。25（第4区出土）・26（第6区出土）はそれに類するものだろうか。

5・6は、杯部の内面が深い稜をなして、底と接する特徴をもっている。そして3と5とは、脚上部に皿の基部をはめこみ、蓋をしめた恰好で内面底を仕上げ、6も同様に仕上げているが、脚が太いので、さらに筒形の脚上部には柄状に栓をして補強している。5は第5区、6は第6区出土。

第10区北東隅出土の7もこれに似た同様の作りである。

4もこの系統であるが、口縁部が立上がる傾向をも加え、すでに土師器の感じである。橙色の化粧掛けを施す。第8区北西隅出土。

これらは弥生式に見ない手法であるから、土師器に属せしめるのが本当ではあるまいか。

次に杯部碗形のは20・21で円い杯部は口縁で外反し、あたかも後世の茶碗のように唇の当たりを快くしているのは、やはり飲むための用具であっただろうか。20は第5区遺物群B、21は第9区出土。

これらに付属する脚部（第10図1～3・6）はやはり無文である上に、杯部に相応する特色がないために、それぞれ区別することできない。ただ3孔を開くことだけでは弥生式とも言えるし、土師器にもある。

1～3はともに第5区出土、ことに3は遺物群Bに属する。6は第9区遺物群Cに属して出土。

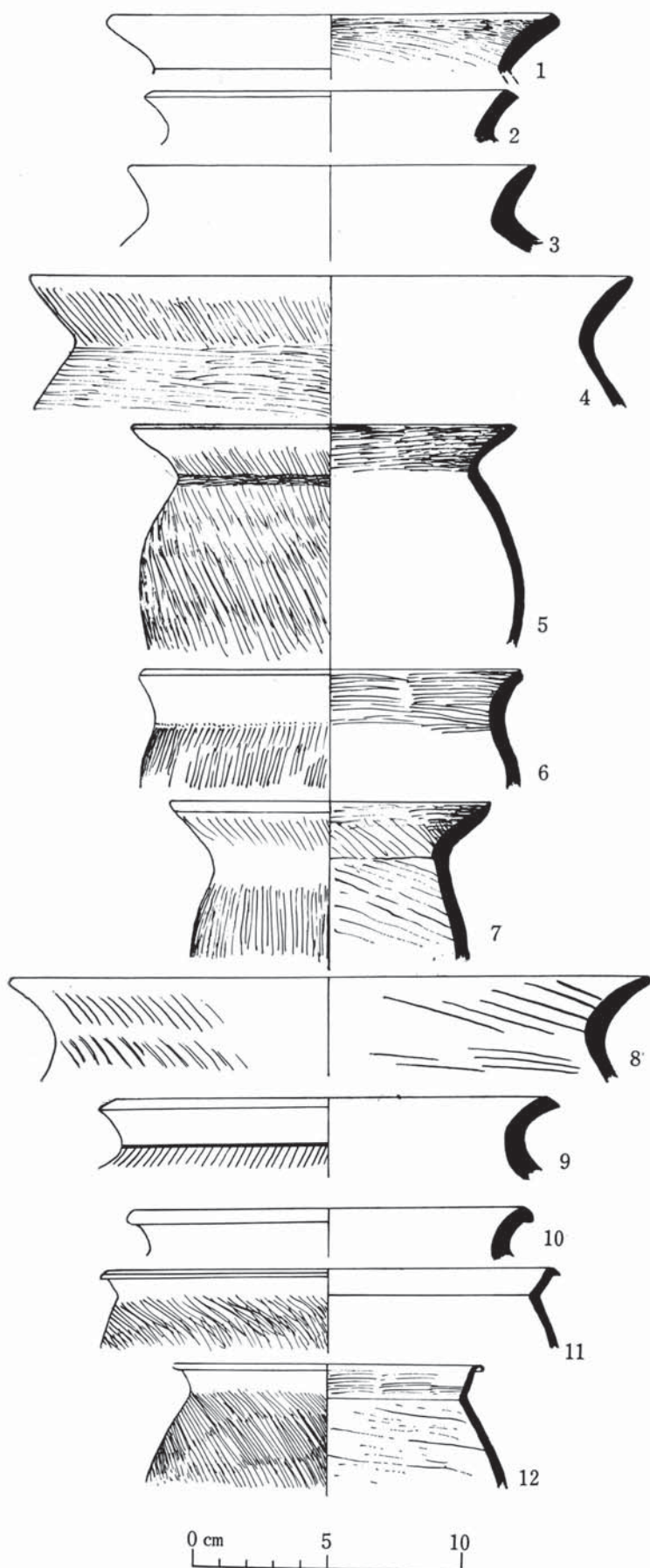
器台（第10図4・5）

脚部2例を知るにすぎないが、ことに4はただ単に通例のごとく3孔を開くにとどまらず、さらにその下段に、おそらくは同数の孔を開くと思われる。4は第6区、5は第3・4区中間出土。

甕（第11図1～7・図版第8下）

弥生後期の甕は口縁が単純なものである。しかし単純な口縁はずっとのちの時代まで続くようなので、それだけで弥生式のものとは決めにくい困難さがある。が、ただし「く」の字形に折れず円弧状に曲がるもの（例えば第11図8・9）は弥生式にはなく、また逆に弥生式以後の口縁には、それがいかなる形態にであろうと、とにかく複雑に発展して行く傾向も一方にはあると見られるので、複雑な口縁のものは、せいぜい弥生もごく末期か、大方は古墳時代に属すると考えられることになる。いわゆるS字形口縁（註2）などはその好例であって、また柳ケ坪型壺の口縁とも関連性があると思われる。それはまた土師器の甕の項で、くわしく論ずることとしよう。

註2 大参義一「S字状口縁土器考」（『いちのみや考古』13 昭和42年）



第11図 弥生後期以降甕

さて1～3は、外面無文、その余はすべておおむね頸部以下を刷毛目で蔽っている。1・5は第5区、3・4は第6区、6は第8区、2・7は第9区出土。

底は第14図2（第4区出土）がわりに古い平底の例だが、3（第5区遺物群B出土）・4（第5区出土）・5（第6区出土）のような、下端の折り曲げがないか、または少ない台も、この時代のものであろうか。図版第7上右の甕台部破片の内外面には靱痕がいくつも残されている。

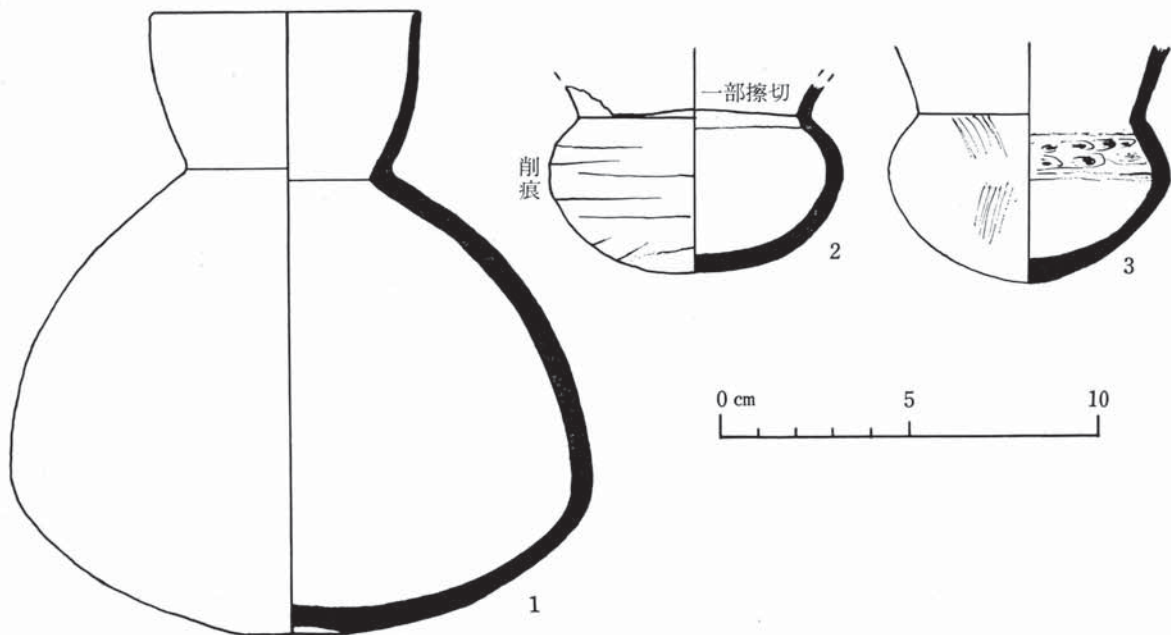
なお第5区遺物群Bの下ビットの底近くに見出された刷毛目ある磨いた土器片は、おそらく中期ごろの壺の胴部破片と思われる。

これだけがこの埋田遺跡でとびぬけて古いと思われ、さらにそうした中期前後の遺物を含む部分が、まだこの遺跡のどこかに潜んでいるかもしれないことを示唆するようでもある。

第 6 章 遺 物 (2) 土 師 器

細頸壺（第12図1・図版第11上右）

弥生後期の瓢形細頸壺の系統を引くものだが、ただ底を凹めて、上げ底にしてある点が特異である。この点弥生後期を余り隔てて下るものではないであろう。外面よく篋で縦で磨いているのも、その感を深くさせる。しかしいわゆる赤焼きで、その点では紛れもない土師器と言ってよい。第5区遺物群B出土。



第12図 土師器細頸壺・小型丸底壺

小形丸底壺（第12図2・3、図版第11上左）

ほぼ同大のもの2個、頸は太く、口部を欠くがやや長い器形のはずである。2は胴外面を削って整形しており、割れた頸部の一部を擦切って再生しているのが注目される。第9区遺物群C出土。3はいくらか刷毛目を残し、内面には指痕など成形の痕を残している。第8区北西隅出土。

2が石製模造品の勾玉を含む群に属するから、これらもまた古墳時代も余り遅いものではないことが明らかで、おそらくは6世紀までも下るまい。

高杯（第9・10図、図版第11下）

前述の通り、杯部は底部小さく、立上がりの深いものが、土師器高杯の主体を占められるが、第9図9（第6区出土）のように比較的たけの高い椀形のものは、弥生に見ないから、これは土師器に属するであろう。

杯部が変化に乏しく、わりと弥生の高杯と区別しにくいのに、脚部は著しく特徴を明確にして

現われて来る。

第10図8（第5区遺物群B）・9（第9区遺物群C）は、ともに脚の開く角度が大きく、一見したところ、台付甕の台のようでもあるが、それにしても8は細く高すぎて甕の台とは考えられないし、9は台と胴との接合の仕方において高杯の脚のうちに数えるべきであろう。

以下土師器高杯脚は次の2型式に分たれる。すなわち

(1) 脚の中間で屈折して、急に広がるもの（第10図10～12・18～23・25～27）。そのうち比較的直線的なものと、上半に膨みをもつとの2種類があり、また屈折の仕方にも、ゆるやかなものから、急角度に折れて、屈折点から先の下面は全く水平で、ペツタリ床面に着くように作られたもの（26、第7区出土）まで、いろいろの段階がある。27（第1～3区出土）や28（第9区出土）は脚の下縁が下方に垂直に伸びて、須恵器高杯風の立上がりができているものもある。

(2) 脚を縦に削って稜を作るもの。7や28がすでにその傾向を示しているが、まだ削り方におだやかさが見える。しかし極端に各面を全く平坦に削って、稜をはっきり出した8角前後の多角形の断面を有するものもある。29～31はその例である。これらはたとえば大和地方にも見られるもの（註3）だが、奈良時代高杯に最も発達して見られる特徴なので、そのころまでの所産であろう。

7は第3区遺物群A、8は第5区遺物群B、9は第9区遺物群C、10・21・29は第10区、11・12は第3区、13・25・31は第5区、14は第4区、15は第6区、16・26は第7区、17・18・19・20・30は第9区、22・23は第8区、24は第2・3区中間の出土である。

甕（第11・13・14図、図版第8・9・10）

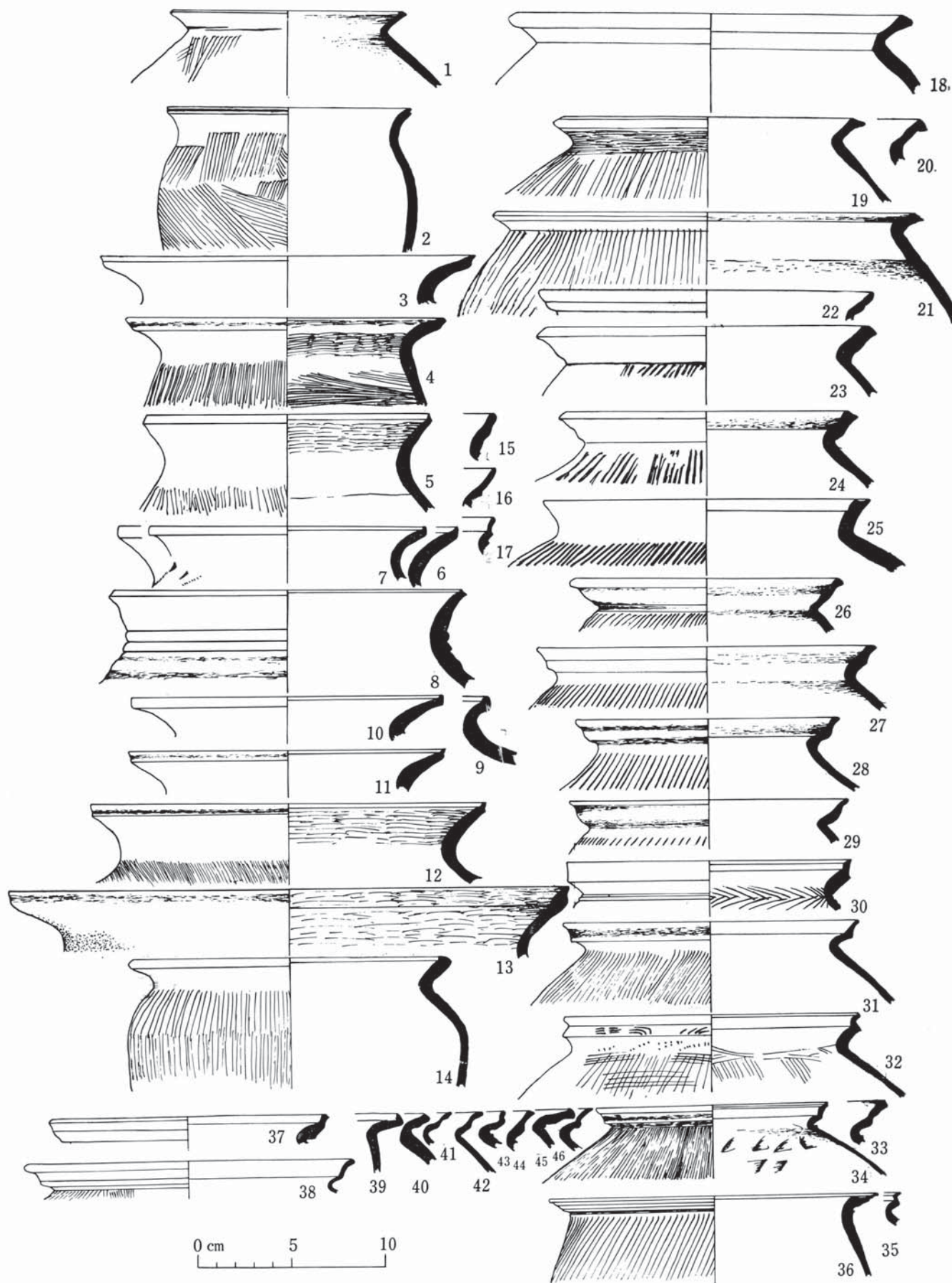
前述した通り、頸部短かく円弧状を呈しているもの（第11図8～10）から、多かれ少かれ何等かの形で複雑化している口縁をもつもの（同図11・12、第13図のすべて、第14図1）は、土師器に属するであろう。ときとして煤を外面に付着させていることがあるのは弥生式甕も同様である。

頸部を円弧状にすることは、結局口縁内面を補強することであり、やはり煮沸用として甕などをのせる用途を意味するであろう。

しかしそれが第13図左列（1～14）のように、たとえわずかにしろ口縁端に、立上がりを作ることは、須恵器壺類の影響であるにしろ、その最も損傷しやすい部分をことさらに発達させる点で甕などを掛ける用よりは、それ自体で単独に用いられて、縁端をそこなうことのないものとして受取らなければならぬまい。ここに甕の用途の変化が考えられるのである。

一方従来の用途に類するものに、内面に平らな斜面を設けて、甕受けを確実にし、縁端を水平

註3 たとえば小島俊次『奈良県の考古学』（昭和10年）参照。



第13図 土 師 器 甕

に伸ばし、もしくはさらに下方へ折られるもの（第11図11・12、第13図18～25）も現われる。

そしてそれがさらに、柳ケ坪型の壺の口部の特徴と同化して、屈曲するようになると、いわゆるS字状口縁のさまざまな変種（第13図26～46）を産み出して行くことになるのである。大参氏はこれを（a）立上がり垂直なものと（b）水平に伸びるものとに分け、（b）がS字状口縁の本格的なものと言われるが、埋田遺跡では（a）がほとんどで、（b）はあまり見受けない。

ところでここでも頸部内径の最も狭いところは、厚く作られているから、甌などをかけるのにも都合はいいけれど、30～32や第14図1のようないわば2重口縁式になって来ると、もうこれは単に器形に現われた「このみ」とか装飾とかいうものではあるまい。おそらくは木製などの蓋受けとしても、充分役立つ器形となって来ていると、考えられはしないだろうか。

この形は須恵器には見当たらない。従って須恵器から直接出た形とは考えられないけれども、口縁を蛇腹状に波打たせることは類似しないとも言えない。むしろ上述の通り、柳ケ坪型壺の口縁の影響と考えたいわけである。

そこで蓋の適用をも考えるとすると、先の立上がりのある甕とともに、甕単独の使用も考慮にのぼって来るわけである。

S字状口縁は弥生式か土師器かで論議を呼んでいるようであるが（註4）、津島市史纂委員伊藤晃雄氏は、弥生式ならば砂交り、土師器なら純良粘土を用いているという胎土の質で区別できると言われるが、両者ともに存し、一方また柳ケ坪型壺に出自が求められる点でも、より弥生式に近いと考えたいところである。しかしそれは柳ケ坪型壺との共存関係が認められるか、S字状口縁甕の方がおくれるかで決定されるのであろう。大参氏によれば、同時期の伴出関係が認められるとのことだが、さらに例を多く知りたいものである。

第13図13・14のような締まりのない器形のものや、23～25のように、刷毛目が太く、粗雑でしかもわりに深く引かれるものも、時期的には、おくれるように考えられる。

第11図8は第3・4区中間、9は第9区、10は第7区、11は第4区、12は第5区出土。

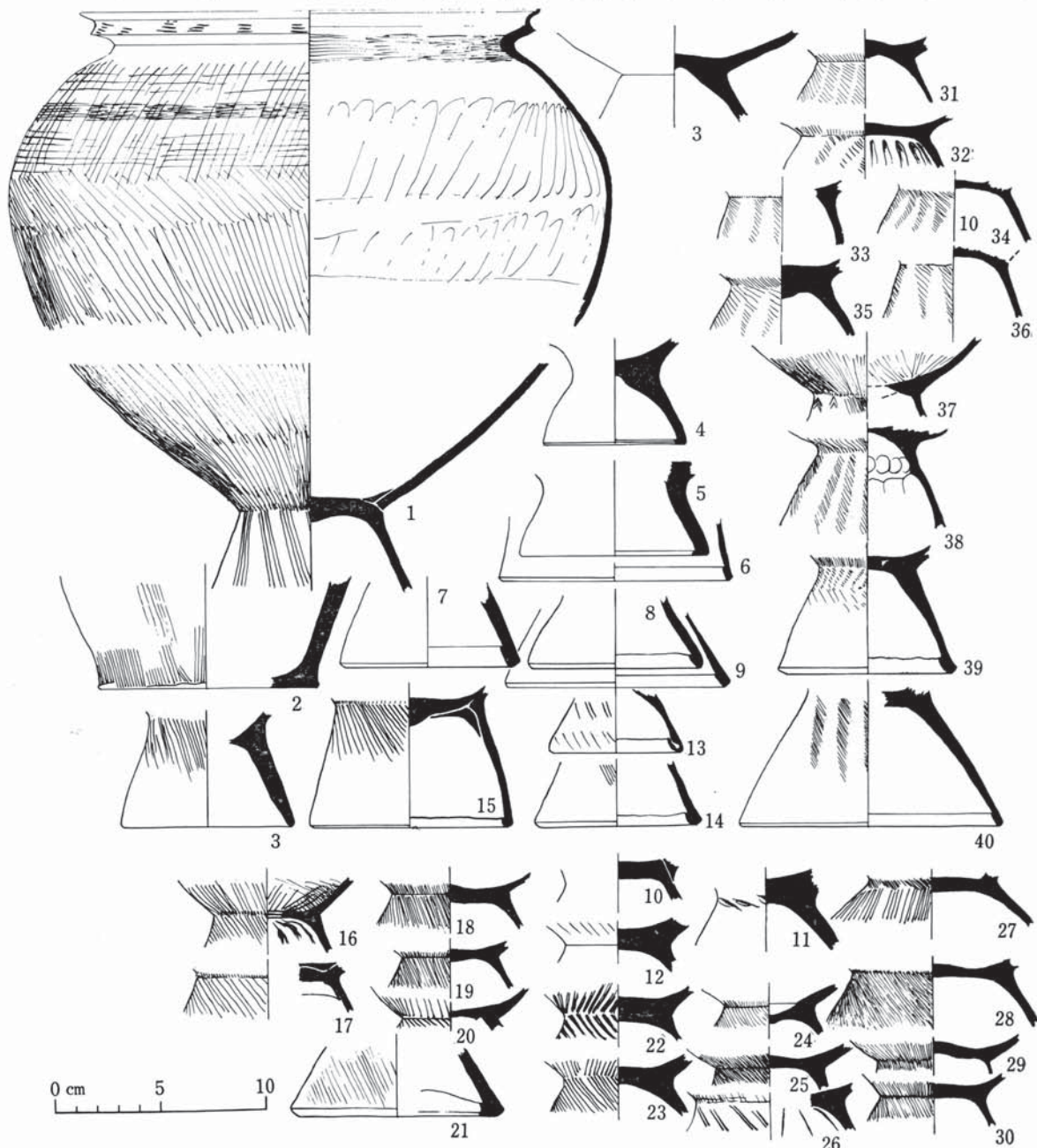
第13図1は第3区、2は第8区、3は第2・3区中間、4・14は試掘区、5は第2区、6・7・41・42は第4区、8・24は第4区、9・15～17・20・22・25・27・28は第9区、10～12・19・21・34・37・39・43～45は第6区、13・26は第1～3区、18は第1・2区中間、19・23・33・35・36は第10区、29・30・31・32は第5区、38・40・46は第7区の出土。

次にこれらの甕に付属する底であるが、おそらくそのすべてが台付きであったであろう。

胴部の刷毛目の有無は不明だが、とにかく台部に刷毛目のないもの（第14図6～12）と、刷毛目

の全面にあるもの（13～30）と、そして最も特徴的なものとして、台部に斜行刷毛目帯を空間と交互に縦に配するか、または同様な効果を、磨消の手法によって出しているか（31～40）の3種類に分たれる。そしてそのすべてが、下端は内上方へ折り曲げて縁を厚くする工作を施している。

ところでそれらが、一体いかなる胴部と組合わせられているのかは、まず破片ばかりで知るよしもないが、ただ1例だけであるが第14図1（第5区遺物群B出土）は、ほぼ完形がうかがわれる



第14図 弥生後期以降甕

ので、S字状口縁の甕には、この最も特徴ある種類の台が付属する場合のあることが明らかとなった。

このような刷毛目の作為には、当然台下端の折り曲げとは異り、実用的意味があろうとは考えられないので、専ら装飾的意図に出たものと思われたいが、そういう点では胴乃至口部でも

これに相応して、装飾的傾向が強まっていることがうかがわれ、第13図32や第14図1のごとく、口縁の中段に刷毛目施文具による押引文が施されたり、また胴上半における通常の斜行の刷毛目自体の上に、さらに横位の刷毛目帯が重ねられて、明らかに装飾的施文として受取られるのである。これも甕自体の用法の変化と言おうか、価値観の転換と言おうか、煮沸具もまたおそらくは一家団欒の中心として、重視されつつあったのではあるまいか。

それにしても台部は、本来炉の灰に挿して安定を保つ意義があると思われるのに、ここをも美しく飾るということになると、それは炉から引出されて供されるということがあったのを示すだろうか。ともかくかような見落されがちな部分に、地味な技巧を施していることには、いかにも日本人的なデリカシーが認められるとして大変興味深いのである。

ところで刷毛目帯をまばらに施す(1・31)のは、まず全体に施しておいてのちに磨消した(35・36)のより後出の型式であろうことは、一般的に言って、全体に刷毛目を施すのが通例であることから容易に推定できるが、まばらに施すのにも31(第8区出土)のように斜方向に施すのが古くて、1のように、刷毛目を垂直に、磨消の方向に合わせて引くようなのは、最も後出の型式であろう。37(第5区遺物群B)のように異方向に施すのは、試作的な作例だろうか。これが整理され完成されたと思われる型式を見ることはなかった。

この磨消刷毛目の型式は、大参義一氏によれば、一宮市元屋敷・下渡・堤遺跡にも類例が見られる(註5)が、埋田遺跡ではことに顕著な存在となっている。大参氏によればこの型は柳ヶ坪型の壺と組み合わせになっているように記されるが、その壺の口部との共通性は前にも触れておいた。

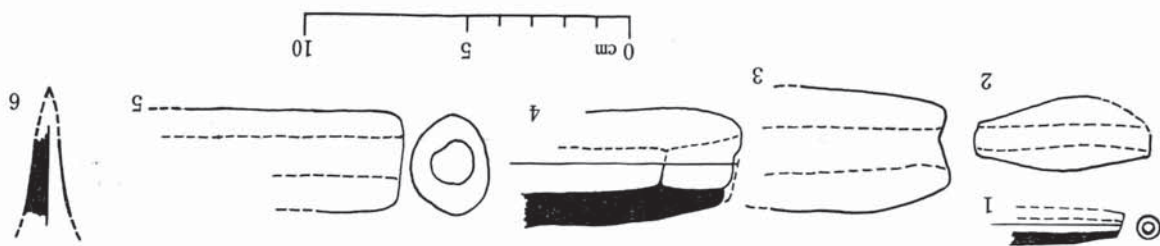
しかし大参氏がこの台が(b)水平な口縁に伴う特徴とされるが、埋田遺跡では(a)類ばかりが目立って多いのである。

また大参氏によれば、この型式は速く消滅するとのことであるが、そうすれば時期決定の特徴のにない手として重要である。この意味で一応この甕を「埋田型」の名で呼ぶことを提唱することとしたい。年代は石製模造品・銅鏃等に近接するもののある点で、大胆かもしれないが、ほぼ5世紀末を甚しくは下らぬものと一応考えたい。

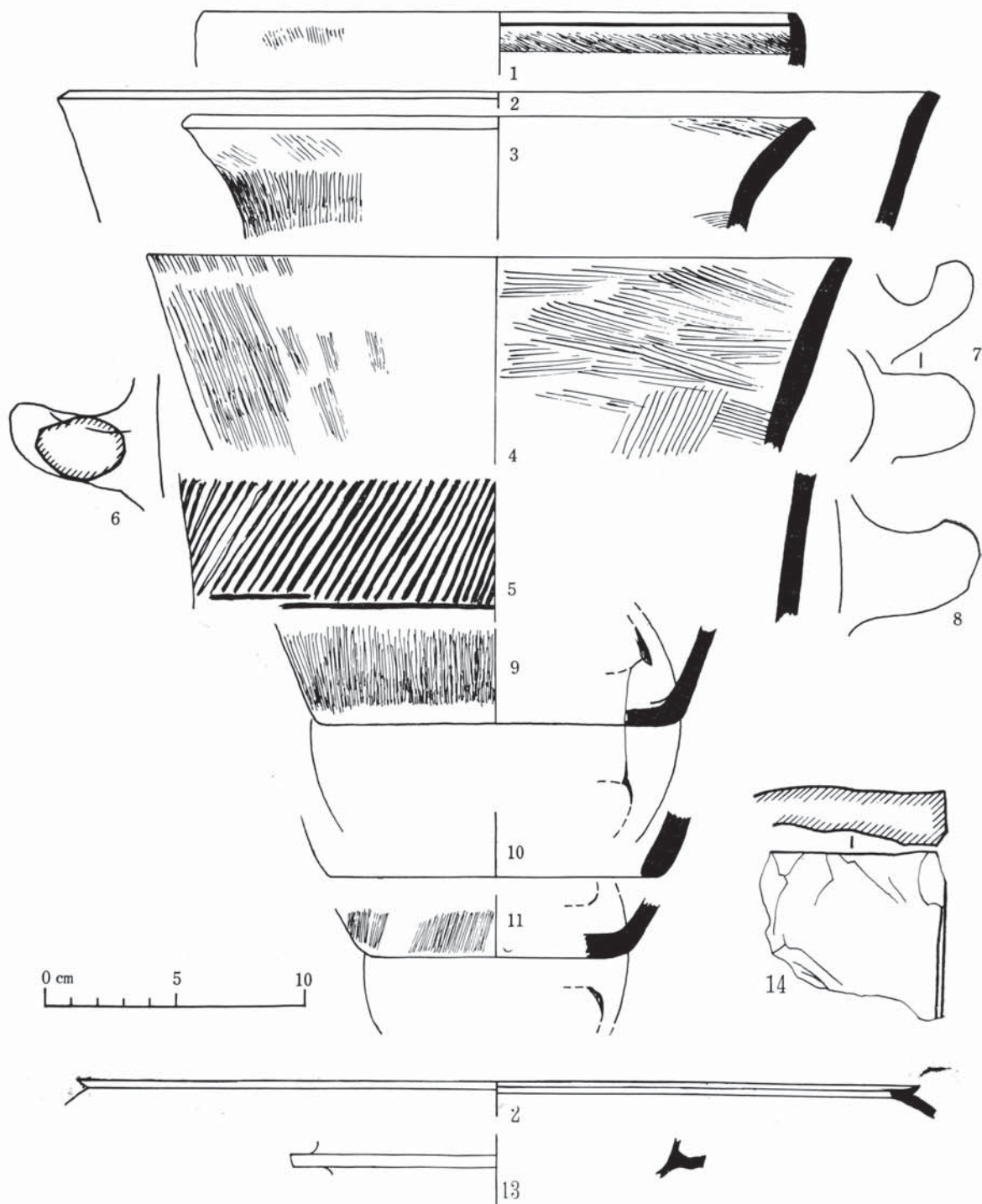
第14図6・9・11・27は第9区、7・10・20・40は第4区、8・32は第6区、12・18・19・24は第3区、13・14・23・25は第6区、15・22・37は第5区遺物群B、16・17・35・36は試掘区、21・31は第8区、26・38は第5区、28・29は第7区、30・34・39は第10区(39は銅鏃に近い位置)、33は第9区遺物群Cの出土である。

土師質土錘(第15図、図版第12下左)

註5 前出大参氏論考



第15図 土師質土錘・角形土器脚部



第16図 土師器甗・土鍋・土釜・平瓦

土鍾は中形のもの（第15図3～5）が普通で、小形（1・2）は少なく、大形のものは見ない。

古墳時代のものであろうが、出土地点の関係から見ると、中形の方が古くて、のちに小形に限られるようにも思われるが、全体として資料が少ないので、確実には言えない。

1は第1・2区中間、2・3は試掘区、4は第9区、5は第8区出土。

土師質甗（第16図、図版第12上・第14下）

甗は口縁がいくらか内彎するもの（第16図1）もあるが、おおむね軽く外反し（2～4）内外面に刷毛目を施すか、無文である。至るところに手づくねの指痕も見られて、埴輪円筒の状態によく似る。

5は実は須恵質のようであるが、黄褐色を呈して一見土師器に見える。外面に条痕状叩目を印し、横線だけは篋で入れている。（図版第14下）。

角形把手は（6～8）他の器にも付くかもしれないが、少なくともこの地方では、まず圧倒的に甗に付属するものと考えていいであろう。

底（9～11）は、知られる限り、専ら大きな半月形の孔を相対して穿ち、ひとつの橋部を残す型が見られるだけで、その余の型は有無さえ明らかでない。

1・3は第6区、2は第8区、4は第2・3区中間、5・11は第9区、6は第3区遺物群A、7は第3・4区中間8は第3区、9は第7区、10は第1・2区中間出土である。

角形土器（第15図6、図版第12下右）

脚部1片を、第1・2区中間から出土しただけである。断面正円形で内部充実しているので、細く尖った型であることが知られる。従って最も後出の型、すなわち奈良以後と言われている種類で、またこの伊勢湾沿岸地方で最も普通に見られる種類である。

土鍋・土釜（第16図12・13、図版第21下左）普通鎌倉ごろのものと言われるが、便宜上ここで説明しておく。

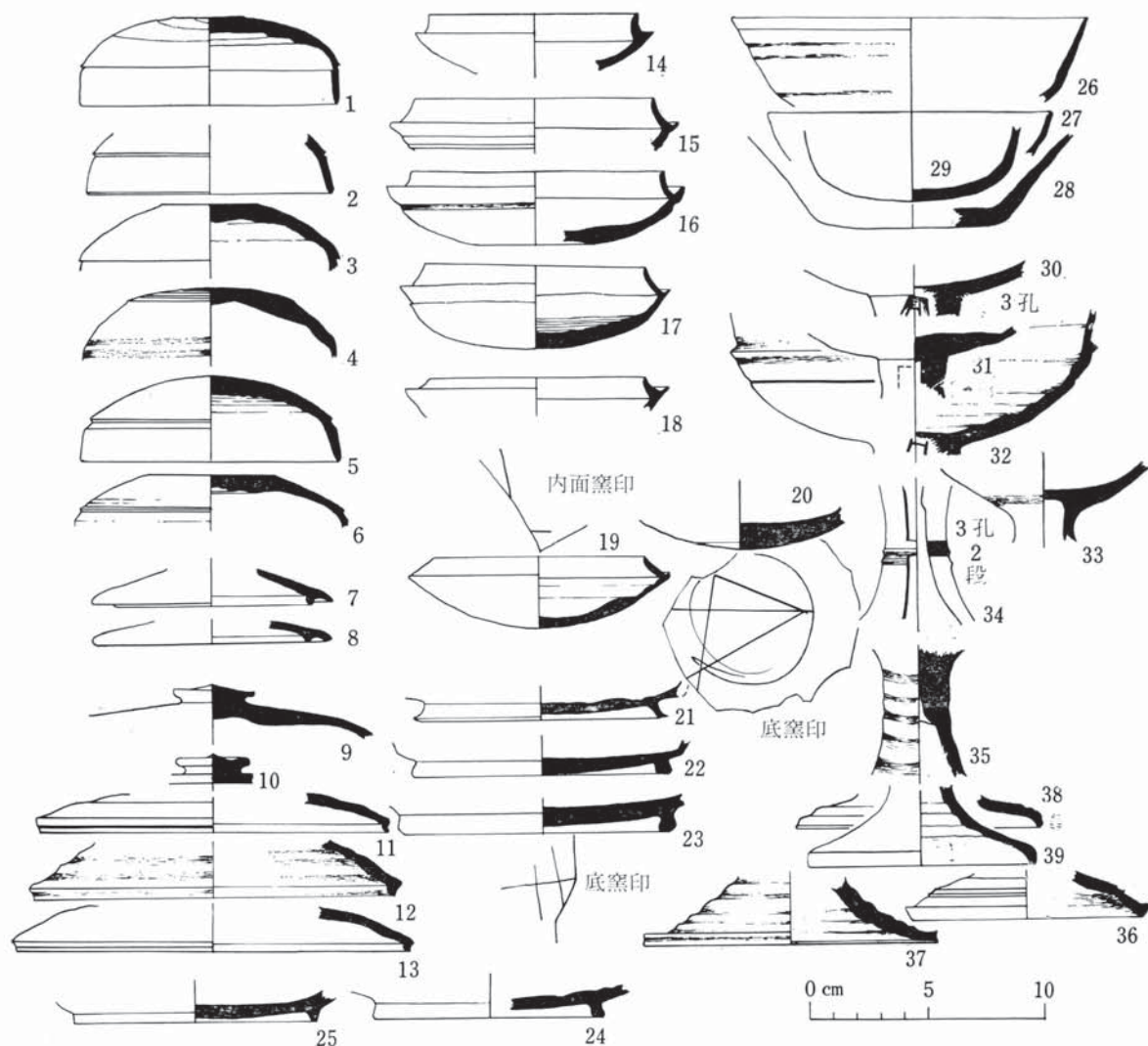
第16図12（第1～3区出土）は、口部を折返し厚みを増して上面を平らにしている。薄いけれど胴径は大きく、おそらく鉄鉢形の鍋ではあるまいか。

また13（第5区出土）は、狭い齔があり、図版第16下左の一番隅に掲げたのも同様の例である。

第7章 遺物 (3) 須恵器

須恵器（第17・18図、図版第13～16）はほとんど完形をうかがうに足るものは稀で、一応は下に記すものの、形態の分類同定に必ずしも正確を期しがたい場合があったことをあらかじめ断っておきたい。

杯の蓋（第17図1～13、図版第13上左・第16上）



第17図 須 恵 器

1は身の立上がりと重なる部分垂直で高く、比較的古い型式に属し、蓋頂は削痕を残している。第5区出土。

2～6は、その部分が外傾し器壁やや厚みを増す型で、先の型に後続する型である。2は第5区、3は第1区、4は第1・2区中間、5は第7区、6は第8区出土。

7・8は見られるごとく、蓋の方に引っかかりを付けている型で、最も新しい種類である。7は

第3・4区中間、8は第3区出土。

9～13は、すでに古墳時代を脱し、いわゆる猿投窯に属する奈良―平安の間の蓋とその鈕である。9は第2区、10は第6区、11は第8区、12は第6区、13は第1～3区出土。

杯（第17図14～25、図版第13左第2段・第14上下・第16上）

第17図14が蓋1の型に対応するかわかれ、15～19は蓋2～6の型に対応し、また21～25は蓋7～13に対応する。

19・20・21・23等には、それぞれ窯印が刻まれ、19は直交する十字らしく、20は1垂線を下す三角形、21は1直線、23は片仮名の「キ」字状である。

14は第3区、白色の15は第3・4区中間、16・17は第5区遺物群B、18は第1・2区中間、19は第1～3区、20は第9区遺物群C、21・23は第6区、22は第9区、24は試掘区、25は第5区出土。

碗（第17図26～28）

器胎薄手で平底と思われる。26は第6区、27は試掘区、28は第1・2区中間出土。

盃（第17図29）

小形のわりにたけ高く、丸底である。碗というよりは、盃というべきであろう。第5区出土。

高杯（第17図30～39、図版第14上）

高杯の杯部の完形をうかがい得る破片は全くなくて、わずかに破碎しにくい脚接合部と脚、そして脚下端が知られるにとどまる。

30～33の杯部では、32が最も古いであろうし、33はまた逆に最も新しいであろう。30～32はともに3個の長方形の孔を穿つ。

34の脚はやはり3個の長方形孔を2段に穿つ例であるが、35は轆轤上で握りながら整形した指圧痕が、螺旋状にそのまま残っている。35はやや黄褐色を帯び、古墳時代もごく末期のものと思われる。

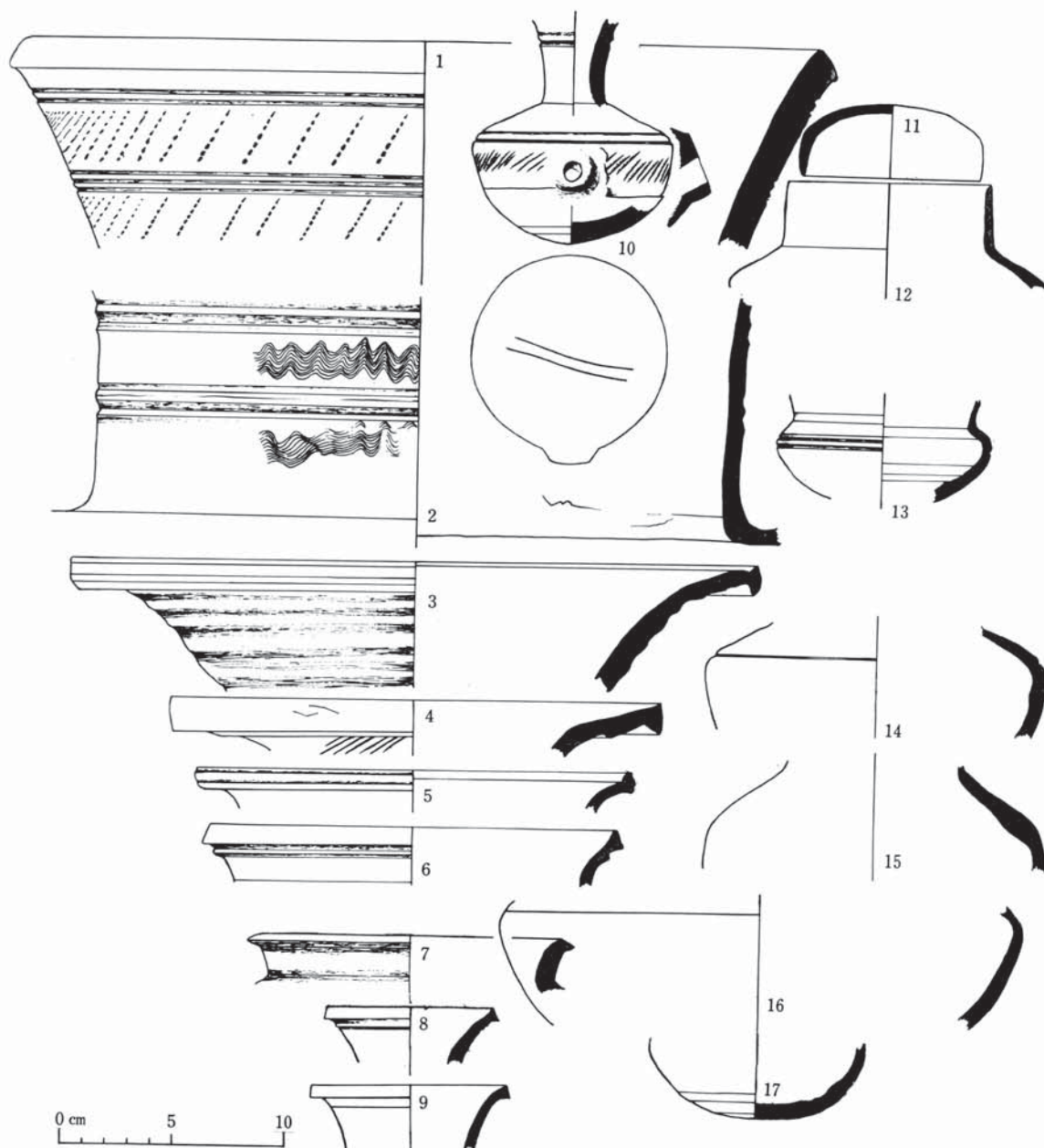
脚下端の36は古い型式であり、37がこれに次ぎ、38・39は最も新しい。ことに39は焼成が甘く、35に近い感じである。

30・38は第6区、31は第1～3区、32は第5区遺物群B、33は第4区、34・36は第7区35は第9区、37は第5区、39は第1区出土である。

広口壺（第18図1～7、図版第14下・第15・第16下）

非常に大形のものから、普通の大きさのものまで、いろいろあって、1のごときは口径ほぼ35cm口部の厚さ1.4cmを数え、高さも40cmを越えることになる。2段に櫛歯による斜行点線文を飾る。これは第3区柱穴の底に内面を上にして収められ、柱受けの用をなした破片である。

2は口径は大体等しいが、はるかに薄くて0.8cmしかなく、波状文を2段に飾る。第2区出土。



第18図 須 恵 器

3は口径において余り変らないが、頸径ははるかに狭く、胴もわりに小さかったと推定されるもの。外面の装飾施文はすでに消えて、蛇腹状の凹凸を加えるにとどまる。古墳時代も末の新しいものであろう。第4区出土。

4は斜線を並列させて飾っているが、口縁端には針書きの窯印様の陰刻がある。前者よりは、いくらか古いであろう。第5区出土。

5・6は口縁端上反するもの、7は逆に水平に張出すもの、これは頸が大変短い。5・6・7ともに第4区出土。

図版第16下の左は第3区柱穴の側面に、根固めとして縦に埋められていた破片だが、条痕様叩目文を加えた上に、さらに櫛歯施文具で平行線を文様風に施したもの、内面は無文平滑である。

ところが同じ外面の施文をもちながら、それが一層装飾文らしく、刷毛目様の平行線文の施されるところは、叩目文を磨消して、複雑な装飾効果を出しているもの（図版第15の上図では上左と下2個の3個、その内面が同図版の下）がある。これは図示する通り、内面に同心円叩目文を施しているのが普通のようなものである。

一般に叩目には(1)単純な条痕様のもの(2)それが縄目風に節のある線によるもの(3)凸格子文の3種があり、(1)には内面に同心円叩目文のない場合が普通だが、ときには前述の通り、さらに特殊な施文を加えている場合に限り、内面に同心円叩目文をも有しているのに対し、(2)・(3)の両者はともに内面の同心円叩目文を伴っている区別を知るのである。

内面の同心円叩目文をもつものは、奈良ごろまでも続くというように言われているが、この場合も外面に凸格子目文が出現するなどは、時代の下る要素が濃厚である。同心円叩目文は正円形のものから不正形のもの、さらに馬蹄形に一方が開いたまま、線がのびているものまである。

また(1)単純な条痕様叩目文をもつものには、内外面ともに黒色に塗抹された一例がある（試掘区出土）。これは平安猿投窯の所産であろう。

図版第15上の上段右の白い焼成の条痕様叩目文ある例（第3・4区出土）は、壺とすれば、口縁直下、頸部からすでに叩目が施される点が特異だが、あるいは甗のたぐいかもしいない。いずれにしろ古墳時代というよりは、さらにそれ以後に下る可能性が強い。

図版第14下図の上段右（第1区出土）もよく似た壺の肩だが、これは断面三角形の低い凸帯をめぐらしている。

細頸壺（第18図8・9、図版第14上）

口部破片等を得たにすぎず、それも縁端の断面が撥形にひろがる型で、奈良平安初期ごろのものであろう。8は第3区、9は第5区出土。

甗（第18図10、図版第13上右）

口縁を欠くほかは完形である。胴の開口部膨隆し、その位置に斜線文を施す。底には2条の平行線を斜に刻した窯印がある。第3区—73cm単独出土。7世紀ごろの所産であろう。

短頸壺（第18図11～17、図版第14上）

11はその蓋で、小形のわりに厚く、内面粗雑。第9区出土。

12は直口でたけの高いもの、わりに新しいものであろう。第5区出土。

13はそれよりやや古いと思われる。第7区出土。

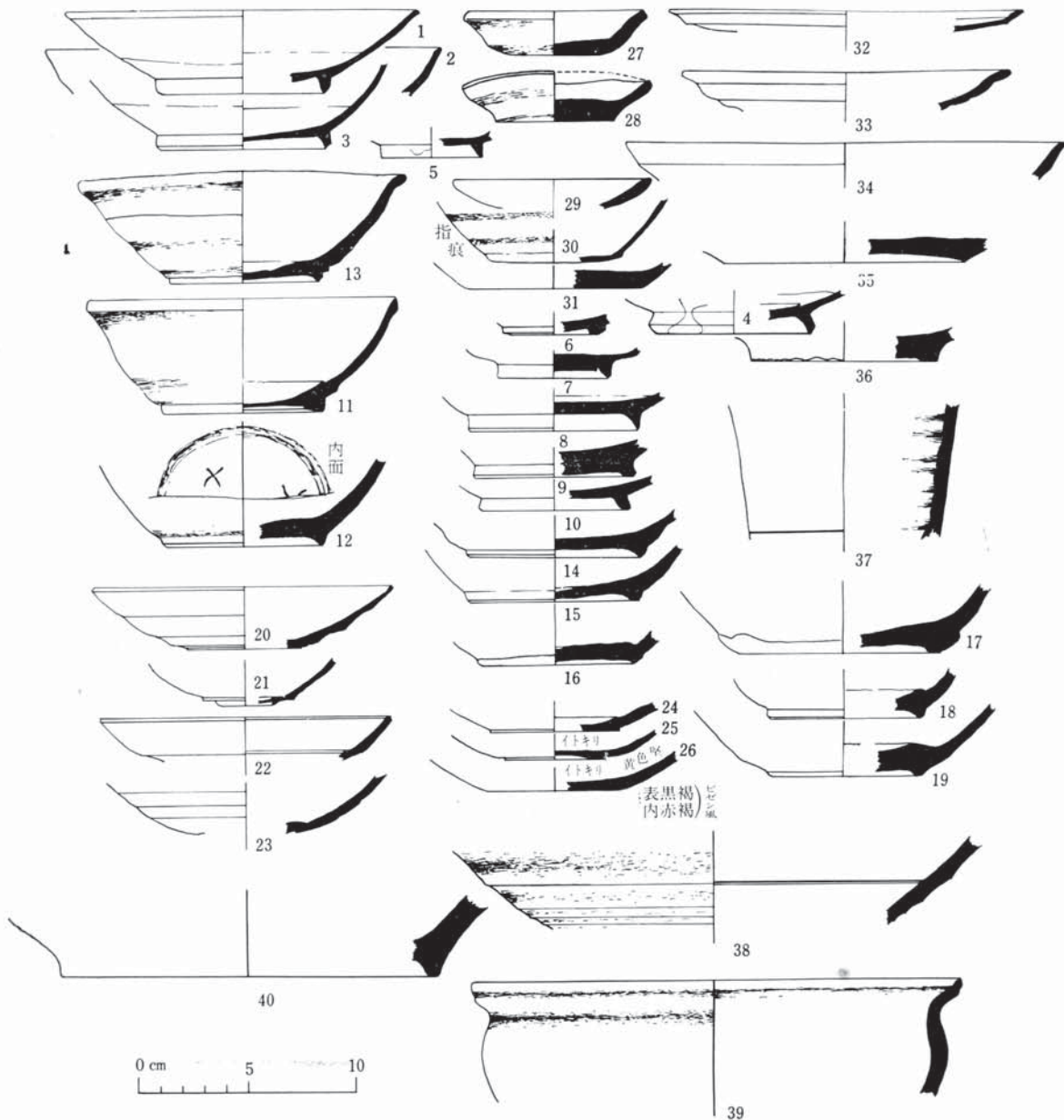
14～17は、肩から底へかけての破片だが、いずれも末期のものであろう。17は底に一直線の窯印がある。14・17は第7区、15は第6区、16は第10区出土。

第 8 章 遺 物 (4) 陶 器 ・ 青 磁 類

無釉陶・灰釉陶（第19図・図版第17・18・20・21）

いわゆる猿投窯の産物で、胎土灰白色である。

第19図1~4（Ⅰ・Ⅱ型）は、器形整美で、口部内外に、帯緑白色を呈する、ごく薄い失透性の灰釉を施した、口径五寸の碗で、平安後期も比較的古い方の作である。5は高台を除き、内外全



第19図 無釉陶・灰釉陶

面に同じ釉をかけた胎土薄黄色のもの。高台の径が小さく、しかも外面は垂直である。これはもしかすると多少時代が下るかもしれない。6~10の底もこの型式のものである。

次に最も多いのは、11~19（Ⅲ・Ⅳ型）の、胎土に砂多く交り、成形渋滞して、台の付け方も

また粗雑に傾く口径4寸5分の碗で、いずれも高台には、まばらながら靱痕が印されている。平安末から鎌倉時代にかけての所産である。

そのうち12は最も注目すべきもので、見込みに十字を2個刻しているのは、窯印と言うべきであろうか、それとも宋磁の花文、または瓦器の暗文などに影響された結果であろうか、とにかく珍しい唯一の例である。

20～23（V型）は、胎土純良で器壁きわめて薄い、焼成は堅牢な、やはり口径4寸5分のだけの低い碗である。高台は低くかつ細く、きわめて形式的な存在でしかないが、やはり靱痕を印する。一般に鎌倉末から室町時代の所産と言われている。

24～26は同様な薄さの器壁をもつが、底部は前2者のように糸切りの痕を残すか、26のように削平されている点で、前者と異なる。おそらくは皿に類するものであろうか。

27・28は平安末以降の小皿で、高台は付けられていない。

29は土師質小皿で、30もやはり土師質だが、非常に薄く、しかも轆轤による指痕が顕著である。底は同じ薄さの平底だが、やや膨隆して丸底に近い。31は胎土白色で土師質に近く、底に削痕あり、おそらくは鉢であろうか。ともに時代不詳。

32～34は皿で、32は薄い無色灰釉を内外に、33は、外面は口縁だけ、内面は全体に、貫入ある淡緑色灰釉を、34は内外全面に同様の釉をかけている。32は平安、33・34は鎌倉時代であろう。

35は平底だが、削って上げ底の気味があり、内面にだけ刷毛塗りの白色灰釉が施される。大鉢であらう。

38も同様な大鉢らしく、内外両面に淡緑色灰釉を施す。ともに平安時代であらう。

36は壺の底で無釉、平安か。37は壺で、外面に流下する緑色灰釉の貫入あるものが施されている。内面は素地のままである。これは鎌倉時代であらう。

39はやはり1種の鉢というべきか、蓋受けのある器形である。無釉、時代不詳。

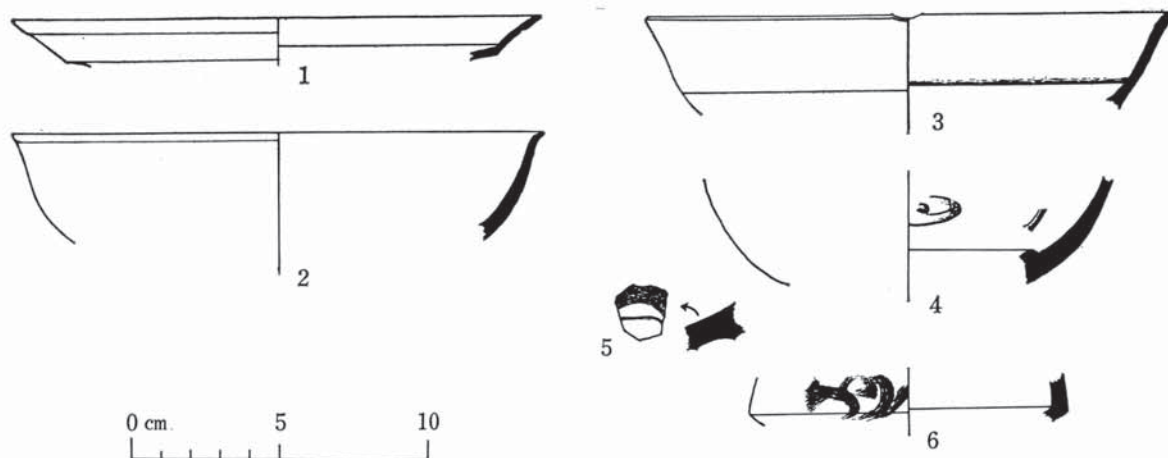
40も大鉢おそらくは片口であらう、無釉で胎土も粗雑なもの、鎌倉時代。

1・11・29は第1区、2・3・15・39は第4区、4・23・34は第10区、5・10は第9区、6・7・9・21・33・35は第7区、8・25・37・40は第5区、12は第1・2区中間、13・16・28は第3区、14・26・31・36は第6区、17～19は第2・3区中間、20は試掘区、22・24・30・38は第8区、27は第1～3区、32は第3・4区中間、36は第6区出土。

図版第21上左は口縁内外面に緑色灰釉をかけて、内壁に平行線を刻したもの、鎌倉時代の卸し鉢であらう。第6区出土。

緑釉陶（第20図1・2、図版第19上）

1は胎土は須恵質で堅く灰色、釉は内外とも全面にかかり、美しい緑色を呈するが、外面光沢



第20図 緑釉皿・碗・灰白磁輪花碗・青磁碗・染付合子・鉄絵鉢

に富むのに、内面は光沢弱く、いくらか銀化の傾きが見える。皿の口部と思われ、外面口縁から少し下がったところに、1線を引き、内面はそれよりさらに下がり屈折する。釉にはきわめて細かい貫入がある。

2は胎土白く、やや柔い瓷質、わずかに外反する口縁をもち、ゆるやかな丸みをもつ碗と思われる、内外面ともに、はなはだ淡い黄緑色の釉が施されるが、口縁だけには本来施さず、いわゆる口元（くちはげ）の姿になっている。釉には、きわめて細かい貫入が認められる。ともに平安時代鳴海古窯の所産か。試掘区出土。なお釉の成分の分析は、破片が小さいため、行なうことをとりやめた。

灰白磁輪花碗（第20図3、図版第19中・下の上左）

胎土釉色ともに灰白色を呈し、胎土はかなり磁化しており、釉薬は多少の掛けムラによって濃淡はあるが、濃い部分はベージュ色に近く、淡い部分もごく淡いオリーブ色を帯びると言おう。梨皮状に小点散在し、また凹凸がある。失透性が強く、釉の厚い部分はやや透明な小点が、不透明で白い地に交るが、白い地の方が高く、小点の方は凹んでいる。貫入は全くない。口縁に切り欠きがあって輪花形をなし、内面やや下がったところに1線を片切りに施しているようである。外面にも1～2の横線が見えるが、これは装飾の劃花ではなく、製作の際の疵痕であろう。

灰白碗の名は広島県福山市草戸千軒の報告（註1）中に始めて見る名だが、それによれば広東・福建省あたりの窯の産と見なされている。その資料を村上氏から贈られたがこれと照合するに、全く同種のものと見ていいであろう。時代は宋と考えられる。第3区—70cm出土。

青磁（第20図4、図版第19中・下のそれぞれ上左端を除く）

4は劃花文碗の破片で胎土灰色、3線の櫛描きによる縦区劃と、その間に配される単線の渦状花文とが刻され、見込み円圈を劃して一段と高く、透明で貫入ある黄がかったオリーブ色の釉が

註1 村上正名『草戸千軒町』（『福山文化財シリーズ』No 6 昭和42年）

薄くかかる。南洋セレベス出土のもの（註2）と同類で、草戸千軒にも出土例が知られている。時代はやや下って南宋～明初ごろか。おそらく中国南方の民窯の所産であろう。第3区出土（図版第19中・下の下右）。

図版第19中・下の下左は、胎土が青味を帯びた灰色の磁土で、いくらかかせてはいるが美しい灰青色の、貫入とまでは言いにくい氷裂文風の皺をもつ釉が内外面にかかる。外面に太い縦凹線が見えるので、しのぎ手蓮弁文の碗か鉢であろう。これは南宋龍泉窯と見て誤りなかろう。第3・4区中間出土。

図版第19中・下の小破片4個のうち、上の右から第2のものを除き、大体同じ系統のものと思われるが、胎土は灰色の磁土で、明るい淡青色からやや灰色を帯びる暗青色のものまで、色調は多少異なるが、ともに透明で薄い釉がかけられ、細かい貫入がはいっている。4とともに、一見珠光青磁によく似た感じだが、おそらくはやはりどこか中国南方の産であるまいか。

ところが残るひとつの上右第2のものは、ひとり全く異った胎土で、1部鼠色を呈する部分も交りはするが、おおむね黒灰色であり、しかもかなりの砂粒を含むばかりでなく、充分には磁化していないのである。釉薬やや厚くかかり、胎土厚3mmに対し、釉厚0.6mmから1mm程度で、本遺跡出土青磁中、他の例の紙のような釉の厚みよりは、かなり厚いのである。釉色全く透明ではないが暗青色で、やはり貫入がはいっている。胎土が黒いと言っても、南宋の官窯郊壇窯の器とはもちろん違う。黒胎は龍泉窯にもあると言われるが、とにかくやはり南方系統民窯の産であろう。小片4個ともに第2区出土。ほかに前3者同様の破片が第7・8区からも出ている。

染付合子（20図6・図版第22中右）

胎土は淡い帯黄灰色の陶土でほとんど磁化せず、透明で貫入のある灰白色釉に、やや燻んだ藍色でぼやけた唐草文を描く破片で、腰が張って屈折している点、合子の身の破片と思われる。ぼやけた唐草文が盛んに行なわれるのは、従来いわゆる安南手と呼ばれる種類に普通のことであるが、実は明初宣徳ごろの景德鎮窯の産だと言われている。『南海古陶瓷』の図版第29を参照せられるとよい。

鉄絵鉢（第20図5、図版第22中左）

胎土がきわめて良質な灰色の半ば磁化した土で、若干同質ではあるが淡黄褐色の微小塊や白い砂粒等を含む程度なので、これも中国産ではなかろうかと考えられる。内外面ともに無色・無貫入の透明釉をかけ、一部黒褐乃至褐色の鉄釉を以て描いているが、あまりにも小片なので、何が描かれているのかはわからない。時代産地ともに不詳だが、中国窯だとすれば、宋まで遡るだろうか。しかし、あるいは案外わが国の江戸初期ごろの美濃窯の産かもしれない。

これが小さいながらほぼ円形の破片になっているのは、後述柿釉の同様な破片から比較推定す

註2 伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』（昭和16年重版）

ると、偶然かような形になっているのではなく、意識的に打ち欠かれたものと思われる。整形のための打ち欠きは、大体交互に両側から施され、従って側面は三角形の交互連続だと言ってよい。江戸時代になってからのメンコのたぐいか。第7区出土。

白磁

胎土全く磁化した白色で、釉色もまた帯青白色である。器胎きわめて薄く、高台からの立上りが低いので、皿であろう。清代の景德鎮窯か。第4区出土。

平瓦（第16図14・図版第20上左）

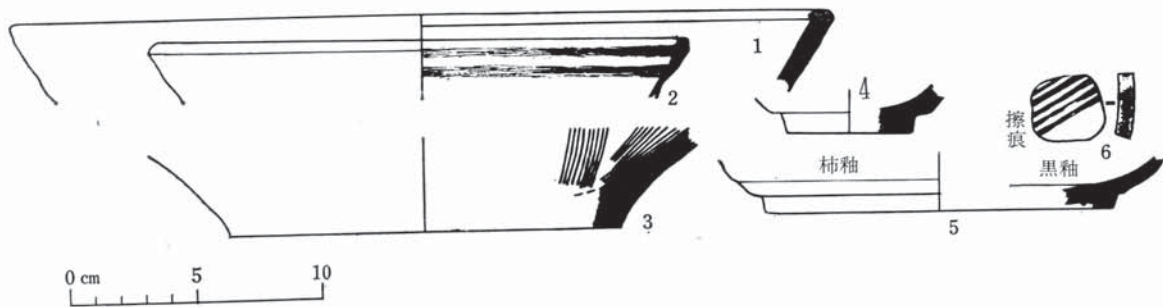
青灰色の須恵質の胎土の中に、白い土が薄層になって交っているもので、表裏ともに何の印痕もない平滑のもの。時代不詳であるが、平安を遡ることはあるまい。2個ともに第7区出土。

常滑焼甕（図版第20下右）

肩に格子目文を印した破片（第3区出土）や、常滑特有の折曲げられて厚い帯状口縁の部分（第6区出土）などが出ているが、数が少ない。後者の口縁帯と頸部とは密着しているので、時代は室町に下るであろう。

天目釉茶碗（第21図4、図版第21下）

胎土は淡褐色で陶質、天目特有の黒釉を内外にかけている。図版に見える第7区出土の例は、高台脇で釉が厚く溜まり、素地を露出している。兎毫盞とは言えないにしても、垂針状の結晶が



第21図 播鉢・天目釉茶碗・柿釉鉢等

全面に見られる。

しかしその下に示した例（すなわち第21図4、第5区出土）はほとんど高台まで釉が垂れている。その他第5・6・9区などから同じ天目の小片を出している。ともに中国産ではなく、瀬戸の室町ごろの所産であろう。

柿釉鉢等（第21図5・6、図版第21下・22上の左）

柿釉を施すものも、本質においては前者と異らないので、部分により黒色を呈することがあるし、胎土もほぼ同一である。

5は高台脇まで釉をかけ、内面も黒色釉がかかるが、見込みだけは素地のまま残している。第8区出土。

6は外面の1部に蛇腹状の線条を重ねており、そして黒釉がおそらく流下するのであろう、斑状に残るのが見えている。この破片は先きの鉄絵小片のように、丸く整形された上に、さらに砥で磨ってかどを取り、滑らかに仕上げる。メソコなどに再生利用されたものであろうことが、一層明確であるのは、きわめて興味深い。第8区出土。

ほかに第6区出土の、外面だけに柿釉をかけ、内面は黒く発色した素地のままの破片があり、壺の破片と思われる。以上ともに江戸初期ごろの瀬戸産か。

飴釉尾呂窯茶碗（図版第22上の中）

胎土淡黄褐色で暗い黄褐色釉をかけた直口の碗。尾張尾呂窯の産で、桃山～江戸初期のものとされる。第3・4区中間出土。

志野白釉碗（図版第22上の右）

胎土同上、わりに薄く志野白釉をかけている。貫入あり、江戸中期以降か。第7区出土。

擂鉢（第21図1～3、図版第22下）

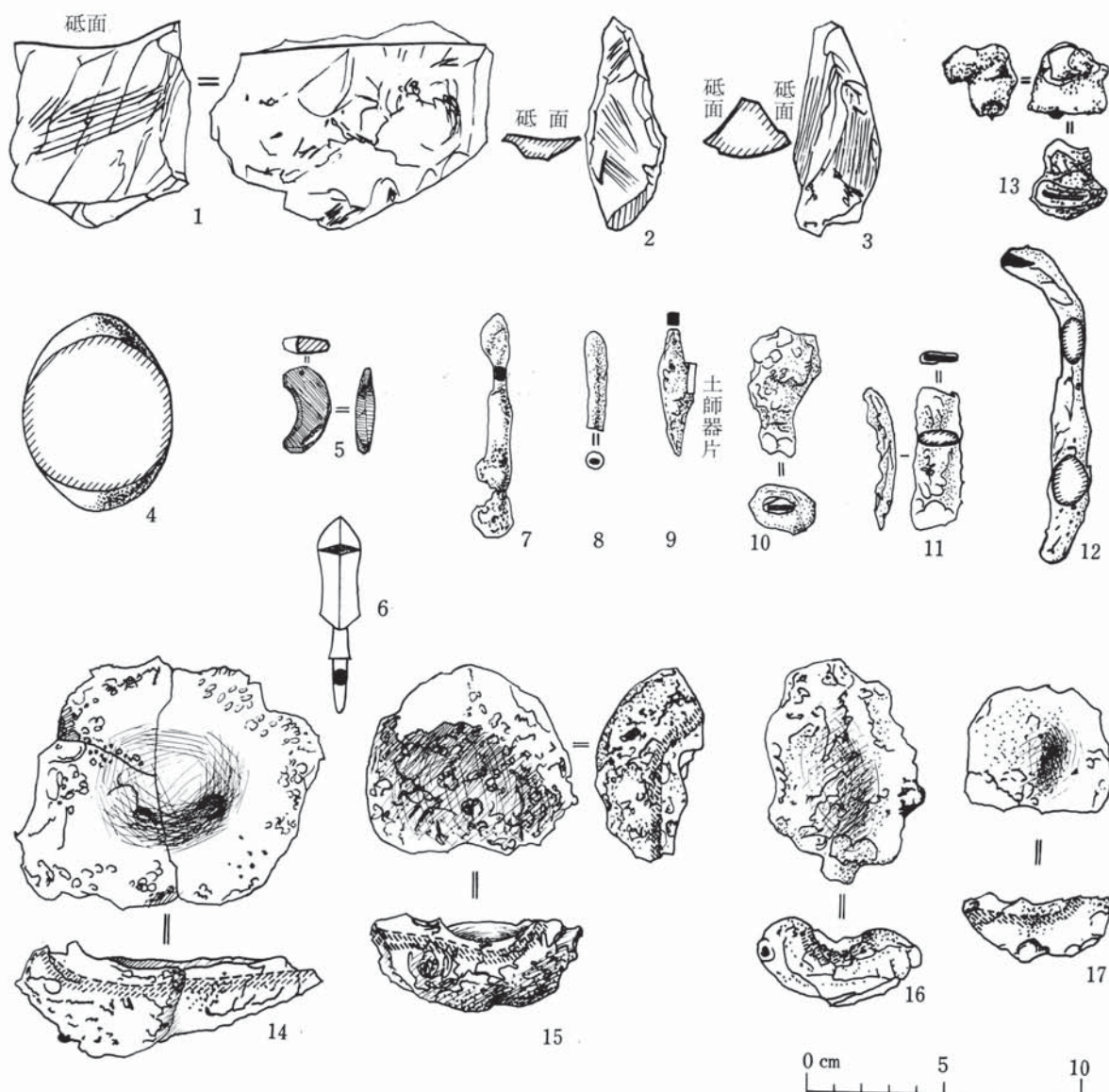
1・2は内反する口縁部で、全く失透性の褐色釉を薄くかける。3は底部、内外側壁は同じ釉をかけ、底面は素地のまま残す。内壁の条線9条で、条列と条列との間隔はあまり粗ではない。江戸初期ごろか、すべて第6区出土。

ほかに黄瀬戸釉の小片も、第4区から出土している。

第 9 章 遺物(5) 石器・青銅器・鉄器・鉄鋅

砥石（第22図1～3、図版第7下右）

第22図1は黄色と灰色との互層をなす粘板岩製で、もとはもっと大きなはずの砥石の破片である。上面だけがよく磨りへって凹んでおり、図の左に見える側面に、右上から左下にかけて、鋭



第22図 砥石・磨石・石製模造品勾玉・銅鏃・鉄器・鉄鋅

い線条が平行して8～9条ばかりも刻まれていて、これが砥石のものの側面の姿を残していることを知る。厚み6.5 cmばかり、しかし他の側面はことごとく破碎して原状をとどめないで、この砥石本来のものの形はよくわからない。これは黄名倉で的一种であろう、仕上砥である。第3区出土。

2（図版第7下右のうち下の左）は表面褐色に風化しているが、実は青黒色らしい細粒の砂岩製で、細長い裂片の浅い凹面を砥として用い、その周辺もまた平行線条を印して、研磨に用いたことを知る。第7区出土。

3(同じく下の右)は、前者よりわずかに粗い砂粒より成る黄褐色砂岩製で、これも自然の細長い礫の浅い凹面を選んで研磨の痕を残し、もうひとつの平らな面にも、平行線条が一面に見えて、やはり砥石として、利用されていたことを知る。第9区出土。2・3ともに荒砥で、削平に用いられたであろう。

1は別として、2と3とは、その大きさや形から、当然手持ち砥石であることが考えられる。1は遺物群Aに属し、須恵器や土錘と共存関係を認めてよいようであるから、古墳時代として差支えなかりうが、2・3はよくはわからない。しかし古墳時代でないとしても、中世を下ることはないであろう。

磨石(第22図4、図版第7下左)

第22図4は花崗岩で、断面の丸い楕円球形に研磨されている。自然の礫のままでなく、明らかに磨石として、何等かの用途に供せられたものと思われる。第5区出土。遺物群Bとは少し離れているが—80cmの深位なので、動いていなければ、古墳時代の須恵器直前のころのものと考えられる。

図版第7下左の下の一層長い楕円形の石は、輝緑安山岩質らしく、断面丸みを帯びた菱形に近い不整形で、自然の石塊に近いが、全体に研磨されてあまりにも平滑な点は、単に河原石と解し去ることが不可能のように思われる。第5区遺物群Bのうちにあり、いくらか赤く焼けた感じの部分と、別に鉄分で汚染せられた部分とがある。時代は前者同様と考えられる。

石製模造品勾玉(第22図5、図版第13中右)

暗緑色半透明の蠟石製で、両側面は凸面に磨り、背を薄く腹を厚くし、頭の穿孔部は最も薄い。木口は背腹の厚いところは山形に両側から、頭の薄いところは垂直に、磨って成形しており、孔も両側から穿って中央で合致させているので、両面同じ大きさである。全面に粗い研磨の条痕を残すところを見れば、砂岩のように粒子の粗い砥石にかけたまま、仕上げを全くしていないことを知る。

祭祀用品であることは、今さら説くを要しないが、これが第9区遺物群Cの中央にありながらこれを囲むものは土器の小破片ばかりであり、わずかにやや離れて70cmと2mの距離に、小形丸底壺各1個を、それぞれ前者は仰むき、後者は底を上にして、ほぼ同一深位の遺物として発見したにすぎない。従ってこれを祭祀のため埋納されたもの、または祭祀の場にそのままある状態のもの、という風に考えることは認められず、むしろ祭祀後の撤下したものを廃棄埋没したと見る方がよいであろう。

銅鏃(第22図6、図版第13下)

平根で柳葉形、中央に稜を通し、断面長菱形、逆刺はなく、しっかりした篋被を具え、茎は断

面正円形で、古墳時代銅鏃としては典型的なものである。

—30cmの深位からの単独出土でほぼ水平に横たわり、特に変わった出土状態ではない。付近からは弥生後期土器乃至土師器が出てはいるが、共存関係を示すものとして取上げるほどのものもない。第10区出土。

普通古墳時代の銅鏃は古墳から出土するのを例として、集落跡などから出る場合は、決して多くない。しかも愛知県ではこの型式は全く初見であり、岐阜県長塚・静岡県松林山等の古墳からの出土が知られているにもかかわらず、かつて県内に見ることのできなかったものが、集落跡から発見できたことは、まことに興味深い。

ここに古墳があったかどうかは、もちろんわからないし、特に古墳関係を意味する——たとえば埴輪の類のごときは1片も見出さなかったので、以前あるいは古墳がここにあって破壊され、その結果、第2次的にかような状態で埋没していたということが言えるかどうか。

鉄器（第22図7～13、図版第13中左）

鉄器と思われるものはすべて棒状のものばかりで、そのうち7～9はそれぞれ断面が円形・楕円形・正方形のものであり、釘または鏃の茎と思われるようなものが多い。9は土師器の小破片が銹着いており、第3区の大きな柱穴の中から出土した。7は第9区遺物群C、8は第9区出土。10～13は断面きわめてひらたい長方形の器である。11・12はそれぞれ多かれ少なかれ彎曲しているが、それがこれらの器の本来の姿なのかどうかは、ともに両端が折れていて、器の不完全な現状ではよくわからないが、11は正円に近いカーブだし、12は長楕円の一部分をなすようなので、あるいはこれが、その器形をよく示しているのかもしれない。器形が明確でない上に、時代もよくわからないというほかはないが、10のような刀子らしい例もあって、古墳～中世の線は動くまい。

10は第6区、11は第7区、12は第9区、13は第1～3区出土。

鉄鏢（第22図14～17、図版第23）

鉄鏢は14が最大で長径17cm、最も小さい17が5cmだけれども、完形のものはみな掌を凹めたように、必ず1面は凹、他面は凸面をなす。全面銹に被われるが、14の凹面だけは、鉄が黒色を呈して露出している。すべてところどころに大小多数の気泡孔が開くが、ことに凸面において甚しい。14は第2区、15は試掘区、16は第6区、17は第7区出土。

ほかになお小破片が第7区に1個、第6区に2個出土し、また釉葉状のきわめて軽い暗緑色の気泡を多く含む不整形の塊も、第6区と第3・4区中間とから各1個出土している。

なお試掘区から、スサ入りの焼け固まったような粘土塊が出ていて、タタラの1部分かどうかきめられないとしても、その可能性がきわめて多いと思われる資料も、出ていることを付け加えておく。

かように鉄鋅やことによく熔けた釉塊状の鋅がよく出て、また木炭粉もしばしば散布しているところを見ると、当然ここに野タタラが設けられて、製鉄か鑄造かを明らかにしがたいとしてもとにかく鉄を熔かすことを業とした者のいたことも、明らかになったと言えるのである。ただ時代をはっきりとはきめにくいけれども、古墳時代でないにしても、中世を下ることはないであろう。14の出た真下に無釉陶碗を含む大きなピットがあったことは、中世ことに鎌倉時代以降と考えていいのではなかろうか。

分析のため、試料を14から取って得た結果は、次の通りである。分析は名古屋市工業研究所に依頼した。

まず分光分析の結果からあげると

元 素	Fe (鉄)	K (カリウム)	Na (ナトリウム)	Ca (カルシウム)	Si (ケイ素)	Al (アルミニウム)	Cu (銅)	Co (コバルト)
%	++++	+++	+++	+++	++	++	+・	t

B (ホウ素)	P (リン)	Mn (マンガン)	Sn (スズ)	Mg (マグネシウム)	Mo (モリブデン)	V (バナジウム)	Ti (チタン)
t	・	+	・	+	t	t	t

Ni (ニッケル)	Cr (クローム)	Sr (ストロンチウム)	Ba (バリウム)	Li (リチウム)
・	t	・	・	・

(註) +++++は10位の数、++++は1位の数、+は0.1位の数、・は0.01位の数、tは痕跡を表わす。

次にX線回析の結果、銅は酸化第一銅の形で含まれ、鉄は非晶質の形であることが知られ、また化学分析の結果は

成 分	全 鉄	無水ケイ酸	酸化アルミニウム	酸化カルシウム	酸化カリウム
%	48.8	11.7	11.2	4.2	2.6

酸化ナトリウム	酸化マグネシウム	酸化第一銅	炭 素	硫 黄
0.9	0.7	0.3	0.06	0.04

そして、全体を総合しての判断はむづかしいが、長年土中にあることによって水分の影響を受け、磁性を失った非晶質の鉄の化合物ができ、そのまま固まったもので、のちに高熱を受けていないという状態と見られ、多孔性の外形の観察とも合わせ考えると、やはりこれは明らかに鉄鋅で、あるいは赤鉄鉱をタタラで製鉄した鑄鉄の残りかすを捨てたものではなかろうか、との同所鈴木孝氏の意見が添えられている。ここに改めて鈴木氏の厚意に感謝の意を表したい。

第 10 章 考 察

最初にも述べた通り、今回の発掘は、遺跡全体としては、そのごく 1 小部分について行なわれたにすぎず、ここに得た結果自体は事実であるにしても、今試みようとする考察は、それが全体に通じて言えることかはわからないだけに、一応の見通しをつける程度にとどまって、確定的な結論というほどのものではない。将来諸般の調査の進行に伴って、補訂の必要を生ずることもあろうことを、あらかじめことわっておきたい。

今度の発掘で知られた諸事実のうち、特に考察を加えて、少しでも明らかにしておきたいことは、おおよそふたつにしばられるであろう。

ひとつは比較的多く土師器—ことにいわゆる S 字状口縁土器の類を出して、関係共存遺物を介して、若干土師器の編年に寄与するところがあり、甚だ貧弱な尾張の土師器文化の研究を少しでも進めたいという点と、もうひとつは古代末から中世にかけての、緑釉・中国の白・青磁類を出すという遺跡の性格を明らかにしたいという点とである。後者に付随して特に津島市としては、一体津島の中心をなす津島神社との関係はあるのかないのか、あるとすればいかなる関係においてであるかを知りたいと、強く望まれるのも至極当然なことであろう。それも遺跡の性格を明らかにすることにおいて、おのずから解明されて行く——いな、かように考えることもできるのではないかという私見を披露してみたいと思う次第である。

さて第 1 の土師器を中心とする編年の問題であるが、何分先にも述べた通り、わずかな遺物群をほかにしては、あまり出土状態がよくなく、すべての資料をこれに利用するというわけにはいかなかった。

もちろんかようなところで、弥生式土器と土師器との区別の根本問題を論じたりするわけにはいかないから、先の遺物の記述にも、やむを得ずきわめて常識的に取扱ったわけであるが、弥生文化の生活内容が、それまで家庭生活的と言おうか、わりに土器をも美しく飾って、楽しんで暮らしていたと思われるような状態から、にわかに集落立地もしばしば全く異った地点を新しく選び土器は著しく貧弱粗雑になって、生活は混乱して精神的余裕もないような状態に陥っていると見受けられるのは、大きな政治力で攪乱され、混迷した状況で彷徨していることを表わしているのではないであろうか。

少なくとも地方では、弥生文化から直ちに高塚古墳を作る時期までに、そうした従来の伝統が破壊され、新しい躍動がはぐくまれていたという短い前駆の時期があったのではなかろうか。

パレース式の丹彩壺もたしかにあとまで残るが、いわゆる柳ヶ坪型壺の行なわれる時期がそうであろう。この壺の口縁の特徴ある形態は一般に近畿にも見られる。しかしパレース式からの移

行も、たしかにこの東海地方では、きわめて自然かつスムーズである。

従ってS字状口縁土器、ことに今回新しく「埋田型」と名づけた、S字状口縁で台に装飾的刷毛目文をもつ甕が、はたして口縁形態の類似を以て、これらの壺と同時期のものと見てよいかどうか、まず問題となるわけである。

いわゆるS字口縁土器は、近畿・北陸にもあるにはあるが、ことに東日本に広く分布するという点で、この東海地方で発生したものと考えられているようである。しかしそれはまだ近畿におけるその変遷を明らかにしない限り、よくはわからないことであろう。大参義一氏の論考(註1)から引くと、近江大清水や和泉石津の例は、胴部が通例の単なる斜行刷毛目だけで、特別に埋田型のように飾られず、埋田型が胴部のみならず、口部・台部をも飾ることは、パレース式壺等において、東海地方のものが近畿のものよりも美しい点と共通していて、その美しく飾るという伝統がここにまだ残る一あるいは復活するのを見るわけであるが、大変興味深いことである。

従ってS字状口縁それ自体の起源如何を、今論ずるわけにはいかないにしても、少なくとも埋田型がこの東海地方で新しく産まれたことだけは、まさしく確実と考えていいだろう。

第14図1の埋田型の標式となるものは、大参氏が分類せられた(a)・(b)の2類のうち、口縁は(a)類の特徴に、台部は(b)類の特徴に数えられている両者をあわせもつので、その過渡期的なものなのかも知れないが、これがともかく美しく飾られる点でも、柳ヶ坪型壺に組合わせることが可能のようにも考えられる。

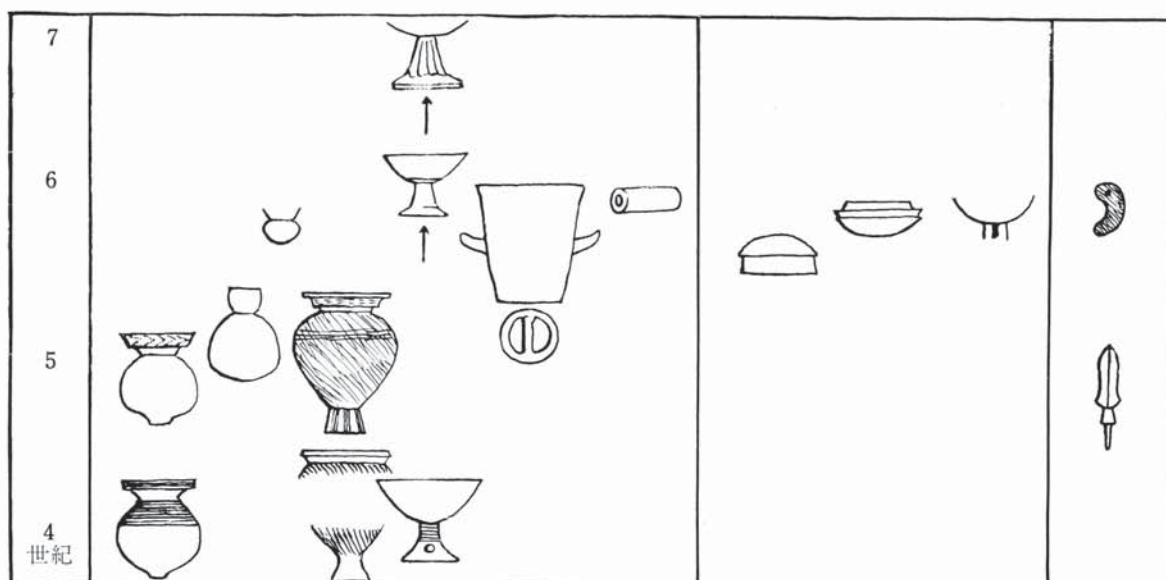
もし、まさしく柳ヶ坪型壺と埋田型甕とが組合わせになり、しかも絶対年代は古墳時代としても、その生活内容は、土器の装飾性がなお盛んであるという意味で、前古墳文化または非古墳文化、ということも考えられる。ことに分布に相違の問題がありはしないか。これを解決するには確実な例を、さらに多く集積せねばならない。

さて、それでは実際の出土状態ではどうであろうか。第23区は、主として先の第6図の各遺物群出土状態から、深位をもととして整理してみた編年模式図である。

これによれば第10区において、銅鏃と大体同じ深位から出た埋田型甕台部と柳ヶ坪型壺とは、まず同時期と見てよいだろうが、わずかな例だから決定はできまい。しかしもし全く時期的に一致し組合わせられることが判明決定したときは、型式名を統一する必要があるだろう。

また一方第5区では、パレース式壺や有孔の平行線文高杯などにはおくれるだろうが、土師器の上げ底細頸壺とは、同時期ということが考えられる。須恵器出現より早いこともまた確かであろう。従って5世紀にあてるとは問題ないとしても、前半に限ることなく、後半までくらは余裕を見ておいた方がいいだろう。

註1 大参義一「S字状口縁土器考」(『いちのみや考古』No.13 昭和42年)



第23図 埋田出土遺物編年模式図

小形丸底壺はこの地方でどこまで廻れるかわからないが、これらにおくれて続くのではあるまいか。ここで祭祀が始まったとも言われまいが、少なくともその形式が一定して固まって来た時期なのであろう。これと石製模造品とが同時期とすれば、いくらおそくとも6世紀の前半くらいに当てられようか。土師器高杯はもはや脚部が屈折し、ここでは須恵器もそのころまでには現われていて、土鍾・甕も用いられている。

以上の事実から、さらに型式学的に敷衍して考えてみると、弥生式の最末端はやはり少なくとも4世紀ごろまでであろうし、同じ土師器でも甕の口部や高杯の脚端に、須恵器の影響の見えるものなどは、もちろん6世紀にはいつてからのものであろう。また脚を稜に削るものには、さらに遅れて7～8世紀にも下ることがあるであろう。

しかし甕でも、頸部の屈折強く、口部水平に張り出す奈良平安ごろにまで下ると考えられる種類（註2）は、まだ埋田では見出していない。

以上甚だ不十分な資料で到底満足すべき結果ではないが、一応のまとめとして、将来の調査にそなえ、補訂を期することとしたい。

次に第2の問題として、遺跡の古代末から中世にかけての性格はどう見られるだろうか。

まず比較的特殊な遺物として、緑釉陶や白・青磁類等に着眼するならば、一般には都・官庁・大社・大寺・長者屋敷・港などに限られ、尾張でもそれほど多いものではない。将来調査が進むにつれて、発見例は増加するだろうが、それにしてもその時代の遺跡ならどこでも出るかという点で、決してそういうものではない点で、ある程度遺跡の性格が知られるはずである。古窯跡は別とし

註2 拙稿「万場垣内遺跡」（『矢作ダム水没埋蔵文化財調査報告』 昭和43年）

て、今これを表に示すと次のようになる。

緑 釉 陶 出 土 地	器 形	胎 土	釉 色
名古屋市昭和区天白町大字八事字富士見ヶ丘3 八事一堂址（註3）	香 炉 三足皿 碗	硬・軟 薄・鼠	淡 緑・濃 緑
稲沢市松下町字随所（註4）	鉢?	黒 硬	濃 暗 緑
津島市埋田町3丁目25ノ1 埋田遺跡	皿・碗	硬 灰・白	濃緑・淡黄緑

尾張の緑釉陶の窯は、篠岡5号・鳴海N45・N46・N49・N50号が知られ、篠岡のは胎土硬質で黒色を帯び濃緑釉、鳴海のは胎土やや軟質で黄色に近く、淡緑釉だといわれる（註5）。してみると、埋田のは鳴海古窯の産と見ていいであろう。

八事の堂が寺であることは問題ないが、随所遺跡がはたして国衙または国学関係なのか、それとも尾張大国霊神社あるいは神宮寺関係なのかよくわからないけれども、同地には、土師器・青白磁・灰白磁・青磁・灰釉陶も出れば、また別に、礫積みの中世古墓では印花三巴文古瀬戸骨壺（底に穿孔あり）もあったという。

また白・青磁類については

出 土 地	器 形	胎 土	釉 色	文 様	窯	時代
知多郡横須賀町字前畑 前畑遺跡（註6）	鉢	灰	淡 青	花(内)	竜泉	元
名古屋市南区見晴町 見晴台遺跡（註7）	鉢・碗 小 壺	〃	〃・〃 オリブ	無文 櫛描(内・外) 花文(内)	〃・ ほか	宋・〃
名古屋市緑区鳴海町字清水寺 清水寺遺跡(註8)	鉢	〃	灰	無 文	〃	元
〃 瑞穂区瑞穂運動場 大金寺跡（註9）	〃	〃	オリブ	蓮弁(外)	〃	宋
西春日井郡清洲町五条川底（註10）	〃・碗	〃	淡青・灰	金玉満堂 (内)ほか	竜泉	宋～明
稲沢市松下町字随所（第24図）（註11）	〃・〃	〃・白	灰白・〃 〃・オリ ーブ・黄	無 文 蓮弁(外) 花文(内)	〃・ 景德鎮 ほか	宋～明
津島市埋田遺跡	〃・〃	〃・黒	〃・〃 〃・〃	無文 渦文(内) 蓮弁(外)	〃・ ほか	宋～明

このうち前畑は貝塚出土であるから、港とは思いますが、確実には不詳、見晴台遺跡は笠覆寺関係、

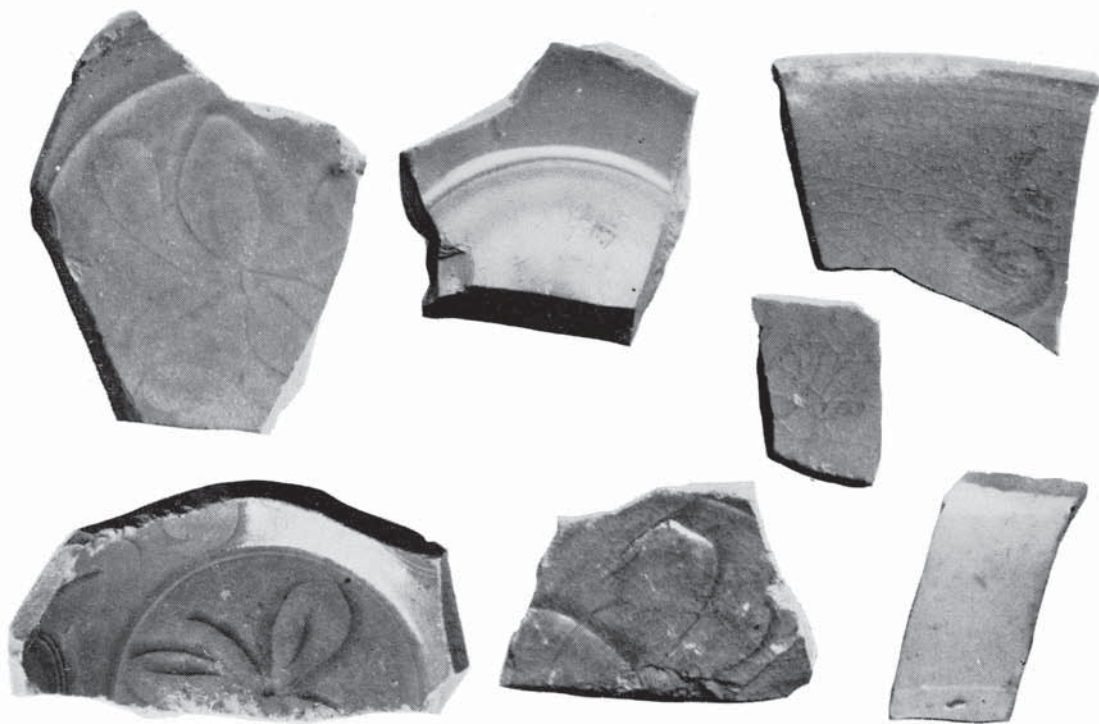
- 註3 植崎彰一『猿投窯』（陶器全集31 昭和41年）
 註4 筆者の資料による。なお増子康真氏によれば、名鉄国府宮駅東からも同様の破片が出土しているという。
 註5 山崎一雄「篠岡出土の緑釉および灰釉陶片の化学的研究」（『愛知県知多古窯址群』付篇1 昭和35年）
 註6 飯尾恭之・石口勇「前畑遺跡EH貝塚」（『名古屋考古学会会報』69 昭和43年）
 註7 筆者『見晴台遺跡第IV・V次発掘調査概報』（昭和43年）
 註8 飯尾恭之氏の資料による。
 註9 北村斌夫氏の資料による。
 註10 鈴木鎌造氏の資料による。
 註11 尾張大国魂神社宮司田島仲康氏・津島神社宮司伊藤晃雄氏および筆者の資料による。

清水寺は包含層出土で、寺があったのか、港に近いということなのか不詳だが、大金寺跡は実は井戸遺構だが、「大金寺」墨書銘須恵器が出ていて、寺関係であることは明白、五条川底は清洲（これも古駅萱津の上流に当たり、もとは港町であったが、のちに政治の中心ともなったのであろう）、随所は前記の通りだから、いずれにしろ一応尾張の政治の中心に当たる土地であることにまちがいはない。

見晴台・大金寺跡の青磁は、前者は南宋と言われる珠光青磁などだし、大金寺跡のも高麗青磁と見る人もないではないが、実は薄い上手の竜泉窯らしい蓮弁文鉢で、随所の灰白磁（第24図下右）が、草戸千軒の灰白磁と全く同一の口元（くちはげ）の碗らしく、竜泉窯蓮弁文青磁碗とともに、これも宋代にはいるだろう。

しかしその余の前畑・清水寺・清洲五条川底・随所の青磁はみな底部の破片であるが、有文・無文を問わず器胎きわめて厚く、1・3cm以上のものばかりで、元代に下るものではなかろうか。

稲沢の随所遺跡が、埋田遺跡と同じく緑釉も白・青磁も出しているが、随所の位置する国衙付近とこの埋田の位置する津島とは、意外に近いばかりでなく、その両地を等しく貫通している旧三宅川の舟便に頼ることによって、両地は簡単に直結される交通関係にあることは、すでに井関弘太郎氏の説かれるところである（註12）が、まさしく律令時代の東海道は、伊勢桑名郡から水路を経て、尾張へはといったとされていて、尾張とりつきの「馬津」駅をどこに当てるかは困難としても、藤岡謙二郎氏もまた、臨海諸国には必らず国津ともいうべき、国府の外港が存したことを指摘しておられる（註13）。



第24図 稲沢市松下町随所出土灰白磁（下右端）・青磁

註12 井関弘太郎「生活と自然」（『日本の考古学』Ⅶ 歴史時代（下）昭和42年）

註13 藤岡謙二郎「水陸交通」（『日本の考古学』Ⅶ 歴史時代（下）昭和42年）

そこで第1図の地図をよく観察すると、現在三宅川は、勝幡において改修された日光川に流入しており、古くは、旧天王川に落ちていたというが、さらにそれ以前には、三宅川の方の先を追うことによって、図中点線で示した通りに流れて、今の善太川のあたりに落ちていたことが明らかであろう。

善太川の上流は、今は塞がれているが、勝幡の名も、もとは本来今も小字名に残る「塩畑」に、織田氏居城以後吉字をあてたもので、その南から「小津」・「河田」・「古川」、そして相対する東岸には、さらに下流にかけて「越津」・「白浜」の字名が示す通り、そこには川の流れのかつて存したことを知る。古川は寛文6年(1666)新川の開通によって新田となったというが、「埋田」の字名は河田・古川と異り、寛文村々覚書にはまだ出て来ないので、その以後の命名になる新しい地名であることを知るが、旧川止ののちも、それほどに低湿の地で、埋立ててのちようやく田として利用でき、人も住むようになった地形であったことを知るのである。埋田の南東に隣る「新開」は、またそののちの名なのであろう、これまたよくその同じ事情と地形の状態とを物語る地名と言える。

埋田の北約2 km、佐織町諸桑の北の田の中から、天保9年(1838)閏4月3日に、長13間2尺、巾7尺ばかりあって、中央で継いだ楠のくり舟を出した(註14)ことが知られ、また地点は異なるかもしれないが、やはり諸桑のうちの北の方の字中江128ノ1で、明治28年灰釉鉢で蓋をした室町時代の常滑甕2個と、古瀬戸三耳壺1個とに、神功開宝・隆平永宝・五銖や唐宋金元の古銭を満たして発見せられたこと(註15)などは、ここらあたりでも、少なくとも室町もあまり遅くないころには、舟運の便と富裕な集落と、そしておそらくは盛んな交易が、行なわれていたであろうことを知るのである。

諸桑の東にも低地が南北に続いていて、もうひとつの目比川の広い川筋が別にあったかもしれないが、とにかく諸桑に舟が着いていたことだけは、これで明白であろう。そしてその上流三宅の地に古来屯倉があり、埋田と言わず、諸桑と言わず、まさしく旧三宅川沿岸一帯が延々と続く港町であったであろうことも、実際に証拠立てられるわけである。

一方伊勢湾口の方を見ると、図中横線を以て劃した一帯は、江戸以降新田として干拓によって

註14 『尾張志』海東郡の条。しかし『尾張名所図会』後編によると、図入りで、天保9年(1838)4月、川ざらえをして、満成寺の裏で、3箇所をかんぬきでつないだ樟の丸木舟の中から、大網のいわ(土鍾)や古瓦・古銭その他異形の珍器を多く出し、さらに付近から木造仏像をも掘出したという話になって、出土品目が豊富になっている。いずれに信をおくべきか、決しがたいが、とにかくそうした発見があったことは、注意してよからう。

註15 『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第16 (昭和13年)

開かれた土地なので、今の場合これは除いて考えねばならない。さらに時代が遡れば遡るほど、海岸線はより北方にあったと考えてよからうが、先に挙げた「白浜」の地名をはじめ、遺跡（●印。ただし遺跡の表示は、国の文化財保護委発行の『遺跡地図』に示されるもののほか、その後の知見にのぼったものをも加えてあるが、いずれも発掘調査を経ていないので、再検討を要するものが多い。）や、式内社（**𠩺**印）の分布の状態を見れば、おおよそ、その線が浮かんで来る。埋田南約800mに東愛宕七軒家貝塚、また南西約1.4kmに愛宕七丁目貝塚があるが、埋田では全時代を通じて貝塚を形成していないから、弥生後期ごろにはすでに海岸ではないが、むしろ海岸から奥へは行って、すぐと言うべき旧三宅川口に位置することが、よく想像せられるであろう。

この付近で一番古いのは、弥生中期に始まる寺野遺跡である。もしや寺野から津島の文化が始まったとすれば、これも貝塚は形成していないから、海岸ではなかったであろうが、やはりかなりに近い、少なくとも同様な川口付近の集落であったことに相違はないであろう。

寺野はさように埋田より時代も古く、加えるに寺野では、埋田に貧弱な須恵器が大変に豊富であるのに、平安以降になると、にわかにたとえば埋田にその繁栄を譲るように見えるのは、単に集落の盛衰交替という以上に、あるいは一部の人口移動さえも行われたかもしれない。また一方寺野に緑釉陶・青磁類や鉄鋳などが全く見出されないということは、平安以降の海岸線の南方進出以外に、集落の性質の相違をも考えねばならないのかもしれない。

そして埋田では、三宅川の川口の進出につれてか、遺跡の堆積が南へ移行し、さらに漁業はもちろん、製塩も行なわれ、鋳物師または鍛冶の居住も推定せられれば、一方少数ながら平瓦の存在は、商品でなければ、仏堂または官庁の存在も考えなければならず、集落の性格はますます複雑性を加えるが、そうすると規模の大小は、とても比較にならないかもしれないが、きわめてよく似た時代と性格の遺跡として、容易に浮かんで来るのは、かの有名な草戸千軒（広島県福山市）の遺跡である（註16）。草戸は瀬戸内海における潮待ちの港として存立したようであるが、何も遠方の遺跡を例に引かなくても、伊勢湾には松阪市の海岸に松ヶ島（もとの細頸港）遺跡の好例がある。ここもおびただしく土師器から青磁や天目に至る陶磁器・石塔その他各種遺物を出し、松阪城の前身もここにあった中世の要港である（註17）。この地方での類例は、まだ全く未開拓であるので比較しにくい、埋田は国衙地方に対する外港のひとつということで、この種研究の先鞭をつけたことになる。将来はこの種海拔0m地帯の遺跡をも調査の対象とする「港の考古学」も重視せられねばならぬことを痛感する次第である。

註16 村上正名『草戸千軒町』（『福山市文化財シリーズ』No.6 昭和42年）

註17 穂山泰次「伊勢天目古窯跡発見記」（『陶説』32 昭和30年）

さて今度新しく刊行せられた『稲沢市史』によれば、『甲斐国志』を引いて、富士山に鉄仏の十一面観音像があり、「尾張国海西郡津島村奉鑄之者也檀那富士大宮司親時願主津島住吉左衛門有久大工河内□村□左衛門尉□□浅間嶽于時明応二癸丑年五月十六日」との銘があると見え、また新井喜久夫氏も「尾張の鉄仏」（註18）において、この十一面観音と、ほかにもうひとつ大日如来像の存在を記されているので、その原拠を求めて、誤字が『甲斐国志』より少ないと言われる岩瀬文庫の『北口登山富士参詣名所図会』七（写本、『富士叢書』三十三）を引くと、観音嶽（初穂打場）の少し下に十一面観世音菩薩の鉄像1軀あり、銘にいわく「於尾張国海西郡津嶋村奉鑄之者也于時明応二癸丑五月十六日檀那富士大宮司親時願主津嶋住吉左衛門有久大工河内□村□左衛門尉□□」とあり、またさらにその下の大日室（ここにも大永8年富田庄云々の鉄仏あり）の傍、西にむかい初穂投場の方へ行く途中に大日鉄像1軀あり、銘にいわく「於尾張海西郡津嶋村奉鑄之者也于時明応貳年癸丑伍月十六日大檀那富士大宮司親時願主津嶋□住吉左工門有久大工河内国傘林住右工門」というのである。

明治初年の廃仏棄釈により、現物を見ることができない今日では、この種の文献にたよるほかはないが、言われる通り『甲斐国志』よりも『北口登山富士参詣名所図会』の方がより正確に近いとすれば、ここに「於」の一字が見られるばかりに、これら鉄仏がもつ津島との関係が、きわめて重要なものとなって来る。つまりこれらの鉄仏は、ほかでもない津島のどこかで鑄造されたことが明確にされているからである。この場合鑄物師は、銘文によって河内国傘林住左（または右）衛門（尉□□）であることも明らかであるから、土着の人でなく、鑄物の本場である河内から呼んでことに当たらせたのであろう。「傘林」はあるいは「今林」の誤写で、永正3年（1506）河内国新林住藤原宗次の鑄造の銅仏稲沢市地藏寺の阿弥陀如来背刻銘に「新林」とあるのに当たる名ではあるまいか（註19）。余論ながら『稲沢市史』には、尾張の藤原宗次が、摂津・大和・河内をめぐる結果、その地名を冠していると見たい旨が記されているが、これは同名異人が別々にあり、この例のようにむしろそれぞれ工人を迎えて作らせたと見るべきであろう。

註18 『いちのみや考古』 No.15 （昭和13年）

この論考は、一宮市史編纂室の岩野見司氏の厚意により知ることができた。記して謝意を表する次第である。

註19 このことを坪井良平氏に知らせたところ、坪井氏は今一新相通説は有力と思う。『稲沢市史』所収の海部郡十四山村弥勒寺銅造阿弥陀如来坐像背銘（明応9年1500）の「大工津国今林之住人藤原宗次」の津国今林は、河内の隣りみたいところだから、あるいは河内国とったかもしれない。他の金石文にもこのような例はある。摂津今林と河内新林と同地説は大いに考える必要があると思う旨、書簡を寄せられた。この点『稲沢市史』編者の河内新林＝むかしの丹北郡若林村、すなわち今の松原市若林町とする新一若相通説と合わせ考えたいので、後日のために、あえてともに掲げて併記しておく。

元来津島には延応2年(1240)かと言われる鉄灯籠があり、また海部郡美和町中橋の法蔵寺の本尊で、寛喜2年(1230)在銘の鉄地蔵は、もともと津島に近い同町蜂須賀蓮華寺の門前にまつられてあったと伝えとか、同郡八開村に観音鉄仏のあることを聞いているなど、鑄造による鉄製品の分布を知るが、いずれもともにその鑄造地や鑄物師の名は鑄出されていない。

一方鑄銅の方では、津島市兼平町有の梵鐘が、応永10年(1403)大工沙弥道忍によって作られた旨の刻銘があって、しかもそれはこの兼平町で鑄造されたのだという伝承を伴っている。北東に当たる佐織町地内には、鉄鋅を多く出すとは、堀田喜慶委員の談である。

一体そのほかにも鉄鋅を発見できるかどうか、一切は将来の探査に待たなければならないが、この埋田遺跡の鉄鋅も、これら鑄鉄のわざに全く関係がないであろうか。

いつも述べるように、尾張中世の鑄鉄工業の発達には、原料として木曾川に産する砂鉄等をも利用したせいもあるが、また同時に、むしろ尾張平野の細砂や粘土が、その鑄型の作成に最も適していたからと思われる。もし原料を多量に輸入せねばならぬ、その上に、その巨大な製品を富士山頂まで運搬せねばならぬような場合もあるとすると、やはり鑄物師屋の位置も港町に近い方が便利なのは、いまさら言を待たない。だからと言ってこの埋田の地を、すぐそれら鉄仏の鑄造地に当ててみようと考えては、速断にすぎることもちろんであるが、そのひとつの候補地として、仮にここを当ててみる可能性も、また鉄鋅の出土状態から、鎌倉以後と見てよい点をも考え合わせると、全くないわけではあるまい。

ところで記述は元に戻るが、博多・鎌倉を始め中世の港町の遺跡は、すべて中国宋元明の青磁を出すといわれる。

もっとも国衙が国司の着任を得て政治の中心となっていたのは、せいぜい平安末までのことで鎌倉時代に尾張は美濃の土岐氏の守護のもとにあったと言われる。そうしてみると、随所出土の青磁類には、鎌倉も末に近いものもあろうから、すべてが直接に国衙の関係かどうか疑わしくなると同時に、むしろ比較的新しいと考えられるものは、社寺関係等の交易、または輸送品という性質のものであったであろう、と考えた方がいいかもしれない。しかし鎌倉・博多・草戸等のように宋船が直接来たとは見られず、むしろそこから転送されて来た輸入品を扱ったであろう可能性の方が、確実ではないであろうか。

それはいずれにしろ、尾張特産の陶器を、中央政府はじめ諸国に積出すのに、はたして具体的には一体いかなるルートに頼っていたか、ひとつの久しい疑問であったのだが、たとえばこの埋田などもその一端をになって、水路を利用して運搬交易をしていただろうことが考えられる。ただ埋田だけをとりあげて言わずとも、尾張の西端を占めるここら一帯三宅川沿岸は、そうした水陸交通の要衝として、中世きわめて重要な地点のひとつだったと言えるのであれば、後世江戸にな

ってからの東海道のひとつの傍道のうちで、佐屋が渡船を捨てて陸路に移る重要なポイントであったことと全く同じである。古代・中世における三宅川の水運のことは、すでに述べたが、先学の論を確証づけることができた埋田調査の意義は大きく、関係諸遺跡の調査を誘発する契機としたいものである。この点さらに、この埋田を挟んでほぼ東西に並ぶ点で、同じような意味を持つと思われる寺野一帯および姥ヶ森一帯の調査を必要とするわけで、律令時代の「馬津」駅は、そうした結果始めて適確にあてるべき地を求めることができるであろう。

さてそうしたところであれば、自然悪霊悪疫に対する防禦の信仰も厚くなるわけで、津島神社の勧請・鎮座の理由も、これでよく理解できるのではなかろうか。石製模造品の勾玉が、はたして作物の豊饒を祈ったのか、信州御坂峠を中心に点在する、たとえば中津川山畑遺跡のような祭祀遺跡が、交通安全とともに、やはり悪霊悪疫の防禦をも願ったであろうように、ここでもそうした祭祀が、行なわれたのかは明らかにしがたいにしても、諸所で随時に行なわれた後の祭が、国衙外津の港町としての重要性を増すと同時に、中央から着任する国司らの尊崇により、漸次大社に成長して、津島神社の形が完成するに至ったことも考えられるであろう。

下三宅には、須恵器や奈良時代古瓦を出土することが知られているが、そのほか津島神社はもとその地にあり（今は屯倉社というのがそれである）のち津島に移ったという伝承のあるのも興味ぶかい。延喜式内に加えられず、元禄11年の「七ツ寺記」によれば、保元元年(1156)尾張権守に任ぜられ、勝幡に居住していたと伝える従五位下散位大中臣安長が、平安末承安5年(1175)に寄進した七寺の一切経の奥書や大般若経櫃の銘に、ようやく初めて津島神社の名が見える（註20）というのも、その寄進者の官職や住居の伝承を参照すれば、特に津島の名を挙げた理由がよくわかるように思われるのである。

ところで、この埋田の集落が衰亡するのは、尾張国政の中心も、文明9年(1477)には清洲に移ったという室町中期以後であれば、そのころまでには津島の町も、もはや完成しつつあったであろう。清洲の繁栄は、やはり萱津につながる五条川の舟運の便を得ていたことにあるとすれば、埋田が不振になった原因は、国衙関係の意義がなくなったことと同時に、背後の陸路で直接には清洲、間接には鎌倉街道から遠ざかることになったせいであろう。

埋田では、そのころに集落自体は、別に洪水の痕は認められないから、12世紀以後三宅川自体氾濫の事実は知られるにしても（註21）それが原因であったとも考えられまい。

そしてもうひとつ考えられることは、永正年間に織田氏が、勝幡に築城して、尾張の下四郡（海東・海西・愛知・知多）を支配したというが、のちも長く勝幡は交通の要衝であったことから見

註20 『尾張史料七寺一切経目録』（昭和43年）

註21 前出井関氏論考

ると、勝幡へ移住した者が多かったかもしれないということも、想像が可能であろう（註22）。

一方室町末の引続く戦乱に災されたか、それとも津島の町へでも移住したか、とにかくほとんど無人の境の状態に陥っていたのが、再び集落を迎えるのは、寛文以後の埋田一実は初めて「埋田」と名づけられて以来の埋田、そして今日までの埋田なのである。

九月現在、すでに遺跡の隣地に住宅が建てられつつある。

原始には小集落であったものが、古代中世には要港のひとつとなり、世相の変化につれて衰亡し、ようやく寒村ながら復活して、今はまた一転して、密集した住宅地帯となろうとしている。これが埋田の約2,000年になんなんとする間の歴史なのであった。

そして埋田の歴史を、こうして知ったことは、ただ埋田の歴史を明らかにしたばかりでなく、きわめて重要な古代や中世の政治経済交通産業の各部門にかかわる問題の解決に役立つと同時に、考古学における新しい分野を開いてくれた意味で、どれほど大きな恩恵を永世に施してくれたか、計りがたいのである。この意味で津島市史編纂の仕事が、埋田の調査から始まったことは、偶然の成り行きであったにしろ、大変意義深いものがあると言わなければならぬ。

追 記

名古屋市蓬左文庫所蔵の尾張国古地図のひとつに、元禄ごろの書写だと考えられているものがあり、それを見ると（第25図）、本文中に考察をめぐらした結果、その存在を推定したような旧三宅川に関する水路は、そのまま実存したものとして、表わされており、第1図に記入しておいた推定の位置とは多少異なるけれど、元禄ごろにはとにかく三宅川下流の一分流が「埋田」に当たる部分を通過していることは、これで明確になった。

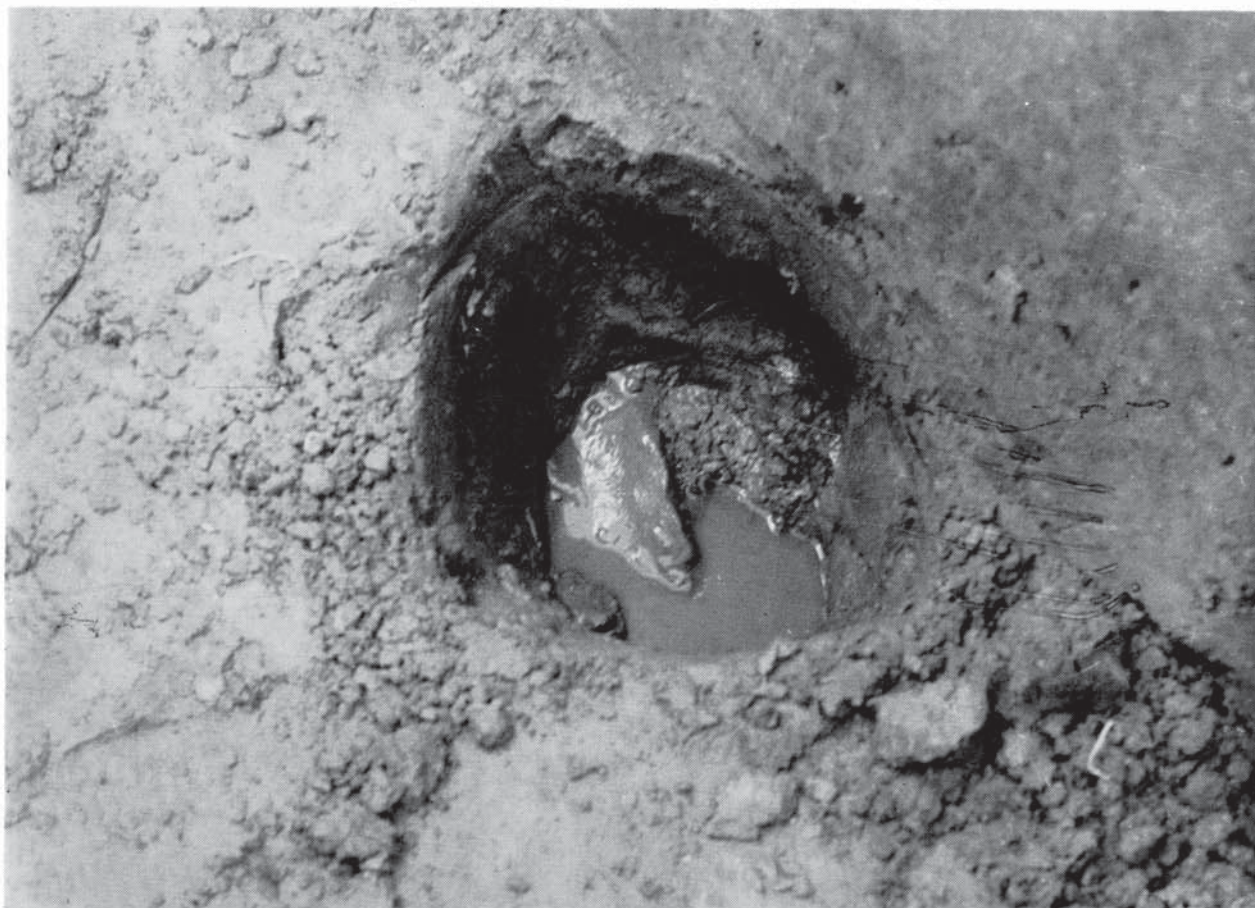
「埋田」の地名は記されていないから、まだ当時は村としては存立せず、ただ川に挟まれた三角形の島地となっていたものとみえる。

「新開」の名は、すでにこの地図に見えるので、本文中に「新開」は「埋田」よりまたのちの名であろうと考えた点は、ここで訂正しておきたい。

註22 古代・中世の遺跡を、開発領主勢力との関係において、とらえようとした好例は、石川考古学研究会の『加賀三浦遺跡の研究』（昭和42年）である。こうした態度は史料のそろった地方でなければ、いつでも可能とは限らないが、少しでも学び取って行きたい方向であること、言を待たない。



遺 跡 全 景 (一段高い麦畑の部分)



第 3 区 柱 穴 (底と側面に須恵器片)



第 3 区 遗 物 出 土 状 态



第 5 区 遗 物 出 土 状 态



第 5 区 遗 物 出 土 状 态



第 5 区 遗 物 出 土 状 态



第 8・9 区 遺 物 出 土 状 態



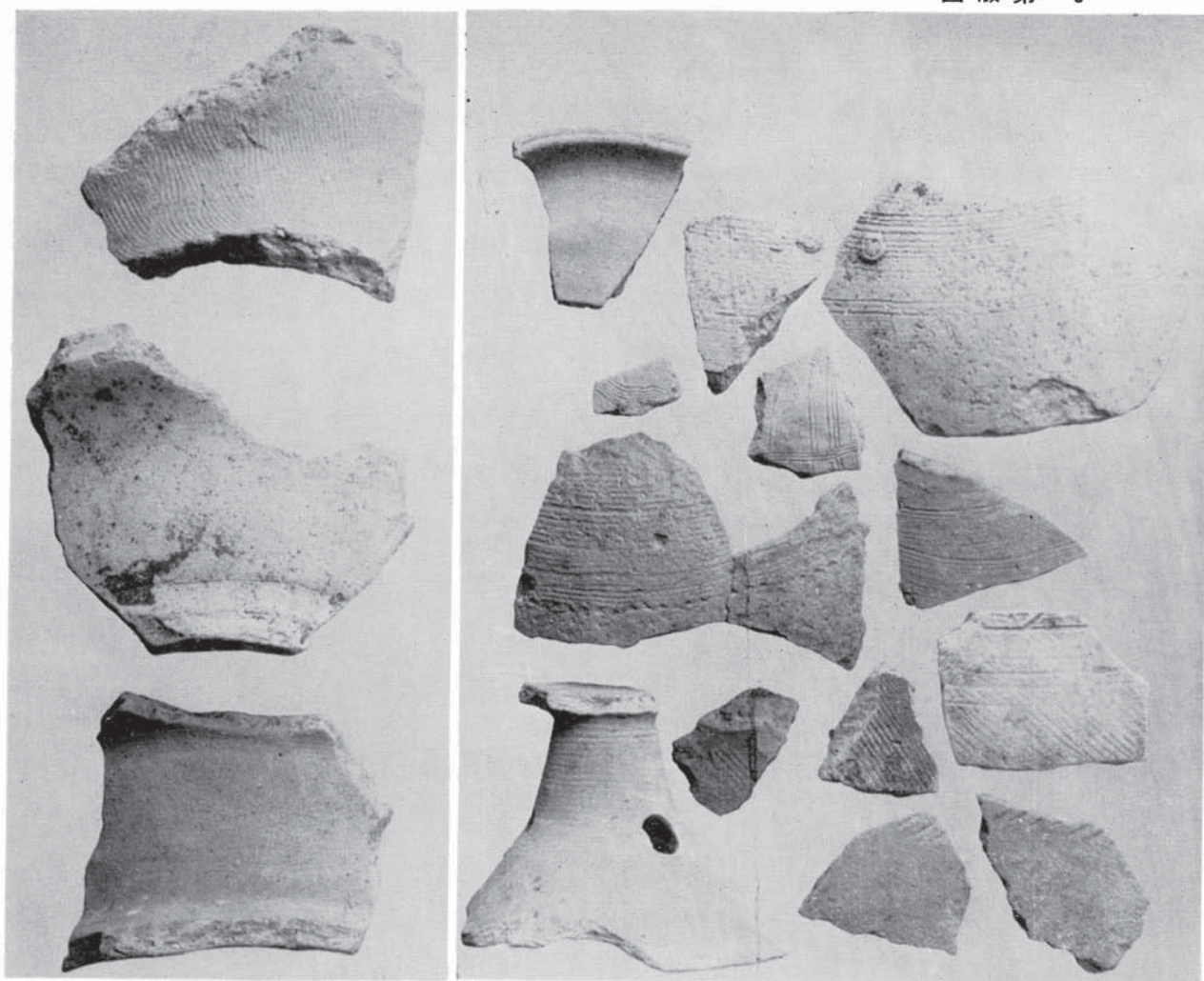
第 8・9 区 遺物出土状態 (中央は石製模造品勾玉)



第 10 区 遺物出土状態 (右上は銅鍬)



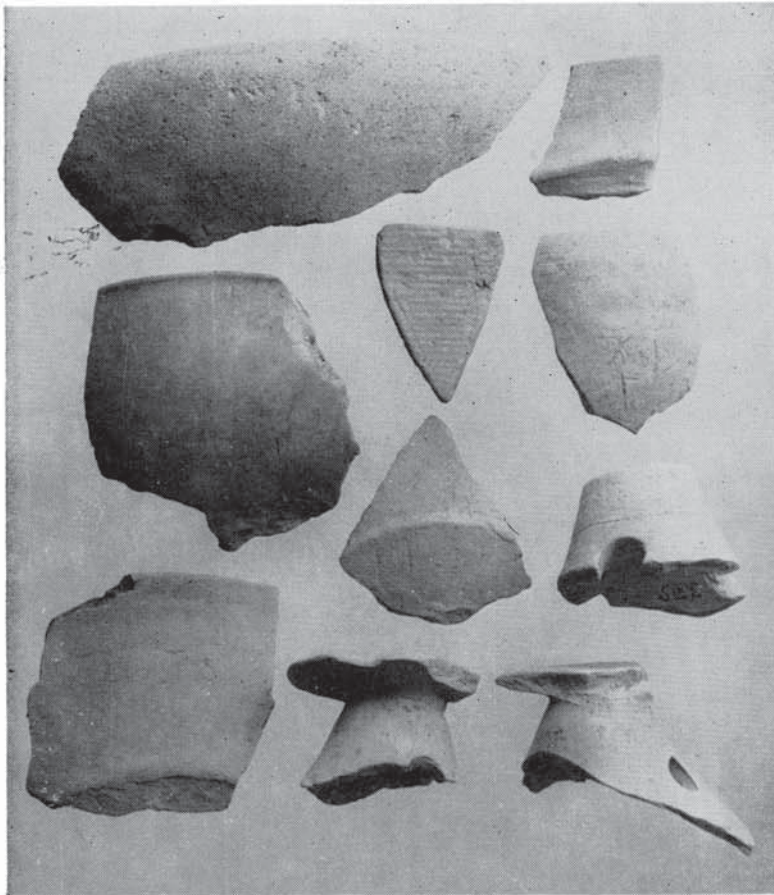
第 10 区 北 側 断 面



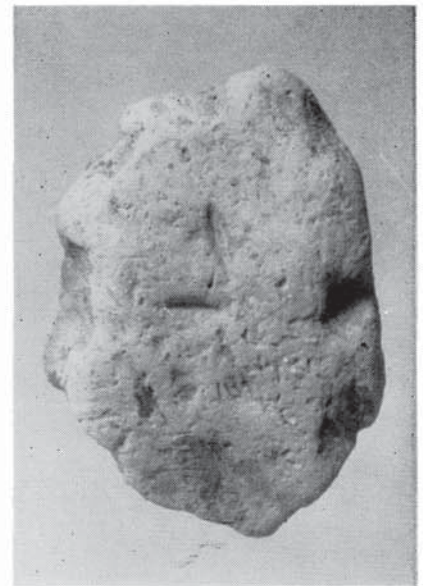
生後期 壺・高杯



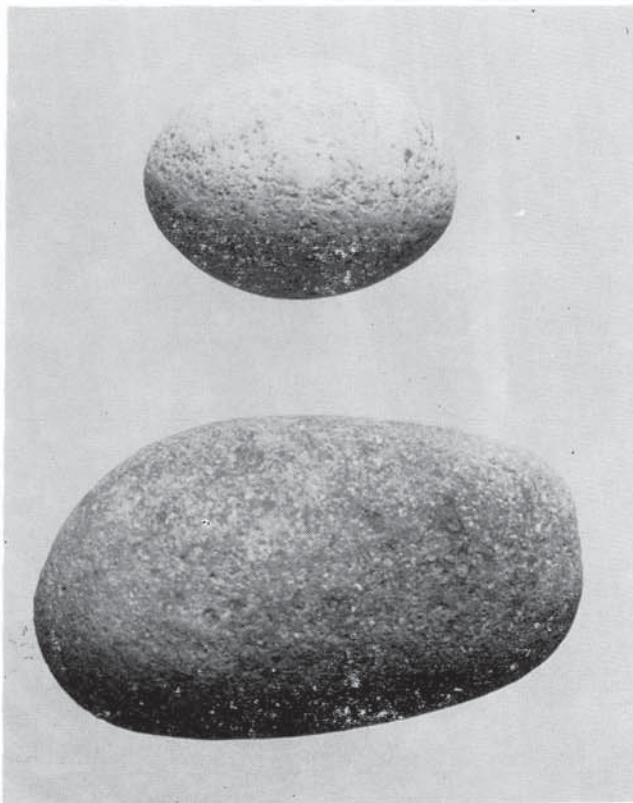
弥生後期 壺・甕底部



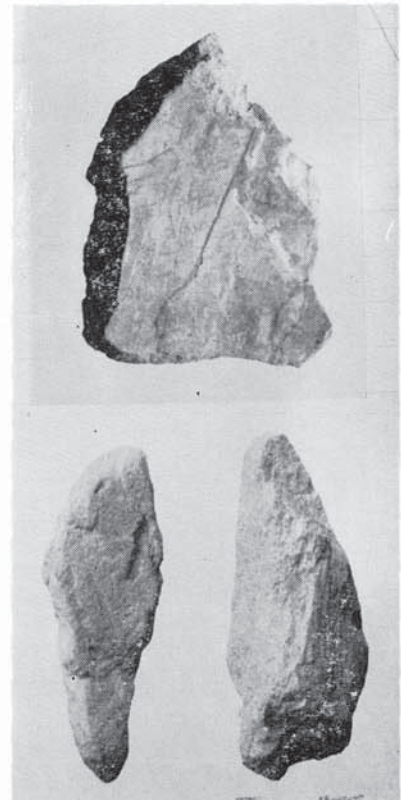
弥生後期 高杯・碗



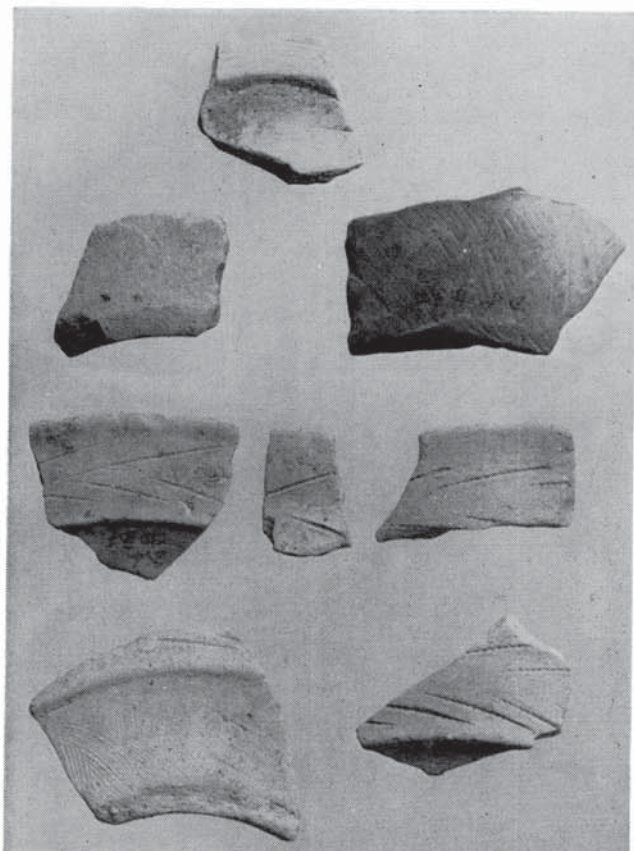
粗痕ある台付甕の台部外面
(弥生後期)



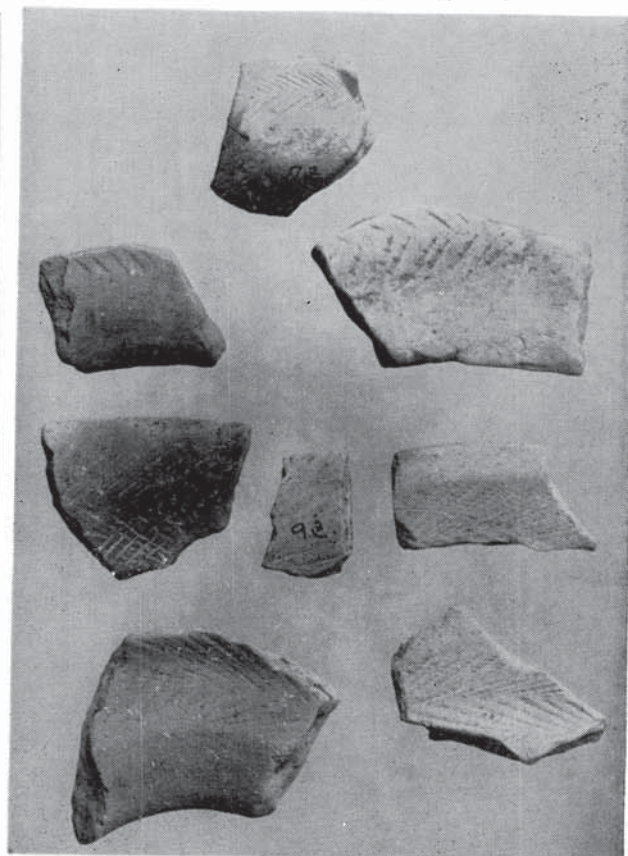
磨 石



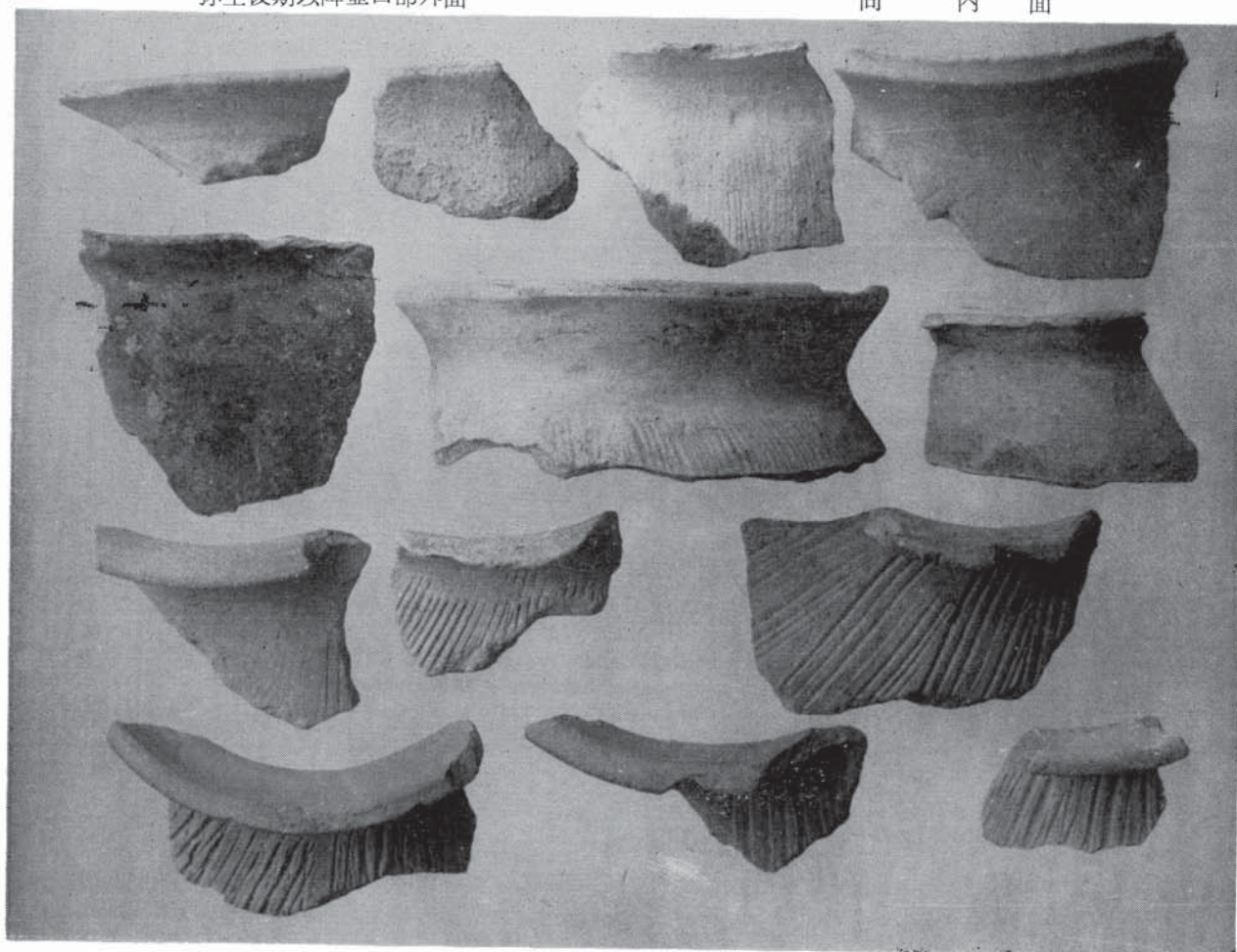
砥 石



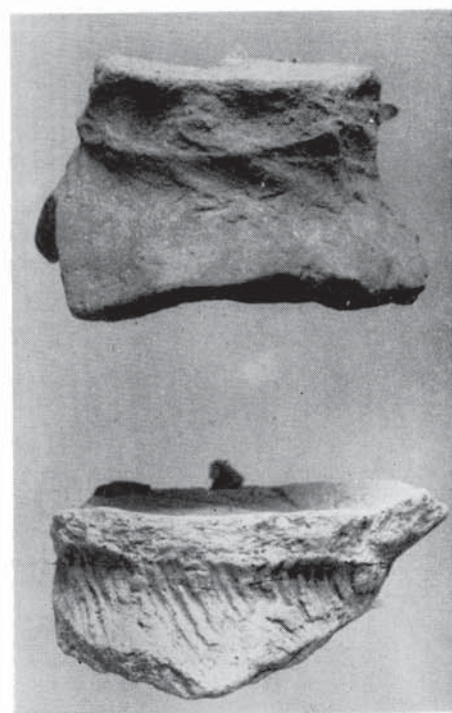
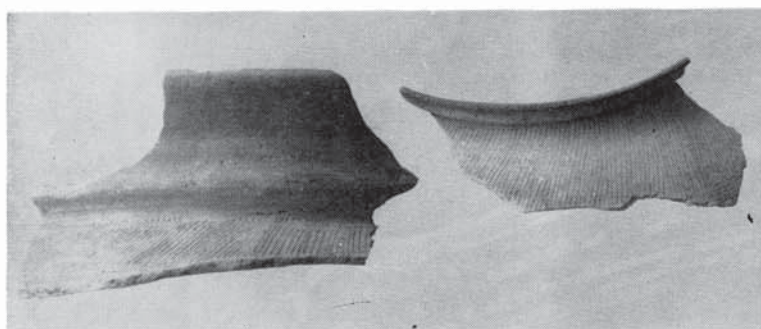
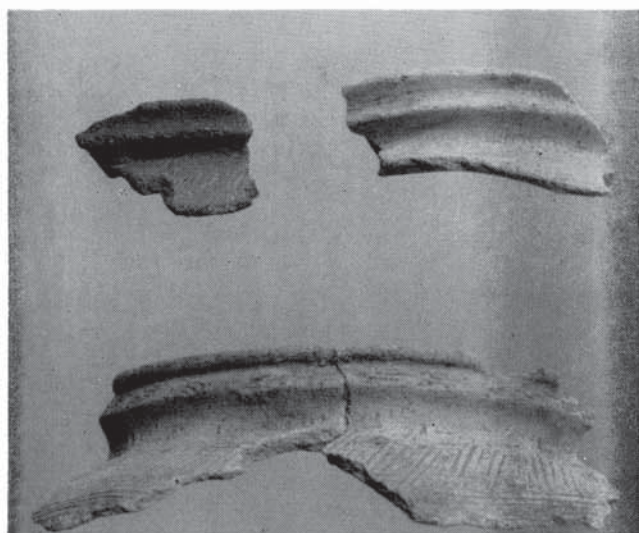
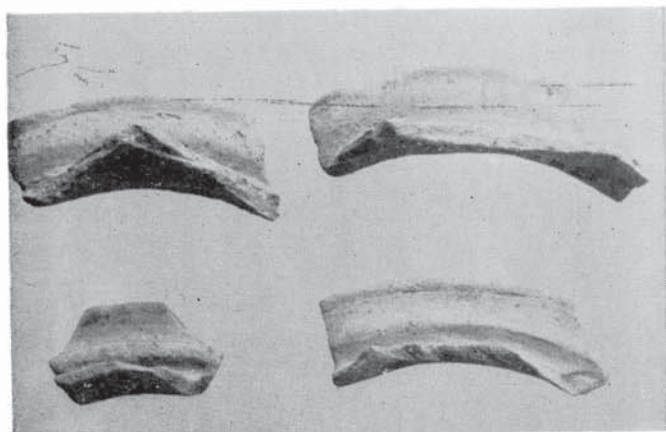
弥生後期以降壺口部外面



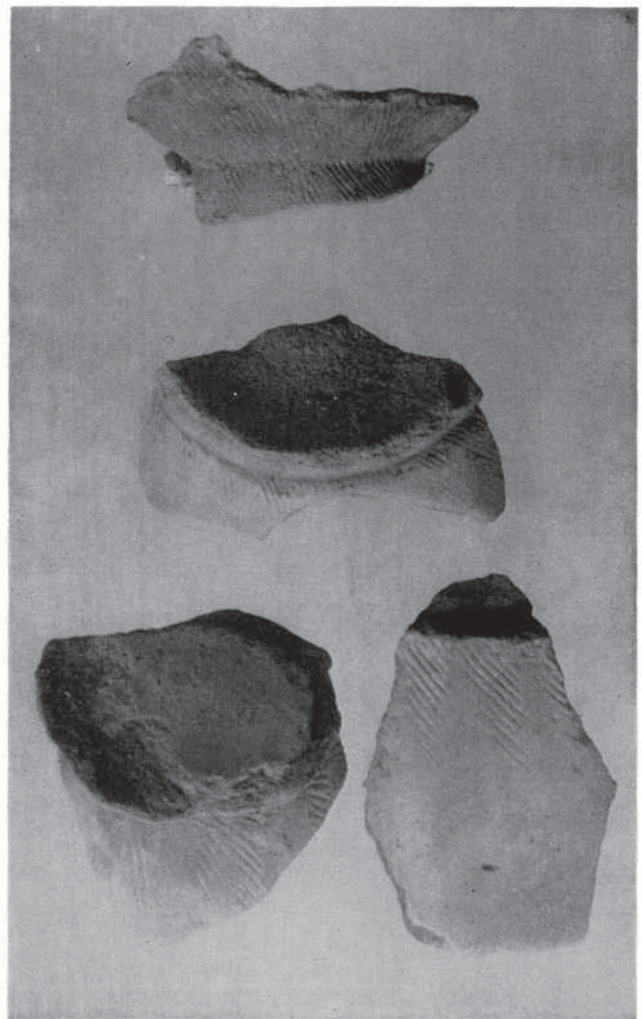
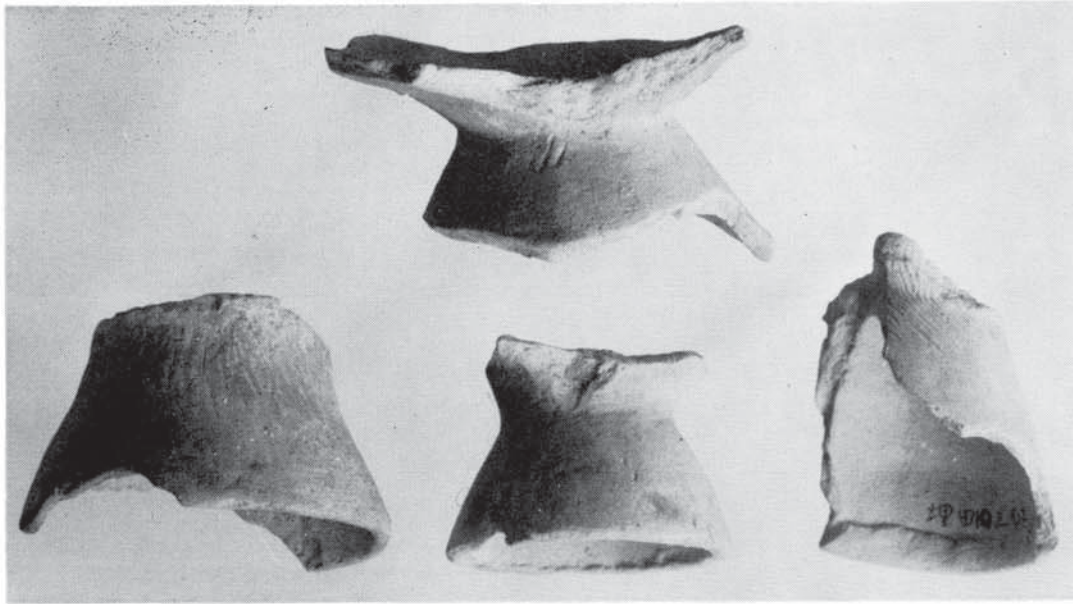
同 内 面



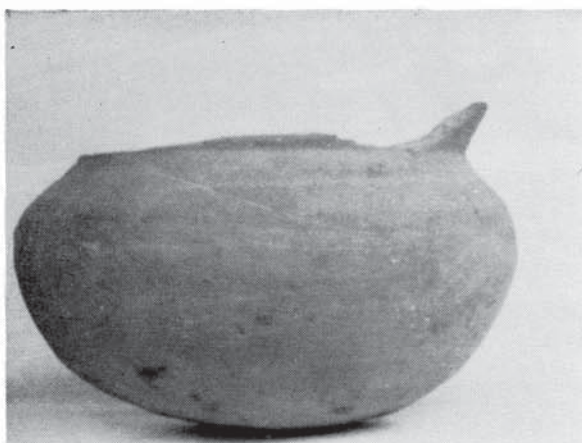
甕 口 部



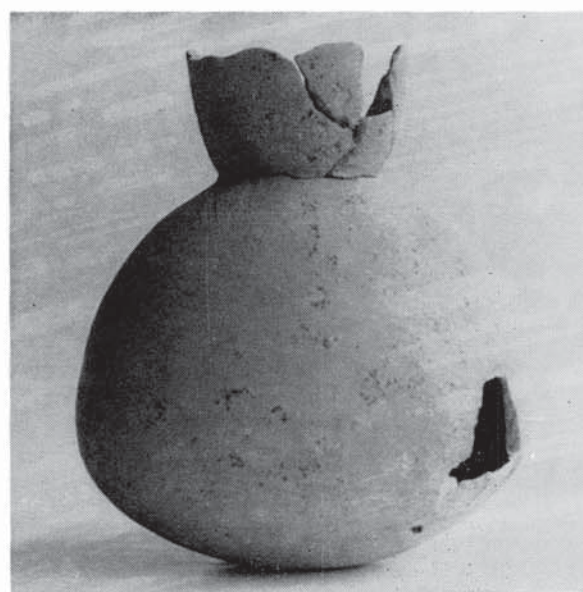
土師器 甕口部・台部



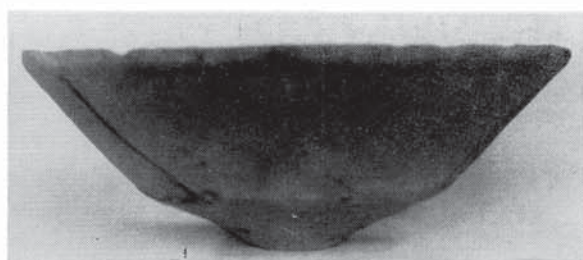
土師器甕台部とその磨消刷毛目



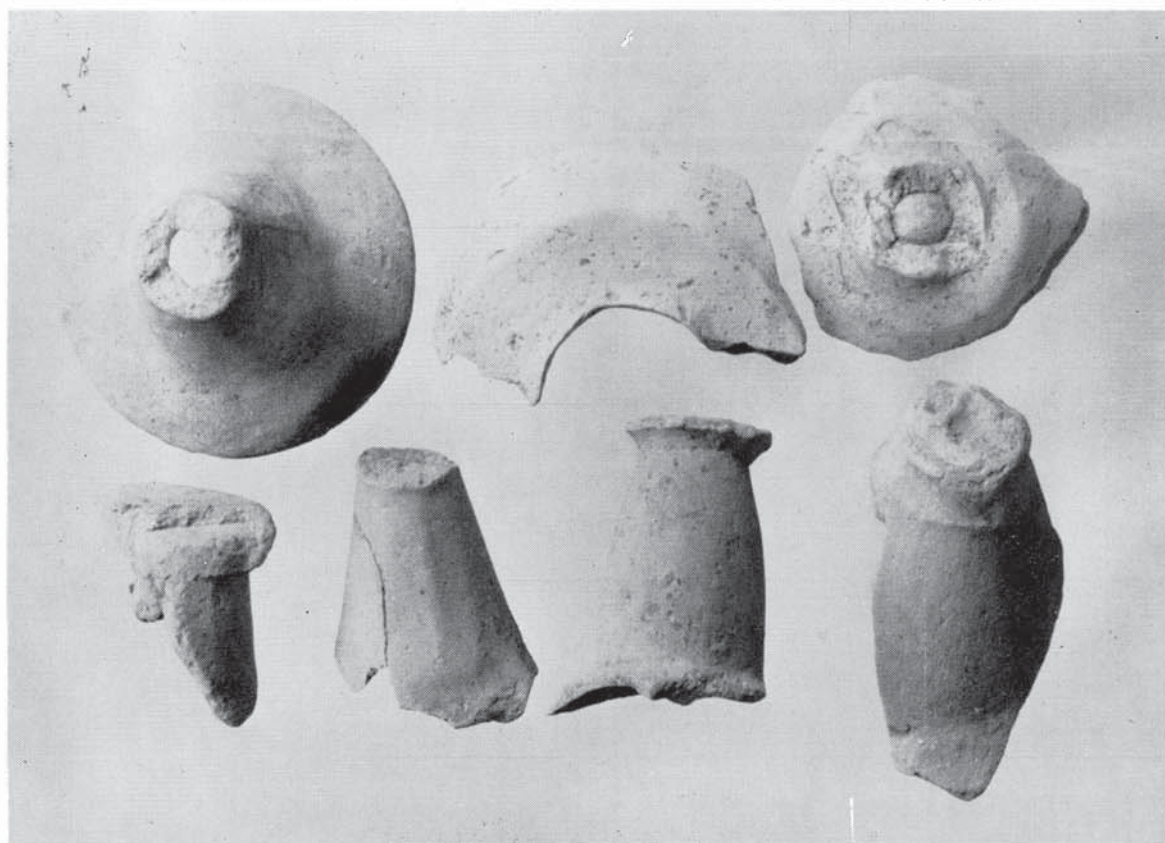
土師器小形丸底壺



土師器細頸壺



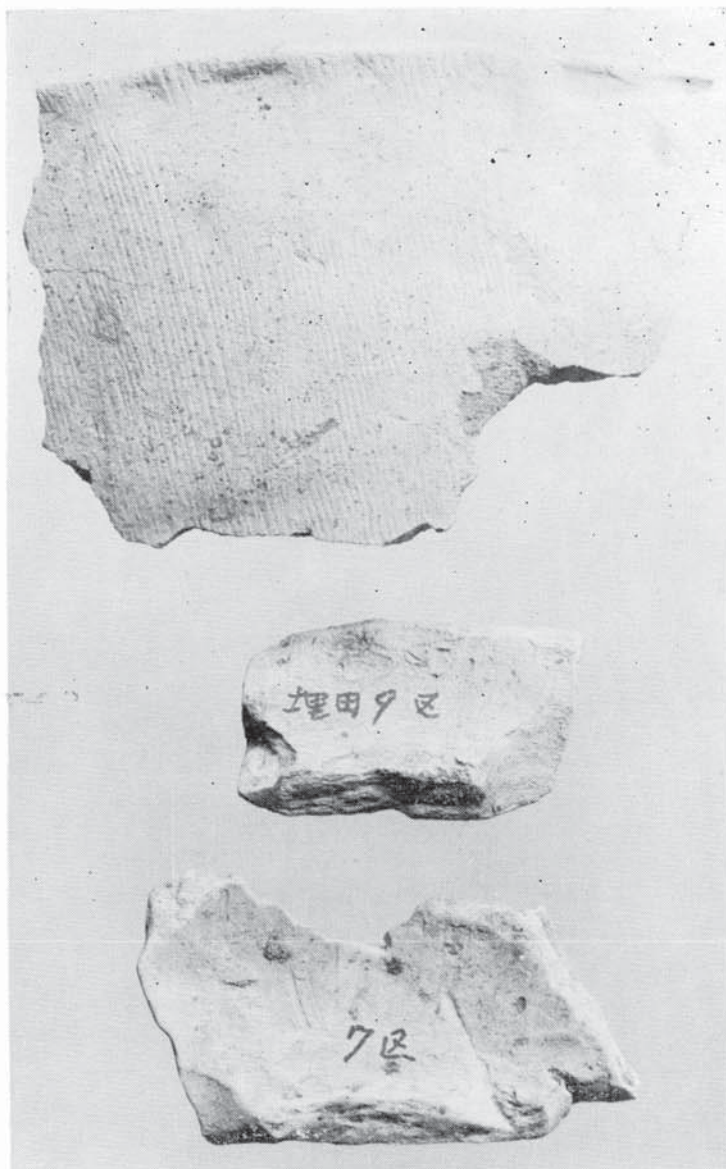
土師器高杯



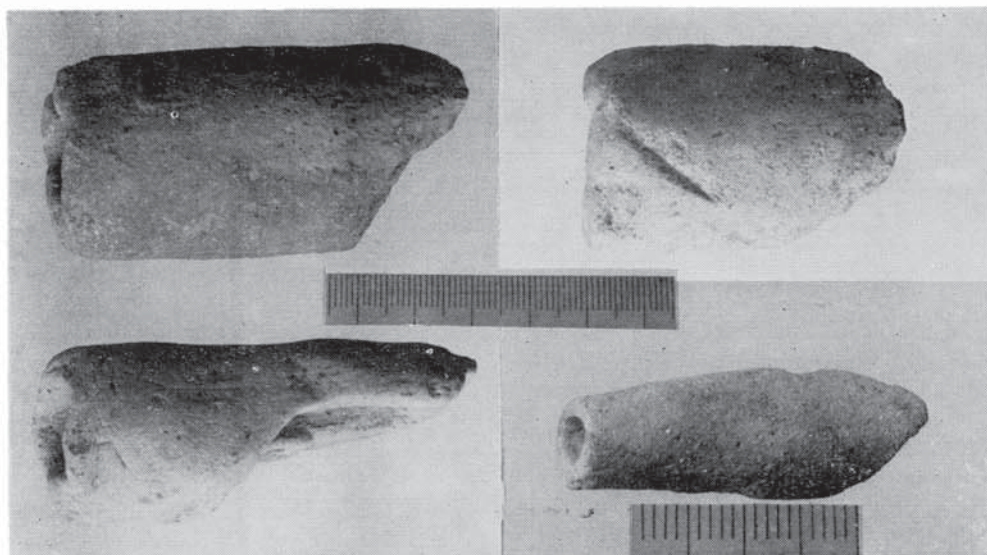
土師器高杯



土師器把手



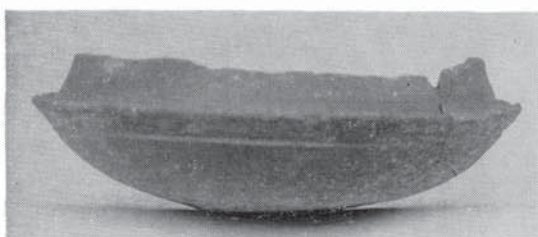
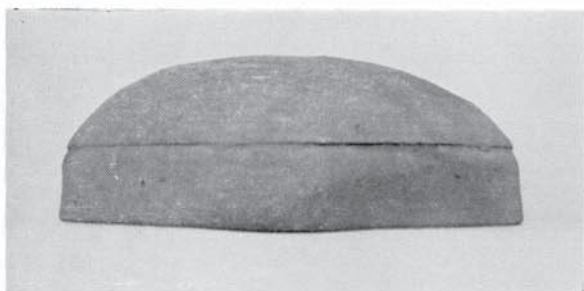
土師器甕とその底部内面



土師質土錘



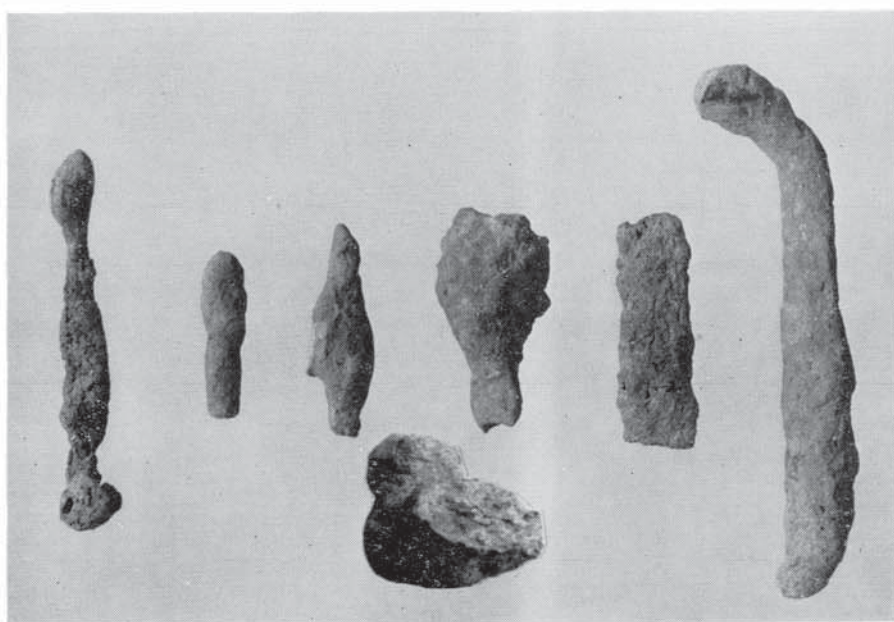
角形土器脚部



須恵器 蓋・杯



須恵器 琺



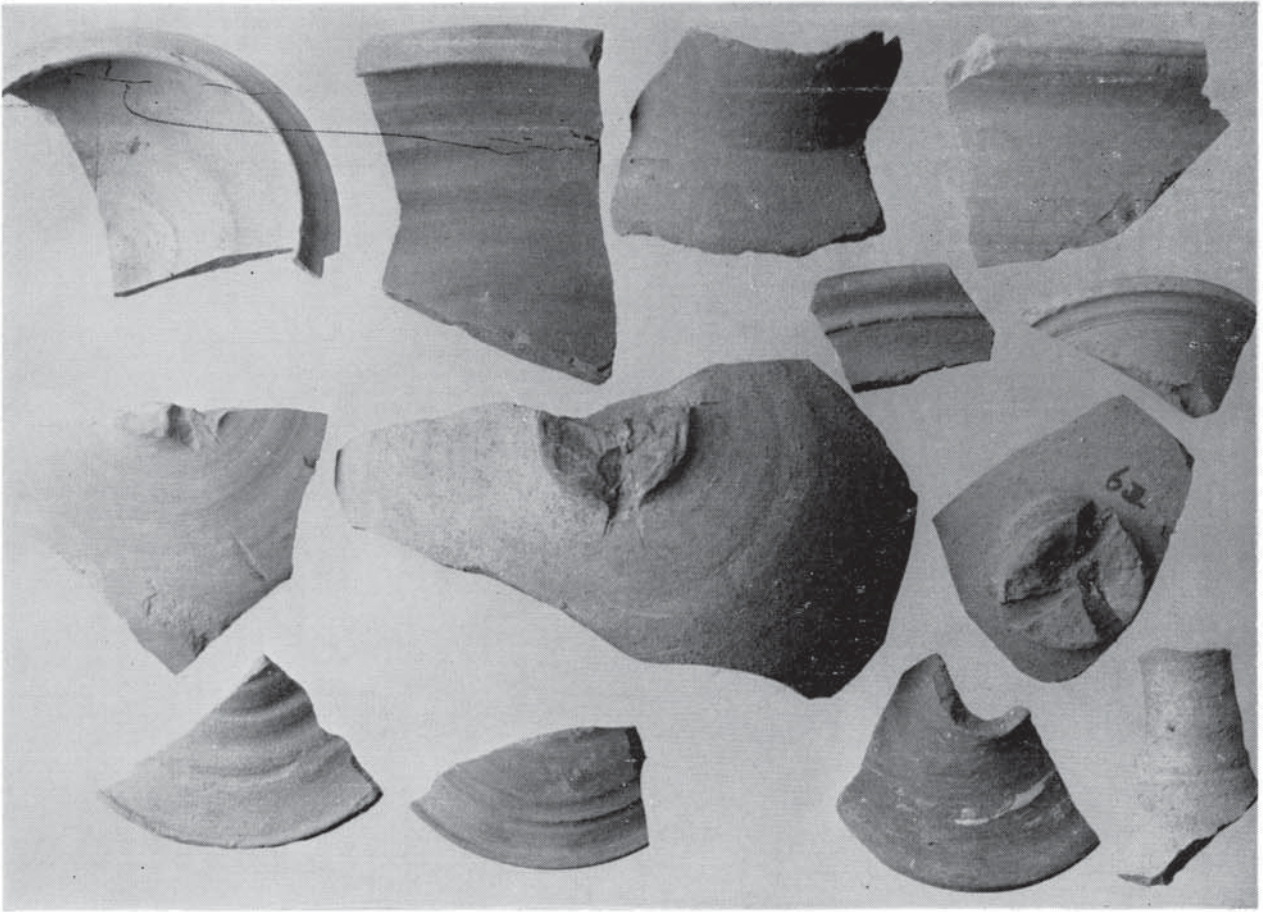
鉄 器



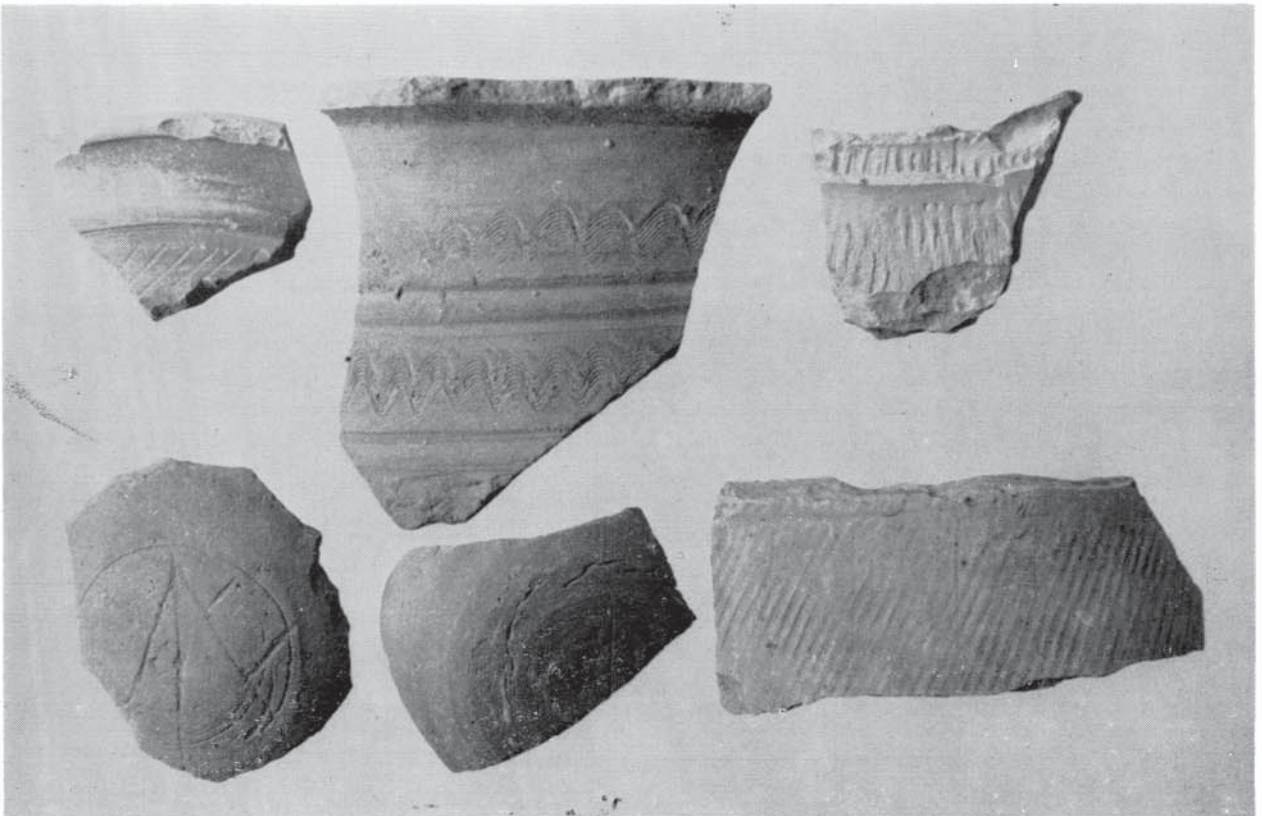
石製模造品勾玉



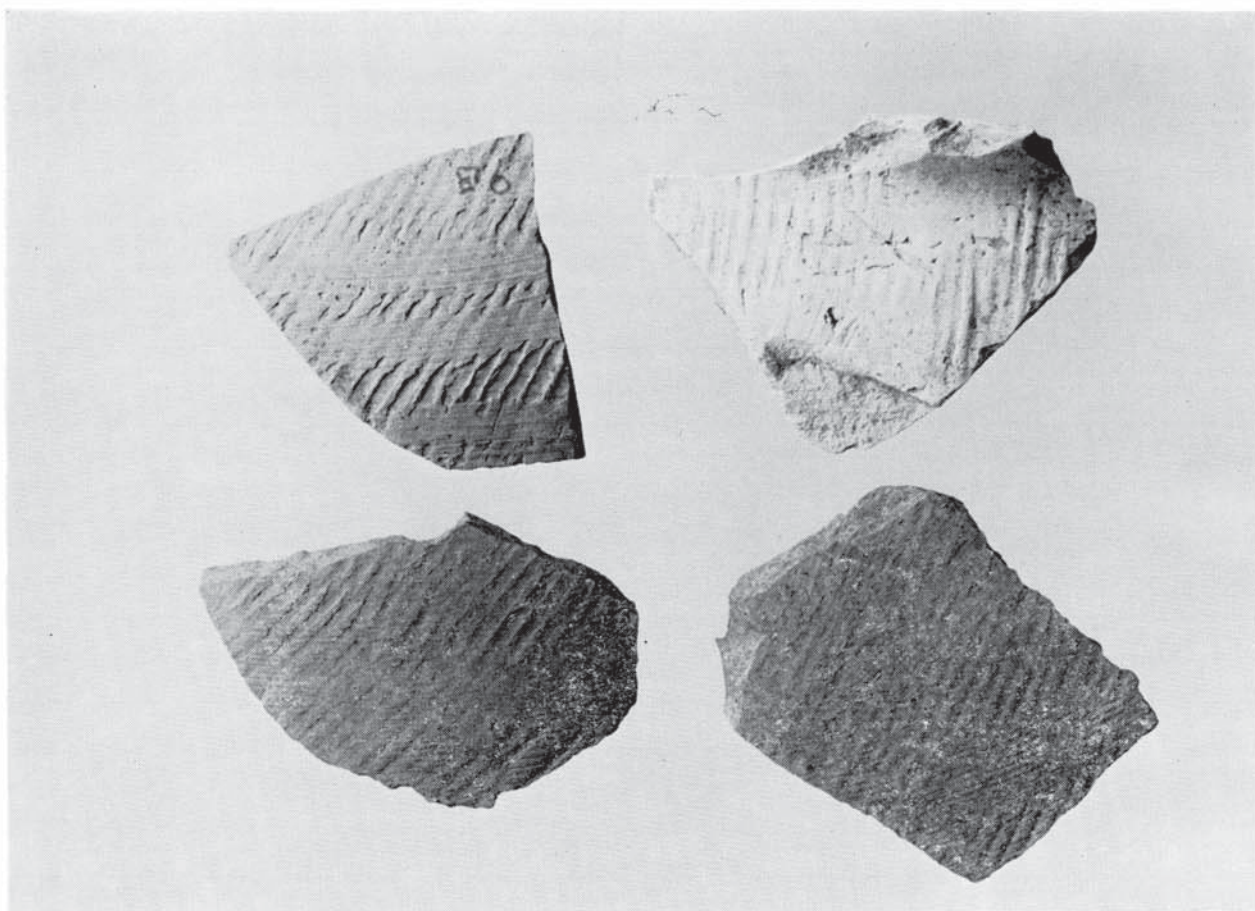
銅 鋌



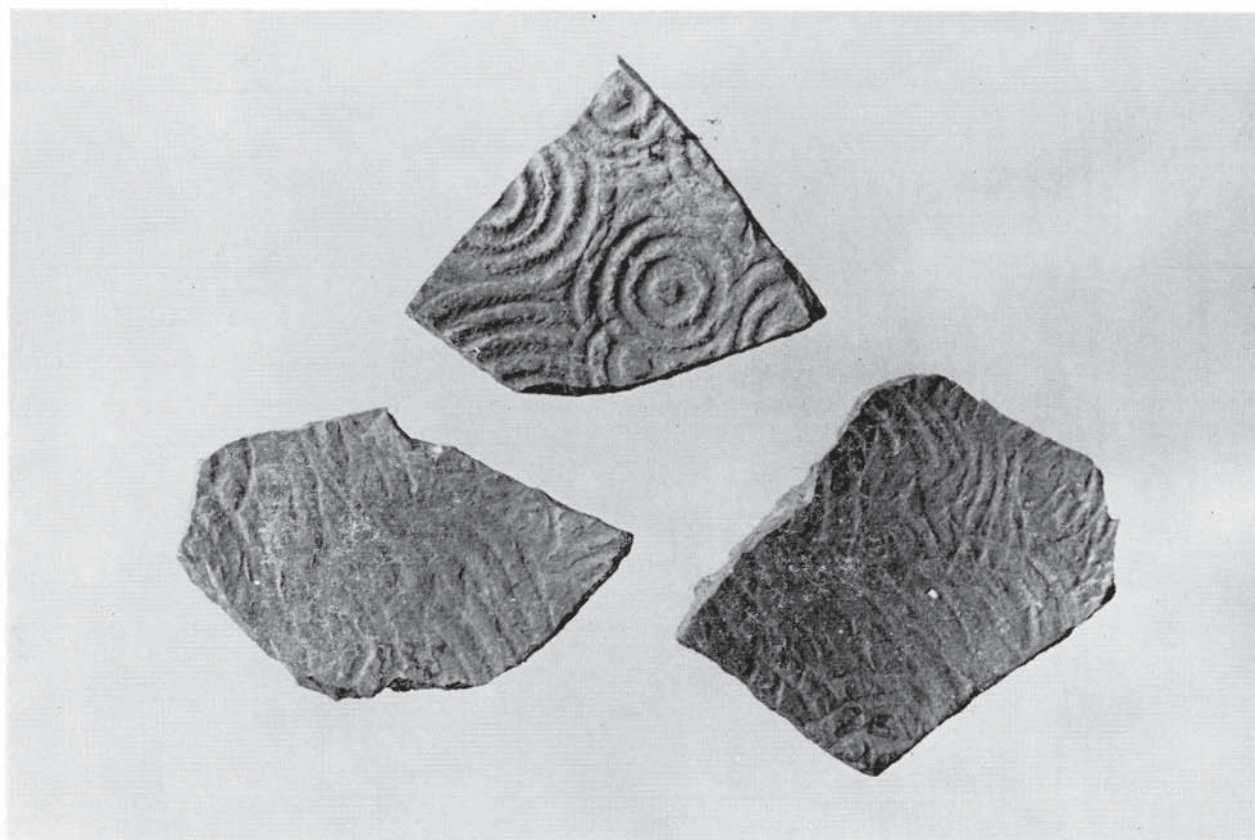
須惠器 蓋杯・壺・高杯等



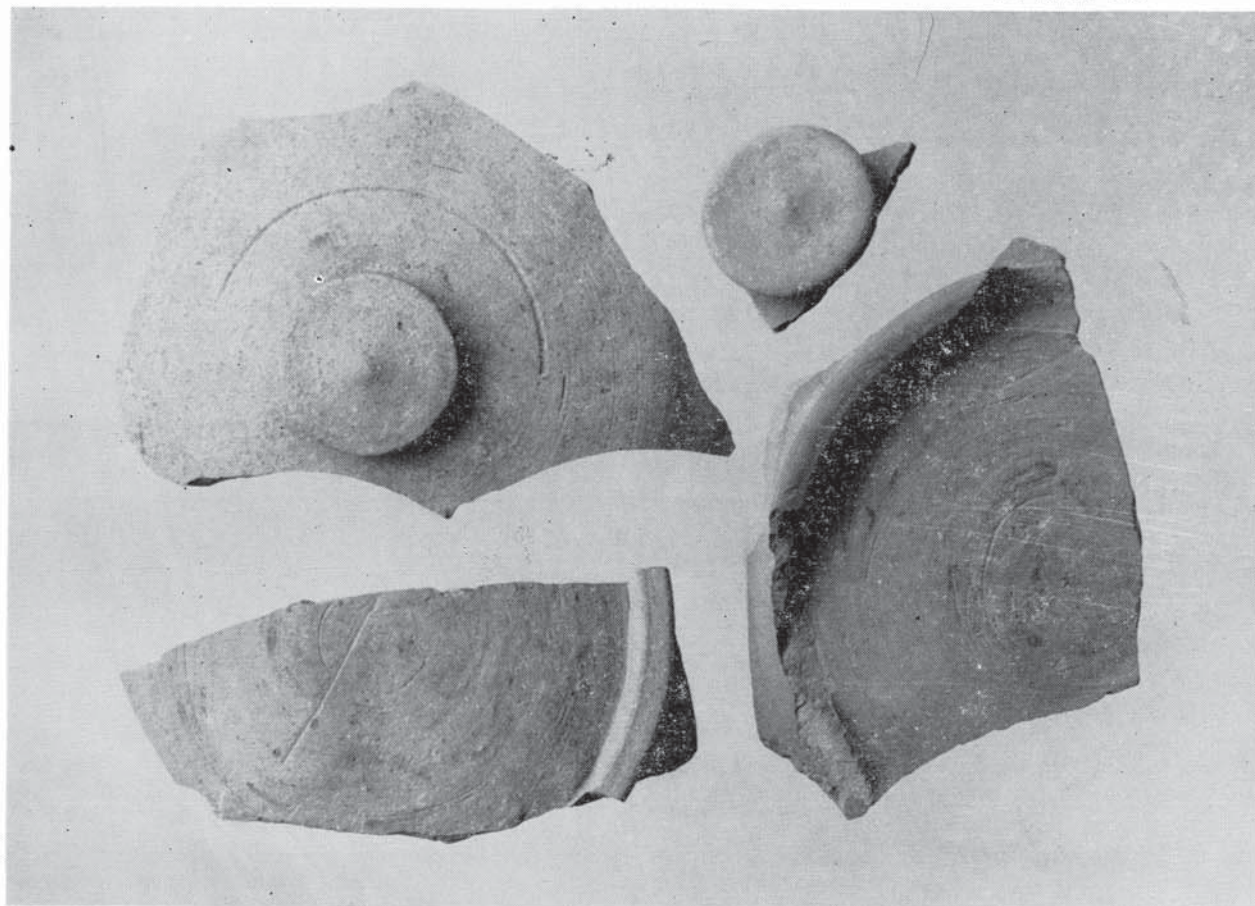
須惠器 壺・杯・甌等



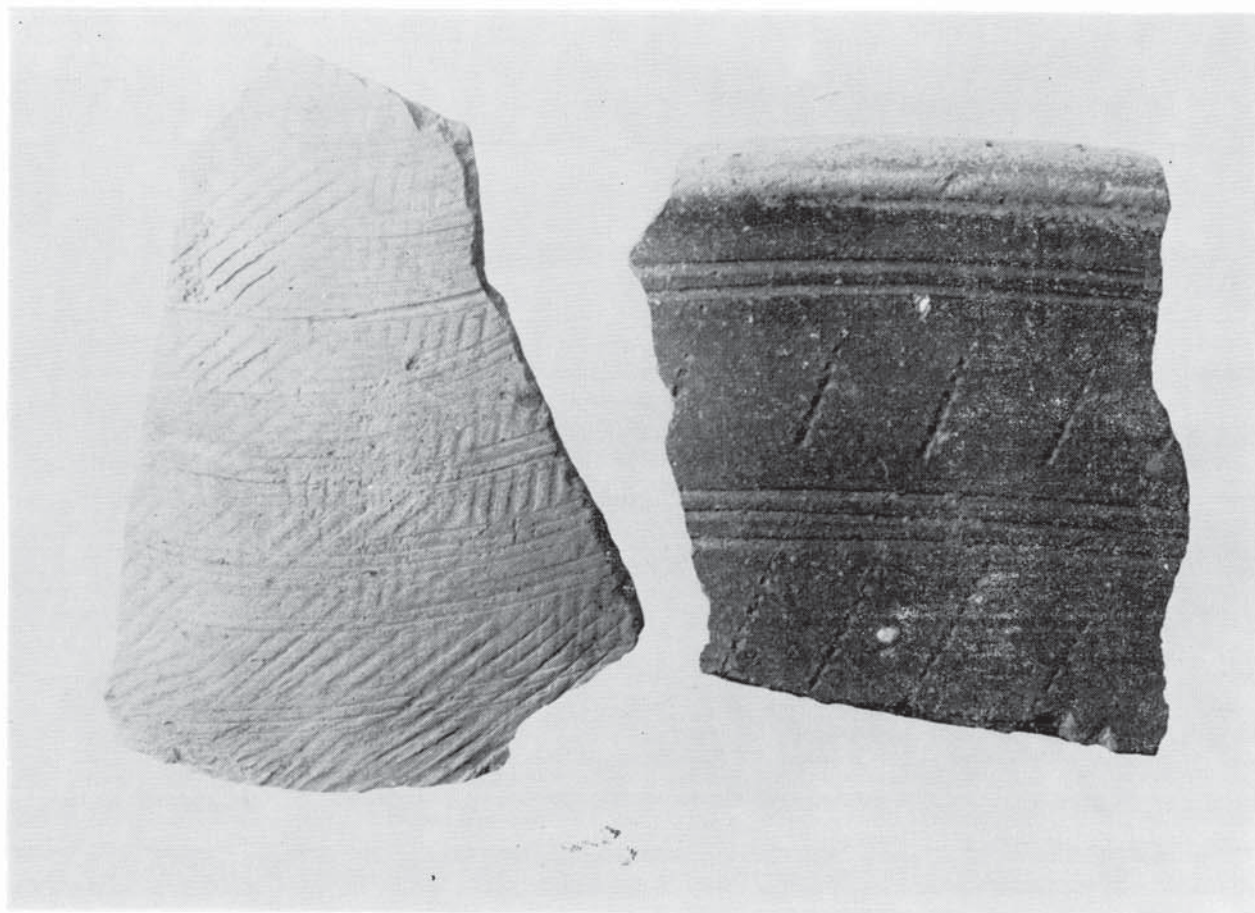
須恵器広口壺外面



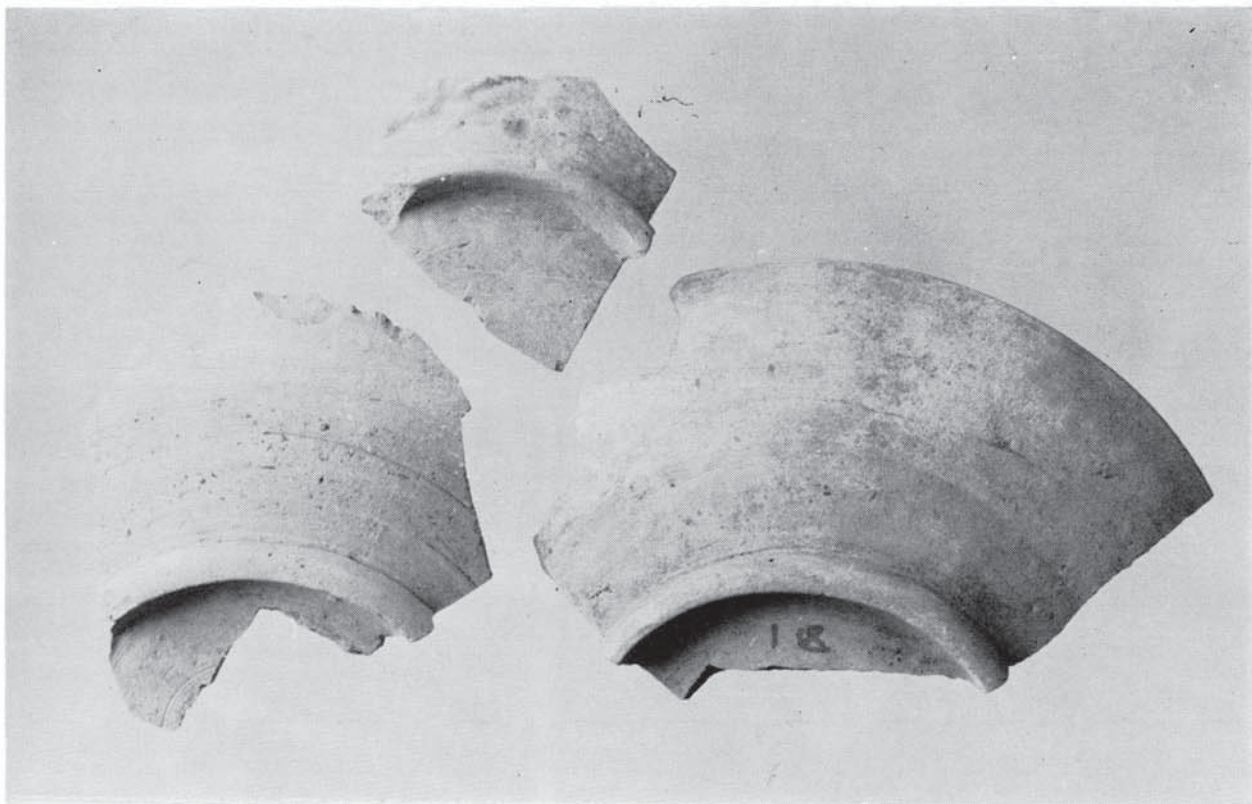
須恵器広口壺内面の同心円叩目文



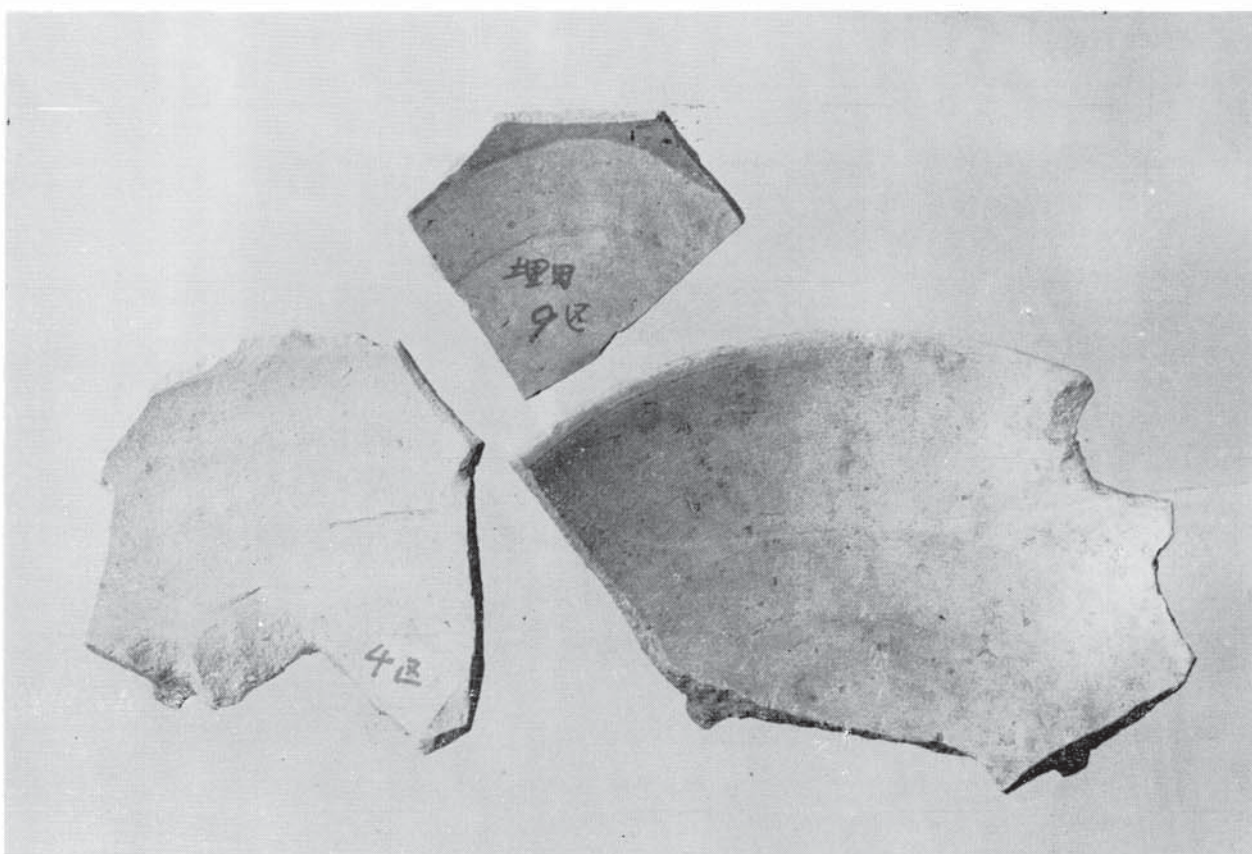
須恵器蓋・杯



第2区柱穴の柱受けおよび根固めに用いられた須恵器広口壺の破片

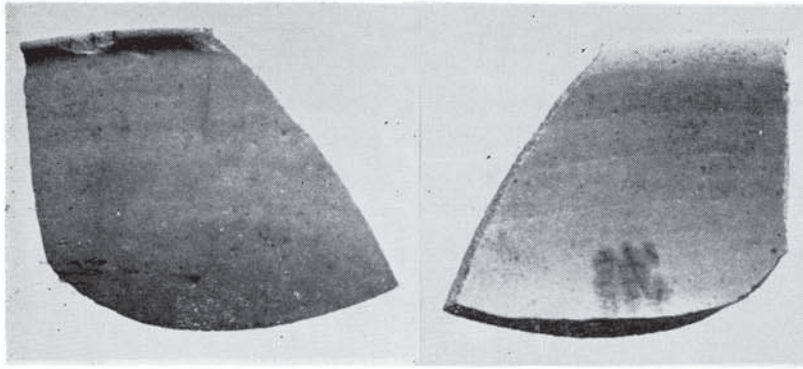


白色灰釉陶碗外面

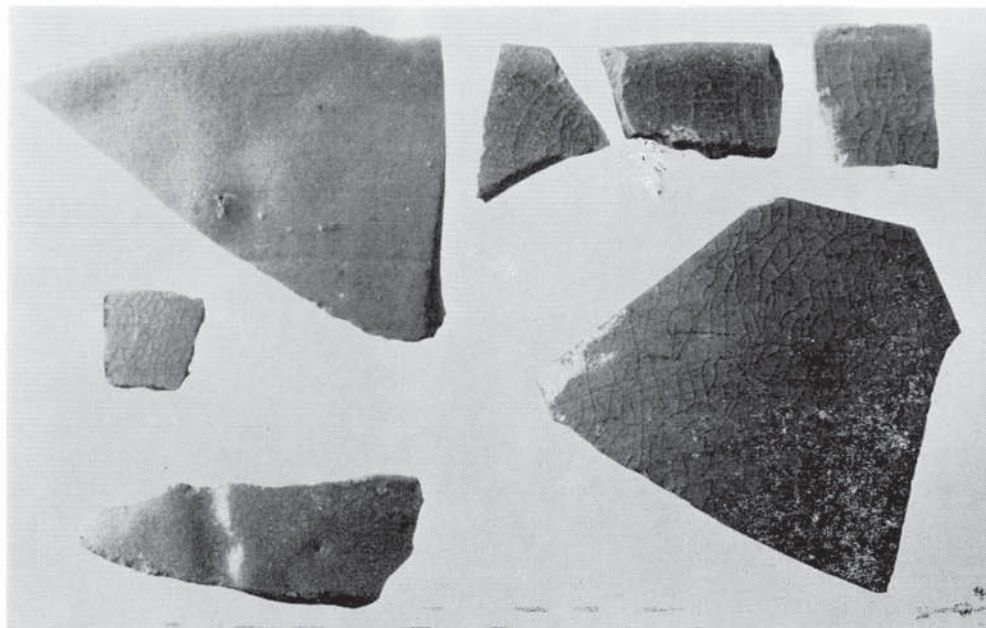
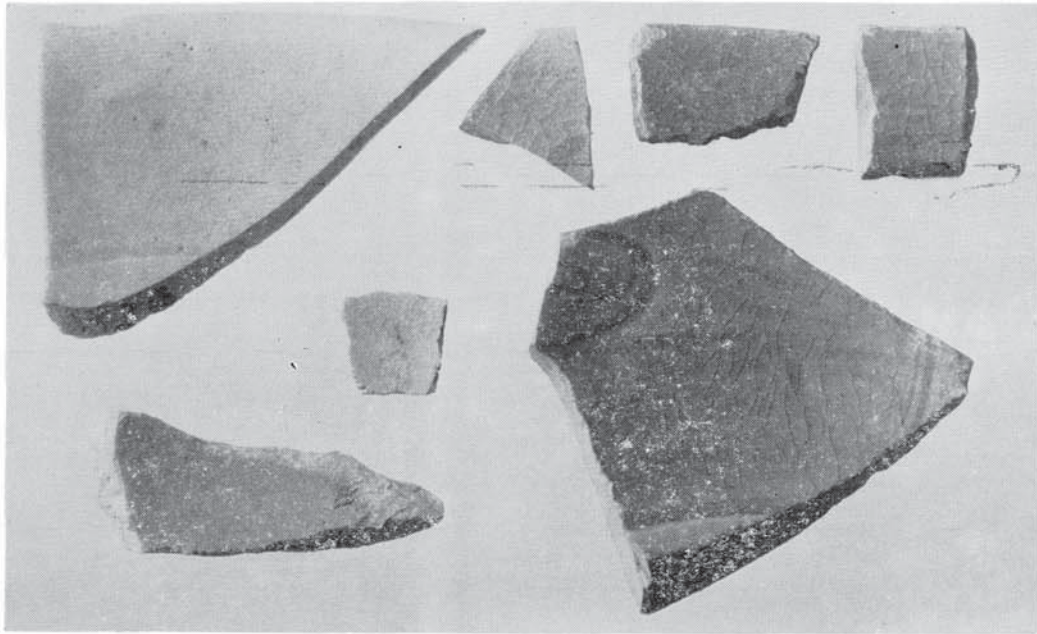
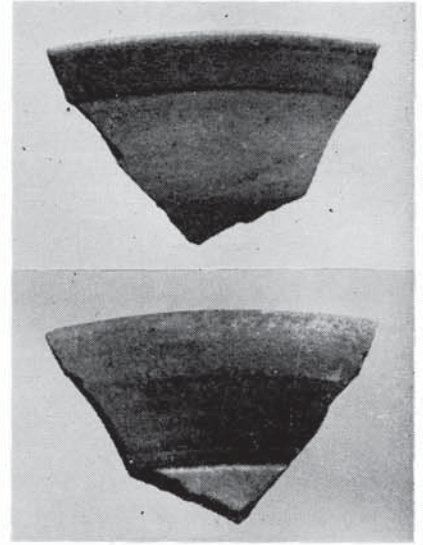


同上内面

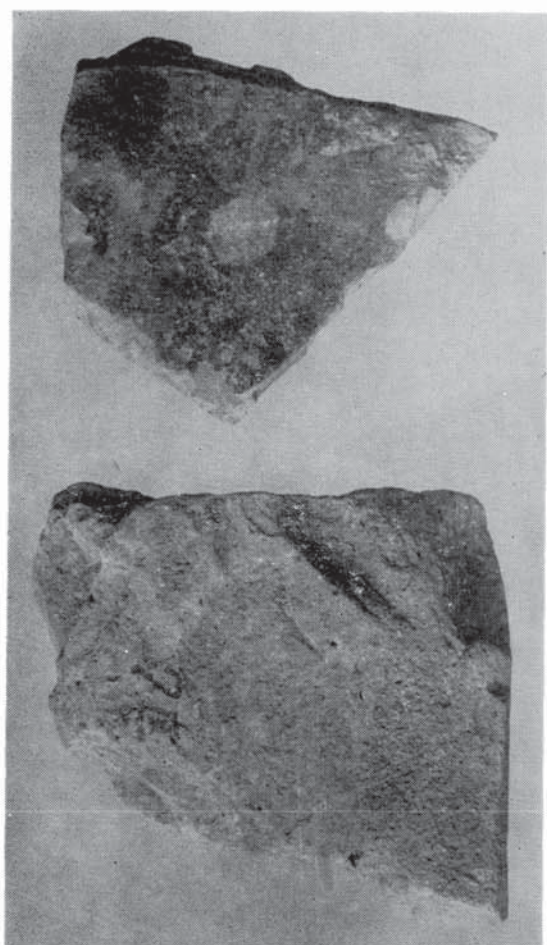




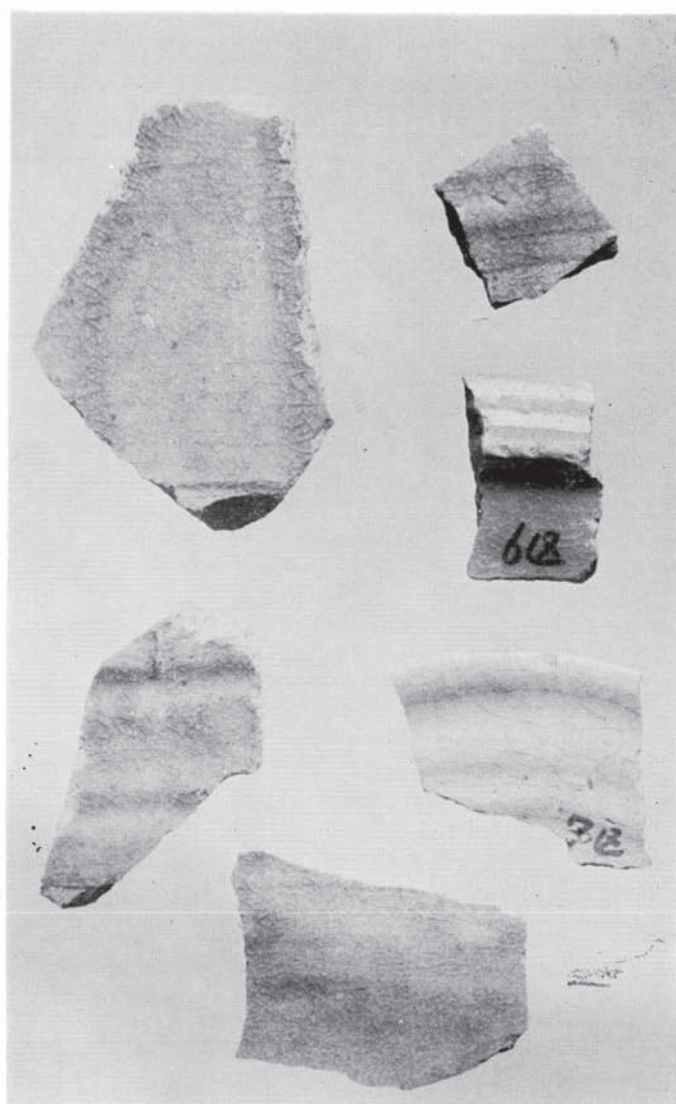
緑 釉 碗・皿（内外面）



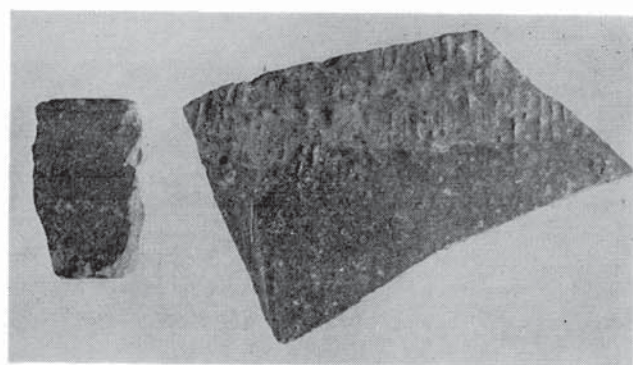
灰白磁輪花碗・青磁劃花文碗等（内外面）



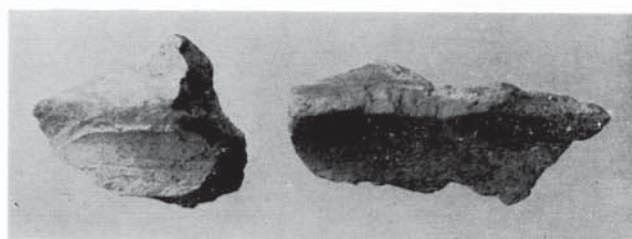
平 瓦



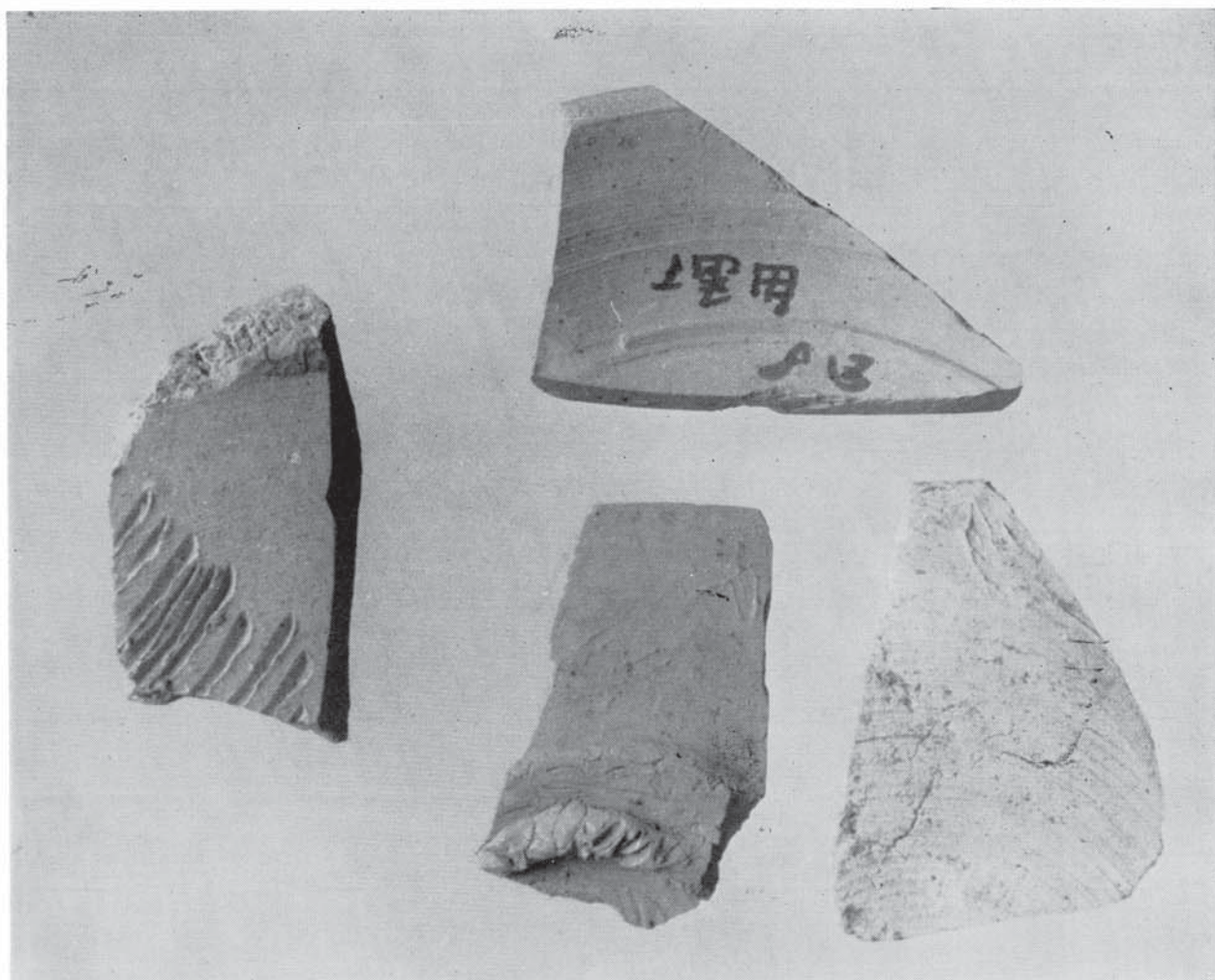
緑 色 灰 釉 陶 鉢・壺 類



常 滑 焼 甕



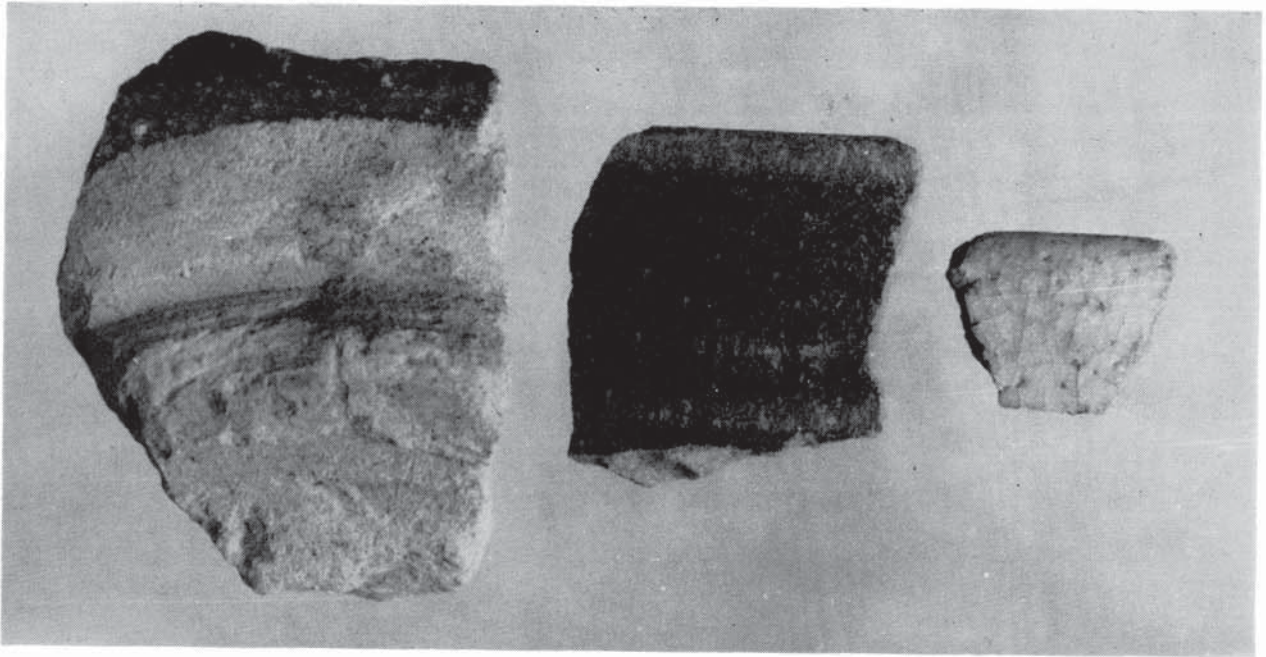
土 釜



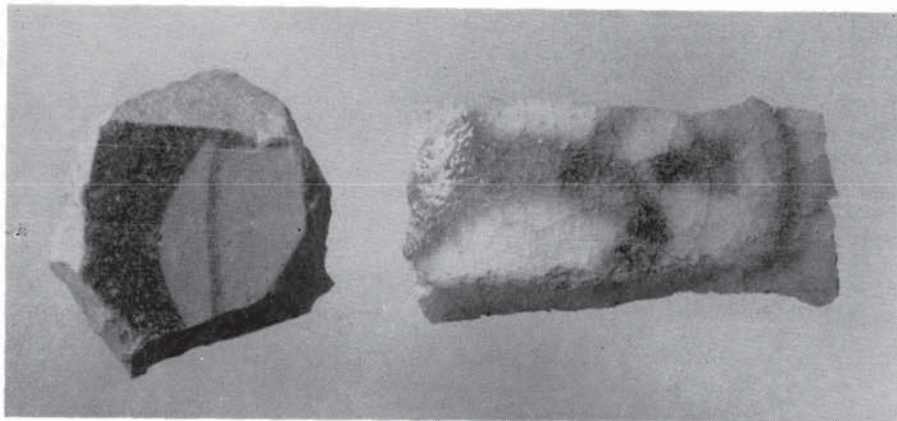
無 釉 陶 碗 • 卸 鉢



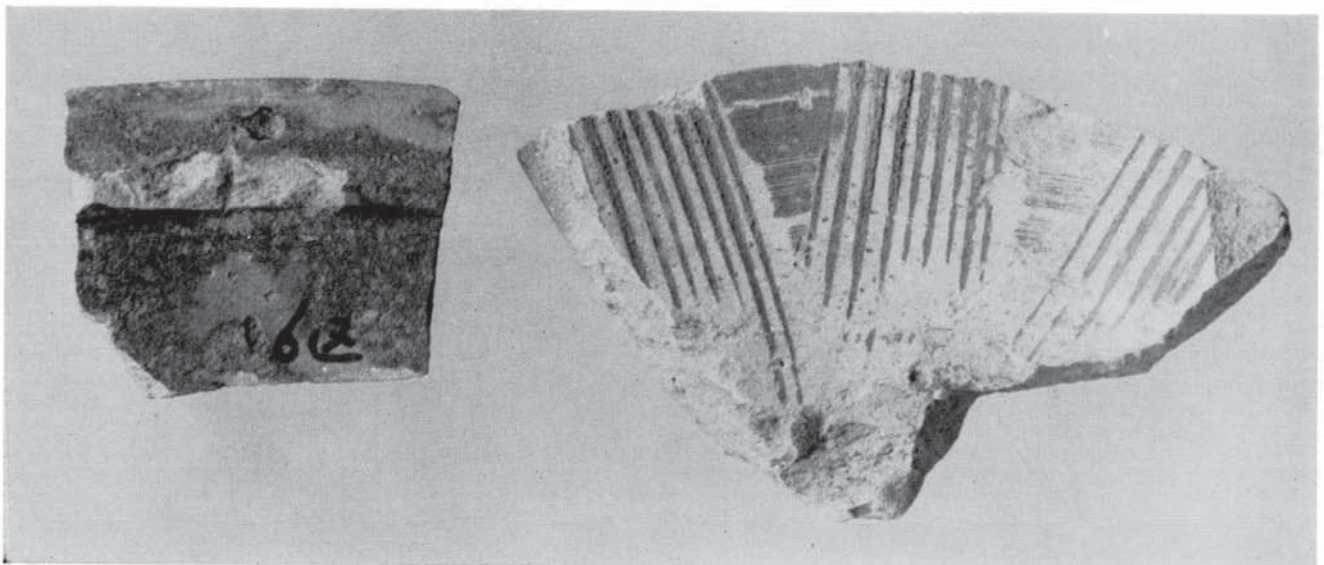
天 目 釉 茶 碗 • 柿 釉 壺 等



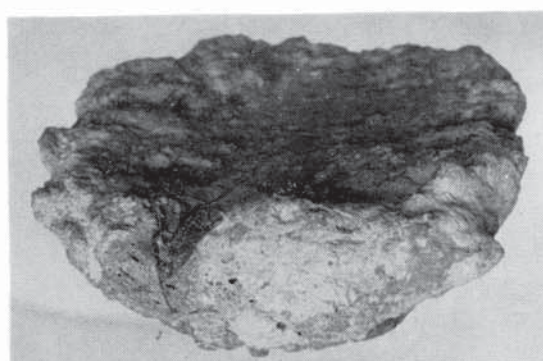
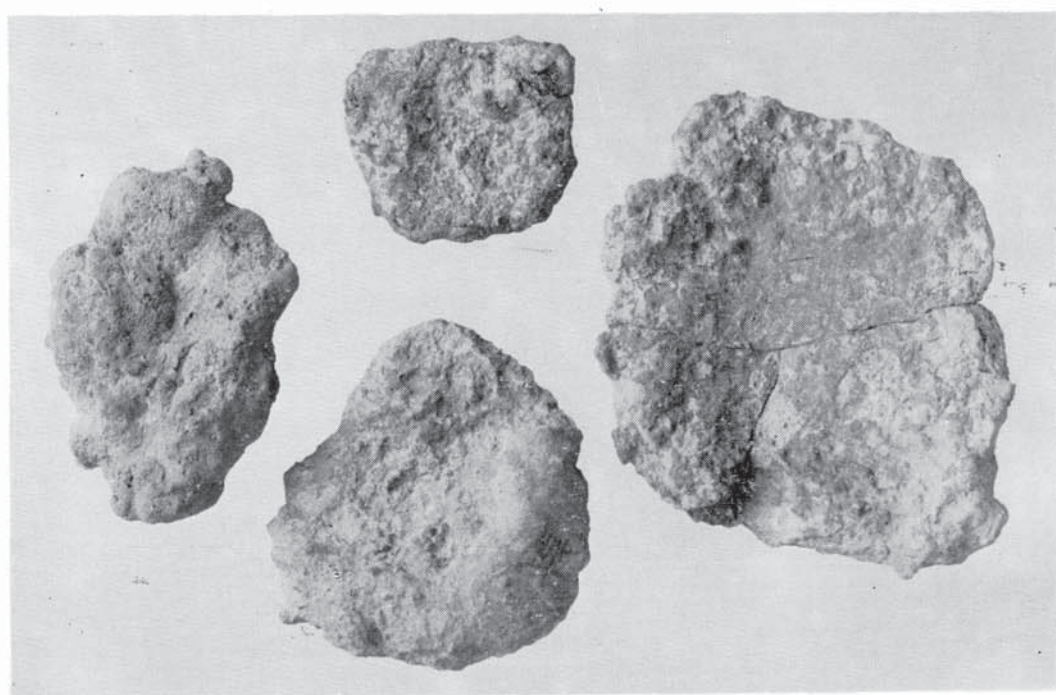
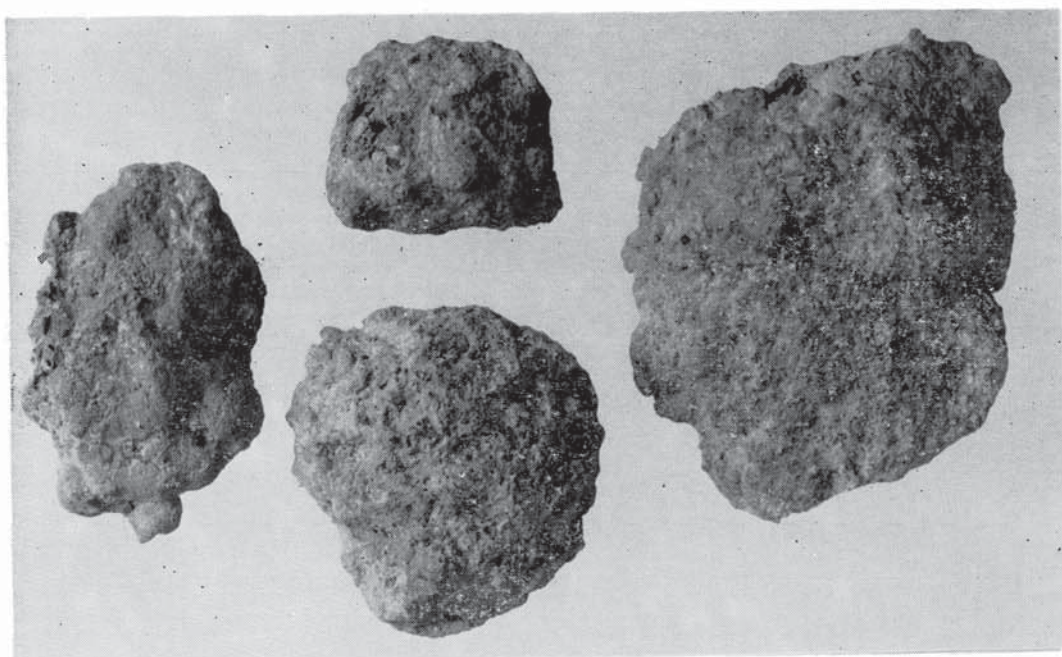
柿 釉 鉢 • 尾呂窯 飴 釉 茶 碗 • 志 野 白 釉 碗



鉄 絵 鉢 • 染 付 合 子



描 鉢



鉄 鋅 4 個 (上・下・側 面)



元禄頃の埋田付近古図（蓬左文庫蔵）

4, 宇 治 町 遺 跡

第 1 章 調 査 経 過

宇治町は蛭間・大木両町を結んで、恰も三角形の位置にあり、両町共にそれぞれ遺物を出しているが、宇治町地内でも既に別記の通り、旭羊毛工場構内から若干の遺物が出ている。しかし旭羊毛工場遺跡の土地は、いわゆる宇治町の出郷（でごう）で、本邑とはやや距離があり、且つ旭羊毛工場遺跡は既に原形も失はれ、今後調査の余地もないので、ここに宇治町部落を中心とした本邑地域を、宇治町遺跡と呼ぶこととした。

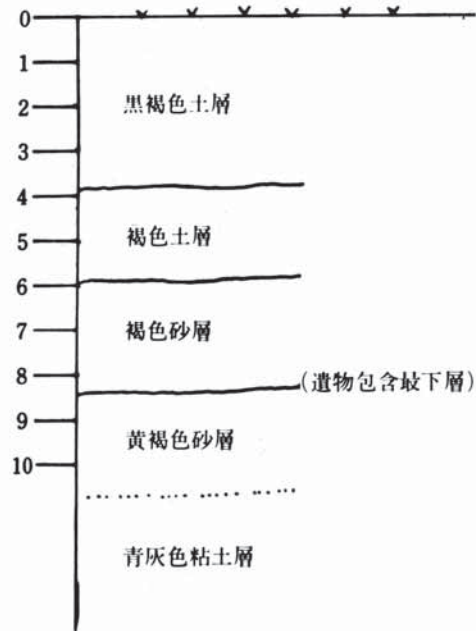
ここは蛭間・大木両町と境を接し、既に十数年前に耕地整理が行なわれた当時、各所から土器の破片等が多く出土したと聞いたが、偶々伊藤委員は昭和43年秋、宇治町茶の里の畑に於いて、若干の無釉陶片にまじり、1個の青磁陶片を拾ったが、翌44年10月、当地の浜田稔氏方に耕地整理当時出土した遺物が保存されている事を知り、これを実測した。

ついで10月7日伊藤委員は調査に訪れ、浜田氏の案内で部落内の各所を見廻った結果、昨年青磁陶片を得た「茶の里」とは反対方向の小字「観音堂」地内、浜田玉二氏所有の畑を中心として附近一帯の畑の表土には土師器・須恵器・無釉陶器の破片が夥しく散布し、且つ数片の青磁をも採集した。

そこで予備調査を行うことに決定し、10月21日に試掘を行った。

第 2 章 試 掘 結 果

試掘は曩の表土採集で青磁を含む土器片が多く露出していた、浜田玉二氏所有の畑、巾 2 m 長さ 6.5m を試掘した。



第 1 図 試掘地層断面図(宇治町)

地層は第 1 図に示すように表土下の黒褐色土層が耕土でその下に褐色土層があり更に褐色砂層・黄褐色砂層となっている。

遺物はこの黒褐色土層と、褐色土層のうちが主で、次の褐色砂層には比較的少く、土器出土の下限となっている。又土器の種類と格別に層位による区分は認められなかった。

土器は土師器と須恵器を主とし、若干の無釉陶器がまじる程度で他に灰白磁・瓦の破片各 1 個を得た。

これを要するに当遺跡は、土師を上限とし、古墳期から平安にわたる須恵器が主体であることが確認されたが、聞くところによると以前表土を 50cm 程度削ったそうだから、青磁類が多く表面に散布しているわけもうなずける。又遺物中に土師質で胎土の非常に密な皿（第 2 図 7 ～ 9）と同類の破片が数片あり、これは明らかに仏器と認められ、瓦の破片青磁の散布とあい合わせ、字名が示すように寺院が存在したことも考へられるが、この程度の調査では勿論不十分で、断定は許されない。

第 3 章 遺 物 (1) 土 師 器

●深鉢（第 2 図・図版第 1）

- 1：口径21cm、高さ11.5cm、茶褐色で胎土に砂粒と雲母がまじる。く字状に強く外開きする口縁端面は中央をやや凹ませ、端面には左傾の櫛目刺突並列文が印される。頸部からやや張る胴部は下胴で急にすぼみ、やや大きめの平底がついている。

手づくねになり外面篋で調整の上、全面竪に刷毛目が施される。これは試掘に際し、地表下59cm出土（第 2 図 1・図版第 1 右下）

●甕（第 2 図）

- 2：口径16cm、上胴の破片で、暗褐色を呈し胎土に砂がまじる。外反する口頸からゆるやかに外彎して下胴に移るようである。口頸から上胴へかけて、竪位やや右傾の櫛目を引いた上、口頸部のみは横位の刷毛目で文様が消されている。（第 2 図 2・図版第 2 左上）
- 3：強く外反する口頸部破片で淡褐色、かなり大きい口径をもつ甕と思われるが、上胴まで残って居るのみで判らない。胎土は砂まじりであらう、頸部以下は肋条貝の縁辺で引いたかと思われる、右傾のあらい条痕が印される。口頸内面は水平にあらい刷毛目を引き、上胴と接合した手法がハッキリと見られる。（第 2 図 3・図版第 2 左上）
- 4：強く外反する口頸部破片で、胎土砂まじりであらう暗褐色、残存部は素文であるが以下の様子は判らない。（第 2 図 4・図版第 2 左上）

●壺（第 2 図・図版第 2）

- 5：朝顔状の口頸をもつ、長頸壺の口頸部破片と思われるが、小片のため詳細はわからない。赤褐色で胎土砂まじり、外面素文、内面は口縁端を肥厚させ、以下横位櫛目が印せられる。（第 2 図 5・図版第 2 左上）
- 6：同形の口頸部破片と思われるが、小片のため詳細はわからない。これは或いは口頸外開きの甕かとも思われる。褐色でやや厚手、胎土やや密である。外面は素文で内面は口縁端を折曲げたように肥厚させ、以下はややあらい横位櫛目が引かれる。（第 2 図 6・図版第 2 左上）
- 23：口径 9.5cm、高さ 7.7cm、小形平底の壺で淡褐色、胎土密で轆轤で端正に仕上げられ素文、宇治町舟入の出土で、浜田稔氏の所蔵品。（第 3 図 23・図版第 2 右中）

第 4 章 遺 物 (2) 土師質土器

●皿（第2図・図版第2）

数個体の破片が出土した、いずれも淡褐色で粒子は密、焼成は悪くいずれも吸水度が強い。悉く手づくねで凹凸があり、僅かに口辺の内外面だけ刷毛様のもので整形してある。こうした土器は時代判定がつけ難いが、それよりもこの土器は恐らく仏器であろうと思われ、瓦の出土と考へ合せ、寺院の存在を思わしめる。

7：口径11cm、高さ3cm、丸底の皿の破片で、黄褐色を帯び手づくね、焼成はよくない。

（第2図7）

8：口径13.5cm、高さ2.3cm、安定のよい平底であるが、手づくねにより内外面は凹凸甚だしく、口辺の内外的み刷毛目で整えてある。これは試掘に際し表土下65cm内外で1mほど離れた2ヶ所から出土した同一個体の破片を復原したものである。（第2図8・図版第2右上）

9：小片のため口径等は判らない。淡褐色で胎土は密、口辺の外면을刷毛目調整されることは前者同様であるが、この場合強く刷毛目を施してくびれさせ、恰も底を肥厚させた感じである。（第2図9）

●土 錘（第2図・図版第2）

10：破片のため詳細は判らないが、残存部で測ると直径4cm、かなり大形の土錘と思われる。淡褐色を呈し胎土に砂がまじり器表はザラザラしている。紐掛の穴は端正にあけられている。（第2図19・図版第2左上）

第 5 章 遺 物 (3) 須 恵 器

●杯（第2図・図版第2）

10：口径15cm、高さ5.2cm、セメント色を呈し焼成堅緻、轆轤仕上げになり、やや外開きのシッカリした高台がついている。（第2図10・図版第2左中）

24：口径15cm、高さ4cm、暗灰色で焼成堅緻、外開きのシッカリした高台がつく、焼成時のユガミで底が高台よりも垂れさがっている。宇治町地内出土、浜田稔氏所蔵。（第3図24・図版第2左下）

●碗（第2図・図版第2）

11：口径12.7cm高さ3.8cm、暗いセメント色で、轆轤により端正に仕上げられ、焼成は堅緻である。器の内面が全体赤茶けていて、恰も火で焼けたような感じである。（第2図11・

図版第2 左中)

●有鈕蓋 (第2 図・図版第2)

12・13: 鈕の部分のみ出土した。暗灰色を呈し焼成堅緻。第2 図12の鈕は山形を呈し、13は中凹みとなっている。(第2 図12・13・図版第2 左上)

●把 手 (第2 図・図版第2)

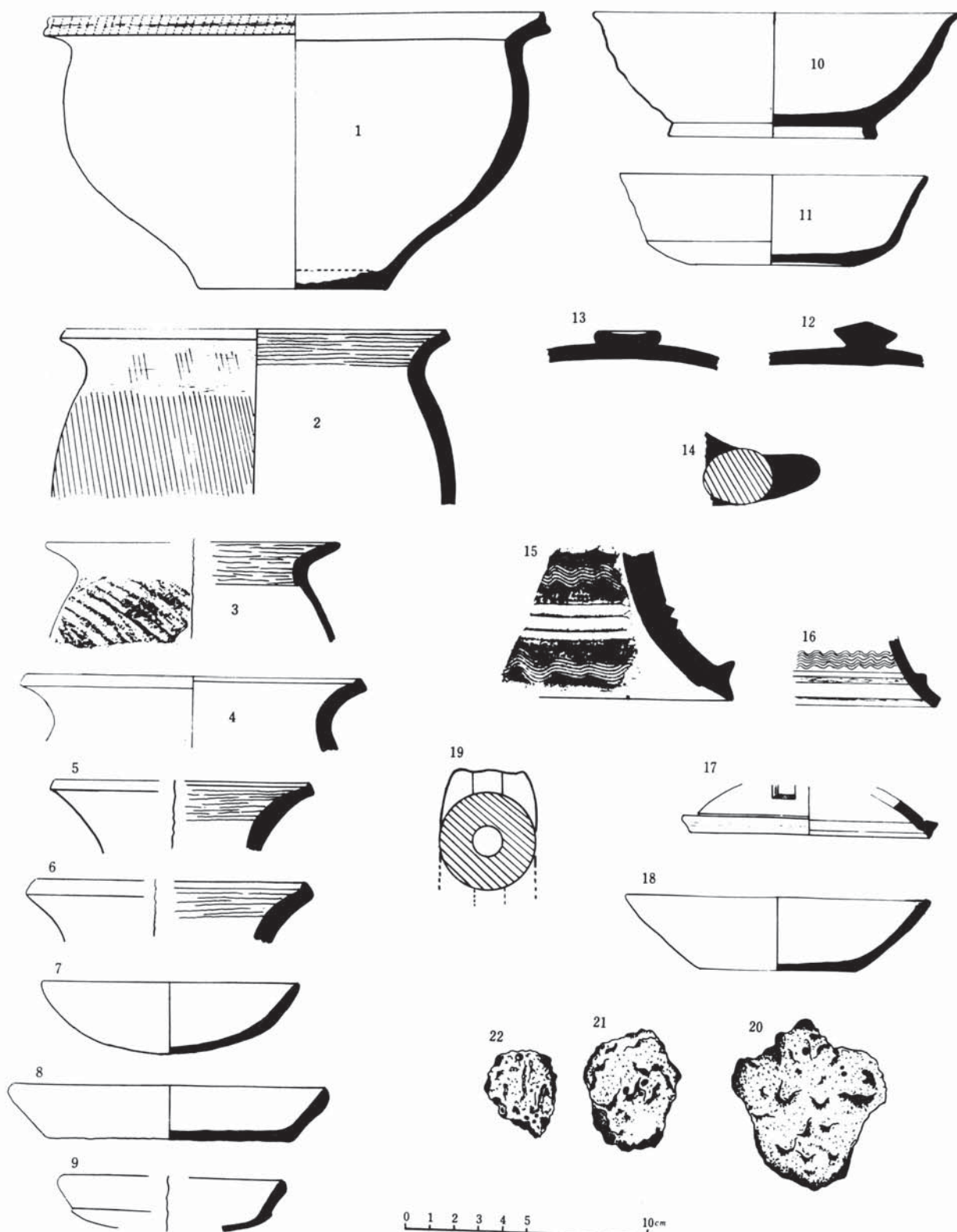
14: 暗灰色を呈し、楕円形やや上反と思われる把手の破片で、胎土にやや細砂がまじり、行基質に近い感じを与える。(第2 図14・図版第2 左中)

●飾 台 (第2 図・図版第2)

15: 浅いセメント色を呈し、轆轤仕上によるかなり大形の飾台の下底で、残存部では下端の台から3 cm上に、2 条並行の凸帯を繞らし、凸帯の上下には櫛目波状文が印せられる。透穴は勿論あると思われる。なお本破片は試掘地附近の農道で得たものである。(第2 図15・図版第2 左中)

16: 暗灰色を呈し薄手、小形の土器の飾台と思われるが細片のため判らない。下端より9 mm上って1 条の凸帯を繞らし、凸帯上部に櫛目波状文が印せられる。(第2 図16・図版第2 左中)

17: 同じく小形の土器の飾台と思われる。暗灰色を呈し、肥厚した台下端より1 cm上に透穴が認められる。(第2 図17・図版第2 左中)



第2図 試掘出土 土師器・須恵器・鉄滓

1. 深鉢 2~4. 土師器甕 5・6. 土師器壺 7~9. 土師質皿
 10・11. 須恵杯・碗 12・13. 有鈕蓋 14. 同把手 15~17. 同飾台
 18. 無釉陶器皿 19. 土錘 21~22. 鉄滓
 宇治町観音堂出土

第 6 章 遺 物 (4) 無釉陶器

● 椀 (第 2 図・図版第 2)

18：口径12.5cm、高さ 3 cm、灰色を呈し胎土はややあらい、薄手造りではあるが焼成は堅緻である。(第 2 図18・図版第 2 左中)

● 壺 (第 3 図・図版第 2)

25：俗に舟徳利という形である。口縁端が欠けているが、現存部の口径 6 cm、胴の最大径12 cm、高さ現存部で12.8cmある。焼成は極めて堅緻、外面は淡い褐色を帯びた灰色の器肌へ、土中の酸化鉄分でも付着したもののように、大部分が赤褐色となっている。肩部に 1 条の沈線を繞らすのみの、簡素な作りで平底がついている形態は、恰もハカリの分銅を思わせる。

底部きわめて厚く、船中に置く場合の安定を考へて、重心を下へもって行くように作ってある。(第 3 図25・図版第 2 右下)

● 山 杯 (第 3 図26～28)

26：口径14.2cm、高さ 5 cm、砂粒まじり焼成は良好である。低い高台に靱痕がついている。(第 3 図26)

27：口径14.5cm、高さ 5 cm、砂粒まじり焼成は良好である。下底の外輪を残してえぐり、高台状に造り出したもののようであるが、或いは貼付高台やも知れない。同じく靱痕がついている。(第 3 図27)

28：口径13.5cm、高さ 5 cm、砂粒まじり焼成は良好である。貼付と思われる低い高台がつき、靱痕がついている。焼成にあたり重ね焼きしたもののように、内面の底に他の土器の高台の陶土が付着し、その円形を除いて、全面に灰釉がかかっている。(第 3 図28)

以上 3 個の山杯は共に一般的なもので、何特徴とてもない雑器である。

● 小 杯 (第 3 図29～31)

29～31：口径7.5・8・9 cmの 3 個、いずれも灰色の粗雑な器で、29・30は平底31は低い造出様の高台がついている。(第 3 図29～31)

第 7 章 遺 物 (5) 青磁・灰白磁・陶器

●青 磁 (図版第 2)

青磁は各種類を含め、宇治町字茶の里で 1 片同じく字観音堂地内試掘地周辺で 14 片を採集した。いずれも表土採集によるもので、試掘では 1 片も発見されなかった。これは前記のように、試掘地周辺は過去に表土を 50cm 程度移動したと云うから、少くも表土下 50～70cm 程度下層にあったものが、鋤先にかかって現在露出しているものと推定される。青磁は細片のため詳細を知るを得ないが、厚さ 3mm 前後のものは碗、5～7mm に及ぶものはやや大形の鉢の類と推定されるが、中で厚手直口のものは香炉の類であろう。胎土純白でたとへば厚さ 6mm に対し釉は 0.6mm と厚くかけられ、透明度の高い青天色、暗青色の「きぬた」青磁や、蓮弁文青磁の中では、胎土純白のものもあるが、概ね灰色・暗灰色のものが多い。この種の釉薬は美しい暗青色のものから、暗黄緑色のものまで色々まじる。ハッキリと蓮弁の判るもの 1 片の他は、細片のために、凡そ表面の隆起によって蓮弁文と判定するのみである。なおこの種類は一部を除き、釉薬の冴えないものが多い。他に淡青色の美しい色彩で、外面に貫入があるものが 2 片あるが、施釉にムラがあって、やや時代の降る粗雑な器の感がある。其他淡いオリーブ色及至は甚だしく暗黄緑色に磁化した所属不明の一群が見られる。(図版第 2 左中)

●灰白磁

表土採集 4 片と試掘で 1 片を得た。青磁と同じく細片ではあるが、1 片は皿 1 片は碗 1 片は蓮弁文の碗と見られる。胎土純白で透明度の高い青白の釉のあるものは、或いは青白磁に属するものかとも思われるが、他はいずれも胎土暗灰色で、釉は黄味を帯びた暗白色で、表面梨皮状に小点が散在するもの 1 片の他は、貫入も見られない。(図版第 2 左中)

以上青磁・灰白磁は宋代のものが主で、それよりやや時代の降るものも若干はまじるようである。

●天目釉陶器

茶碗の破片と見られる天目釉陶片は、胎土褐色の陶質で、外面は天目特有の黒釉をかけ、内面は暗黄色の釉がかけられる。細片のため図示しなかった。

●柿釉陶器

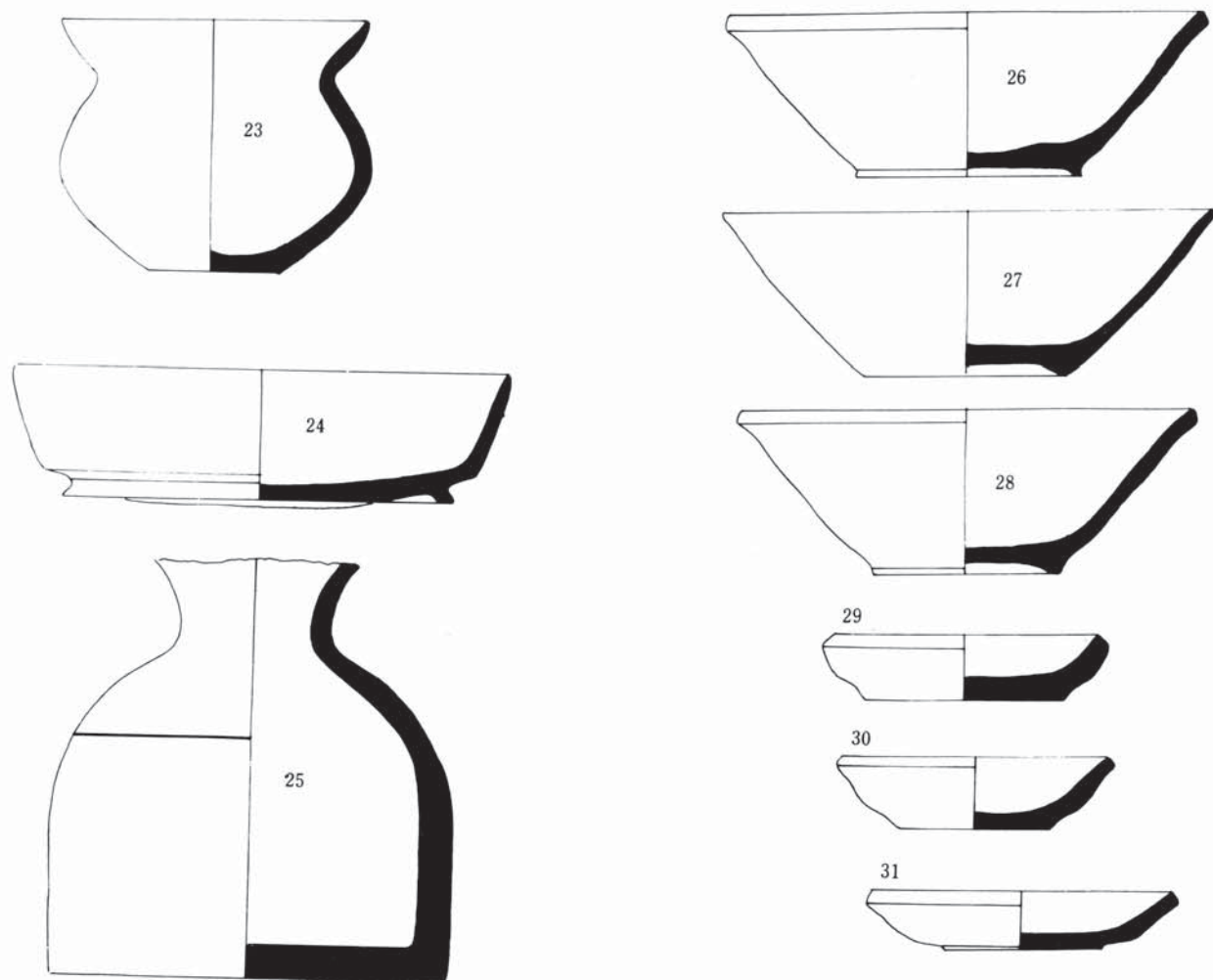
細片が 3 個出土したが器体は判らない。胎土暗白色又は淡褐色の陶質で、外面は柿釉の地に黒釉が斑状にかけられる。内面は柿釉のかけられるものと、光沢のない褐色の釉をかけたものとある。細片のため図示しなかった。

第 8 章 遺 物 (6) 鉄 鋅

●鉄鋅 (第 2 図・図版第 2)

20～22：3 個出土した。大きさ $7 \times 6 \text{ cm} \cdot 5 \times 4 \text{ cm} \cdot 4 \times 3 \text{ cm}$ の 3 個で、いずれも錆で被われている。すべてところどころ大小の気泡が開き、気泡の周辺のみは黒色を呈している。

(第 2 図 20～22・図版第 2 右中)



第 3 図 各所出土 土師器・須恵器・無釉陶器

23. 土師壺 24. 須恵碗 25. 無釉陶器壺

26～28. 山 杯 29～31. 小 杯

浜田稔氏所蔵品





試掘風景



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態

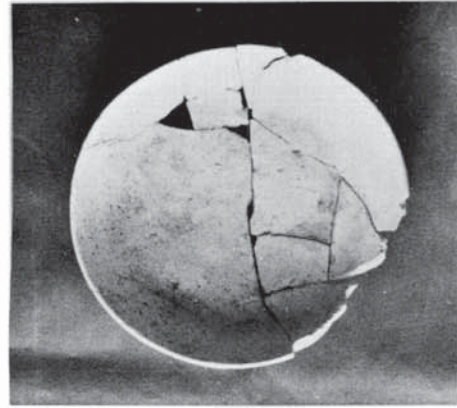


土師器深鉢

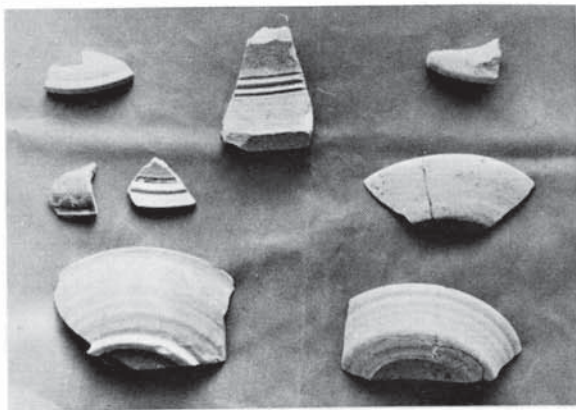
宇治町遺跡



1 土師器甕・壺 須恵器有鈕蓋・土錘



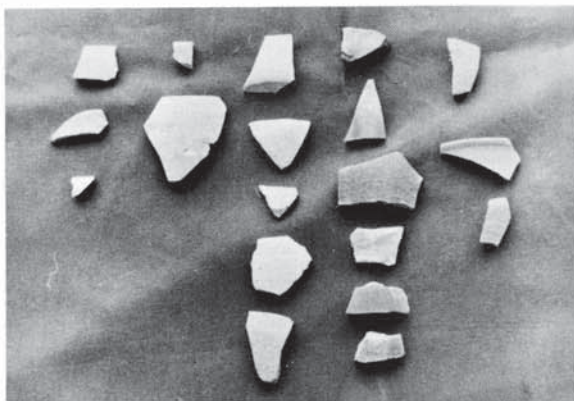
5 土師質 皿



2 須恵器 飾台・碗・把手



6 鉄 鋅



3 青磁・灰白磁

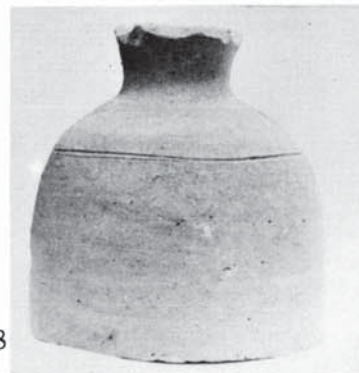


7

土師器 壺



4 須恵器 杯

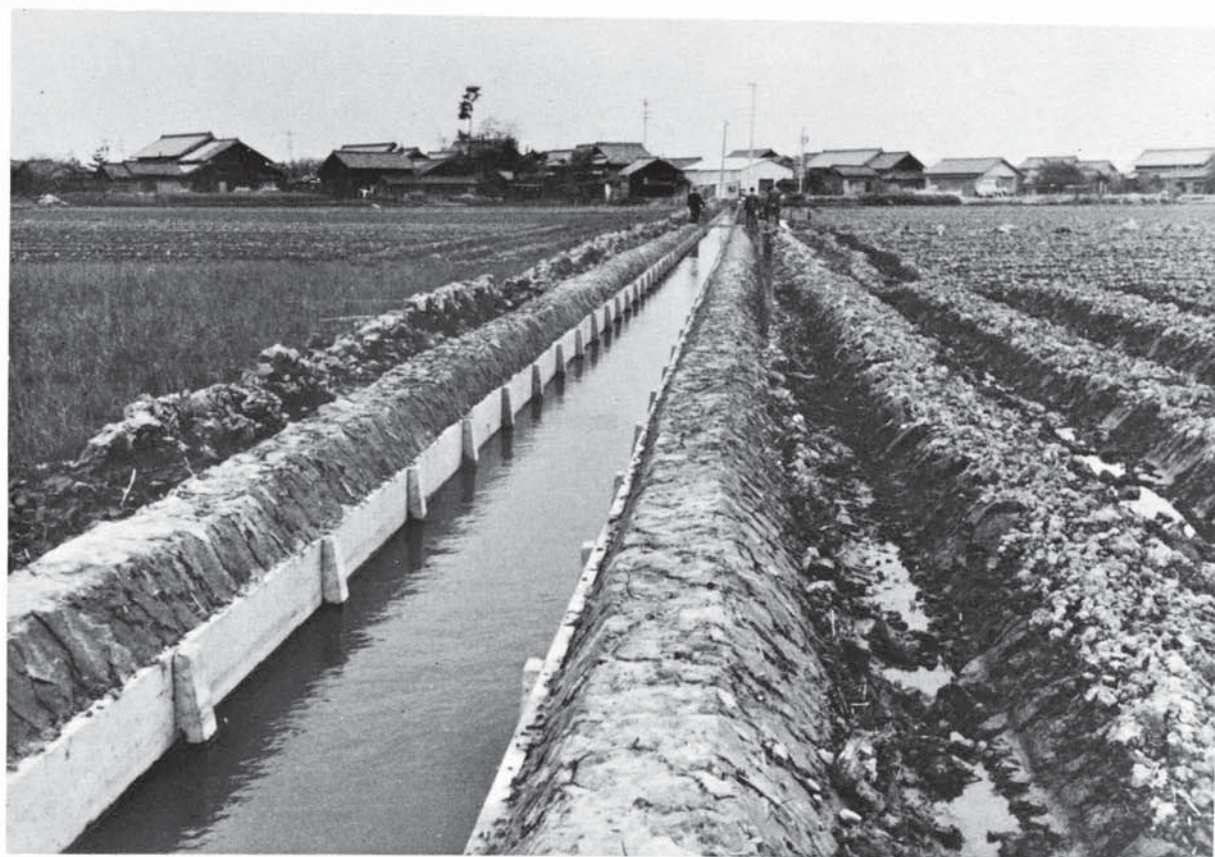


8

無釉陶器壺

宇治町遺跡

5. 中 一 色 町 遺 跡



第 1 章 調 査 経 過

昭和44年4月20日、津島市神島田連絡所より、中一色町地内に於いて土器の発見が通報されたので、4月21日、委員等は現地に赴いて調査に従い、その後4月26日及5月6日の2度にわたって調査と遺物の採集に従った。

第 2 章 遺 跡 の 現 状

遺跡は中一色町地内の田圃へ、農耕用水の灌漑のため、巾約 1.5m の堀割が開かれたが、たまたま小字名「清光坊」地内から、数個の壺が堀出され、その 1 個が連絡所に保管されていたが、他は現場へ埋戻し、或いは工事人夫が持去ったと云う。現地調査の結果、各所に蛤・かき等の浅海性貝類の混土と共に、土錘・素焼皿・天目茶碗・古瀬戸茶碗等を採集するを得た。

なお同所から出土したと伝える、阿弥陀如来を半肉彫した石仏が、同町杉山孝次氏方の庭先に祀られている。

第 3 章 遺 物 (1) 無釉陶器・陶器類

●常滑焼壺（第 1 図・図版第 1）

- 1：常滑焼三筋壺で、清光坊地内から数個出土した中の 1 つで、口頸部が欠損している。現存部の口径 7 cm、高さ 20.8 cm で、肩の最腹部は 17 cm ある。地肌は暗灰色で、口頸から肩部一面に淡い暗緑色の灰釉が浮き、それが肩部からつらら状に夥しく流下して下胴に溜っているが、なお 2 ケ所ばかり平底まで流下附着した結果、甚だ器の安定がなくなっている。肩部と上胴とに 3 条の並行沈線を引いた、俗に 3 筋壺と呼ばれるもので、火葬骨壺に用いたものであろう。鎌倉初期。（第 1 図 1・図版第 1 左上）

●天目釉茶碗（第 1 図・図版第 1）

- 2：口径 11.7 cm、高さ 6.5 cm、生地黄白色で焼成堅緻、内面及外面の下胴まで黒釉がかけられるが、釉薬が十分に熔融しなかったために、表面は縮緬状の小皺が生じている。（第 1 図 2・図版第 1 左中）
- 4：口径 9 cm、高さ 4.2 cm、小形の天目茶碗の破片である。生地白色で焼成堅緻、高台は糸切した平面の内側を篋でえぐり取って造り出してある。内面と外面の下胴まで黒釉がかけられる。（第 1 図 4・図版第 1 右上）

●黄瀬戸茶碗（第 1 図・図版第 1）

- 3：口径 16.3 cm、高さ 6.5 cm、生地黄白色で焼成はよい。総体轆轤で仕上げた上、外面下胴と高台は篋加工される。内面及外面下胴まで透明の黄瀬戸釉がかけられ、非常にこまかな貫入が見られる。なお内面の底よりやや上って、重ね焼の際置いた粘土跡が残っているから、江戸初期の雑器と見られる。（第 1 図 3・図版第 1 左下）

●山杯（図版第 1）

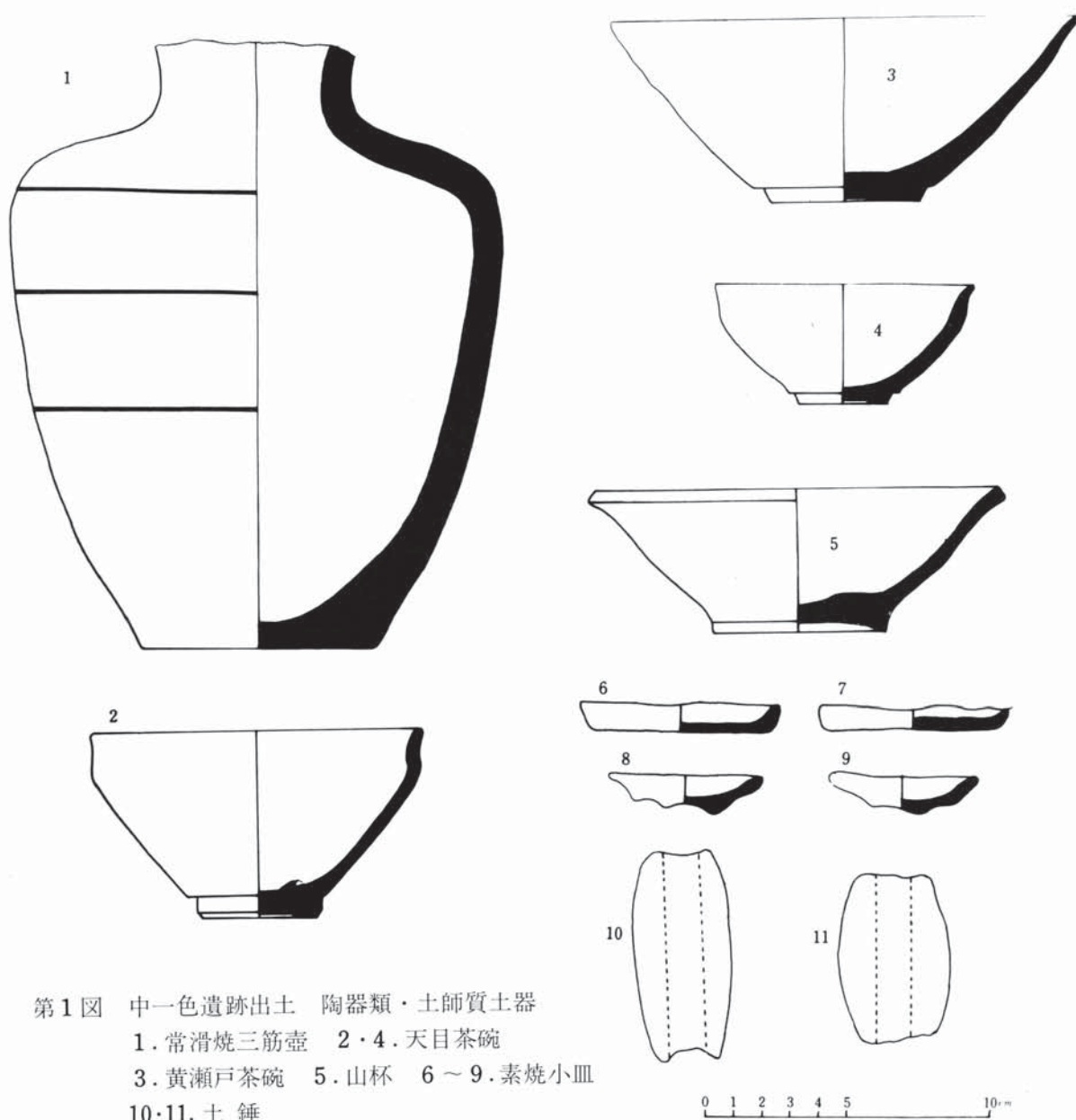
- 5：口径 14 cm、高さ 5 cm、暗灰色で胎土あらく焼成堅緻、雑な貼付高台で亀裂を生じ、靱痕がついている。（第 1 図 5）

第 4 章 遺 物 (2) 土師質土器

●素焼小皿（第 1 図・図版第 1）

- 6～9：口径 5～7 cm、灰色又は淡褐色で、胎土に砂がまじり、いずれも手捏ねによる粗雑な製作であるが、殊に小形のものは、粘土を手指の上に載せ、上から指の腹で圧して凹ませただけの粗雑な造りで、俗に「からすのすてごき」と呼ばれるものである。当遺跡では破片を含め、相当多数が出土したが、ある地点ではこの「からすのすてごき」のみ重なり合って出土した。

当遺跡ではこの他に、大形の素焼皿も出土し、中には油皿に使用したと見られるものもある。(第1図6～9・図版第1中左右)



第1図 中一色遺跡出土 陶器類・土師質土器
 1. 常滑焼三筋壺 2・4. 天目茶碗
 3. 黄瀬戸茶碗 5. 山杯 6～9. 素焼小皿
 10・11. 土 錘

●土 錘（第1図・図版第1）

10・11：長さ7cm及5.8cm、太さ3.4cm及4cmある。いずれも胎土暗灰色で砂まじり、管状の器具へ田圃泥を巻いて造ったと見られ粗雑である。（第1図10・11・図版第1右上）

第5章 石 仏

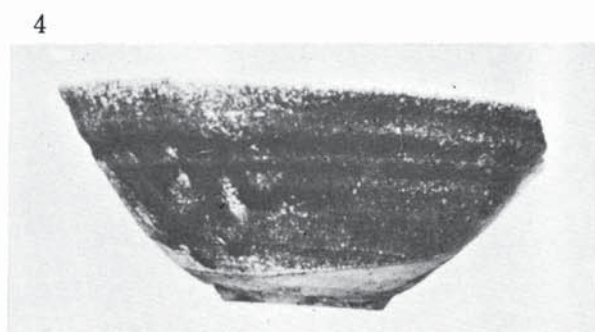
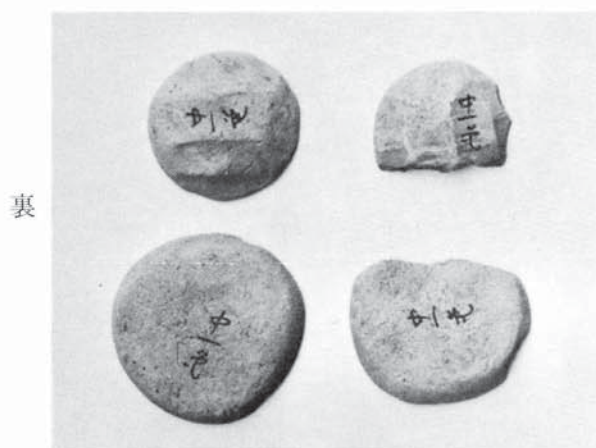
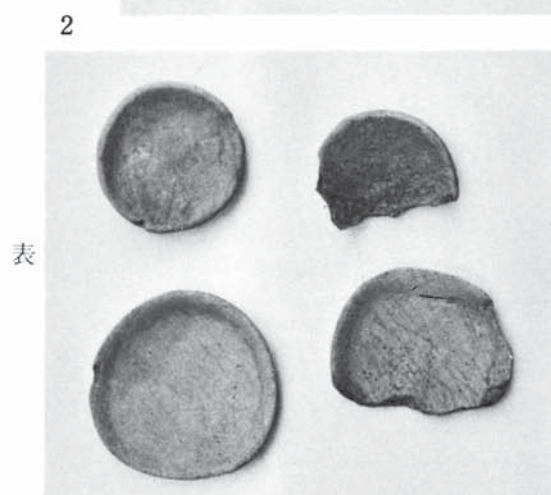
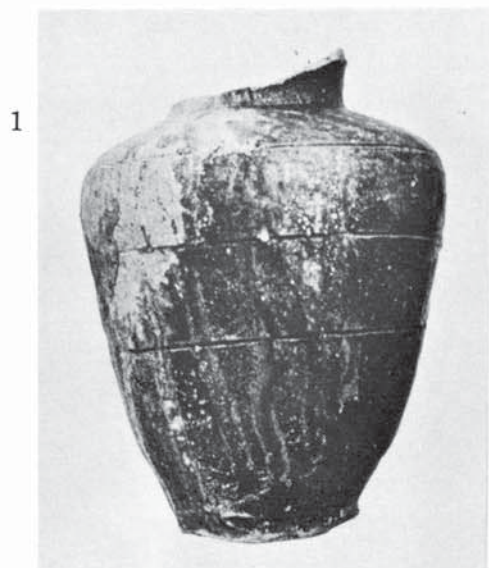
清光坊跡出土と伝え、かなり以前から同町杉山孝次氏庭先に安置されている。堅緻な河戸石で、高さ40cm、巾17cm、厚さ12cmで上端は山形に作る。上端から7.5cm下って板碑の中心よこ12cm、たて20cmの区画へ、蓮座の上に結跏趺座（けっかふざ）し、弥陀の定印を結んだ阿弥陀如来の座像が半肉彫されている。簡素な彫りではあるが古拙まことに愛すべきものがあり、室町期と見られる。（図版第1右下）

第6章 考 察

古老の言伝えによれば

いま字名になっている清光坊地内には、名古屋城築城当時、清光院と呼ぶ寺があったが、そのころ洪水によって流失したと云う。

洪水は木曾川あるいはその支流の氾濫とも考えられるが、この辺りは新田の地域で、当時は海岸線に近く、高浪の被害のようなものでなかったかと思われる。出土遺物にしても、鎌倉期の三筋壺・山杯が上限であり、土器の性格から見ても三筋壺の骨壺を初め、仏寺に多く用いられる素焼の皿が多量に出土する他、寺跡の出土と伝へる石仏等、仏寺につながるものが多い事から考へ、里人の伝承の如く、この土地は矢張り寺院跡と見て間違ないと思われる。



中一色町遺跡出土 陶器類・土師質土器・石仏

1. 三筋壺 3・5. 天目茶碗 4. 黄瀬戸茶碗 2. 土師質皿 5. 土鍾 6. 石仏

6. そ の 他 の 遺 跡

蛭 間 町 遺 跡

大 木 町 遺 跡

観 音 町 遺 跡

(1) 蛭間町遺跡

蛭間町松永一義氏方に、蛭間町出土遺物が数点所蔵されている。いずれも昭和14年12月、耕地整理に際し、蛭間町地内椿市神社東の地点から出土したものの一部である。なお当時此の他に破片類はリング箱2杯程も有ったと聞くが、その後どうなったかは不明であるという。

弥生式土器

●壺（第1図・図版第1）

口縁部を欠く球形の壺で、現存部の高さ18cm、胴の最大径20cmで平底がつく、赤褐色で胴肩部に並行櫛目文が施されている。（第1図・図版第1）

須恵器

●壺（第1図1・図版第1）

2：口縁部を欠く丸底壺で、現存部の高さ19cm、胴の最大径22cmある。セメント色で焼成堅緻、肩部から腹部へかけて並行櫛目文帯を3段周らし、この区画内は左傾の擦痕と、下腹部空間は不整な擦痕を以て器表を整えている。

出土した時この中から、土に混じて粃が出たと云うから、穀物貯蔵用の壺と思われる。頸部欠損のため断言は出来ないが、寺野町遺跡出土遺物(16)須恵器壺1・2（第25図1・2）と同形の漏斗状の口頸をもつ壺と思われる。（第1図2・図版第1）

●短頸埴（第1図・図版第1）

3：口頸部を欠失した肩の張る小形丸底埴で、現存部の高さ6.5cm、胴の最大径は10cm、暗いセメント色で焼成堅緻である。肩部と腹部へ各1条の沈線を周らし、その空間へ櫛歯状器具により、左傾の並行刺突文が施される。（第1図3）

無釉陶器

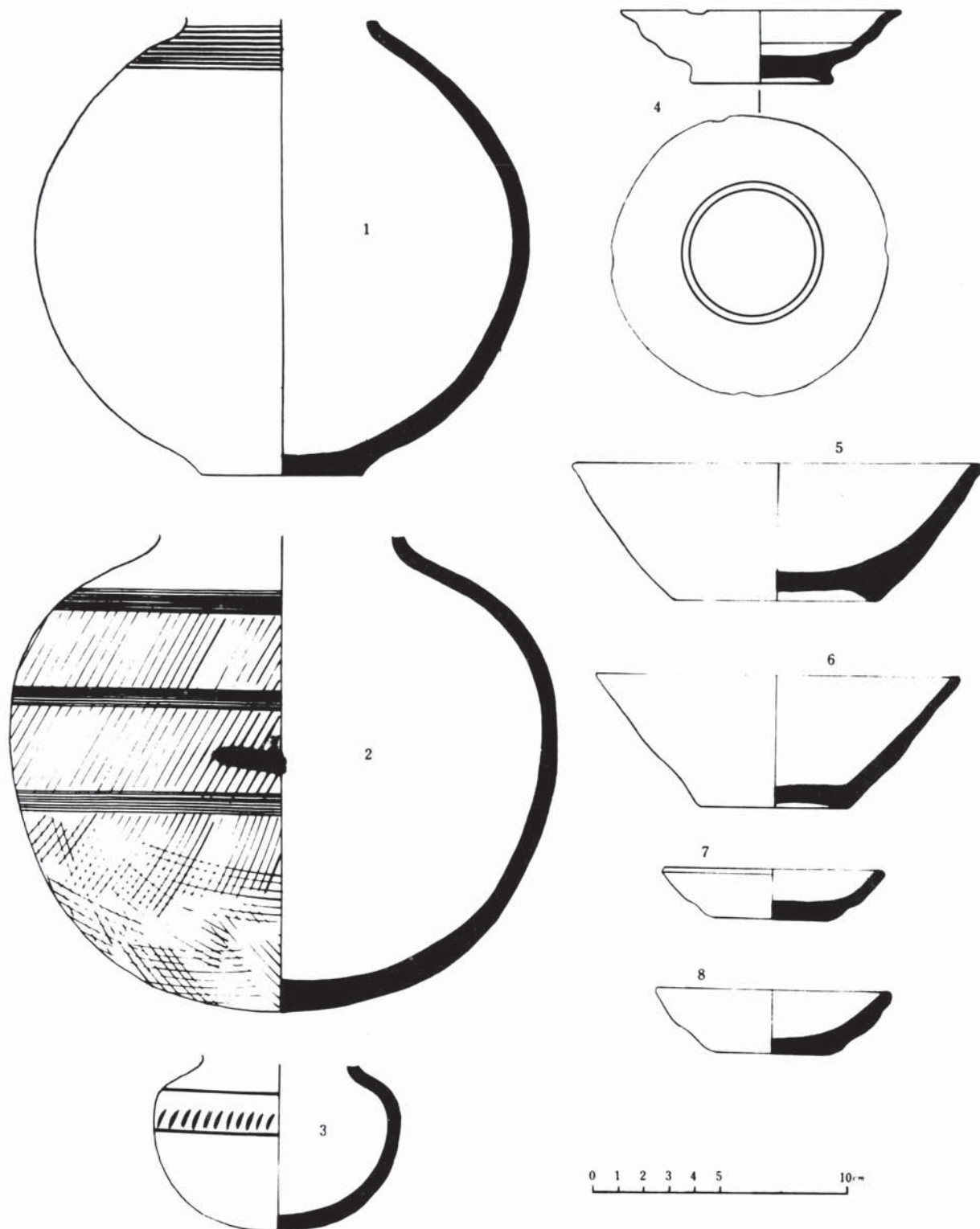
●輪花皿（第1図・図版第1）

4：口径10.1cm、高さ3cm、灰色を帯びた生地へ、表面灰釉が施される。口縁端の上面を4ヶ所圧して輪花の状に造る。内面口縁端から2.2cm下って段をつけ、底へ移行している。外面は轆轤（ろくろ）により器表に軽く起伏をつけ、外開きの低い高台がつけられる。（第1図4・図版第1）

●山杯（第1図）

5：口径16cm、高さ5.5cm、淡いセメント色で砂粒まじり、焼成堅緻、何等特徴もない普通見る所の雑器で、高台には粃痕がついている。（第1図5）

6：口径14.3cm、高さ5.2cm、淡いセメント色で胎土に小石が混り、何等の特徴もない杯で、高台は剥落している。（第1図6）



第1図 蛭間町遺跡出土

1. 弥生式 壺 2・3. 須恵器 壺 4. 無釉陶器輪花皿
5・6. 山杯 7・8. 小杯

●小 杯（第1図）

7・8：口径9～9.5cm、高さ2～2.5cm、普通見る小杯で、8は内面に灰色の自然釉がかかっている。（第1図7・8）

（2）大木町遺跡

今から十数年前耕地整理を行なった際に、相当多量の遺物が出土したが、当時は格別深い注意も払われずに、遺物は散逸してしまったと云う。その際に出土した遺物3個が、現在同町西運寺に遺されている。しかし当時これを貰い受けた西運寺先代住職は、花器に利用するために3個とも破損していた口頸部を奇麗に削り取ってしまった為に、原形は失われてしまった。

大木町は寺野町に隣接し、現在でも農道には、土器破片の散布が見られるが、なお、当時耕地整理に従事した人の記憶によれば、今回寺野町で発見された、A井戸と同様な遺構が掘出されたと云うから勿論寺野町と同じ遺跡地帯として定めて優秀な各種遺物が出土したことと思われる。

遺 物

須 恵 器

●甕（第2図・図版第1）

2：暗灰色を呈し焼成堅緻、最腹部は肩にあって直径8.8cm、口頸は欠失し現存部の高さが5.5cmあり丸底である。肩部に2条の並行沈線を水平位に繞らし、更に1.3cm下って沈線1条を引き、この沈線間へ1.3cmの穴1個を穿つほかは、篋による右傾の並行斜線を繞らせている。又甕に普通見るところの朝顔状の頸部はこれを削り取ってしまっている。（第2図2・図版第1）

●壺（第1図・図版第1）

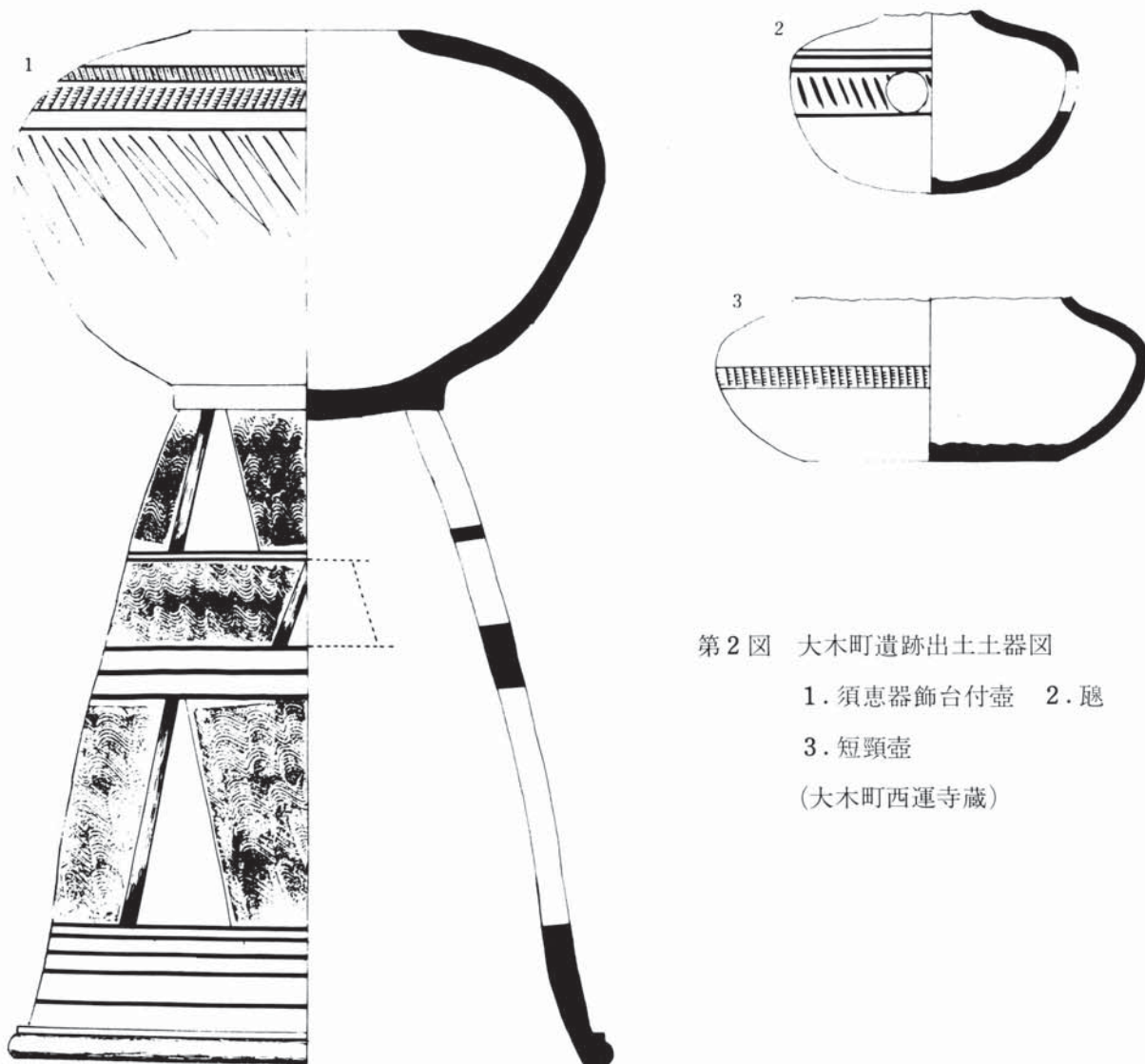
3：暗灰色を呈し焼成堅緻、頸部の径8.6cm、胴の最腹部は肩にあって径13.3cm、現存部の高さ5cmで、径7.8cmの平底となる。上胴へ7mm巾の並行沈線を水平位に繞らせ、沈線間へ櫛歯状器具によるやや右傾の刺突並列文が施される。これも2と同様、口頸は削り取られているが、形態から考えて、く字状の低い口縁をもつ広口壺と思われる。（第1図3・図版第1）

●飾台付壺（第1図・図版第1）

1：セメント色で焼成堅緻、ところどころ暗褐色の自然釉が浮く。現存する器の総高さ32cm、扁球状の壺は最腹部が肩にあって、直径18.6cm、高さ12cmある。肩部へ4条の並行沈線

を水平位に繞らせて3区とし、上の1・2区へは櫛歯状施文具により右傾と左傾の刺突並列文を印して、羽状の文様を構成し、以下は刷毛目を施している。

飾台は壺の接合部の直径 8.2cm、やや脹らみをもちながら裾拡がりし、台の高さ20cm 下端の径 8.6cmで、ドッシリと安定感がある。壺の接合部から 4.5cm、2.6cm、7 cmの間隔で、2条或いは3条の並行沈線で3区画し、各区一杯に波状文を印し、それぞれに長三角形の透穴がつけられる。台下部 4.2cm間へ、5条の並行沈線を引き、下端は角・半円を組合せた台で飾り重量感を保っている。(第1図1・図版第1)



第2図 大木町遺跡出土土器図

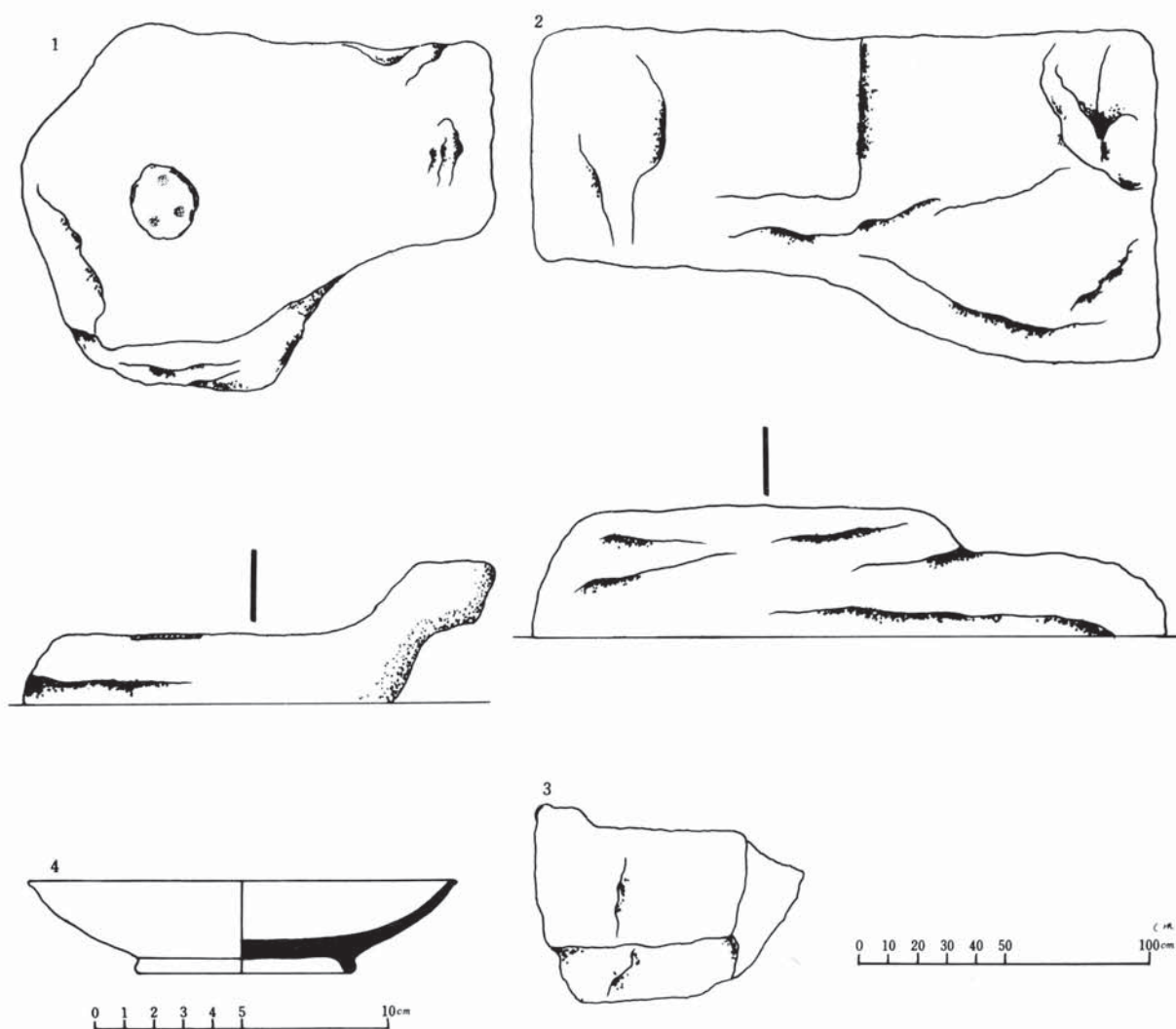
1. 須恵器飾台付壺 2. 甌

3. 短頸壺

(大木町西運寺蔵)

(3) 観音町遺跡

津島市河原町34番地加藤時義氏方で、現在沓脱石及庭石に使用されている3個の石はかつて数年前に観音町1番地と城山町3丁目87番地に跨る、同氏所有の田で、地下約1m下層から掘出したものである。そこは古くは祖父江から西川端・草平（現佐織町）を経て津島に至る旧街道に沿った地点で、現在は周囲に住宅がまばらに営まれている田園地帯で、石の出土地点は以前は畑であったが、先年畑土を移動して田に転換した結果、石の埋没している個所は作物が枯れるので、石を除去しようと取かかったところ、予想以上に大きいのに驚いたと云う。



第3図

観音町遺跡 1～3. 巨石 4. 灰釉皿

別図3個の石は凡そ3.64m（2間）間隔で、東西に並列していた。なお同じ田には未だ彼様の石が埋没しているが、格別に調査した事がないので何個位あるかは判らないと云う。又同所で瓦と素焼の皿類が若干出土したと云うが、現在は散逸し、どのような瓦であるかは確認出来なかった。3個の石は堅緻な灰白色の角の取れた河原石で、現在沓脱石に使用されている第1の石は長径160cm、短径で一番巾の広い部分は124cmあり、長径の一方は船の艘のように立あがり、表面平滑で、長径の端から37cm入ったところで、長径26cm、短径23cm、深さ1.3cmの不整な穴が穿たれ、且つ穴の中に3ヶ所、直径3cm程の浅い凹みが見られる。

穴は自然の凹みではなく、人工によることは間違ないが、しかし丸さもいびつの上に周縁も無細工で一見素人細工のように見られるが、しかし穴の内面は平滑になっている。

第2・3の石は組合わせて庭石に使用されているが、第2の石は長径167cm、短径の狭い部分で80cm、広い部分は114cmあり、地上44cm露出しているが、これは現在裏返しに据えられて居り、表面は平坦であると云う。第3の石は長径72cm、短径広い部分50cm、狭い部分34cmあり、表面は平滑である。

以上3個の石を考察するに

第1 古くから観音と云う字名であること。

第2 恰も寺院の礎石のようにほぼ等間隔で3個が並列していたこと

第3 塔心礎を思わせる凹みが穿たれること

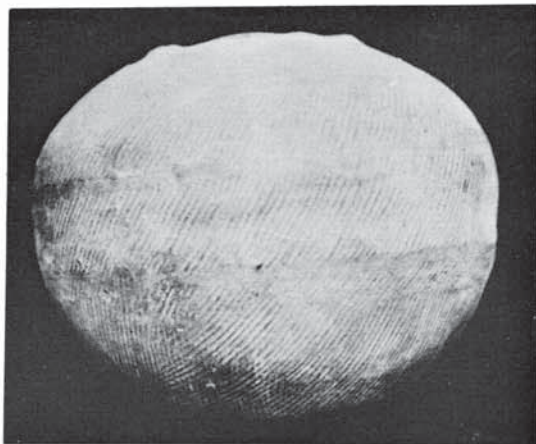
第4 瓦が伴出したと聞くこと

等の諸点から考えると、其処は当然寺院跡と思われるが、しかし之れはあくまでも類推であるから、軽々しい断定は許されない。なお同所に近い草平街道沿いにある佐織町大字町方新田姥ヶ森は、古来津島神社の縁故地で、森中に露出している巨岩は一般の人々の信仰の対象になっているが、去る昭和10年土地の人々が巨岩の周辺を発掘したところ他に2個の立石と多くの河原石が埋没して居り、中から須恵器の横瓶1個を発掘したが、その構造から見て横穴式古墳に比定された。（注1）

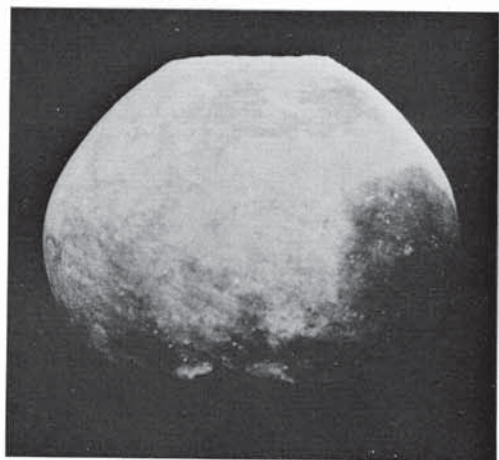
其他附近の畑からは土取の際土器片等が出土したこともあるが、別段注意もされず散逸してしまった。ここに第3図4に示す灰釉皿は先年附近から出土した唯一の例であるが、現在この姥ヶ森周辺の畑には、須恵・土師質土器等の細片が多く露出して居り、この辺りは少くも古墳時代以降の遺跡であることには間違ない。

註1 愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第14（昭和11年3月）「佐織町大字町方新田姥ヶ森の遺蹟」

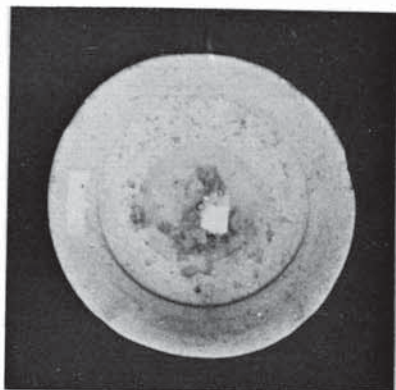
1



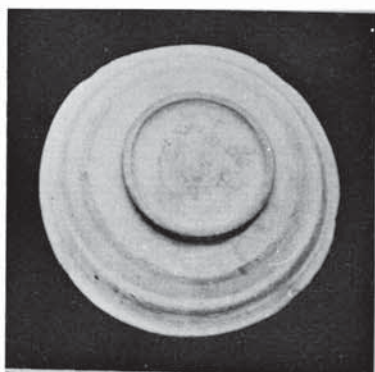
2



3



同裏



4



5



6



1. 須恵器壺 2. 弥生壺 3. 輪花皿
津島市蛭間町遺跡出土遺物

4. 須恵器 飾台付壺 5. 須恵器 甗 6. 短頸壺
津島市大木町遺跡出土遺物



1



向って右 2・中央 3

観音町遺跡 巨石（礎石？）

あ　と　が　き

津島市史刊行にあたって、その経過の概要を述べ、関係各位のご協力に対して感謝の意を表したい。

昭和22年3月1日、市制施行とともに郷土史家の間から、しばしば、市史編さんの話しが出たが、実現されず空しく歳月が流れた。昭和42年9月、ようやく編さん委員を委嘱し、津島市史編さん委員会が発足した。委員に伊藤晃雄・小島広次・樋田豊・堀田喜慶の四氏が就任、市教育委員会が業務の担当をすることになり、市条令によって教育委員長である不肖が編さん委員長の席に就くことになった。もとより史家でない素人であるため重責に反省をしつつ進んでいる。

市長の発刊の辞にもあるごとく資料の滅失散逸したものが少なくないため、資料の調査・整理・記述・編集の困難さは多大のものがあるが、委員諸氏の献身的な努力によって、逐次、進みつつあることは、まことに感謝にたえない次第である。津島市史は本文編と資料編の二部からなり、先ず、資料編を刊行し、ついで本文編を刊行することにした。

研究調査のはじめから、ご指導とご協力を戴いた徳川義親先生・所三男先生・祝宮静先生・吉田富夫先生等、専門権威の諸賢に厚くお礼を申し上げるとともに市史刊行にご協力、ご支援を賜った市議会議員・市民の皆様方に対し深甚の敬意を表し、あとがきとする次第である。

津島市教育委員長　出　口　清　一

津島市役所備品			
所 属 課	調査事務局		
種 別	教育用品		
整 理 品 目	図 書		
物品名	番号	23	
調 達 年 月 日	45. 5. 24		

津島市史(資料篇)

昭和45年 2 月20日 印刷
昭和45年 3 月 1 日 発行

発行者 津島市教育委員会
印刷所 金明堂印刷所

